

918.6-G34イウ



1200500759122

86
34
4)



始



24. 10. 26

197

918.6
9341
(24)



納本

谷崎潤一郎集

改造社版

杉浦非水装幀





影 近 者 著

585-43

(次 目)

「谷崎潤一郎集」目次

巻頭寫眞(無影)

序 詞(有影)

痴人の愛……………一

少年……………一三六

篇 姫……………一五八

信 西……………一七三

兄弟……………一八〇

二人の稚兒……………一九七

金と銀……………二一〇

The Affair of Two Watches……………二五七

人面痘……………二六七

國と五平……………二七九

或る少年の法れ……………二九〇

赤い屋根……………三三〇

年 論……………三三〇



痴人の愛

私は此れから、あまり世間に類例がないだらうと思はれる私たち夫婦の間柄に就て、出来るだけ正直に、ざつとばらんに、有りのままの事實を書いて見ようと思ひます。それは私自身に取つて忘れがたい貴い記録であると同時に、恐らくは讀者諸君に取つても、きつと何かの参考資料となるに違ひない。殊に此の頃のやうに日本もだんだん國際的に顔が廣くなつて来て、内地人と外國人とが盛んに交際する、いろんな主義や思想やらが這入つて来る。男は勿論女もどしどしハイカラになる、と云ふ種々な時勢になつて来る、今まではあまり類例のなかつた私たちの如き夫婦關係も、追ひ追ひ殊方に生じるだらうと思はれますから。考へて見ると、私たち夫婦は既にその成り立ちから變つてゐました。私が始めて現在の私の妻に會つたのは、ちやうど足かけ八年前のことになります。尤も何月の何日だつたか、

詳しいことは覚えてゐませんが、兎に角その時分、彼女は淺草の雷門の近くにあるカフェエ、ダイヤモンドと云ふ店の、給仕女をしてゐたのです。彼女の歳はやつと數へ歳の十五でした。だから私が知つた時はまだそのカフェエへ奉公に来たばかりの、ほんの新米だつたので、一人前の女給ではなく、その見習ひ、――まあ云つて見れば、ウエイトレスの那に過ぎなかつたのです。そんな子供をもうその時は二十八にもなつてゐた私が何で眼をつけたかと云ふと、それは自分でもハッキリとは分りませんが、多分最初は、その兄の名前が気に入つたからなのでしょう。彼女はみんなから「直ちやん」と呼ばれてゐましたけれど、或るとき私が聞いて見ると、本名は奈緒美と云ふのでした。此の「奈緒美」と云ふ名前が、大變私の好奇心に引かれました。「奈緒美」は素直だ、NAOBIと書くとまるで西洋人のやうだ、と、さう思つたのが始まりで、それから次第に彼女に注意し出したのです。不思議な

もので名前がハイカラだとなると、顔だちなども何處か西洋人臭く、さうして大さう相巧さうに見える、「こんな所の女給にして置くのは惜しいものだ」と考へるやうになつたのです。實際ナオミの顔だちは、斷つて置きますが、私は此れから彼女の名前を片假名で書くことにします。どうもさうしないと感じが出ないのです。活動女優のメリー・ピクフォードに似たところがあつて、確かに西洋人じみてゐました。此れは決して私のひいき眼ではありません。私の妻となつてゐる現在でも多くの人がさう云ふのですから、事實に違ひないのです。そして顔だちばかりでなく、彼女を素つ裸にして見ると、その體つきが一層西洋人臭いのですが、それは勿論後になつてから分つたことで、その時分には私もそこまで知りませんでした。ただおぼろげに、きつとああ云ふスタイルなら手足の恰好も悪くはなからうと、着物の着こなし具合から想像してゐただけでした。一體十五六の少女の氣持ちと云ふものは、肉身の親か姉妹でもなければ、なかなか分りにくいものです。だからカフェエにゐた頃のナオミの性質がどんなだつたかと云はれると、どうも私には明瞭な答へが出来ません。恐らくナオ

序の間
 時の集まるやうは自分か否か
 げかりも知らずあると
 け北風も来りん
 ぐみは笑う角
 けを顧みて見ると
 ぬくしふしけかり
 は愛するは愛、いろいろの可成の
 ころの傾向の自分も代表する
 えくぬいたと云ふたに

と自身にしたつて、あの頃はただ何事も夢中で過したと云ふだけでせう。が、ハタから見た感じを云へば、執事かと云ふと、陰鬱な、無口な兒のやうに思へました。顔色なども少し青みを帯びてゐて、背へば斯う、無色透明の板ガラスを何枚も重ねたやうな、深く沈んだ色合をしてゐて、健康さうではありませんでした。此れは一つにはまだ奉公に奉つたので、外の女給のやうにお白粉もつけず、お客や朋輩にも馴染がうすく、限の方に小さくなつて黙つてチヨコチヨコ働いてゐたものだから、そんな風に見えたのでせう。そして彼女が桐巧さうに感ぜられたのも、やつぱりそのせみだつたかも知れません。

ここで私は、私自身の経歴を説明して置く必要がありすが、私は當時月給百五十圓を貰つてゐる、或る特種會社の技師でした。私の生れは栃木縣の宇都宮で、國の中等學校を卒業すると東京へ来て、藏前の高等工業へ這入り、そこを出てから間もなく技師になつたのです。そして日曜を除く外は、毎日日の下宿屋から大町町の會社へ通つてゐました。一人で下宿住居をしてゐて、百五十圓の月給を買つてゐたのですから、私の生活は可成

り樂でした。それに私は、總領息子ではありましたが、郷里の方の親やきやうだいへ仕送りをする義務はありませんでした。と云ふのは、實家は相當に大きく農業を営んでゐて、もう父親は亡くなくなつたが、年老いた母親と、忠實な叔父夫婦とが、萬事を切り盛りしてゐてくれたので、私は全く自由な境涯にあつたのです。が、さればと云つて道樂をするのと云ふやうな氣はありませんでした。先づ模範的なサラリーマン、——實業で、眞面目で、あんまり曲がな過ぎるほど凡庸で、何の不満も不満もなく日目の仕事を勤めてゐる、——當時の私は大方そんな風だつたのでせう。河合清君と云へば、會社の中でも「君子」と云ふ評判があつたくらいでせう。

それで私の娛樂と云つたら、夕方から活動寫眞を見に行くとか、銀座通りを散歩するとか、たまたま奮發して芝居へ出かけるとか、せいぜいそんなものだつたのです。尤も私も結婚前の青年でしたから、若い女性に接觸することは無論嫌ひではありませんでした。元來が同會育ちの無骨者なので、人づきあひが拙く、従つて異性と交際などは一つもなく、まあ其のために「君子」にさせられた形だつたでもありません。

うが、しかし表面が君子であるだけ、心の中はなかなか前衛なく、往來を歩く時でも朝電車に乗る時でも、女に對しては絶えず注意を配つてゐました。恰もさう云ふ時期に於いて、たまたまナオミと云ふ者が私の目の前に現れて來たのです。

けれど私は、その當時、ナオミ以上の美人はないときめてゐた譯では決してありません。電車の中や、帝廟の廊下や、銀座通りや、さう云ふ場所ですれ違ふ命のうちに、云ふ迄もなくナオミ以上に美しい人が山あつた。ナオミの器量がよくなるかどうかは將來の問題で、十五やそこらの小娘では此れから先が樂しみでもあり、心配でもあつた。ですから最初の私の計畫は、兎に角此の兒を引き取つて世話をしてやらう。そして望みがあつたら、大いに教育してやつて、自分の妻に貰ひ受けても羞文へない。——と、云ふくらゐな程度だつたのです。此れは一面から云ふと、彼女に同情した結果なので、池の一面には私自身のあまりに平凡な、あまりに單調なその日暮らした、多少の變化を興へてゐたからでもあつたのです。正直のところ、私は長年の下宿住居に飽きてゐたので、何と云へば、此の發展的な生活

に一點の色彩を添へ、温かみを加へて見たいと思つてゐました。それにはたとへ小きくとも一軒の家を構へ、部屋を飾るとか、花を植ゑるとか、日あたりのいいエランダに小鳥の籠を吊るすとかして、臺所の川事や、拭き掃除をさせるために女中の一人も置いたらどうだらう。そしてナオミが來てくれたらば、彼女は女中の役もしてくれ、小鳥の代りにもなつてくれよう。と、大體そんな考へでした。

そのくらゐなら、なぜ相當な所から嫁を迎へて、正式な家庭を作らうとしなかつたのか？——と云ふと、要するに私はまだ結婚をするだけの勇氣がなかつたのでした。此れに就いては少し詳しく話さなければなりません。一體私は常識的な人間で、突飛なことは嫌ひな方だし、出来もしなかつたのですけれど、しかし不思議に、結婚に對しては可なり進んだ、ハイカラな意見を言つてゐました。結婚と云ふと世間の人は大さう事を堅苦しく、儀式繁らせる傾向がある。先づ第一に簡潔しと云ふものがある。それとなく雙方の考へをあつて見る。次には「見合ひ」と云ふ事をする。さてその上で雙方に不服がなければ改めて媒人を立て、結婚を取り交はし、五疋とか、七疋とか、十三疋と

か、花嫁の荷物を婿家へ運ぶ。それから奥入れ、新婚旅行、里歸り、……と随分面倒な手續を踏みますが、さう云ふことがどうも私は嫌ひでした。結婚するならもつと簡単な、自由な形式でしたいものだと思つてゐました。

あの時分、若しも私が結婚したいなら候補者は大勢あつたのでせう。同會者ではありますけれども、體格は頑丈だし、品行は方正だし、さう云つては可笑しいが男前も普通であるし、會社の信用もあつたのですから、誰でも喜んで世話をしてくれただせう。が、實のところ、この「世話をされる」と云ふことがイヤなのだから、仕方がありませんでした。たとへ如何なる美人があつても、一度や二度の見合ひでもつて、お互ひの意氣や性質が分る筈はない。「まあ、あれならば」とか、「ちよつときれいだ」とか云ふくらゐな、ほんの一時の心持ちで一生の伴侶を定めるなんて、そんな馬鹿なことが出来るものぢやない。それから思へばナオミのやうな少女を家に引き取つて、後ろにその成長を見附けてから、氣に入つたらば妻に貰ふと云ふ方法が一番いい。何も私は財産家の娘だの、教育のある偉い女が欲しい譯ではないのですから、それで澤山なものでした。

のみならず、一人の少女を友達にして、朝夕彼女の發育のさまを眺めながら、明るく喋れやかに、云はば遊びのやうな気分だ、一軒の家に住むと云ふことは、正式の家庭を作るのとは違つた、又格別な興味があるやうに思へました。つまり私、ナオミでたわいのないままごとをする。「世帯を持つ」と云ふやうなシテ面影ない意味でなしに、呑氣なシンプル・ライフを送る。

此れが私の望みでした。實業家の日本の「家庭」は、やれ軍備だとか、長火鉢だとか、座布團だとか云ふ物が、あるべき所に必ずなければいけなかつたり、主人と親戚と下女との仕事がいやにキチンと分れてゐたり、近所隣りや親類同士の付き合いがうるさかつたりするもので、その爲めに餘計な入費も懸るし、簡單に済ませることが煩雜になり、窮屈になるし、年の若いサラリーマンには決して愉快なことでもなく、いいことでもありません。その點に於いて私の計畫は、たしかに一種の思ひつきだといふべきです。

彼女に親しむ機会を作ったものでした。ナオミは大變活動寫眞が好きでしたから、公休日には私と一緒に公園の館を覗きに行ったり、その歸りにはちよつとした洋食屋だの、蕎麥屋だのへ寄つたりしました。無口な彼女はそんな場合にもいたつて言葉数が少ない方で、嬉しいのだから詰まらないのだから、いつも大概はむつぷりとしてゐます。そのくせ私が誘ふときは、決して「いや」とは云ひませんでした。「ええ、行つてもいいわ」と、素直に答へて、何處へでも附いて行くのでした。

一體私をどう云ふ人間と思つてゐるのか、どう云ふつもりで附いて来るのか、それは分りませんでした。まだほんたうの子供なので、彼女は「男」と云ふ者に疑ひの眼を向けようとしてない。此の「伯父さん」は好きな活動へ連れて行つて、ときどき御馳走をしてくれるから、一緒に遊びに行くのだと云ふだけの、極く單調な、無邪氣な心持ちであるのだらうと、私は想像してゐました。私にしたつて、全く子供のお相手になり、優しい親切な「伯父さん」となる以上のこと、當時の彼女に望みもしなければ、素振りにも見せはしなかつたのです。あの時分の、淡い、夢のやうな月日のことを考へ出すと、

お伽噺の世界にでも住んでゐたやうで、もう一度ああ云ふ罪のない二人になつて見たいと、今でも私はさう思はずにはゐられません。「どうだね、ナオミちゃん、よく見えるかね？」と、活動小屋が満員で、空いた席がない時など、後ろの方に並んで立ちながら、私はよくそんな風に云つたものです。するとナオミは、「いいえ、ちつとも見えないわ。」と云ひながら一生懸命に背伸びをして、前のお客の首と首の間から覗かうとする。

「そんなにしたつて見えやしないよ、此の木の上へ乗つかつて、私の肩へ頼まつて御覽。」さう云つて私は、彼女を下から押し上げてやつて、高い手すりの横木の上へ腰かけさせる。彼女は兩足をぶらんぶらんさせながら、片手を私の肩へあてがつて、やつと満足したやうに、息を凝らして輪の方を視つめる。

「面白い、いい？」
と云へば、
「面白いわ。」
と云ふだけで、手を叩いて愉快がつたり、跳ひ上つて喜んだりするやうなことではないのですが、賢い犬が遠い物音を聞き澄ましてゐるやうに、黙つて、惻みさうな眼をパツチリ開いて

て見物してゐる顔つきは、餘程寫眞が好きなのだと知れました。「ナオミちゃん、お前お腹が減つてやしないか？」
さう云つても、
「いいえ、なんにも喰べたくない。」
と云ふこともありすが、減つてゐる時は遠慮なく「ええ」と云ふのが常でした。そして、洋食なら洋食、お蕎麥ならお蕎麥と、尋ねられればハツキリと喰べたい物を答へました。

「ナオミちゃん、お前の顔はメリー・ピタフオードに似てゐるね。」
と、いつのことでしたか、ちやうどその女優の映畫を見てから、歸りにとある洋食屋へ寄つた晩に、それが話題に上つたことがありました。

「さう。」
と云つて、彼女は別にうれしさうな表情もしないで、突然そんなことを云ひ出した私の顔を見つめて、
「お前はさうは思はないかね。」
と、重ねて聞くと、

「似てゐるかどうか分らないけれど、でもみんなが私のことを混血兒みたいだつてさう云ふわよ。」
と、彼女は済まして答へるのです。
「そりやさうだらう、第一お前の名前からして變つてゐるもの、ナオミなんてハイカラな名前を、誰がつけたんだね。」
「誰がつけたか知らないわ。」
「お父つあなかねお母さんかね、——」
「誰だか、——」
「ちやあ、ナオミちゃんのお父つあんは何の商賣をしてるんだい。」
「お父つあんはもう居ないの。」
「お母さんは？」
「お母つあんは居るけれど、——」
「ちや、兄弟は？」
「兄弟は大勢あるわ、兄さんだの、姉さんだの、妹だの、——」

それから後にもこんな話はたびたび出たことありませうけれど、いつも彼女は、自分の家庭の事情を聞かれると、ちよつと不愉快な顔つきをして、言葉を濁してしまふのでした。で、一緒に遊びに行くときは大概前の日に約束をして、きめた時間に公園のベンチとか、観音様

のお堂の前とかで待ち合はせることにしたものですが、彼女は決して時間を違へたり、約束をすつぽかしたりしたことはありませんでした。何かの都合で私の方が遅れたりして、「あんまり待たせ過ぎたから、もう歸つてしまつたかな」と、案じながら行つて見ると、矢張りキチンと其處に待つてゐます。そして私の姿に気が付くと、ふいと立ち上つてつかつか此方へ歩いて来るのです。

「御免よ、ナオミちゃん、大分長いこと待つただらう。」
私がさう云ふと、
「ええ、待つたわ。」
と云ふだけで、別に不さうな様子もなく、怒つてゐるらしくもないのでした。或る時などはベンチに待つてゐる約束だったが、急に雨が降り出したので、どうしてゐるかと思ひながら出かけて行くと、あの、池の側にある何様だかの小さい祠の軒下にしゃがんで、それでもちやんと待つてゐたのは、ひどくいぢらしい気がしたことがあります。

さう云ふ折の彼女の服装は、多分姉さんのお譲りらしい古ぼけた銘仙の衣類を着て、めりんす友染の帯をしめて、髪も日本風の桃割れに結

ひ、うすくお白粉を塗つてゐました。そしていつでも、細ぎはあたつてゐましたけれど、小さな足にピツチリと嵌まつた、恰好のいい白足袋を穿いてゐました。どういふ體で休みの日だけ日本髪にするのかと聞いて見ても「内ですらし」と云ふもんだから、彼女は相變らず詳しい説明はしませんでした。

「今夜はおそくなつたから、家の前まで送つて上げよう。」
私は再び、さう云つたこともありましたが、
「いいわ、直き近所だから獨りで歸れるわ。」
と云つて、花屋敷の角まで来ると、きつとナオミは「左様なら」と云ひ捨てながら、千束町の横丁の方へバタバタ駆け込んでしまふのでした。

さうです、——あの頃の話を語り、いかに記す必要はありませんが、一度私は、やや打ち解けて、彼女とゆつくり話をした折がありました。たつけ。

それは何でもないといふと春雨の降る、生暖かい四月の末の宵だつたせう。ちやうど其晩はカフェエが暇で、大さう静かだつたので、私は長いことテーブルに構へて、ちびちび酒を飲んでゐました。——かう云ふとひどく酒飲みの

やうですけれど、實は私は甚だ下戸の方なので、時間つぶしに、女の飲むやうな甘いコクテルを拵へて買つて、それをホンの一口づつ、紙めるやうに啜つてゐたのに過ぎないのですが、そこへ彼女が料理を運んで来てくれたので、「ナオミちゃん、まあちよつと此處へおかけ。」と、いくらか酔つた勢いでさう云ひました。

「なあに、」
と云つて、ナオミは大人しく私の側へ腰をおろし、私がポケットから歌鳥を出すので、すぐにマツチを捻つてくれました。
「まあ、いいだらう、此處で少うししゃべつて行つても。——今夜はあまり忙しくもなささうだから。」
「ええ、こんなことはめつたにありはしないのよ。」
「いつもそんなに忙しかい？」
「忙しいわ、朝から晩まで、——本を讀む暇もありやしないわ。」
「ちやあナオミちゃん、本を讀むのが好きなんだね。」
「ええ、好きだわ。」
「一體どんな物を讀むのさ、」
「いろいろな雑誌を見るわ、讀む物なら何でも

わ。誰も何とも云ふ者はありやしないの。」
と、口ではさう云つてゐたものの、その實彼女がそれを案外氣にしてゐたことは確かでした。つまり彼女のいつもの癖で、自分の家庭の内幕を私に知られるのが嫌に、わざと何でもないやうな素振りを見せてゐたのです。私もそんなに嫌がるものを無理に知りたくはないのでしたが、しかし彼女の希望を實現させる爲めには、矢張りどうしても家庭を訪れて彼女の母なり兄なりに篤と相談をしなければならぬ。で、二人の間にその後だんだん話が進行するに及ひ、
「一遍お前の身内の人に會はしてくれろ——と、何度もさう云つたのですけれど、彼女は不思議に喜ばないで、
「いいのよ、會つてくれないでも。あたし自分で話をするわ。」
と、さう云ふのが極まり文句でした。

私はここで、今では私の妻となつてゐる彼女の爲めに、「河合夫人」の名譽の爲めに、強ひて彼女の不機嫌を買つてまで、當時のナオミの身許や素性を洗ひ立てる必要はありませんから、成るべくそれには觸れないことにして置きます。後で自然と分つて来る時もありませう

「いいの。」
「そりや感心だ、そんなに本が讀みたかつたら、女學校へでも行けばいいのに。」
私はわざとさう云つて、ナオミの顔を覗き込むと、彼女は癪に觸つたのか、つんと赤まして、あらぬ方角をちつと眺めてゐるやうでしたが、その眼の中には、明かに悲しいやうな、遣る瀬ないやうな色が浮かんでゐるのでした。
「どうだね、ナオミちゃん、ほんたうにお前、學問をしたい氣があるかね。あるなら僕が習はせて上げてもいいけれど。」
それでも彼女が黙つてゐますから、私は今度こそ思ひ切るやうな口調で云ひました。
「ええ、ナオミちゃん、黙つてゐないで何とかお云ひよ。お前は何をやりたいんだい、何が習つて見たいんだい？」
「あたし、英語が習ひたいわ。」
「ふん、英語と、——それだけ？」
「それから音楽もやつてみたいの。」
「ちや、僕が月謝を出してやるから、習ひに行つたらいいぢやないか。」
「だつて女學校へ上るのには遅過ぎるわ。もう十五なんですもの。」
「なあに、男と違つて女は十五でも遅くはないの。」

し、さうでない迄も彼女の家が千束町にあつたこと、十五の歳にカフェエの女給に出されてゐたこと、そして決して自分の住居を人に知らせようともしなかつたことなどを考へれば、大凡そんな家庭であつたかは誰にも想像がつく筈です。それから、そればかりではありません、私は結局彼女を説き落して母だの兄だのに會つたのですが、彼等は殆んど自分の娘や妹の貞操と云ふことに就いては、問題にしてゐないのでした。私が彼等に持ちかけた相談と云ふのは、折角當人も學問が好きだと云ふし、あんな所に長く奉公させて置くのも惜しい兒のやうに思ふから、其方でお差支へがないのなら、どうか私に身許を預けては下さるまいか。どうせ私も十分な事は出来まいけれど、女中が一人欲しいと思つてゐた際でもあるし、まあ臺所や拭き掃除の用事ぐらゐはして貰つて、そのあひ間に一通りの教育はさせて上げますが、と、勿論私の境遇だのまだ獨身であることなどをすつかり打ち明けて頼んで見ると、「さうして頂けば誠に當人も都合でして、——と云ふやうな、何だか張り合ひが過ぎるくらゐな挨拶でした。全くこれではナオミの云ふ通り、會ふ程のことはなかつたのです。

世の中には随分無責任な親や兄弟もあるものだと、私はその時つくづく感じましたが、それだけ一層ナオミがいぢらしく、處々に思へてなりません。何でも母親の言葉に依ると、彼等はナオミを持って扱つてゐたらしいので、「實は此の兒は養子にする筈でございまして、」實は此の兒は養子にする筈でございまして、たのを、當人の氣が通みませんものですから、さういつ迄も遊ばせて置く譯にも參らず、據んどころなくカフェエへやつて置きましたので——と、そんな口占でしたから、誰かが彼女を引き取つて成人させてくれさへすれば、まあ兎も角も一と安心と云ふやうな次第だつたのです。ああ成る程、それで彼女は家にゐるのが嫌だものだから、公休日にはいつも戶外へ遊びに出て、活動寫眞を見に行つたりしたんだな、雨が降つても傘が降つてもきつと私を持つてゐたのはそのせゐなんだなと、事情を聞いてやつと私もその謎が解けたのでした。

が、ナオミの家庭がさう云ふ風であつたことは、ナオミに取つても私に取つても非常な幸だつた譯で、話が極まるに直きに彼女はカフェエから眼を貰ひ、毎日毎日私と二人で適當な借家を捜しに歩きました。私の勤め先が大井町でしたから、成るべくそれに便利な所を擇

いき。それとも英語と音楽だけなら、女學校へ行かないだつて、別に教師を頼んだらいいさ。どうだい、お前眞面目にやる氣があるかい？」
「あるにはあるけれど、——ちや、ほんたうにやらしてくれませんか？」
さう云つてナオミは、私の眼の中を俄かにハツキリ見据えました。
「ああ、ほんたうとも。だがナオミちゃん、もしさうなれば此處に奉公してゐる譯には行かなくなるが、お前の方はそれで差支へないのかね。お前が奉公を止めていいなら、僕はお前を引取りつて世話をしてみてもいいんだけれど、——さうして何處までも責任を以て、立派な女に仕立ててやりたいと思ふんだけれど。」
「ええ、いいわ、さうしてくれれば。」
何の躊躇するところもなく、言下に答へたキツパリとした彼女の涙辭に、私は多少の驚きを感じないではゐられませんでした。
「ちや、奉公を止めると云ふのかい？」
「ええ、止めるわ。」
「だけどナオミちゃん、お前はそれでいいにしたつて、おッ母さんや兄さんが何と云ふか、家の都合を聞いて見なければならぬだらうが。」
「家の都合なんか、聞いて見ないでも大丈夫だ

いさ。それとも英語と音楽だけなら、女學校へ行かないだつて、別に教師を頼んだらいいさ。どうだい、お前眞面目にやる氣があるかい？」
「あるにはあるけれど、——ちや、ほんたうにやらしてくれませんか？」
さう云つてナオミは、私の眼の中を俄かにハツキリ見据えました。
「ああ、ほんたうとも。だがナオミちゃん、もしさうなれば此處に奉公してゐる譯には行かなくなるが、お前の方はそれで差支へないのかね。お前が奉公を止めていいなら、僕はお前を引取りつて世話をしてみてもいいんだけれど、——さうして何處までも責任を以て、立派な女に仕立ててやりたいと思ふんだけれど。」
「ええ、いいわ、さうしてくれれば。」
何の躊躇するところもなく、言下に答へたキツパリとした彼女の涙辭に、私は多少の驚きを感じないではゐられませんでした。
「ちや、奉公を止めると云ふのかい？」
「ええ、止めるわ。」
「だけどナオミちゃん、お前はそれでいいにしたつて、おッ母さんや兄さんが何と云ふか、家の都合を聞いて見なければならぬだらうが。」
「家の都合なんか、聞いて見ないでも大丈夫だ

いさ。それとも英語と音楽だけなら、女學校へ行かないだつて、別に教師を頼んだらいいさ。どうだい、お前眞面目にやる氣があるかい？」
「あるにはあるけれど、——ちや、ほんたうにやらしてくれませんか？」
さう云つてナオミは、私の眼の中を俄かにハツキリ見据えました。
「ああ、ほんたうとも。だがナオミちゃん、もしさうなれば此處に奉公してゐる譯には行かなくなるが、お前の方はそれで差支へないのかね。お前が奉公を止めていいなら、僕はお前を引取りつて世話をしてみてもいいんだけれど、——さうして何處までも責任を以て、立派な女に仕立ててやりたいと思ふんだけれど。」
「ええ、いいわ、さうしてくれれば。」
何の躊躇するところもなく、言下に答へたキツパリとした彼女の涙辭に、私は多少の驚きを感じないではゐられませんでした。
「ちや、奉公を止めると云ふのかい？」
「ええ、止めるわ。」
「だけどナオミちゃん、お前はそれでいいにしたつて、おッ母さんや兄さんが何と云ふか、家の都合を聞いて見なければならぬだらうが。」
「家の都合なんか、聞いて見ないでも大丈夫だ

ばうと云ふので、日曜日には朝早くから新橋の驛に落ち合ひ、さうでない日はちやうど會社の退けた時刻に大井町で待ち合はせて、蒲田、大森、品川、目黒、主としてあの邊の郊外から、市中では高輪や田町や三田あたりを廻つて見て、さて歸りには何處かで一膳に晩飯をたべ、時間があれば例の如く活動寫眞を覗いたり、銀座通りをぶらついたりして、彼女は千束町の家へ、私は芝口の下宿へ戻る。たしかその頃は借家が掃底な時でしたから、手頃な家がなかなかオインレと見つからないで、私たちは半月あまりも斯うして暮らしたものでした。

もしもあの時分、麗かな五月の日曜日の朝などに、大森あたりの青葉の多い郊外の路を、肩を並べて歩いてゐる會社員らしい、一人の男と、桃々に結つた見すばらしい小娘の様子を、誰かが注意してゐたとしたら、まあどんな風に思へたでせうか。男の方は小娘を「ナオミちゃん」と呼び、小娘の方は男を「河合さん」と呼びながら、主従ともつかず、兄妹ともつかず、さればと云つて夫婦とも友達ともつかぬ恰好で、互ひに少し遠慮しいしい語り合つたり、香地を尋ねたり、附近の景色を眺めたり、ところどころの生垣や、邸の庭や、路端などに咲いて

る花の色香を振り返つたりして、晩春の長い一日を彼方此方と幸福さうに歩いてゐた此の二人は、定めし不思議な取り合はせだつたに違ひありません。花の話で想ひ出すのは、彼女が大變西洋花を愛してゐて、私などにはよく分らないいろいな花の名前——それも面倒な英語の名前を深山知つてゐたことでした。カフェエに奉公してゐた時分に、花瓶の花を始終扱ひつけてゐたので自然に覚えたださうですが、通りすがりの門の中なぞに、たまたま温室があつたりすると、彼女は眼敏くも直ぐ立ち止まつて、

「まあ、綺麗な花！」
と、さも嬉しさうに叫んだものです。
「ぢや、ナオミちゃんは何の花が一番好きだね。」
と、尋ねてみたとき、
「あたし、チューリップが一番好きよ。」
と、彼女はさう云つたことがあります。
淺草の千束町のやうな、あんなゴミゴミした路次の中に育つたので、却つてナオミは反動的にひろびろとした田圃を慕ひ、花を愛する習慣になつたのでありませうか。草、たんぼぼ、げんげ、櫻草、——そんな物でも畑の畔や田舎

道などに生えてゐると、忽ちチヨコチヨコと驅けて行つて摘まうとする。そして終日歩いてゐるうちに彼女の手には摘まれた花が一杯になり、幾つとも知れない花束が出来、それを大事に歸り途まで持つて来ます。
「もうその花はみんな萎んでしまつたぢやないか、好い加減に捨てておしまひ。」
さう云つても彼女はなかなか承知しないで、「大丈夫よ、水をやつたら又直ぐ生キツ返るか、河合さんの机の上へ置いたらいいわ。」
と、別れるときにその花束をいつも私にくれるのでした。

かうして方方捜し廻つても容易にいい家が見つからないで、散散迷ひ抜いた揚句、結局私たちが借りることになつたのは、大森の驛から十二三町行つたところの、省線電車の線路に近い、とある一軒の甚だお粗末な洋館でした。所謂「文化住宅」と云ふ奴、——まだあの時分はそれがそんなに流行つてはゐませんでした、近頃の言葉で云へばさしづめさう云つたものでした。勿論私の郷里の方へも、今度下宿を引き拂つて一軒家を持つたこと、女中代りに十五になる少女を雇ひ入れたこと、などを知らせてやりましたけれど、彼女と「友達」のやうに「暮らす」とは云つてやりませんでした。國の方から身内の者が訪ねて来ることはめつたにないのだし、いづれそのうち、知らせる必要が起つた場合には知らせてやらうと、さう考へてゐたのです。
私たちは暫くの間、此の珍らしい新居にふさはしいいろいろの家具を買ひ求め、それらをそれぞれ配置したり飾りつけたりするために、忙しい、しかし楽しい月日を送りました。私は成るべく彼女の趣味を察するやうに、ちよつとした買ひ物をするのにも自分一人では極めないで、彼女の意見を云はせるやうにし、彼女の頭から出る考へを出来るだけ採用したものですが、もともと筆筒だの長火鉢だのと云ふやうな、在り來たりの世帯道具は置き所のない家で

ラス窓。そして正面のポーチの前に、庭と云ふよりは寧ろちよつとした空地がある。と、先づそんな風な恰好で、中に住むよりは繪に畫いた方が面白さうな見つきでした。尤もそれはその筈なので、もとの家は何かと云ふ輪かきが建てて、モデル女を細君にして二人で住んでゐたのださうです。従つて部屋の取り方などは随分不便に出来てゐました、いやにだだっ広いアトリエと、ほんのささやかな玄関と、臺所と、階下にはたつたそれだけしかなく、あとは二階に三疊と四疊半とがありましたけれど、それとて屋根裏の物置小屋のやうなもので、使へる部屋ではありませんでした。その屋根裏へ通ふのはアトリエの室内に梯子段がついてゐて、そこを上ると手すりを渡らした廊下があり、恰も芝居の機敷のやうに、その手すりからアトリエを見おろせるやうになつてゐました。

ナオミは最初此の家の「風景」を見ると、
「まあ、ハイカラなこと！ あたし斯う云ふ家がいいわ。」
と、大さう氣に入つた様子でした。そして私も、彼女がそんなに喜んだので直ぐ借りることに賛成したのです。
多分ナオミは、その子供らしい考へで、間取り

の工合など實用的でなくつても、お伽草の挿繪のやうな、一風變つた様式に好奇心を感じたのでせう。たしかにそれは存心な青年と少女が、成るだけ世帯じみないやうに、遊びの心持ちで住まはうと云ふにはいい家でした。前の輪かきとモデル女もさう云ふつもりで此處に暮らしてゐたのでせうが、實際たつた二人でゐるなら、あのアトリエの一と間だけでも、寝たり起きたり食つたりするには充分用が足りたのです。

三

私がいよいよナオミを引き取つて、その「お伽草の家」へ移つたのは、五月下旬のことでしたらう。這入つて見ると思つたほどに不便でもなく、日あたりのいい屋根裏の部屋からは海が眺められ、南を向いた前の空地は花壇を造るのに都合がよく、家の近所をとくとき省線の電車の通るのが取でしけれど、間にちよつとした田圃があるのでそれもそんなにやかましくはなく、先づ此れならば申し分のない住居でした。のみならず、何分さう云ふ普通の人には不適當な家でしたから、思ひの外に家賃が安く、一般に物價の安いあの頃のことではありましたが、敷金なしの月月二十圓といふので、それも私

には氣に入りました。
「ナオミちゃん、これからお前は私のことを「河合さん」と呼ばないで「麗治さん」と呼び。そしてほんとに友達」のやうに暮らさうぢやないか。」
と、引つ越した日に私は彼女に云ひ聞かせました。勿論私の郷里の方へも、今度下宿を引き拂つて一軒家を持つたこと、女中代りに十五になる少女を雇ひ入れたこと、などを知らせてやりましたけれど、彼女と「友達」のやうに「暮らす」とは云つてやりませんでした。國の方から身内の者が訪ねて来ることはめつたにないのだし、いづれそのうち、知らせる必要が起つた場合には知らせてやらうと、さう考へてゐたのです。
私たちは暫くの間、此の珍らしい新居にふさはしいいろいろの家具を買ひ求め、それらをそれぞれ配置したり飾りつけたりするために、忙しい、しかし楽しい月日を送りました。私は成るべく彼女の趣味を察するやうに、ちよつとした買ひ物をするのにも自分一人では極めないで、彼女の意見を云はせるやうにし、彼女の頭から出る考へを出来るだけ採用したものですが、もともと筆筒だの長火鉢だのと云ふやうな、在り來たりの世帯道具は置き所のない家で

あるだけ、従つて選擇も自由であり、どうでも自分等の好きなやうに意見を施せるのでした。私たちは印度更紗の安物を見つけて来て、それをナオミが危うい手つきで縫つて窓かきを作り、芝口の西洋家具屋から古い藤椅子だのソファだの、安椅子だの、テーブルだのを捜して来てアトリエに並べ、壁にはメリー・ピクフォードを始め、亞米利加の活動女優の寫眞を二つ三つ吊るしました。そして私は寢道具なども、出来ることなら西洋流にしたいと思つたのですけれど、ベッドを二つも買ふとなると入費が懸るばかりでなく、夜且布團なら田舎の家から送つて貰へる便宜があるので、とうとうそれはあきらめなければなりませんでした。が、ナオミの爲めに田舎から送つてよこしたのは、女中を寝かす夜具でしたから、お約束の唐草模様、ゴワゴワした木綿の敷布團でした。私は何か可哀さうな気がしたので、

「此れではちよつとひと過ぎるね、僕らの布團と一枚取換へて上げようか。」

と、さう云ひましたが、

「ううん、いいの、あたし此れで深山。」

と云つて、彼女はそれを引つ被つて、獨り淋しく屋根裏の三疊の部屋に寝ました。

私は彼女の隣りの部屋、同じ屋根裏の、四疊半の方へ寝るのでしたが、毎朝毎朝、眼をさますと私たちは、向うの部屋と此方の部屋とで、布團の中にもぐりながら聲を掛け合つたものでした。

「ナオミちゃん、もう起きたかい。」

と、私が云ひます。

「ええ、起きてるわ、今もう何時？」

と、彼女が應じます。

「六時半だよ、——今朝は僕がおまんまを炊いてあげようか。」

「さう？ 昨日あたしが炊いたんだから、今日は誰治さんが炊いてもいいわ。」

「いや仕方がない、炊いてやらうか。面倒だからそれともパンで済ましてかうか。」

「ええ、いいわ、だけど誰治さんは随分ずるいわ。」

そして私たちは、御飯がたべたければ小さな土鍋で米を炊き、別にお粥へ移す迄もなくテーブルの上へ持つて来て、誰治か何かを突ツつきながら食事をします。それもうるさくて厭だと思へば、パンに牛乳にジャムでごまかしたり、西洋菓子を買込んで置いたり、晩飯などはそばやうどんに合はせたり、少し御馳走が欲し

い時には二人で洋所の洋食屋まで出かけて行きます。

「誰治さん、今日はピフチキをたべさせてよ。」

などと彼女は、よくそんなことを云つたものです。

朝飯を済ませると、私はナオミを獨り残して會社へ出かけます。彼女は午前中は花壇の草花をいぢくつたりして、午後になるとカラッパの家へ鏡をおろして、英語と音楽の稽古に行きました。英語は寧ろ始めから西洋人に就いた方がよからうと云ふので、日黒に住んでゐる亞米利加人の老練のミス・ハリソンと云ふ人の所へ、一日置きに會話とリトナーを習ひに行つて、足りないところは私が内できき渡してやることにしました。音楽の方は、此れは全く私にはどうしたらいいか分りませんでした。二三年前に上野の音楽學校を卒業した或る婦人が、自分の家でピアノと音楽を教へると云ふ話を聞き、此の方は毎日芝の伊豆子まで一時間づつ授業を受けに行くのでした。ナオミは御佛の書物の上に箱のカシヤの袴をつけ、黒い靴下に可愛い小さな半靴を穿き、すつかり女學生になりすまして、自分の理想がやうやうかなつた嬉しさに胸をときめかせながら、せつせと通ひまし

た。をりをり寄り添うたに彼女と往來で遇つたりすると、もうどうしても千束町に育つた娘で、カフェエの女給をしてゐた者とは思へませんでした。髪もその後は梳割れに結つたことは一度もなく、リボンで結んで、その先を編んで、お下げにして垂らしてゐました。

私は前に「小鳥を飼ふやうな心持ち」と云ひましたつけが、彼女は此方へ引き取られてから顔色などもだんだん健康さうになり、性質も次第に變つて来て、ほんたうに快活な、晴れやかな小鳥になつたのでした。そしてそのただツ廣いアトリエの一と間は、彼女のためには大きな鳥籠だつたのです。五月も暮れて明るい初夏の氣候が来る。花壇の花は日増しに伸びて色彩を写して来る。私は會社から、彼女は積百から、夕方家へ歸つて来ると、印度更紗の窓かきを洩れる太陽は、眞つ白な壁で塗られた部屋の四方を、いまだにカツキリと晝間のやうに照らしてゐる。彼女はフランネルの單衣を着て、素足にスリッパを突ツかけて、とんとん床を踏みながら暫つて来た唄を歌つたり、私を相手に眼隠しだの鬼ごっこをして遊んだり、そんな時にはアトリエ中をぐるぐると走り廻つて、テーブルの上を飛び越えたり、ソファの下にもぐ

り込んだり、椅子を引つ繰り覆したり、まだ足らないで椅子段を駆け上つては、僕の抄敷のやうな屋根裏の廊下を、鼠の如くチヨコチヨコと往つたり來たりするのでした。一度は私が馬になつて彼女を背中に乗せたまま、部屋の中を這つて歩いたことがありました。

「ハイ、ハイ、ドウ、ドウ！」

と云ひながら、ナオミは手拭を手綱にして、私にそれを咬へさせたりしたものです。

矢張りさう云ふ遊びの日の出来事でしたらう、——ナオミがきやつきやつと矢ひながら、あまり元氣に椅子段を上つたり下りたりし過ぎたので、とうとう足を踏み外して頂邊から駆け落ちた揚句、急にしくしく泣き出したことがありました。

「おい、どうしたの、——何處を打つたんだか見せて御覽。」

と、私がさう云つて抱き起すと、彼女はそれでもまだしくしくと鼻を鳴らしつつ、袂をまくつて見せましたが、落ちる拍子に釘か何かに觸つたのでせう、ちやうど右腕の脇のところの皮が破れて、血がにじみ出てゐるのです。

「何だい、此れッぼちの事で泣くなんて！ き、絆着帯を貼つてやるから此方へおいで。」

そして音楽を貼つてやり、手拭を裂いて繻帯をしてやる間も、ナオミは一杯涙をためて、ぼたぼた涙を滴らしながら、やくり上げる吐息が、まるで不足ない子供のやうでした。傷はそれから運悪く膿を持って、五六日経りました。しかし毎日繻帯を取り替へてやる度毎に、彼女はきつと泣かないことはなかつたのです。

しかし私は、既にその頃ナオミを怒してゐたかどうか、それは自分にはよく分りません。さう、たしかに怒してはゐたのでせうが、自分自身のつもりでは寧ろ彼女を育ててやり、立派な婦人に仕込んでやるのが楽しみなので、ただそれだけでも満足出来るやうに思つてゐたのです。が、その年の夏、會社の方から二週間の休暇が出たので、毎年の例で私は歸省することになり、ナオミを淺草の實家へ預け、入森の家に戸締りをして、さて田舎へ行つて見ると、その二週間と云ふものが、溜らなく私には單調で、淋しく感ぜられたものです。あの兒が居ないとこんなにも耐まらないものか知らん、此れが愛の初まへました。そして母親の前を好い加減に云ひ終つて、東京へ戻ると、もう夜の十時過ぎでしたけれど、いきなり上野の停車場か

らナオミの家までタクシーを走らせました。
「ナオミちゃん、帰って来たよ。角に自動車
待たしてあるから、これから直ぐに大森へ行か
う。」

「さう、ちや今直ぐ行くわ。」

と云つて、彼女は私を格子の外へ待たして
置いて、やがて小さな風呂敷包みを提げながら
出て来ました。それは大さう蒸し暑い晩のこと
でしたが、ナオミは白っぽい、ふわふわした、
薄絹の葡萄の模様のあるモスリンの單衣を纏
つて、髪はゆるい、派手な黄色のリボンで髪を
結んでみました。そのモスリンは先達のお盆に
買つてやつたので、彼女はそれを留守の間に、
自分の家で仕立てて貰つて着てゐたのです。

「ナオミちゃん、毎日何をしてゐたんだい？」
「車が賑やかな廣小路の方へ走り出すと、私
は彼女と並んで腰かけ、心持ち彼女の方へ顔を
すり寄せるやうにしながら云ひました。」

「あたし毎日活動寫眞を見に行つてたわ。」

「ちや、別に淋しいはなかつたらうね。」

「ええ、淋しいことなかなかつたけれど、

「さう云つて彼女はちよつと考へて、

「でも調治さんは、思つたより早く歸つて来た

「恐ろしくハイカラになつちやつたつて。」
「そりやさうだらう、僕が見たつてさうだから
なあ。」

「さうか知ら。——一遍頭を日本髪に結つて
御覽て云はれたけれど、あたしイヤだから結は
なかつたわ。」

「ちやあそのリボンは？」

「此れ？ 此れはあたしが仲店へ行つて自分で
買ったの。どう？」

と云つて、頭をひねつて、さらさらとした油
氣のない髪の毛を風に吹かせながら、そこにひ
らひら舞つてゐる黄色の布を私の方へ示しま
した。

「ああ、よく映るね、かうした方が日本髪より
いくらかいいか知れやしない。」

「ふん」

と、彼女は、その獅子ッ鼻の先を、ちよいとし
やくつて意を得たやうに笑ひました。悪く云へ
ば小生意氣な此の鼻先の笑ひ方が彼女の癖では
ありませんたけれど、それが却つて私の眼には大
へん精巧さうに見えたものです。

「ナオミがしきりに『鎌倉へ連れてつてよう』
のね。」
「田舎にゐたつて話まらないから、鎌倉を切り
上げて来たつたんだよ。やつぱり東京が一
番だなア。」
私はさう云つてほつと溜息をつきながら、
窓の外にちらちらしてゐる都會の夜の花やか
な光景を、云ひやうのない懐かしい気持ちで眺
めたものです。

「ただどあたし、夏は田舎もいいと思ふわ。」

「そりや田舎にもよりけりだ、僕の家なんか
草深い百姓家で、近所の景色は平凡だし、名所
古蹟がある調子やなし、眞つ妻間から数だの鐘
だのがぶんぶん叩つて、とても暑くつてやり切
れやしない。」

「まあ、そんな所？」

「あたし、何處か、海水浴へ行きたいなあ。」
突然さう云つたナオミの口調には、だだッ見
のやうな可愛らしさがありました。

「ちや、近いうちに涼しい處へ連れて行かう
か、鎌倉がいいかね、それとも箱根かね。」

「温泉よりは海がいいわ、——行きたいなア、ほ
んたうに。」
その無邪氣さうな聲だけを聞いてゐると、矢
とね、だるので、ほんの二三日滞在のつもりで出
かけたのは八月の初め頃でした。

「なぜ二三日でなけりやいけないの？ 行くな
ら十日か一週間ぐらゐる行つて居なけりや話まら
ないわ。」
彼女はさう云つて、出がけにちよつと不平さ
うな顔をしました。が、何分私は會社の方が忙
がしいといふ口實の下に、郷里を引き揚げて來
たのですから、それがバレルと母親の手前、少
し工合が悪いのでした。が、そんなことをいふ
と却つて彼女が肩身の狭い思ひをするであらう
と察して、

「ま、今年は二三日で我慢してお置き、来年
は何處か變つたところへゆつくり連れて行つて
上げるから。——ね、いいぢやないか。」

「だつて、たつた二三日ぢやあ。」
「そりやさうだけれども、泳ぎたけりや歸つて
來てから、大森の海岸で泳げばいいぢやない
か。」
「あんな汚い海で泳げはしないわ。」
「そんな分らないことを云ふもんぢやないよ、
ね、いい見だからさうおし、その代り何か着物
を買つてやるから。——さう、さう、お前は洋
服が欲しいと云つてゐたぢやないか。だから洋

張り以前のナオミに違ひないのでしたが、何だ
かほんの十日ばかり見なかつた間に、急に身體
が伸び伸びと育つて来たやうで、モスリンの單
衣の下に息づいてゐる圓みを持った肩の形や乳
房のあたりを、私はそつと偷み覗かないではゐら
れませんでした。

「此の着物はよく似合ふね、誰に縫つて貰つた
の？」

と、暫く立つてから私は云ひました。

「おツ母さんが縫つてくれたの。」

「内の評判はどうだつた、見立てが上手だ
と云はなかつたかい。」

「誰が見立てたんだつて、云つてたわ。」

「僕が見立てたつてさう云つたかい。」

「ええ、云つたわ、——悪くはないけれど、あ
んまり柄がハイカラ過ぎるつて、——」

「おツ母さんがさう云ふのかい。」

「ええ、さう、——内の人たちにやなんにも分
りやしないのよ。」

さう云つて彼女は、遠い所を眺めるやうな
眼つきをしながら、

「みんながあたしを、すつかり變つたつて云つ
てたわ。」

「どんな風に變つたつて？」

「その『洋服』といふふきに釣られて、彼女はヤ
つと納得が行つたのでした。
鎌倉では長谷の金波樓と云ふ、あまり立派で
ない海水旅館へ泊りました。それに就いて今
から思ふと可笑しい話があるのです。と云ふの
は、私のふところには此の半期に貰つたボーナ
スが大部分使つてゐましたから、本来ならば何
も二三日滞在するのに節約する必要はなかつた
のです。それに私は、彼女と始めて泊まりがけ
の旅に出ると云ふことが愉快でなりませんでした
から、なるべくならばその印象を美しい
ものにするために、あまりケチケチした眞似は
しないで、宿屋なども一流の所へ行きたいと、
最初はそんな考へてゐました。ところがいいよ
と云ふ日になつて、横須賀行の二等室へ乗り込
んだ時から、私たちは一種の氣遣ひに襲はれた
のです。なぜかと云つて、その汽車の中には運
子や鎌倉へ出かける夫人や令嬢が澤山乗合は
してゐて、ずらりと並びやかな列を作つてゐ
ましたので、さてその中に割込んで見ると、私
は兎に角、ナオミの身なりがいかにも見すばら
しく思へたものでした。
勿論夏のことですから、その夫人達や令嬢

達もさうゴチゴチと着飾つてゐた筈はありませ
ん、が、かうして彼等とナオミとを比べて見ると、
社會の上層に生れた者とさうでない者との
間には、争はれない品格の相違があるやう
な気がしたのです。ナオミもカフェエにゐた頃
とは別人のやうになりはしたものの、氏や育ち
の悪いものは矢張りどうしても駄目なのぢやな
いかと、私もさう思ひ、彼女自身も一層強くそ
れを感じたに違ひありません。そしていつもは
彼女をハイカラに見せたところの、あのモスリ
ンの葡萄の襟の單衣物が、まあその時はどん
なに情なく見えたこととせう。並居る婦人達の
中にはあつさりとした浴衣がけの人もゐました
けれど、指に寶石を光らしてゐるとか、持ち物に
贅を凝らしてゐるとか、何かしら彼等の富貴を
物語るものが示されてゐるのに、ナオミの手に
はその滑らかな皮膚より外に、何一つとして誇る
に足るものは無いであつたのです。私は
今でもナオミが極まり悪さうに自分のバラッ
ルを袂の袋へ隠したことを覚えてゐます。それ
もその筈で、そのバラッルは新調の物ではあり
ましたが、誰の目にも七八圓の安物としか思は
れないやうな品でしたから。

り、やがてミニヨンの一節になりして、ゆるや
かな船の歩みと共にいろいろな唄をつづけて行
きます。

かういふ経験は、若い時代には誰でも一度あ
ることとせうが、私に取つては實にその時が
始めてでした。私は電氣の技師であつて、文學
だとか藝術だとか云ふものには縁の薄い方だ
したから、小説などを手にすることはめつたに
なかつたのですけれども、その時思ひ出したの
は嘗て讀んだことのある夏目漱石の「草枕」で
す。さうです、たしかあの中に、「ゲニス」は沈
みつつ、ゲニスは沈みつつ、と云ふところが
あつたと思ひますが、ナオミと二人で船に揺ら
れつつ、沖の方から夕霧の帳を透して陸の灯影
を眺めると、不思議にあの文句が胸に浮んで來
て、何だか斯う、此のまま彼女と果てしも知らぬ
遠い世界へ押し流されて行きたいやうな、涙ぐ
ましい、うつとりと酔つた心地になるのでした。
私のやうな武骨な男がそんな気分を味はふこ
とが出来ただけでも、あの鎌倉の三日間は決し
て無駄ではなかつたのです。

海濱ホテルへ泊まらうかなどと、そんな空想を
描いてゐたに拘はらず、その家の前まで行つて
見ると、先づ門構への厳しいのに扉迫されて、長
谷の通りを二度も三度も往つたり來たりした末
に、とうとう土地では二流か三流の金波樓へ行
くことになつたのです。

宿には若い學生たちが大勢がやが泊まつて
ゐて、とても落着いてはゐられないので、私た
ちは毎日濱でばかり暮らしました。お轉婆のナ
オミは海へ見れば機嫌がよく、もう汽車の中
でいよげたことは忘れてしまつて、
「あたしどうしてもこの夏中に泳ぎを覚えてし
まはなかつちや、」

と、私の腕にしがみついて、盛んにばちばち
ちやちや所々で是れ廻る。私は彼女の胸を兩
手で抱へて、腹這にさせて泳がせてやつたり、シ
ツカリ棒杭を綱かませて置いて、その綱を持つ
て足踏き方を教へてやつたり、わざと突然手を
つツ放して苦い潮水を飲ましてやつたり、それ
にも飽きると波乗の稽古をしたり、濱邊にころ
ころ寝ころびながら沙いたづらをしてみたり、
夕方からは舟を借りて沖の方まで滑いで行つた
り、そして、そんな折には彼女はいつも海
水着の上に大きなタオルを纏つたまま、或る時
と一緒に住んでゐながら、彼女がどんな體つき
をしてゐるか、露背に云へばその素裸な肉體の
姿を知り得る機会がなかつたのに、それが今
度はほんたうによく分つたのです。彼女が始め
て由比ヶ濱の海水浴場へ出かけて行つて、前の
晩にわざわざ銀座で買つて來た、濃い緑色の海
水着と海水服とを肌身に着けて現はれたとき、
正直なところ、私はどんなに彼女の四肢の整
つてゐることを喜んだでせう。さうです、私は
は全く喜んだのです。なぜかと云ふに、私は
先から着物の着こなし工合や何かで、きつとナ
オミの體の曲線は斯うであらうと思つてゐた
のが、想像通り中つたからです。

「ナオミよ、ナオミよ、私のメリー・ピクフオ
ードよ、お前は何と云ふ釣合の取れた、いい體
つきをしてゐるのだ。お前のそのしなやかな腕
はどうだ。その眞つ直ぐな、まるで男の子のや
うにすつきりとした脚はどうだ。」

と、私は思はず心の中で叫びました。そし
て映畫でお馴染の、あの活潑なマックスセンネ
ットのページング・ガールたちを想ひ出さずに
は居られませんでした。

誰しも自分の女房の體のことなどを餘り評
しく書き立てるのは厭でせうが、私にしたつ

は顔に腰かけ、或る時は表を背に背空を仰
いで誰に憚ることもなく、その得意のナボリの
船唄、「サンタ・ルチア」を甲高い聲でうたひま
した。

O dolce Napoli,
O font beato,
Ove scendete
Volle il creatore,
Tu sei l'impero
D'armonia!
Santa Lucia!
Santa Lucia!

と、伊太利語でうたふ彼女のソプラノが、夕
なぎの海に響き渡るのを聴き惚れながら、私は
しづかに櫓を漕いで行く。「もつと彼方へ、もつ
と彼方へ」と彼女は無限に浪の上を走つたが
いつの間にか日はとつと暮れてしまつて、
銀色の星がチラチラと私等の船を空から照
ろし、あたりがぼんやり暗くなつて、彼女の姿
はただほの白いタオルに包まれ、浴間に結ばれ
たらたかたのやうにその輪廓がぼやけてしま
ふ。が、暗れやかな唄ごまはなかなか止まずに、
「サンタ・ルチア」は幾度となく繰り返され、そ
れから「ローレライ」になり、「流浪の民」にな

て、後年私の妻となつた彼女に就いて、さう云
ふことをいれいしくしゃべつたり、多くの
人に知らしたりするのは決して愉快ではありま
せん。けれどもそれを云はないとどうも話の都
合が悪いし、そのくらゐのことを遠慮しては、
結局この記録を書き留める意義がなくなつてし
まふ譯です。ナオミが十五歳の八月、鎌
倉の海邊に立つた時に、どう云ふ風な體格だつ
たか、一と通りはここに記して置かねばなりま
せん。當時のナオミは、並んで立つと背の高さ
が私よりは一寸ぐらゐ低かつたでせう。

斷つて置きますが、私は頑健な如き體格で
はありましたが、身の丈は五尺二寸ばかり
で、先づ小男の部だつたのです。が、彼女
の骨組の著しい特長として、脚が短く、脚の
方が長かつたので、少し離れて眺めると、實際
よりは大へん高く思へました。そして、その短
い脚體はSの字のやうに非常に深くくびれて
ゐて、くびれた最底部のところにも、もう十分に
女らしい圓みを帯びた臀の隆起がありました。
その時分私たちは、あの有名な水泳の達人ケラ
マン嬢を主役にした、「水神の娘」とか云ふ
人魚の映畫を見たことがありましたので、
「ナオミちゃん、ちよいとケラマンの眞似を

して御覽。
と、私が云ふと、彼女は汗漬に突つ立つて、
両手を空にかざしながら、「飛び込み」の形を
して見せたものですが、そんな場合に胸を
びつたり合はせると、胸と胸の間には寸分の
隙もなく、腰から下が足頭を頂天にした一つ
の細長い三角形を描くのでした。彼女もそれ
は得意の様子で、
「どう？ 誠治さん、あたしの胸は曲つてい
ない？」

と云ひながら、歩いて見たり、立ち止まつて見
たり、砂の上へぐつと伸ばして見たりして、自
分でもその恰好を嬉しさに眺めました。
それからもう一つナオミの體の特長は、頸
から肩へかけての線でした。肩……私はしば
しば彼女の肩へ觸れる機会があつたのです。と
云ふのは、ナオミはいつも海水服を着るときに、
「誠治さん、ちよいと此れを借めて頂戴。」と、
私の傍にやつて来て、肩についてゐるボタンを
嵌めさせるのでしたから。で、ナオミのやうに
撫で肩で、頸が長いものは、着物を脱ぐと被せて
ゐるのが普通ですけど、彼女はそれと反対で、
思ひの外に厚みのある、たつぷりとした立派な
肩と、いかにも呼吸の強さうな胸を持つてゐま

るから此の體の中にお這入り。
と、さう云ふと、彼女は云はれるままになつて
大人しく私に洗はせてみました。それがだん
だん鮮になつて、すずしい秋の季節が来て、行
水は止まず、もうしまひにはアトリエの隅に西
洋風呂や、バスマットを据えつけて、その周りを
衝立て圍つて、ずつと冬洗つてやるやうに
なつたのです。

五

察しのいい讀者のうちには、既に前回の話
の間に、私とナオミが友達以上の關係を結
んだかのやうに想像する人があつたであらう。が、
事實さうではなかつたのです。それはなるほど
月日の立つに隨つて、お互ひの胸の中に一種の
「了解」と云ふやうなものが出来てゐたことはあ
りませう。けれども一方はまだ十五歳の少女で
あり、私は前にも云ふやうに女にかけては經
験のない直直な「君子」であつたばかりでなく、
彼女の貞操に關しては責任を感じてゐたので
すから、めつたに一時の衝動に驅られてその
「了解」の範圍を越えるやうなことはしなかつた
のです。勿論私の心の中には、ナオミを指い
て自分の妻にするやうな女はゐない、あつたと

した。ボタンを嵌めてやる折に、彼女が深く息
を吸つたり、腕を動かして背中の肉にもくもく
波を打たせたりすると、それでなくてもハチ切
れさうな海水服は、丘のやうに盛り上つた肩の
ところ一杯に伸びて、びんと弾けてしまひさ
うになるのです。と口に云へばそれは實に力
の籠つた、「若さ」と「美しさ」の感じの溢れた
肩でした。私は内内そのあたりにゐる多くの
少女と比較して見ましたが、彼女のやうに健康
な肩と優雅な頸とを兼ね備へてゐるものは外に
ないやうな氣がしました。
「ナオミちゃん、少うしちツとしておいでよ、
さう動いちゃボタンが固くつて嵌まりやしな
い。」

と云ひながら、私は海水服の端を掴んで大
きな物を袋の中へ詰めるやうに、無理にその
肩を押し込んでやるのが常でした。
かう云ふ體格を持つてゐた彼女が、運動好き
で、お轉變だつたのは當り前だと云はなければ
なりません。實際ナオミは手足を使つてやるこ
となら何事に依らず器用でした。水泳などは自
分で揚言してゐたやうに、鎌倉の三日を皮切に
して、あとは大森の海岸で毎日一生懸命に習つ
て、その夏中にとらうと物にしてしまひ、ボート

ころで今更情として彼女を捨てる譯には行か
ないといふ考へが、次第にしつかりと根を張
つて来てゐました。で、それだけに、彼女を
汚すやうな仕方、或ひは弄ぶやうな態度で、
最初にその事に觸れたくないと思つてゐまし
た。
左様、私とナオミが始めてさう云ふ關係に
なつたのはその明くる年、ナオミが取つて十六
歳の年の春、四月の二十六日でした。——と、
さうハッキリと覚えてゐるのは、實はその時分、
いやずつとその以前、あの行水を使ひ出した頃
から、私は毎日ナオミに就いていろいろ興味
を感じたことを日記に附けて置いたからです。
全くあの頃のナオミは、その體つきが一日一
日と女らしく、際立つて育つて行きましたか
ら、ちやうど赤子を産んだ親が、「始めて笑ふ」
とか「初めて口をきく」とか云ふ風に、その子供
の生ひ立のさまを書き留めて置くのと同じやう
な心持ちで、私は「自分の注意を惹いた
事柄を日記に誌したのでした。私は今でもと
きどきそれを繰つて見ることがありますが、大
正二年九月二十一日——即ちナオミが十
五歳の秋、——の條には斯う書いてあります。

を滑いだり、ヨットを操つたり、いろんな事が
出来るやうになりました。そして一日遊び抜い
て、日が暮れるとガツカリ疲れて、「ああ、くた
びれた」と云ひながら、ビツショリ濡れた海水
着を持つて歸つて来る。
「あーあ、お腹が減つちやつた、」
と、ぐつたり椅子に體を投げ出す。どうか
すると、晩飯を焚くのが面倒なので、歸り路に洋
食屋へ寄つて、まるで二人が競争のやうにたら
ふく物をたべつくらす。ピフテキのあとで又
ピフテキと、ピフテキの好きな彼女は譯なくべ
ロリと三血ぐらゐお代りをするのでした。
あの夏の夏、楽しかつた思ひ出を書き記し
たら際限がありませんから此のくらゐにして置
きますが、最後に一つ書き洩らしてならないの
は、その時分から私が彼女をお湯へ入れて、手
だの足だの背中だのをゴムのスポンヂで洗つて
やる習慣がついたことです。此れはナオミが
歸がつたりして銭湯へ行くのを大儀がつたもの
ですから、海の潮水をしぼすのに臺所で水
を浴びたり、行水を使つたりしたので始まりで
した。
「さあ、ナオミちゃん、そのまんま寝ちまつち
や身體がべたべたして仕様がないう。洗つてや

五

一夜の八時に行水を使はせる。海水浴で日に焼
けたのがまだ直らない。ちやうど海水着を着て
ゐたところだけが白くて、あとが眞つ黒で、私
もさうだがナオミは生地が白いから、餘計カッ
キリと眼について、裸でゐても海水着を着てゐ
るやうだ。お前の體はまるで鎧馬のやうだとい
つたら、ナオミは可笑しがつて笑つた。
それから一と月ばかり立つて、十月十七日
の條には、
一日に焼けた皮膚が剥けたりしてゐたのがだん
だん直つたと思つたら、却つて前よりつやつや
しい非常に美しい肌になつた。私が腕を洗
つてやつたら、ナオミは黙つて、肌の上を滑けて
流れて行くシャボンの泡を見つめてゐた。「綺麗
だね」と私が云つたら、「ほんとに綺麗だね」と
彼女は云つて、「シャボンの泡がよ」と附け加へ
た。
次に十一月の五日——
「今夜始めて西洋風呂を使つて見る。馴れない
のでナオミはつるつる湯の中で滑つてきやつき
やつと笑つた。『大きなベビーさん』と私が云
つたら、私の事を『パパさん』と彼女が云つた。
……
さうです、此の「ベビーさん」と「パパさん」と

はそれから後にも屢々出ました。ナオミが何かをねだつたり、だだを捏ねたりする時は、いつもふざけて私を「パパさん」と呼んだものです。

「ナオミの成長」——と、その日記にはさう云ふ標題が附いておりました。ですからそれは云ふまでもなく、ナオミに關した事柄ばかりを記したもので、やがて私は寫眞を買ひ、いよいよメリー・ピクフオードに似て来る彼女の顔をさまざまな光線や角度から映し撮つては、記事の間のところどころへ貼りつけたりしました。

日記のことで話が横道へ外れましたが、兎に角それに依つて見ると、私と彼女とが切つても切れない關係になつたのは、大森へ来てから第二年目の四月の二十六日なのです。尤も二人の間には云はず語らず「了解」が出来てゐたのですから、極めて自然に執方が執方を誘惑するでもなく、殆んど此れと云ふ言葉一つも交さないで、暗黙の裡にさう云ふ結果になつたのです。それから彼女は私の耳に口をつけて、「謙治さん、きつとあたしを捨てないでね。」と、云ひました。

「捨ててゐるなんて、——そんなことは決してないから安心おしよ。ナオミちゃんには僕の心がよく分つてゐるだらうが、……」

「ええ、そりや分つてゐるけれど、……」

「ちや、いつから分つてゐた？」

「さあ、いつからだか、……」

「僕がお前を引き取つて世話すると云つた時に、ナオミちゃんは僕をどう云ふ風に思つた？」

「お前を立派な者にして、行く行くお前と結婚するつもりぢやないかと、さう云ふ風に思はなかつた？」

「そりや、さう云ふ積りなかしらと思つたけれど、……」

「ちやナオミちゃんも僕の奥さんになつてもいい氣で来てくれたんだね。」

そして私は彼女の返辭を待つまでもなく、力一杯彼女を強く抱きしめながらつづけました。

「ありがとよ、ナオミちゃん、ほんとにありがと、よく分つてゐてくれた。僕は今こそ正直なことを云ふけれど、お前がこんなに、……こんななまでに僕の理想になつた女になつてくれようとは思はなかつた。僕は運がよかつたんだ。僕は一生お前を可愛がつて上げるよ。」

「お前ばかりを……世間によくある夫婦のやうにお前を決して粗末にはしないよ。ほんとに僕はお前のために生きてゐるんだと思つてお

「さうでなけりや「ナオミさん」にしようか？」

「さんはいやだわ、やつぱりちやんの方がいいわ、あたしがさんにして頂戴つて云ふまでは。」

「さうすると僕も永久に「謙治さん」だね。」

「そりやさうだわ、外に呼び方はありやしないもの。」

ナオミはソファへ仰向けにねころんで、薔薇の花を持ちながら、それを顔に「唇へあてていちくつてゐたかと思ふと、そのとき不意に、

「ねえ、謙治さんと、さういつて、兩手をひろげて、その花の代りに私の首を抱きしめました。」

「僕の可愛いナオミちゃん」と私は息が塞がるくらゐシツカリと抱かれたまま、袂の裏の暗い中から聲を出しながら、

「僕の可愛いナオミちゃん、僕はお前を愛してゐるばかりぢやない、ほんたうを云へばお前を崇拜してゐるのだよ。お前は僕の寶物だ、僕が自分で見つけ出して研ぎをかけたダイヤモンドだ。だからお前を美しい女にするためなら、どんなものでも買つてやるよ。僕の月給をみんなお前に上げてもいいが。」

くれ。お前の望みは何でもきつと聽いて上げるから、お前ももつと學問をして立派な人になつておくれ。……」

「ええ、あたし一生懸命勉強しますわ、そしてほんとに謙治さんの氣に入るやうな女になるわ、きつと……」

ナオミの眼には涙が流れておりましたが、いつか私も泣いてゐました。そして二人はその晩ちゆう、行くすゑのことを飽かず語り明かしました。

それから間もなく、土曜の午後から日曜にかけて郷里へ歸り、母に始めてナオミのことを打ち明けました。此れは一つには、ナオミが國の方の思はくを心配してゐる様子でしたから、彼女に安心を與へるためと、私としても公明正大に事件を運びたかつたので、出来るだけ母への報告を急いだ譯でした。私は私の「結婚」に就いての考へを正直に述べ、どう云ふ譯でナオミを妻に持ちたいのか、年寄にもよく納得が行くやうに理由を説いて聞かせました。母は前から私の性格を理解して居り、信用してゐてくれたので、

「お前がさう云ふつもりならその見を嫁に買ふもいいが、その見の里がさう云ふ家だと面倒が

起り易いから、あとあとの迷惑がないやうに氣を付けて、」

と、たださう云つただけでした。で、おぼびらの結婚は二三年先の事にして、籍だけは早く此方へ入れて置きたいと思つたので、千束町の方にも直ぐ掛け合ひましたが、此れはもともと呑氣な母や兄たちですから、譯なく済んでしまひました。呑氣ではあるが、さう腹の黒い人達ではなかつたと見えて、慈にからんだやうなことは何一つ云ひませんでした。

さうなつてから、私とナオミとの親密さが急速に展開したのは云ふまでもありません。まだ世間で知る者もなく、うはばは矢張り友達のやうにしてゐましたが、もう私たちは誰に聞るところもない法律上の夫婦だつたのです。

「ねえ、ナオミちゃん」と、私は或る時彼女に云ひました。

「僕とお前は此れから先も友達みたいに暮らさうぢやないか、いつまで立つても——」

「ちや、いつ迄立つてもあたしのことを「ナオミちゃん」と呼んでくれる？」

「そりやさうさ、それとも「奥さん」と呼んであげようか？」

「いやだわ、あたし、——」

「どう？ かうやるとあたしの顔は西洋人のやうに見えない？」

などと云ひながら鏡の前でいろいろ表情をやつて見せる。活動寫眞を見る時に彼女は餘程女優の動作に注意を配つてゐるらしく、ピクフオードはかう云ふ笑方をするとか、ピナ・メニケリはこんな工合に眼を使ふとか、ジエラルディン・フアラーはいつも頭をかう云ふ風に東ねてゐるとか、もうしまひには夢中になつて、髪の毛までもバラバラに解かしてしまつて、それをさまざまの形にしながらかつてゐるのですが、瞬間的にさう云ふ女優の斬や感じを捉へることは、彼女は實に上手でした。

「巧いもんだね、とてもその眞似は役者にだつて出来やしないね、顔が西洋人に似てゐるんだから。」

「さうかしら、何處が全體似てゐるのかしら？」

「その鼻つきと齒ならびのせあだよ。」

「ああ、此の齒？」

そして彼女は「い」と云ふやうに唇をひろげて、その齒並びを鏡へ映して眺めるのでした。それはほんとに粒の揃つた非常にツヤのある綺麗な齒列だつたのです。

「何しろお前は日本人離れがしてゐるんだから、普通の日本の着物を着たんぢや面白くないね。いつそ洋服にしてしまふか、和服にしても一風變つたスタイルにしたらどうだい。」

「ぢや、どんなスタイル？」

「此れからの女はだんだん活潑になるんだから、今迄のやうな、あんな重苦しい窮屈な物はいけないと思ふよ。」

「あたし、筒ッぽの着物を着て、兵児帯をしめちやいけないかしら？」

「筒ッぽも悪くはないよ、何でもいいから出来るだけ新しな風をして見るんだよ。日本ともつかず、支那ともつかず、西洋ともつかないやうな、何かさう云ふふりはないかな——」

「あつたらあたしに捲へてくれる？」

「ああ捲へて上げるとも。僕はナオミちゃんにいろんな形の服を捲へて、毎日毎日取り換へ引換へ着せて見るやうにしたいんだよ。お召だの縮緬だのつて、そんな高い物でなくつてもいい。めりんすや銘仙で澤山だから、意匠を高抜にすることだね。」

こんな話の末に、私たちはよく連れ立つて方方の突服屋や、デパートメント・ストアへ切れ地を捜しに行つたものでした。殊にその頃は、殆んど日曜日の度毎に三越や白木屋へ行かないことはなかつたでせう。兎に角普通の女物ではナオミも私も満足しないので、此れはと思ふ柄を見つけるのは容易でなく、在り来たりの突服屋では駄目だと思つて、更紗屋だの、敷物屋だの、ワイシャツや洋服の切れを賣る店だの、わざわざ横濱まで出て行つて、支那人街や居留地にある外国人向きの切れ屋だのを、一日がかりで尋ね廻つたことがありましたつて、二人ともくたびれ切つて足を擦粉木のやうにしながら、それからそれへと何處迄も品物を漁りに行きます。路を通るにも油断をしないで、西洋人の姿や服装に目をつけたり、到る處のショウ・ウインドウに注意します。たまたま珍し

「何だらうあの女は？」

「女優かしら？」

「混血児かしら？」

などといふ囁きを耳にしなから、私も彼女も得意さうにわざとそこいらをうろついたものでした。

「あ、あの切れはどう？」

と叫びながら、すぐその店へ這入って行つてその反物をウインドウから出して来させ、彼女の身體へあてがつて見て顔の下からだりりと下へ垂らしたり、胸の周りにぐるぐる巻きつけたりする。——それは全く、たださうやつて冷かして歩くだけでも、二人に取つては優に面白い遊びでした。

近頃でこそ一般の日本の婦人が、オルガンデ・イーヤ、ジョオセツトや、コットン・ポイルや、ああ云ふものを單衣に仕立てることがゴッポツ流行つて来ましたが、あれに始めて目をつけたものは私たちではなかつたでせうか。ナオミは奇妙にあんな地質が似合ひました。それも眞面目な着物ではいけないので、筒ッぽにしたり、パチャマのやうな形にしたり、ナイト、ガウンのやうにしたり、反物のまま身體に巻きつけてところどころをプロチで止めたり、さうしてそんななりをしてはただ家の中を往つたり来たりして、鏡の前に立つて見るとか、いろいんなポーズを寫眞に撮るとかして見るのです。白や、薄紫色や、薄紫の、紗のやうに透き徹るこれらの衣に包まれた彼女の姿は、一個の生き

た大輪の花のやうに美しく、「かうして御覽、ああして御覽」と云ひながら、私は彼女を抱き起しをり、倒したり、腰かけさせたり、歩かせたりして、何時間でも眺めてゐました。

こんな風でしたから、彼女の衣裳は一年間に幾通りとなく殖えたものです。彼女はそれらを自分の部屋へはともしまひきれないので、手あたり次第に何處へでも吊り下げたり、丸めて置いたりしてゐました。庫房を買へばよかつたのですが、さう云ふお金があるくらゐなら少しでも儉計衣裳を買ひたいし、それに私たちの趣味として、何もそんなに大切に保存する必要はない。数は多いがみんな安物であるし、どうせ傷から着脱してしまふのだから、見える所へ散らかして置いて、氣が向いた時に何處でも取り換へた方が便利でもあり、第一部屋の裝飾にもなる。で、アトリエの中は恰も芝居の衣裳、部屋のやうに、椅子の上でもソファの上でも、床の隅つこでも、甚だしきは梯子段の中途や、屋根裏の棧敷の手すりに迄も、それがだらしないく放つたらかしてない所はなかつたのです。そしてめつたに洗濯をしたことがなく、おまけに彼女はそれを素肌へ纏ふのが癖でしたから、どれも大概は垢じみてゐました。

「あつたらあたしに捲へてくれる？」

「ああ捲へて上げるとも。僕はナオミちゃんにいろんな形の服を捲へて、毎日毎日取り換へ引換へ着せて見るやうにしたいんだよ。お召だの縮緬だのつて、そんな高い物でなくつてもいい。めりんすや銘仙で澤山だから、意匠を高抜にすることだね。」

こんな話の末に、私たちはよく連れ立つて方方の突服屋や、デパートメント・ストアへ切れ地を捜しに行つたものでした。殊にその頃は、殆んど日曜日の度毎に三越や白木屋へ行かないことはなかつたでせう。兎に角普通の女物ではナオミも私も満足しないので、此れはと思ふ柄を見つけるのは容易でなく、在り来たりの突服屋では駄目だと思つて、更紗屋だの、敷物屋だの、ワイシャツや洋服の切れを賣る店だの、わざわざ横濱まで出て行つて、支那人街や居留地にある外国人向きの切れ屋だのを、一日がかりで尋ね廻つたことがありましたつて、二人ともくたびれ切つて足を擦粉木のやうにしながら、それからそれへと何處迄も品物を漁りに行きます。路を通るにも油断をしないで、西洋人の姿や服装に目をつけたり、到る處のショウ・ウインドウに注意します。たまたま珍し

「あ、あの切れはどう？」

と叫びながら、すぐその店へ這入って行つてその反物をウインドウから出して来させ、彼女の身體へあてがつて見て顔の下からだりりと下へ垂らしたり、胸の周りにぐるぐる巻きつけたりする。——それは全く、たださうやつて冷かして歩くだけでも、二人に取つては優に面白い遊びでした。

近頃でこそ一般の日本の婦人が、オルガンデ・イーヤ、ジョオセツトや、コットン・ポイルや、ああ云ふものを單衣に仕立てることがゴッポツ流行つて来ましたが、あれに始めて目をつけたものは私たちではなかつたでせうか。ナオミは奇妙にあんな地質が似合ひました。それも眞面目な着物ではいけないので、筒ッぽにしたり、パチャマのやうな形にしたり、ナイト、ガウンのやうにしたり、反物のまま身體に巻きつけてところどころをプロチで止めたり、さうしてそんななりをしてはただ家の中を往つたり来たりして、鏡の前に立つて見るとか、いろいんなポーズを寫眞に撮るとかして見るのです。白や、薄紫色や、薄紫の、紗のやうに透き徹るこれらの衣に包まれた彼女の姿は、一個の生き

か、そして彼女は多くの場合足袋や靴下を着けることはなく、いつもそれらの穿物を直かに素足に穿いてゐました。

六

當時私は、それほど彼女の機嫌を買ひ、ありとあらゆる好きな事をさせながら、一方では又、彼女を十分に教育してやり、偉い女、立派な女に仕立てようといふ最初の希望を捨てたこととはありませんでした。此の「立派」とか「偉い」とか云ふ言葉の意味を吟味すると、自分でもハツキリしないのですが、要するに私らしい極く単純な考へで、「何處へ出しても恥かしくない、近代的な、ハイカラ婦人」と云ふやうな、甚だ漠然としたものを頭に置いてゐたのでせう。ナオミを「偉くすること」と、「人形のやうに珍重すること」と、此の二つが果して兩立するものかどうか？ 今から思ふと馬鹿げた話ですけれど、彼女の愛に溺惑して眼が眩んでゐた私には、そんな見易い道理さへが全く分らなかつたのです。

と、私は口癖のやうに云ひました。「ええ、勉強するわ、さうしてきつと偉くなるわ。」
と、ナオミは私に云はればいつも必ずさう答へます。そして毎日晚飯の後で、三十分くらゐ、私は彼女に会話やリーダーを渡つてやり、私は彼女に会話やリーダーを渡つてやります。が、そんな場合に彼女は例のピロイドの服だのガウンだのを着て、足の突先でスリッパをおもちやしながら椅子に凭れる始末です。から、いくら口でやかしく云つても、結局「遊び」と「勉強」とはごつちやになつてしまふのでした。
「ナオミちゃん、何だねそんな真似をして！ 勉強する時はもつと行儀よくしなけりやいけなよ。」
私がさう云ふと、ナオミはびくつと肩をちぢめて、小学校の生徒のやうな甘つ垂れた聲を出して、
「先生、御免なさい。」
と云つたり、
「河合チエんチエい、勘忍して頂戴な。」
と云つて、私の鏡をコツソリ覗き込むかと思ふと、時にはちよいと頬つべたを突ついたりする。「河合先生」も此の可愛らしい生徒に對

しては嚴格にする勇氣がなく、叱言の果てがたかいのない悪ふざけになつてしまひます。
一體ナオミは、音楽の方はよく知りませんが、英語の方は十五の歳からもう二年ばかり、ハリソン嬢の教を受けてゐたのですから、本来ならば十分出來ていい筈なので、リーダーも一から始めて今では二の半分以上まで進み、会話の教科書としては「English Echo」を習ひ、文法の本は神田乃武の「Intermediate Grammar」を使つてゐて、先づ中學の三年ぐらゐな實力に相當する譯でした。けれどもいくら品風眼に見ても、ナオミは恐らく二年生にも劣つてゐるやうに思へました。どうも不思議だ、こんな筈はないのだがと思つて、一度私はハリソン嬢を訪ねたことがありましたが、
「いいえ、そんなことはありません、あの兒はなかなか賢い兒です。よく出來ます。」
と、さう云つて、太つた、人の好きさうなその老嬢は、ニコニコ笑つてゐるだけでした。
「さうです、あの兒は賢い兒です、しかしその精に餘り英語がよく出來ないと思ひます。讀むことだけは讀みますけれど、日本語に翻譯することや、文法を解釋することなどが、……」
「いや、それはあなたがいけません、あなたの

考へが違つてゐます。」
と、矢張り老嬢はニコニコ顔で、私の言葉を追つて云ふのでした。

「日本の人、みな文法やトランスレーションを考へます。けれどもそれは一番悪い。あなた英語を習ひます時、決して決して頭の中で文法を考へてはいけません、トランスレートしてはいけません。英語のまま何度でも何度も讀んで見ること、それが一番よろしいです。ナオミさんは大變發音が美しい、そしてリーダーイングが上手ですから、今にきつと巧くなります。」
成るほど老嬢の云ふところにも理窟はあります。が、私の意味は文法の法則を組織的に覚えろと云ふのではありません。二年間も英語を習ひ、リーダーの三が讀めるのですから、せめて過去分詞の使ひ方や、パッセージ・ヴオイスの組み立てや、サブジャンクティブ・モードの應用法ぐらゐは、實際的に心得ていい筈なのに、和文英譯をやらせて見ると、それがまるきり成つてゐないのです。殆んど中學の劣等生にも及ばないくらいなのです。いくらリーダーイングが達人だからと云つて、これでは到底實力が養成される道理がない。一體二年間も何を教へ、何を習つてゐただか譯が分らない。しかし老嬢

は不平さうな私の顔つきに頓着せず、ひどく安心しきつたやうな鷹揚な態度で頷きながら、「あの兒は大へん賢いです」を相變らず繰り返すばかりでした。
此れは私の想像ではありますが、どうも西洋人の教師は日本人の生徒に對して一種のえこひいきがあるやうです。えこひいき、——さう云つて悪ければ先入主とも云ひませうか？ つまり彼等は西洋人臭い、ハイカラな、可愛らしい顔だちの少年や少女を見ると、一も二もなくその兒を惻巧だと云ふ風に感ずる。殊にオールド・ミスであるとその傾向が一層甚しい。ハリソン嬢がナオミを頗りに褒めちぎるのはそのせゐなので、もう頭から「賢い兒だ」ときめてしまつてゐるのでした。おまけにナオミは、ハリソン嬢の云ふ通り發音だけは非常に流暢を極めてゐました。何しろ尚並びがいいところへ産學の素質があつたのですから、その聲だけを聞いてゐると實に綺麗で、素晴らしい英語が出來さうで、私などはまるで足元へも寄りつけないやうに思ひました。それで恐らくハリソン嬢はその聲に欺かされて、コロリと夢つてしまつたに違ひないのです。嬢がどれほどナオミを愛してゐたか云ふことは、驚いたことに、嬢

の部屋へ通つて見ると、その化粧臺の鏡の周りにナオミの寫眞が澤山飾つてあつたので分るのでした。
私は内心嬢の意見や教授法に對しては甚だ不満でしたけれども、同時に又、西洋人がナオミをそんなにひいきしてくれる、賢い兒だと云つてくれるのが、自分の思ふ處なので、恰も自分が褒められたやうな嬉しさを禁じ得ませんでした。のみならず、元來私は、いや、私ばかりではありません、日本人は誰でも大概さうですが、——西洋人の前へ出ると頗る意氣地がなくなつて、ハツキリ自分の考へを述べ勇氣がない方でしたから、嬢の奇妙なアクセントのある日本語で、而も堂々とまくし立てられると、結局此方の云ふべきことも云はないでしまひました。なに、向うがさう云ふ意見なら、此方は此方で、足りないところを家庭で補つてやればいいのだと、腹の中でさう極めながら、
「ええ、ほんたうにそれはさうです、あなたの仰つしやる通りです。それで私も分りましたから安心しました。」
とか何とか云つて、曖昧な、ニヤニヤしたお世辭笑ひを浮かべながら、そのまま不要領

でスゴスゴ歸つて来たのでした。
 「讀治さん、ハリソンさんは何と云つたか——」
 と、ナオミはその晩尋ねましたが、彼女の口調はいかにも老練の寵を恃んで、すつかりたか括つてゐるやうに聞えました。
 「よく出来るつて云つてゐたけれど、西洋人には日本人の生徒の心理が分らないんだよ。發音が器用で、ただすらすら讀めさへすりやあいいと云ふのは大間違ひだ。お前はたしかに記憶力はいいい、だから空で書ける事は上手だけれど、翻譯させると何一つとして意味が分つてゐないぢやないか。それぢや鵝と同じことだ。いくら習つても何の足しにもなりやしないんだ。」
 私がナオミに叱言らしい叱言を云つたのはその時が初めてでした。私は彼女がハリソン嬢を味方にして、「それ見たことか」と云ふやうに、得意の鼻を蓋めかしてゐるのが癪に觸つたばかりでなく、第一こんなで「偉い女」になれりかどうか、それを非常に心もとなく感じたのです。英語と云ふものを別問題にして考へても、文典の規則を理解することが出来ないやうな頭では、全く此の先が案じられる。男の兒が中學で幾何や代數を習ふのは何の爲めか、必ずしも實用に供するのが主眼でなく、頭腦

の働きを鍛へにし、練習するのが目的ではないか。女の兒だつて、成るほど今までは解題的の頭がなくても済んでゐたが、此れからの婦人はさうは行かない。まして「西洋人にも劣らないやうな」立派な「女」にならうとするものが、組織の才がなく、分析の能力がないと云ふのでは心細い。
 私は多少依怙地にもなつて、前にはほんの三分ほど淺つてやるだけだつたのですが、それから後は一時間か一時間半以上、毎日必ず和文英譯と文典とを授けることにしたのでした。そしてその間は斷じて遊び半分の氣分を許さず、びしびし叱り飛ばしました。ナオミの最も缺けてゐるところは理解力でしたから、私はわざと意地悪く、細かいことを教へないでちよつとしたヒントを與へてやり、あとは自分で發明するやうに導きました。たとへば文法のパツシヴ・ヴォイスを習つたとすると、早速それの應用問題を彼女に示して、
 「さ、これを英語に譯して御覽。」
 と、さう云ひます。
 「今讀んだところが分つてさへゐりや、此れがお前に出来ない筈はないんだよ。」
 と、さう云つたとき、彼女が唇を歪めて

黙つて氣長に構へてゐます。その答案が違つても決して何處が悪いとは云はないで、
 「何だお前、これぢや分つてゐないんぢやないか、もう一度文法を讀み直して御覽。」
 と、何處でも突つ返します。そしてそれでも出来ないとなると、
 「ナオミちゃん、こんな易しいものが出来ないでどうするんだい。お前は一體幾つになるんだ。：幾度も幾度も同じ所を直されて、まだこんな事が分らないなんて、何處に頭を持つてゐるんだ。ハリソンさんが細巧だなんて云つたつて、僕はちつともさうは思はないよ。此れが出来ないぢや學校に行けば劣等生だよ。」
 と、私もつい熱中し過ぎて大きな聲を出すやうになります。するとナオミはむつと面を彫らせて、しまひにはしくしく泣きだすことがよくありました。
 ふだんはほんたうに仲のいい二人、彼女が笑へば私も笑つて、嘗て一度もいさかひをしたことがなく、こんな醜ましい男女はないと思はれる二人、——それが英語の時間になるときまつてお互ひに重苦しい、息の詰まるやうな氣持ちにさせられる。日に一度づつ私が怒らないことはなく、彼女が怒れないことはなく、いつ

さつまであんなに醜態のよかつたものが、急に御方ともシヤチコ張つて、殆んど敵意をこへ含んだ眼つきで睨めつくらをする。——實際私はその時になると、彼女を偉くするためと云ふ最初の動機は忘れてしまつて、あまりの癖がひなさにチリチリして、心から彼女が憎らしくなつて來るのでした。相手が男の兒だつたら、私はきつと腹立ち紛れにボカリと一つ喚はせたかも知れません。それでなくても夢中になつて「馬鹿ッ」と怒鳴りつけることは始終でした。一度は彼女の額のあたりをこつんと拳骨で小突いたことさへありました。が、さうされるとナオミの方も妙にひねくれて、たとへ知つてゐる事でも決して答へようとはせず、頬を流れる涙を呑みながらいつ迄も石のやうな沈黙を押し通します。ナオミは一旦さう云ふ風に曲り出したら驚くほど剛情で、始末に負へないたちでしたから、最後は私が根負けをして、うやむやになつてしまふのでした。

或るときこんな事がありました。「going」とか「going」とか云ふ現在分詞には必ずその前に「ある」と云ふ動詞、——「is going」を附けなければいけないのに、それが彼女には何度教へても理解出来ない。そして未だに「I'm going」の働きを徹密にし、練習するのが目的ではないか。女の兒だつて、成るほど今までは解題的の頭がなくても済んでゐたが、此れからの婦人はさうは行かない。まして「西洋人にも劣らないやうな」立派な「女」にならうとするものが、組織の才がなく、分析の能力がないと云ふのでは心細い。
 私は多少依怙地にもなつて、前にはほんの三分ほど淺つてやるだけだつたのですが、それから後は一時間か一時間半以上、毎日必ず和文英譯と文典とを授けることにしたのでした。そしてその間は斷じて遊び半分の氣分を許さず、びしびし叱り飛ばしました。ナオミの最も缺けてゐるところは理解力でしたから、私はわざと意地悪く、細かいことを教へないでちよつとしたヒントを與へてやり、あとは自分で發明するやうに導きました。たとへば文法のパツシヴ・ヴォイスを習つたとすると、早速それの應用問題を彼女に示して、
 「さ、これを英語に譯して御覽。」
 と、さう云ひます。
 「今讀んだところが分つてさへゐりや、此れがお前に出来ない筈はないんだよ。」
 と、さう云つたとき、彼女が唇を歪めて

「The making」と云ふやうな誤りをするので、私は散散腹を立てて例の「馬鹿」を連發しながら口が酸っぱくなる程も細かく説明してやつた揚句、過去、未來、未來完了、過去完了といろいろなテンスに互つて「will going」とやつて見ると、呆れた事にはそれがやつぱり分つてゐない。依然として「I will going」とやつたり、「I had going」と書いたりする。私は覺えずかつとなつて、
 「馬鹿！ お前は何と云ふ馬鹿なんだ！ going」だの「have going」だのつてことは決して云へないつて人があれほど云つたのがまだお前には分らないか。分らないけりや分るまでやつて見ろ。今夜一と晩中かかつて出来るまでは許さないから。」
 そして激しく鉛筆を叩きつけて、その帳面をナオミの前へ突き返すと、ナオミは固く唇を結んで、眞つ青になつて、上眼づかひに、チーツと鋭く私の肩を睨めつけました。と、何と思つたか彼女はいきなり帳面を裏面ににして、ビリビリに引き裂いて、ぼんと床の上へ投げ出したとき、再び物凄いやつて私の顔を穴のあくほど睨めるのです。
 「何するんだ！」

さうです、私は特に「肉體」と云ひます、なぜならそれは彼女の皮膚や、齒や、唇や、髪や、瞳や、その他あらゆるなまめかしい、愛嬌の美しさであつて、決してそこには精神的の何物もなかつたのですから。つまり彼女は肉體の方では私の期待を裏切りながら、肉體の方ではいよいよますます理想通りに、いやそれ以上に、美しさを増して行つたのです。「馬鹿な女」仕様の奴だ、と思へば思ふほど、尙意地悪くその美しさに誘惑される。此れは實に私に取つては不幸な事でした。私は次第に彼女を仕立ててやらう」と云ふ純な心持ちを忘れてしまつて、寧ろあべこべにする引き摺られるやうになり、此れではいけないと気が付いた時には、既に自分でもどうする事も出来なくなつてゐたのでした。

「世の中の事は凡べて自分の思ひ通りに行くものではない。自分はナオミを、精神と肉體と、兩方面から美しくしようとした。そして精神の方面では失敗したけれど、肉體の方面では立派に成功したぢやないか。自分は彼女が此の方面で此れほど美しくならうとは思ひ掛けてゐなかつたのだ。さうして見ればその成功は他の失敗を補つて餘りあるではないか。」

「へえ、ほんたうかね？」

私はナオミの云ふことが突如張りの負け惜しみであるのを知つてゐながら、故意にさう云つて驚いて見せました。

「當り前さ、あんな問題が出来ない奴はありやしないわ。それを本気で出来ないと思つてゐるんだから、談治さんの方がよつほど馬鹿だわ。あたし談治さんが怒るたびに、可笑しくつて可笑しくつて仕様がなかつたわ。」

「呆れたもんだね、すつかり僕を一杯喰はせてみたんだね。」

「どう？ あたしの方が少し利巧でしょ？」

「うん、利巧だ、ナオミちゃんには敵はないよ。」

すると彼女は得意になつて、腹を抱へて笑ふのでした。

讀者諸君よ、ここで私が突然妙な話をして出すのを、どうか笑はないで聞いて下さい。と云ふのは、嘗て私は中學校にゐた時分歴史の時間にアントニーとクレオパトラの條を教はつたことがあります。諸君も御承知のことです。うが、あのアントニーがオクタヴィアヌスの軍勢を迎へてナイルの河上で船戦をする、と、アントニーに附いて来たクレオパトラは、味方の形勢が非なりと見るや、忽ち中途から船を返して逃げ出してしまふ。然るにアントニーは此の

「お前もなかなか剛情だけれど、僕にしたつて一旦斯うと云ひ出したら、決して其の儘にや濟まさないよ。悪いと思つたら詫言まるがよし、それが厭なら歸つておくれ。さ、執方にするんだよ、早く極めたらいいぢやないか。詫言まるのかい？ それとも淺草へ歸るのかい？」

すると彼女は首を振つて「いやいや」をします。

「ぢや、歸りたくないのかい？」

「うん」と云ふやうに、今度は喉で頷いて見せます。

「ぢや、詫言まるよ云ふのかい？」

「うん」

と、又同じやうに頷きます。

「それなら勘忍して上げるから、ちやんと手を街いて詫言まるがいい。」

で、仕方がなしにナオミは机へ兩手を街いて、それでもまだ何處か人を馬鹿にしたやうな風つきをしながら、不精つたらしく横つちよを向いてお辭儀をします。

かういふ傲慢な、我が儘な根性は、前から彼女にあつたのであるか、或ひは私が甘やかして過ぎた結果なのか、いづれにしても目を廻るに従つてそれがだんだん昂じて來つたことには明かでした。いや、實は昂じて來たのではなく、十五六の時分にはそれを子供らしい愛嬌として見逃してゐたのが、大きくなつても止まないで次第に私の手に餘るやうになつたのかも知れません。以前はどんなにだだを捏ねても叱言を云へば素直に聽いたものですが、もう此の頃では少し氣に喰はないことがあると、直ぐにむらつと膨れ返る。それでもしつこく泣いたりされればまだ可愛げがありますけれど、時には私がいかにかに厳しく叱りつけても涙一滴こぼさないで、小憎らしいほど空惚けたり、例の鋭い上眼を使つて、まるで狙ひをつけるやうに一直線に私を見据ゑる。——もし實際に動物電

氣と云ふものがあるなら、ナオミの眼にはきつと多量にそれが含まれてゐるのだらうと、私はいつもさう感じました。なぜならその眼は女のものとは思はれない程、炯炯として強く澄しく、おまけに一種底の知れない深い魅力を湛へてゐるので、ゲットと息に吸められると、折折悚然とするやうなことがあつたからです。

七

その時分、私の胸には失望と愛慕と、互ひに矛盾した二つのものが交る交る聞き合つてゐました。自分が選擇を誤まつたこと、ナオミは自分の期待したほど賢い女ではなかつたこと、——もう此の事實はいくら私のひいき眼でも否むに由なく、彼女が他日立派な婦人になるであらうと云ふやうな望みは、今となつては全く夢であつたことを悟るやうになつたのです。やつぱり育ちの悪い者は争はれない、千束町の娘にはカフエエの女給が相當なのだ、柄のない教育を受けたところで何にもならない。

私はしみじみさう云ふあきらめを抱くやうになりました。が、同時に私は、一方に於いてあきらめながら、他の一方ではますます強く彼女の肉體に惹きつけられて行つたのでした。

薄情な女王の船が自分を捨てて去るのを見る
と、危急存亡の際であるにも拘はらず、戦争な
どは其方除けにして、自分も直ぐに女王のあと
を追ひ駆けて行きます。――
「諸君」と、歴史の教師はその時私たちに云ひ
ました。

「此のアントニーと云ふ男は女の尻を追つ騙
け廻して、命をおとしてしまつたので、歴史の
上に此のくらゐる馬鹿を曝した人間はなく、實に
どうも古今無類の物笑ひの種であります。英雄
豪傑もいやはや斯うなつてしまつては、――」
その云ひ方が可笑しかつたので、學生たちは
教師の顔を眺めながら一度にどつと笑つたもの
です。そして私も笑つた仲間の一人であつた
ことは云ふまでもありません。

が、大切なのはこの處です。私は當時、
アントニーともあらう者がどうしてそんな薄
情な女に迷つたのか、不思議でなりませんで
した。いや、アントニーばかりではない、すぐ
その前にもジュリアス・シーザーの如き英雄が、
クレオパトラに引つかかつて器量を下げてゐ
る。さう云ふ例はまだその外にいくつでもある。
徳川時代のお家騒動や、一國の治亂興廢の跡を
尋ねると、必ずしも物凄く妖婦の手首がない

ことはない。ではその手首と云ふものは、一旦
それに引つかかれば誰でもコロリと欺されるほ
ど、非常に危険に、巧妙に仕組まれてゐるかと
云ふのにどうもさうではないやうな気がする。
クレオパトラがどんなに相巧な女だつたとし
たところでまさかシーザーやアントニーより智
慧があつたとは考へられない。たとへ英雄で
なくつても、その女に眞心があるか、彼女の言
葉が誠かほんとかぐらゐるなことは、用心すれば
洞察出来る筈である。にも拘はらず、現に自分
の身を亡ぼすのが分つてゐながら欺されてしま
ふと云ふのは、飾りと云へば勝甲斐ないことだ。
事實その通りだつたとすると、英雄なんて何も
それほど偉い者ではないかも知れない、私はひ
そかにさう思つて、マーク・アントニーが古今
無類の物笑ひの種であり、「このくらゐる歴史の
上に馬鹿を曝した人間はない」と云ふ教師の批
評を、そのまま肯定したものでした。

私は今でもあの時の教師の言葉を胸に浮か
べ、みんなと一緒にゲラゲラ笑つた自分の姿
を、想ひ出すことが屢あるのです。そして想
ひ出す度に、もう今日では笑ふ資格がないこ
とをつくづくと感じます。なぜなら私は、どう
いふ譯で羅馬の英雄が馬鹿になつたか、アント

一例を挙げると、私とナオミとはその頃し
ば兵隊將棋やトランプをして遊びました
が、本気でやれば私の方が勝てる譯なのに、成
るべく彼女を勝たせるやうにしてやつたので、
次第に彼女は「勝負事では自分の方がずつと強
者だ」と思ひ騙つて、
「さあ、讓治さん、一つ捻つてあげるから入ら
ッしやいよ。」
などと、すつかり私を見詰つた態度で挑んで
來ます。
「ふん、それぢや一番復讐戦をしてやるかな。
――なあに、眞面目でかかちやお前なんか負
けやしないんだが、相手が子供だと思ふもんだ
から、ついつい油断しちまつて、――」
「まあいいわよ、勝つてから立派な口をおきき
なさいよ。」
「よし來た！ 今度こそほんとに勝つてやるか
ら！」
さう云ひながら、私は殊更下手な手を打つ
て相變らず負けてやります。
「どう？ 讓治さん、子供に負けて口惜しかな
いこと？――もう駄目だよ、何と云つたつて
あたしに抗やしないわよ。まあ、どうだらう、
三十一にもなりながら、人の男がこんな事で

ニーとも云はれる者が何故たわいな妖婦の手
首に巻き込まれてしまつたか、その心持ちが
現在となつてはハッキリ領けるばかりでなく、
それに對して同情をさへ禁じ得ないくらゐで
すから。
よく世間では「女が男を欺す」と云ひます。し
かし私の経験によると、此れは決して最初か
ら欺すのではありません。最初は男が自ら
進んで「欺される」のを喜ぶのです、惚れた女
が出来て見ると、彼女の云ふことが誠であらう
と眞實であらうと、男の耳には凡べて可愛い。
たまたま彼女が空涙を流しながら凭れかかつ
て來たりすると、
「ははあ、此奴、此の手で己を欺さうとしてゐ
るな。でもお前は可笑しな奴だ、可愛い奴だ、
己にはちやんとお前の腹は分つてるんだが、折
角だから欺されてやるよ。まあまあたんと己を
お欺し……」
と、そんな風に男は大腹中に構へて、云はば
子供を嬉しがらせるやうな気持ちで、わざとそ
の手に乗つてやります。ですから男は女に欺さ
れる積りはない。却つて女を欺してやつてゐる
のだと、さう考へて心の中で笑つてゐます。
その譯には私とナオミとが矢張りさうで

した。

「あたしの方が讓治さんより相巧だわね。」
と、さう云つて、ナオミは私を欺し終せた
氣になつてゐる。私は自分を問拔け者にして、
欺された體を裝つてやる。私に取つては淺は
かな彼女の論を發くよりか、寧ろ彼女を得意が
らせ、さうして彼女のよろこぶ顔を見てやつた
方が、自分もどんなにうれしか知れない。の
みならず私は、そこに自分の良心を満足させ
る譯さへも持つてゐました。と云ふのは、た
とへナオミが相巧な女でないとしても、相巧だ
と云ふ自信を持たせるのは恐くない事だ。日本
の女の第一の短所は確乎たる自信のない點に
ある。だから彼等は西洋の女に比べていちけ
て見える。近代的の美人の資格は、顔だちより
も才氣煥發な表情と態度とにあるのだ。よし
や自信と云ふ程でなく、單なる己惚れであつて
もいいから、自分は賢い、自分は美人だと思
ひ込むことが、結局その女を美人にさせる。

――私はさう云ふ考へでしたから、ナオミの
相巧がる癖を戒しめなかつたばかりでなく、却
つて大いに褒めてやりました。常に快く
彼女に欺され、彼女の自信をいよいよ強くする
やうに仕向けてやりました。

十八の子供に負けるなんて、まるで讓治さん
はやり方を知らないのよ。」
そして彼女は「やつぱり歳よりは頭だわね」
とか、「自分の方が馬鹿なんだから、口惜しがつ
たつて仕方がないわよ」とか、いよいよ圖に乗つ
て、
「ふん――
と、例の鼻の先で生意氣さらせせら笑ひま
す。
が、恐ろしいのは此れから來る結果なのです。
始めのうちは私がナオミの横顔を取つてやつ
てゐる。少くとも私自身はそのつもりである。
ところがだんだんそれが習慣になるに従つ
て、ナオミは眞に強い自信を持つやうになり、
今度はいくら私が本気で踏ん張つても、事實彼
女に勝てないやうになるのです。
人と人との勝ち負けは理智に依つてのみ結ま
るのではなく、そこには「氣合ひ」と云ふものが
あります。云ひ換へれば動物電氣です。まして
賭け事の場合には尙更さうで、ナオミは私と
決戦すると、初めから氣を呑んでかかち、素晴
らしい勢で打ち込んで來るので、此方はチリ
チリと押し倒されるやうになり、立ち怯れがし
てしまふのです。

「ただでやつたつて詰まらないから、幾らか賭けてやりませうよ。」

と、もうしまひにはナオミはすつかり味を始めて、金を賭けなければ勝負をしないやうにになりました。すると賭ければ賭けるほど、私の負けは嵩んで来ます。ナオミは一文なしの癖に、十銭とか二十銭とか、自分で勝手に單位をきめて、思ふ存分小遣ひ錢をせしめます。

「ああ、三十四あるとあの着物が買へるんだけれど。……又トランプで取つてやらうかな。」

などと云ひながら挑戦して来る。たまには彼女が負けることがありますけれど、さう云ふ時には又別の手を知つてゐて、是非その金が欲しいとなると、どんな真似をしても、勝たずには置けませんでした。

ナオミはいつでもその「手」を用ひられるやうに、勝負の時は大概ゆるやかなガウンのやうなものを、わざとぐずぐずにだらしないく纏つてゐました。そして形勢が悪くなると淫らがはしく居ずまひを崩して、襟をはだけたり、足を突き出したり、それでも駄目だと私の膝へ凭れかかつて頬ツベたを撫でたり、口の端を摘まんでぶるぶると振つたり、ありとあらゆる誘惑を試みました。私は實に此の「手」にかかつては弱

りました。就中最後の手段——これはちよつと此處へ書く譯に行きませんが、——をとられると、頭の中が何だかもやもやと曇つて来て、急に眼の前が暗くなつて、勝負のことなど何が何やら分らなくなつてしまふのです。

「ずるいよ、ナオミちゃん、そんなことをしちや、……」

「ずるかないわよ、此れだつて一つの手だわよ。」

ずいんと気が遠くなつて、凡ての物が霞んで行くやうな私の眼には、その聲と共に満面に媚びを含んだナオミの顔だけがぼんやり見えます。にやにやとした、奇妙な笑ひを浮かべつたその顔だけが……

「ずるいよ、ずるいよ、トランプにそんな手があるもんぢやない、……」

「ふん、ない事があるもんか、女と男と勝負事をすりや、いろんなおまじなひをするもんだわ。あたし餘所で見ることがあるわ。子供の時分に、内で姉さんが男の人とお花をする時、傍で見るとたらいろんなおまじなひをやつてたわ。トランプだつてお花とおんなじ事ぢやないの、……」

私は思ひます、アントニーがクレオパトラ

に征服されたのも、つまりは斯う云ふ風にして、次第に抵抗力を奪はれ、圓め込まれてしまつたのだらうと。愛する女に自信を持たせるのはいいが、その結果として今度は此方が自信を失ふやうになる。もうさうなつては容易に女の優越感に打ち勝つことは出来なくなります。そして思はぬ眼がそこから生じるやうになります。」

八

ちやうどナオミが十八の歳の秋、殘暑のきびしい九月初旬の或る夕方のことでした。私はその日、會社の方が暇だつたので一時間ほど早く切り上げて、大森の家へ歸つて来ると、思ひがけなく門を這入つた庭の所に、つひぞ見馴れない一人の少年が、ナオミと何か話してゐるのを見かけました。

少年の歳は矢張りナオミと同じくらゐ、上だとしてもせいぜい十九を越えてはゐまいと思へました。白地緋の單衣を着て、ヤンキー好みの、派手なりボンの附いてゐる変な帽子を被つて、ステッキで自分の下駄の先を叩きながらしゃべつてゐる、精ら顔の、眉毛の濃い、目鼻立ちが悪くないが満面ににきびのある男。ナオミはそ

の男の足下にしゃがんで花壇の蔭に隠れてゐるので、どんな様子をしてゐるのかはつきり見えませんでした。百日草や、おいらん草や、カンナの花の咲いてゐる間から、その横顔と髪の色だけが僅かにチラチラするだけでした。

男は私に気がつくと、帽子を取つて會話をして、

「ちやあ、又、」

と、ナオミの方を振り向いて云ひながら、すぐすたすたと門の方へ歩いて来ました。

「ちやあ、さよなら、」

と、ナオミもつづいて立ち上りましたが、「さよなら」と男は、後ろ向きのままさう云ひ捨てて、私の前を通る時帽子の縁へちよつと手をかけて、顔を隠すやうにしながら出て行きました。

「誰だね、あの男は？」

と、私は嫉妬と云ふよりは、「今のは不思議な場面だつたね」と云ふやうな、軽い好奇心で聞いたのでした。

「あれ？ あれはあたしのお友達よ、濱田さんて云ふ、——」

「いつ友達になつたんだい？」

「もう先からよ、——あの人も伊皿子へ聲樂を習ひに行つてゐるの。顔はあんなににきびだら

けで汚いけれど、歌を唄はせるとほんとに素敵よ。いいバリトンよ。此の間の音樂會にも私と一緒にクルテットをやつたの。」

云はないでもない顔の悪口を云つたので、私はふいと疑ひを起して彼女の眼の中を見ましたけれど、ナオミの素振りには落ち着いたもので、少しも平素と異なつた所はなかつたのです。

「ちよいよいよ遊びにやつて来るのかい。」

「いいえ、今日が初めてよ、近所へ来たから寄つたんだつて。——今度ソシアル・ダンスの俱樂部を拵へるから、是非あたしにも這入つてくれつて云ひに来たのよ。」

私は多少不愉快だつたのは事實ですが、しかしだんだん聞いて見ると、その少年が全くそれだけの話をしに来たのであることは、誰でないうやうに考へられました。第一彼とナオミとが、私の歸つて来さうな時刻に、庭先でしゃべつてゐたと云ふこと、それは私の疑ひを晴らすのに充分でした。

「それでお前は、ダンスをやるつて云つたのかい。」

「考へて置くつて云つていたんだけれど、と、彼女は急に甘つたれた猫遣で聲を出しな

がら、

「ねえ、やつちやいけない？ よう！ やらしつてよう！ 謙治さんも俱樂部へ這入つて、一緒に習へばいいぢやないの。」

「僕も俱樂部へ這入れるのかい？」

「ええ、誰だつて這入れるわ。伊皿子の袴崎先生の知つてゐる露西亞人が教へるのよ。何でも西比利亞から逃げて来たんで、お金がなくなつて困つてるもんだから、それを助けてやりたいと云ふんで俱樂部を拵へたんですつて。だから一人でもお弟子の多い方がいいのよ。——ねえ、やらせてよう！」

「お前はいいが、僕が覺えられるかなア。」

「大丈夫よ、直きに覺えられるわよ。」

「だけど、僕には音樂の素養がないからなア。」

「音樂なんか、やつてるうちに自然と分るやうになるわよ。……ねえ、謙治さんもやらなきや駄目。あたし一人でやつたつて踊りに行けやしないもの。よう、さうして時々二人でダンスに行かうぢやないの。毎日毎日遊んでばかりゐたつて詰まりやしないわ。」

——ナオミが此の頃、少し今迄の生活に退屈を感じてゐるらしいことは、うすうす私にも分つてゐました。考へて見れば私たちが大

者でも三月もやれば覚えられるから、高いと云つても知れたことだ。

「第一何だわ、そのシニレムスカヤつて云ふ人を助けてやらないぢや氣の毒だわ。昔は伯爵の夫人だったのがそんなに落ちぶれてしまふなんて、ほんとに可哀さうぢやないの。濱田さんに聞いたんだけど、ダンスは非常に巧くつて、ソシアル・ダンスばかりぢやなく、希望者があればステージ・ダンスも教へるんだつて。ダンスばかりは藝人のダンスは下品で、駄目だわ、ああ云ふ人に教へるのが一番いいのよ。」

と、まだ見たこともないその夫人に、彼女は顔りと肩を持つて、一ぱしダンス通らしいことを云ふのでした。

さう云ふ譯で私とナオミとは、兎に角入會することになり、毎月曜日と金曜日に、ナオミは音楽の稽古を済ませ、私は會社の方が退けると、すぐその足で午後六時迄に聖坂の楽器店へ行くとにしました。始めの日は午後五時に町町の譯でナオミが私を待ち合はせ、そこから連れだつて出かけましたが、その楽器店は坂の中途にある、間口の狭いさやかな店でした。中へ這入るとピアノだの、オルガンだの、蓄音器だの、いろいろな楽器が窮屈な場所に列んでゐて、

もう二階ではダンスが始まつてゐるらしく、騒々しい足取りと蓄音器の音が聞えました。ちやうど梯子段の上り口のところに、慶應の學生らしいのが五六人うちやうちやしてゐて、それがチロチロ私とナオミの様子を見るのが、あまり好い氣持ちはしませんでした。

「ナオミさん、」

と、その時則れ馴れしい大きな聲で、彼女を呼んだ者がありました。見ると今の學生の一人で、フラット・マンドリン——と云ふものでせうか、平べつたい、ちよつと日本の月琴のやうな形の楽器を小脇にかかへて、その調子を合はせながら針金の絃をチリチリ鳴らしてゐるのです。

「今日はア。」

と、ナオミも女らしくない、書生ツぽのやうな口調で應じて、

「どうしたのまアちゃん？ あんたダンスをやらぬの？」

「やあだア、已あ。」

と、そのまあちゃんと呼ばれた男は、ニヤニヤ笑つてマンドリンを棚の上に置きながら、

「あんなもな已あ眞つ平御免だ。第一お前、月謝を二十圓も取るなんて、まるでたけえや。」

「だつて始めて習ふんなら仕方がないわよ。」

「なあに、いづれそのうちみんなが覚えたらうから、さうしたら奴等を取つてしまへて習つてやるのよ。ダンスなんざあそれで澤山よ。どうでえ、要領がいいだらう。」

「ずるいわまアちゃん！ あんまり要領がよ過ぎるわよ——ところで濱田さんは二階にゐる？」

「うん、ゐる、行つて御覽。」

此の楽器店は此の近邊の學生たちの「溜り」になつてゐるらしく、ナオミもちよいちよい来るものと見えて、店員などもみんな彼女と顔馴染なものでした。

「ナオミちゃん、今下にゐた學生たちは、ありや何だね？」

と、私は彼女に導かれて梯子段を上りながら尋ねました。

「あれは慶應のマンドリン俱樂部の人たちの、口はぞんざいだけれど、そんなに悪い人たちぢやないのよ。」

「みんなお前の友達なのかい。」

「友達つて云ふ程ぢやないけれど、時々此處へ買ひ物に来るとあの人たちに會ふもんだから、それで知り合ひになつちやつたの。」

森へ巣を構へてから、既に足かけ四年になります。そしてその間私たちは、夏の休みを除く外は此の「お伽蔵の家」の中に立て籠つてひろい世の中との交際を斷ち、いつもいつもただ二人きりで顔を突き合はせてゐたのですから、いくらいろいろな「遊び」をやつて見たところで、結局退屈を感じて来るのは無理ありません。

ましてナオミは非常に飽きつぽいので、どんな遊びでも初めは馬鹿に夢中になりますが、決して長つづきしないのでした。そのくせ何かしてゐなければ、一時間でもちつとしてゐられないので、ランプもいや、兵隊將棋もいや、活動俳優の眞似事もいや、となると、仕方がなしに暫く捨てて顧みなかつた花壇の花をいぢくつて、せつせと土を掘り返したり、種を蒔いたり、水をやつたりしましたけれど、それも一時の氣紛れに過ぎませんでした。

「あーあ、詰まんないなア、何か面白い事はないかなア。」

と、ソオファの上に反り返つて讀みかけの小説本をおつぽり出して、彼女が大きく欠伸をするのを見るにつけても、此の單調な二人の生活に一轉化を興へる方法はないものかと、私も内内それを氣にしてゐたのでした。で、恰もさう

云ふ際でしたから、此れは成る程、ダンスを習ふのも悪くはなからう。もはやナオミも三年前のナオミではない。あの鎌倉へ行つた時分とは譯が違ふから、彼女を立派に盛裝させて社交界へ打つて出たら、恐らく多くの婦人の前でもひげを取るやうな事はなからう。——と、その想像は私に云ひ知れぬ誇りを感ぜさせました。

前にも云ふやうに、私には學校時代から格別親密な友達もなく、此れまで出来るだけ無駄な附き合ひを避けて暮らしてはゐましたけれど、しかし決して社交界へ出るのが嫌ではなかつたのです。田舎者で、お世辭が下手で、人との應對が我ながら無細工なので、そのために引つ込み思案になつてゐたもの、それだけに又、却つて一層華やかな社會を慕ふ心がありました。

もともとナオミを妻にしたのも彼女をうんと美しい夫人にして、毎日方方へ連れて歩いて、世間の奴等に何とか彼とか云はれて見たい。「君の奥さんは素敵なハイカラだね」と、交際場裡で褒められて見たい。と、そんな野心が大いに働いてゐたのですから、さういつ迄も彼女を「小島の籠」の中へしまつて置く氣はなかつたのです。

ナオミの話では、その露西歐人の舞踊の教師

はアレキサンドラ・シニレムスカヤと云ふ名前の、或る伯爵の夫人だと云ふことでした。夫の伯爵は革命騒ぎで行くへ不明になつてしまひ、子供も二人あつたのださうですが、それも今では居所が分らず、やつと自分の身一つを日本へ落ちのびて、ひどく生活に窮してゐたのを、今度いよいよダンスの教授を始めることになつたのださうです。で、ナオミの音楽の先生である杉崎春枝女史が夫人の爲めに俱樂部を組織し、そして幹事になつたのがあの濱田と云ふ、慶應義塾の學生でした。

稽古場であつたのは三田の聖坂にある、吉村と云ふ西洋楽器店の二階で、夫人はそこへ毎週二回、月曜日と金曜日に出張する。會員は午後四時から七時迄の間に、都合のいい時を定めて行つて、一回に一時間づつ教へて貰ひ、月謝は一人前二十圓、それを毎月前金で拂ふと云ふ規定でした。私とナオミと二人で行けば月月四十圓もかかる譯で、いくら相手が西洋人でも馬鹿げてると思ひましたが、ナオミの云ふにはダンスと云へば日本の踊りも同じことで、どうせ贅澤なものだからそのくらゐ取るのは當り前だ。それにそんなに稽古しないでも、器用な人なら一と月ぐらゐ、不器用な

「ダンスをやるのは、ああ云ふ連中が重なのかなあ。」

「さあ、どうだか、——さうぢやないでしよ、學生よりはもつと年を取つた人が多いいんぢやない? ——今行つて見れば分るわよ。」

二階へ上ると、廊下の取っ突きに積古場があつて、「ワン、トウウ、スリー」と云ひながら足拍子を踏んでゐる五六人の人影が、すぐと私の眼に入りました。日本座敷を二た間打ち抜いて、靴穿きのまま這入れるやうな板敷にして、多分滑りをよくする爲めか何かでせう、例の濱田と云ふ男が彼方此方へチヨコチヨコ騙けて歩いては、細かい粉を床の上へまいてゐます。まだ目の長い暑い時分のことだったので、すつかり障子を明け放してある西側の窓から、夕日がざらざらとさし込んでゐる、そのほの紅い光を背に浴びせながら、白いジョオセットの上衣を着て、紺のサージのスカートを穿いて、部屋と部屋との間仕切りの所に立つてゐるのが、云ふ迄もなくシユレムスカヤ夫人でした。二人の子供があると云ふのから察すれば、實際の歳は三十五六にもなるのでせうか? 見たところでは漸く三十前後ぐらゐで、成る程貴族の生れらしい威厳を含んだ、きりりと引き緊つた顔だ

とお氣の毒な方でございますわ、もとは伯爵の奥様で、何不自由なくお暮らしになつていらしたのが、革命のために斯う云ふ事までなさるやうになつたのですから。——」

待合室になつてゐる次ぎの間のソファに腰かけて、積古場の有様を見物しながら、二人の婦人がさも感心したやうにこんな事をしやべつてゐます。一人の方は二十五六の、眉の薄く大きい、支那金魚の感じがする圓顔の出眼の婦人で、髪を割らずに、顔の生え際から頭の頂上へはりねずみの髻部の如く次第に高く膨らまして、髻の所へ非常に大きな白簾甲の髻を挿して、埃及模様の鹽漬の丸帯に翡翠の帯留めをしてゐるのですが、シユレムスカヤ夫人の境遇に同情を寄せ、しきりに彼女を褒めちぎつてゐるのは此の婦人の方なりました。それに合鍵を打つてゐるもう一人の婦人は、汗のために厚化粧のお白粉がぶちになつて、ところどころに小皺のある、荒れた地肌が出てゐるのから察すると、恐らく四十近いのでせう。わざとか生れつきか束髪に結つた精細の毛がぼうぼうと縮れた、瘦せたひよる長い體つきの、身なりは派手にしてゐますけれど、ちよつと看護婦上りのやうな顔だちの女でした。

「Zoni」

と、鋭く叱つて、傍へやつて来て歩いて見せる。覺えが惡くて餘りたびたび間違へると、

「Zoni」

と叫びながら、靴でびしりと床を叩いたり、男女の容赦なくその人の足を打つたりします。「教へ方が實に熱心でいらつしやいますのね、あれでなければいけませんわ。」

「ほんたうにね、シユレムスカヤ先生はそりや熱心でいらつしやいますの。日本人の先生方だどうしてもああは参りませんけれど、西洋の方はたとへ御婦人でも、其處はキチンとしていらして、全く氣持がよございませうのよ。そしてあの通り授業の間は一時間でも二時間でも、ちつともお休みにならないで積古をおつづけになるのですから、此の暑いのお大抵ではあるまいと思つて、アイスクリームでも差し上げようかと申すのですけれど、時間の間は何も要らないと仰つしやつて、決して召し上らないんですの。」

「まあ、よくそれでもつておくれたびれになりませんのね。」

「西洋の方は髻が出来ていらつしやるから、わたくし共とは違ひますのね。——でも考へる

此の婦人連を取り巻いて、つつましかに自分の番を待ち受けてゐる人人もあり、中には既に一通りの練習を積んだらしく、てんでに腕を組み合はせて、積古場の隅を踊り廻つてゐるものもありました。幹事の濱田は夫人の代理と云ふ格なのか、自分でそれを氣取つてゐるのか、そんな連中の相手になつて踊つてやつたり、著音器のレコードを取り換へたりして、獨りで目まぐるしく活躍してゐます。一體女は別として、男でダンスを習ひに来ようと云ふ者は、どう云ふ社會の人間なのかと思つて見ると、不思議なことやしやれた服を着てゐるのは濱田ぐらゐで、あとは大概安月給取りのやうな、野暮くさい紺の三つ組みを着た、氣の利かなさうなのが多かったです。尤も歳は皆私より若さうで、三十臺と思はれる紳士はたつた一人しかありません。その男はモーニングを纏つて、金縁の分の厚い眼鏡をかけて、時勢おくれの奇妙に長い八字髭を生やしてゐて、一番呑み込みが惡いらしく、幾度となく夫人に「Zoni」とどやいつけられ、靴でビシリと喰はれます。と、その度毎にニヤニヤ間の抜けた薄笑ひをしながら、又始めから「ワン、トウウ、スリー」をやり直します。

ああ云ふ男が、いい歳をしてどう云ふつもりでダンスをやる氣になつたものか? いや、考へると自分も矢張りあの男と同じ仲間ぢやないのだらうか? それでなくても晴れがましい場所へ出たことのない私は、此の婦人たちの眼の前で、あの西洋にどやいつけられる利那を思ふと、いかにナオミのお附き合ひとは云ひながら、何だか斯う、見てゐるうちに冷汗が湧いて来るやうで、自分の番の循つて来るのが恐ろしいやうになるのです。

「やあ、入らつしやい。」

と、濱田は二三番踊りつづけて、ハンケチでいきびだらけの顔の汗を拭きながら、その時傍へやつて来ました。

「や、此の間は失禮しました。」

と今日はいささか得意さうに、改めて私に挨拶をして、ナオミの方を向きながら、

「此の暑いによく来てくれたね、——君、濟まないが扇子を持つてたら貸してくれないか、何しろどうも、アッシスタントもなかなか楽しい仕事ぢやないよ。」

ナオミは帯の間から扇子を出して渡してやつて、

「でも濱さんはなかなか上手ね、アッシスタ

ントの資格があるわ。いつから稽古し出したのよ。」

「僕かい？ 僕はもう半歳もやってみるのさ。けれど君なんか器用だから、すぐ覚えるよ、ダンスは男がリードするんで、女はそれに喰つ着いて行けりやあいんだからね。」

「あの、此處にゐる男の連中はどう云ふ人たちが多いんでせうか？」

「はあ、これですか。」
と、濱田は鄭重な言葉になつて、

「此の人たちは大概あの、東洋石油株式会社の社員の方が多いんです。杉崎先生の御親戚が会社の重役をして居られるので、その方からの御紹介ださうですね。」
東洋石油の社員とソシアアル・ダンス！——
随分妙な取り合はせだと思ひながら、私は重ねて尋ねました。

「ちやあ何ですか、あのあそこに居る髭の生えた紳士も、やつぱり社員なんですか。」

「いや、あれは違ひます、あの方はドクトルなんです。」

「ドクトル？」

「ええ、やはりその会社の衛生顧問をして居られるドクトルなんです。ダンスぐらゐる體の運動になるものはないと云ふんで、あの方は寧ろその爲めにやつて居られるんです。」

「さう？ 濱田さん。」
と、ナオミが口を挟みました。

「そんなに運動になるのか知ら？」
「ああ、なるとも、ダンスをやつたら冬でも一杯汗を掻いて、シャツがぐちぐちやになるくらゐだから、運動としては確かにいいね。おまけにシユレムスカヤ夫人のは、あの通り練習が猛烈だからね。」

「あの夫人は、日本語が分るのでせうか？」
私がさう云つて尋ねたのは、實はさつきからそれが氣になつてゐたからでした。

「いや、日本語は殆んど分りません、大概英語でやつてゐますよ。」
「英語はどうも、……スピーキングの方になると、僕は不得手だもんだから……」
「なに、みんな御同様でさあ。シユレムスカヤ夫人だつて、非常なプロローク・イングリッシュで、僕等よりひどいくらゐですから、ちつとも心配はありませんよ。それにダンスの稽古なんか、言葉はなんにも要りやしません。ワン、トウウ、スリーで、あとは身振りで分るんですから……」

「おや、ナオミさん、いつお見えになりました？」

と、その時彼女に聲をかけたのは、あの白鷺甲の替を挿した、支那金魚の婦人でした。

「ああ、先生、——ちよいと、杉崎先生よ。」
ナオミはさう云つて、私の手を執つて、その婦人のゐるソオファの方へ引つ張つて行きました。

「あの、先生、御紹介いたします、——河合治——」

「ああ、さう、——」
と、杉崎女史はナオミが顔色をしたので、皆まで聞かずにそれと意味を悟つたらしく、立ち上つて會釈しながら、

「——お初にお目に懸ります、わたくし、杉崎でございます。ようこそお越し下さいました。——ナオミさん、その椅子を此方へ持つていらしやい。」

そして再び私の方を振り返つて、

「さあ、どうぞおかけ遊ばして。もう直きでございますすけれど、さうして立つてお待ちになつていらしつちや、おくれたびれになりますわ。」

にしゃべり出しましたが、「フォイスト・タイム」と云ふところがいやに氣取つた發音で、ひどく早口に云はれたので、

「は？」
と云ひながら私が、へどもとしてゐると、

「ええ、お始めてなのでございますの。」
と、杉崎女史が傍から引き取つてくれました。

「まあ、さうでいらつしやいますか、でもねえ、何でございませう、そりやジエンルマンはレディよりもモー・モー・デイフィカルトでございませうけれど、お始めになれば直きに何でございませう……」

此の「モー・モー」と云ふ奴が、又私には分りませんでした、よく聞いて見ると、*more more*と云ふ意味なのです、「ジエントルマン」を「ジエンルマン」、「リットル」を「リルル」、凡べてさう云ふ發音の仕方の中へ英語を挟みます。そして日本語にも一種奇妙なアクセントがあつて、三度一度は何でございませうを連發しながら、油紙へ火がついたやうに際限もなくしゃべるのでした。

それから再びシユレムスカヤ夫人の話、ダンスの話、語學の話、音樂の話……ベトオヴェ

ンツナタが何だとか、第三シンプオニーがどうしたとか、何何会社のレコードは何何会社のレコードより良いとか悪いとか、私がすつかりしよけて黙つてしまつたので、今度は女史を相手にしてべらべらやり出すその口ぶりから推察すると、此のブラウン氏の夫人と云ふのは杉崎女史のピアノの弟子でもありませんか。そして私はこんな場合に、「ちよつと失禮いたします」と、いい潮時を見計つて席を外すと云ふやうな、器用な眞似が出来ないので、此の眞似の婦人の間に挟まつた不運を嘆息しながら、否でも應でもそれを拜聴してゐなければなりません。

やがて、髭のドクトルを始めとして石油会社の一團の稽古が終ると、女史は私とナオミとをシユレムスカヤ夫人の前へ連れて行つて、最初にナオミ、次に私を、——これは多分レディーを先にすると云ふ西洋流の作法に従つたのでせう、——極めて流暢な英語で以て引き合はせました。その時女史はナオミのことを「ミス・カワイ」と呼んだやうでした、私は内内、ナオミがどんな態度を取つて西洋人と應對するか、興味を持つて待ち受けてゐましたが、ふだんは已惚れの強い彼女も、夫人の前へ出てはさ

られるドクトルなんです。ダンスぐらゐる體の運動になるものはないと云ふんで、あの方は寧ろその爲めにやつて居られるんです。」

「さう？ 濱田さん。」
と、ナオミが口を挟みました。

「そんなに運動になるのか知ら？」
「ああ、なるとも、ダンスをやつたら冬でも一杯汗を掻いて、シャツがぐちぐちやになるくらゐだから、運動としては確かにいいね。おまけにシユレムスカヤ夫人のは、あの通り練習が猛烈だからね。」

「あの夫人は、日本語が分るのでせうか？」
私がさう云つて尋ねたのは、實はさつきからそれが氣になつてゐたからでした。

「いや、日本語は殆んど分りません、大概英語でやつてゐますよ。」
「英語はどうも、……スピーキングの方になると、僕は不得手だもんだから……」
「なに、みんな御同様でさあ。シユレムスカヤ夫人だつて、非常なプロローク・イングリッシュで、僕等よりひどいくらゐですから、ちつとも心配はありませんよ。それにダンスの稽古なんか、言葉はなんにも要りやしません。ワン、トウウ、スリーで、あとは身振りで分るんですから……」

「ええ、やはりその会社の衛生顧問をして居られるドクトルなんです。ダンスぐらゐる體の運動になるものはないと云ふんで、あの方は寧ろその爲めにやつて居られるんです。」

「さう？ 濱田さん。」
と、ナオミが口を挟みました。

すがにちよつと狼狽の氣味で、夫人が何か一言二言云ひながら、威嚴のある眼元に微笑を含んで手をさし出すと、ナオミは眞つ赤な顔をして何も云はずにコソコソと握手をしました。私と来ては尙更の事で、正直のところ、その青白い彫刻のやうな輪廓を、仰ぎ見ることは出来ませんでした。そして黙つて俯向いたまま、ダイヤモンドの細かい粒が無数に光つてゐる夫人の手を、そうツと握り返しただけです。

九

私が、自分は野暮な人間であるにも拘はらず、趣味としてはハイカラを好み、萬事につけて西洋流を眞似したことは、既に讀者も御承知の筈です。若しも私に十分な金があつて、氣随氣儘な事が出来たら、私は或ひは西洋に行つて生活をし、西洋の女を妻にしたかも知れません。それが境遇が許さなかつたので、日本人のうちでは兎に角西洋人くさいナオミを妻としたやうな譯です。それにもう一つは、たとへ私に金があつたとしたところで、男振りに就いての自信がない。何しろ背が五尺二寸と云ふ小男で、色が黒くて、齒並びが悪くて、あの堂々たる體格の西洋人を女房に持たうなどとは、

身の程を知らな過ぎる。矢張り日本人には日本人同士がよく、ナオミのやうなのが一番自分の註文に嵌まつてゐるのだと、さう考へて結局私は満足してゐたのです。が、さうは云ふものの、白哲人種の婦人に接近し得ることは、私に取つて一つの喜び、いや、喜び以上の光榮でした。有體に云ふと、私は私の交際下手と語學の才の乏しいのに愛想を盡かして、そんな機會は一生廻つて来ないものとあきらめを附け、たまに外人團のオペラを見るときか、活動寫眞の女優の顔に馴染むとかして、わづかに彼等の美しさを夢のやうに慕つてゐました。然るに圖らずもダンスの稽古は、西洋の女——おまけにそれも伯爵の夫人——と接近する機會を作つたのです。ハリソン嬢のやうなお婆さんは別として、私が西洋の婦人と握手する「光榮」に浴したの、その時が生れて始めてでした。私はシユレムスカヤ夫人がその「白い手」を私の方へさし出したとき、覺えず胸をどきツとさせて、それを握つていいものかどうか、ちよつと躊躇したくらゐでした。

これは確かにシユレムスカヤ夫人と云ふものがあつたからです。毎月曜日と金曜日の午後、夫人の腕に抱かれて踊ること。そのほんの一時の間、いつの間にか私の何よりの楽しみとなつてゐたのです。私は夫人の前に出ると、全くナオミの存在を忘れました。その一時間とはへば芳烈な酒のやうに、私を酔はせずには置けませんでした。「讀治さんは思ひの外熱心ね、直きイヤになるかと思つたら。——」

これが西洋の流行なのでもありませうか、爪の先が三角形に、びんと尖らせて切つてあつたのです。

ナオミは私と並んで立つと一寸ぐらゐる低かつたことは、前に記した通りですが、夫人は西洋人としては小柄なやうに見えるながら、それでも私よりは上背があり、踵の高い靴を穿いてゐるせゐか、一緒に踊るとちやうど私の頭とすれすれに、彼女の露はな胸がありました。夫人が始めて、

“Walk with me!”

と云ひつゝ、私の背中へ腕を廻してワン・ステップの歩み方を教へたとき、私はどんなに此の眞つ黒な私の顔が彼女の肌を觸れないやうに、遠慮したことでせう。その滑らかな清楚な皮膚は、私に取つてはただ遠くから眺めるだけで十分でした。握手してさへ濟まないやうに思はれたのに、その柔かな羅衣を隔てて彼女の胸に抱きかかへられてしまつては、私は全くしてはならないことをしたやうで、自分の息が臭くはなからうか、此のにちやにちやした脂ツ手が不快を興へはしなからうかと、そんな事ばかり氣にかかつて、たまたま彼女の髪の毛と筋が落ちて來ても、ヒヤリとしないのでは

られませんでした。そののみならず夫人の體には一種の甘い匂ひがありました。

「あの女アひでえ腋臭だ、とてもくせえや！」と、例のマンダリン俱樂部の學生たちがそんな悪口を云つてゐるのを、私は後で聞いたこととが、夫人も多分さうだつたに違ひなく、それを消すために始終注意して香水をつけてゐたのでせうが、しかし私にはその香水と腋臭との交つた、甘酸ツばいやうなほのかな匂ひが、決して厭でなかつたばかりか、常に云ひ知れぬ憂鬱でした。それは私に、まだ見たこともない海の彼方の國國や、世にも妙なる異國の花園を想ひ出させました。

「ああ、これが夫人の白い體から放たれる香氣か。」と、私は恍惚となりながら、いつもその匂ひを貪るやうに嗅いだものです。私のやうなぶきツちよな、ダンスなどと云ふ花やかな空氣には最も不適當であるべき男が、ナオミの爲とは云ひながら、どうしてその後飽きもしないで、一月も二月も稽古に通ふ氣になつたか。——私は敢て白狀しますが、

それは確かにシユレムスカヤ夫人と云ふものがあつたからです。毎月曜日と金曜日の午後、夫人の腕に抱かれて踊ること。そのほんの一時の間、いつの間にか私の何よりの楽しみとなつてゐたのです。私は夫人の前に出ると、全くナオミの存在を忘れました。その一時間とはへば芳烈な酒のやうに、私を酔はせずには置けませんでした。「讀治さんは思ひの外熱心ね、直きイヤになるかと思つたら。——」

エニエドラドオへ出かけたのは、その年の冬のことでした。まだその時分東京にはダンス・ホールがさう澤山なかつたので、帝國ホテルや花月園を除いたら、そのカフェエがその頃漸くやり出したくらゐのものだつたでせう。で、ホテルや花月園は外国人が主であつて、服装や禮儀がやかましいさうだから、先づ手初めにエニエドラドオがよからうと、さう云ふことになつたのでした。尤もそれはナオミが何處からか噂を聞いて来て「是非行つて見よう」と獨りで發議し出したので、まだ私にはおぼびらな場所であるだけの度胸はなかつたのですが、

「駄目よ、誠治さんは！」

と、ナオミは私を睨みつけて、

「そんな氣の弱いことを云つてゐるから駄目なのよ。ダンスなんて云ふものは、稽古ばかりぢやいくらやつたつて上手になりつゝこありやしないわよ。人中へ出てづうづうしく踊つてゐるうちに巧くなるものよ。」

「それやあたしにさうだらうけれども、僕にはその、づうづうしさが無いんだから……」

「ぢやあいいわよ、あたし獨りでも出かけるから。……濱さんでもまあちゃんでも誘つて行つて、踊つてやるから。」

「まあちゃんて云ふのは此の間のマンドリン俱樂部の男だらう？」

「ええ、さうよ、あの人なんか一度も稽古しないくせに何處へでも出かけて行つて相手構はず踊るもんだから、もう此の頃ぢやすつかり巧くなつちやつたわ。誠治さんよりすつと上手だわ。だからづうづうしくしなけりや損よ……ね、いらつしやいよ、あたし誠治さんと踊つて上げるわ。……ね、後生だから一緒に来て……好い兒、好い兒、誠治さんはほんとに好い兒！」

それで結局出かけることに話が締まると、今度は何を着て行かうとまた長いこと相談が始まりました。

「ちよつと誠治さん、どれがいいこと？」

と、彼女は出かける四五日前から大騒ぎをして、有るだけのものを引つ張り出して、それに一手を通して見るのです。

「ああ、それがいいだらう。」

と、私もしまひには面倒になつて好い加減な返辭をする。

「さうかしら？ 此れで可笑しなないかしら？」

と、鏡の前をぐるぐる廻つて、

「變だわ、何だか。あたしこんなぢや氣に入らないわ。」

と、直ぐ脱ぎ捨てて、紙屑のやうに足で蹴くちやに蹴飛ばして、又次ぎの奴を引つけて見ます。が、あの着物もいや、此の着物もいやで、

「ねえ、誠治さん、新しいのを揃へてよ！」

となるのでした。

「ダンスに行くにはもつと思ひ切り派手なのでなけりや、こんな着物ぢや引き立ちほしなわ。よう！ 揃へてよう！ どうせ此れからちよいちよい出かけるんだから、衣裳がなけりや駄目ぢやないの。」

その時分、私の月月の収入はもはや到底彼女に養つては追いつかなくなつてゐました。元來私は金銭上の事にかけてはなかなかに几帳面な方で、獨身時代にはちやんと毎月の小遣ひを定め、残りはたとへ備かでも貯金するやうにしてゐましたから、ナオミと家を持つた當座は可成りの餘裕があつたのです。そして、私はナオミの愛に溺れてゐましたけれど、依然として事は決して疎かにしたことはなく、依然として精勵な模範的社員だつたので、重役の信用も次第に厚くなり、月給の額も上つて来て、半年期のボーナスを加へれば、平均月に四百圓になりました。だから普通に暮らすのなら二人で樂な譯であるのに、それがどうしても足りま

せんでした。細かいことを云ふやうですが、先づ月月の生活費が、いくら内輪に見積つても二百五十圓以上、場合によつては三百圓もかかります。此のうち家賃が三十五圓、——此れは二十圓だつたのが四年間に十五圓上がりました。——それから瓦斯代、電燈代、水道代、薪炭代、西洋洗濯代等の諸費を差し引き、残りの二百圓内外から二百三四十圓と云ふものを、何に使つてしまふかと云ふと、その大部分は喰ひ物でした。

それもその筈で、子供の頃には一品料理のピフテキで満足してゐたナオミでしたが、いつの間にかやらだんだん口が着つて来て、三度の食事の度毎に「何がたべたい、何がたべたい」と、歳に似合はぬ贅澤を云ひます。おまけにそれも材料を仕入れて、自分で料理するなど云ふ面倒臭いことは嫌ひなので、大概近所の料理屋へ注文します。

「あーあ、何か旨い物がたべたいなあア。」

と、退屈するとナオミの云ひ草はきつとそれでした。そして以前は洋食ばかり好きでしたけれど、此の頃ではさうでもなく、三度に一度は「何屋のお籠がたべて見たい」とか、「何處でこの刺身を取つて見よう」とか、生意氣なこと

を云ひます。

午は私は會社に居ますから、ナオミ一人でたべるのでありますが、却つてさう云ふ折の方がその贅澤は激しいのでした。夕方、會社から歸つて来ると、臺所の隅に仕出し屋のおかもちや、洋食屋の客物などが置いてあるのを、私はしばしば見るのがありました。

「ナオミちゃん、又お前何か取つたんだね！ お前のやうにでんや物ばかり喰べてゐた日にやお金が懸つて仕様がなによ。第一女一人でもつてそんな眞似をするなんて、少しは勿體ないと云ふ事を考へて御覽。」

さう云はれてもナオミは一向平氣なもので、

「だつて、一人だからあたし取つたんだわ、おかげを揃へるのが面倒なんだもの。」

と、わざとふていされて、ソオファの上に乗ん返り返つてゐるのです。

此の調子だから溜つたものでありません。おかげだけならまだしもですが、時には御飯を焚くのさへ臆助がつて、飯まで仕出し屋から運ばせると云ふ始末でした。で、月末になると、鳥屋、牛肉屋、日本料理屋、西洋料理屋、鮎屋、鱈屋、菓子屋、果物屋と、方方から持つて来る通ひ帳の締め高が、よくもこんなに喰べられ

たものだと、驚くほど多額に上つたのです。喰ひ物の次に萬んだのは西洋洗濯の代でした。此れはナオミが足袋一足でも決して自分で洗はうとせず、汚れ物は凡べてクリーニングに出したからです。そしてたまたま此言を云へば、

二た言目には、

「あたし女中ぢやないことよ。」

と云ひます。

「そんな、洗濯なんかすりやあ、指が太くなつちやつて、ピアノが弾けなくなるぢやないの、誠治さんはあたしの事を何と云つて？ 自分の實物だつて云つたぢやないの？ だのに此の手が太くなつたらどうするのよ。」

と、さう云ひます。

最初のうちこそナオミは家事向きの用をしてくれ、勝手元の方を働かされましたが、それが續いたのはほんの一年か半年ぐらゐだつたのでせう。ですから洗濯物などはまだいいとして、何より困つたのは家の中が日増しに複雑に、不潔になつて行くことでした。脱いだものは脱ぎッ放し、喰べた物は喰べッ放しと云ふ有様で、喰ひ荒らした皿小鉢だの、飲みかけの茶碗や、湯呑みだの、垢じみた肌着や湯文字だのが、いつ行つて見てもそこらに散り出している。床は

勿論椅子でもテーブルでも埃が溜つてゐないことはなく、あの折角の印度更紗の窓かけも最早や昔日の偉を止めず煤けてしまひ、あんなに晴れやかな「小鳥の籠」であつた筈のお伽噺の家の気分は、すつかり趣を變へてしまつて、部屋へ這入るときう云ふ場所特有な、むうツと鼻を衝くやうな臭ひがする。私もこれには閉口して、

「さあさあ、僕が掃除をしてやるから、お前は庭へ出ておいで。」

と、掃いたりハタいたりして見たこともありませんけれど、ハタけばハタくほどごみが出て来るばかりでなく、餘り散らかり過ぎてゐるので、片附けたくも手の附けやうがないのでした。

此れでは仕方がないと云ふので、二三度女中を雇つたこともありましたが、来る女中も来る女中もみんな呆れて歸つてしまつて、五日と辛抱してゐるものはありませんでした。第一初めからさう云ふ積りはなかつたので、女中が来ても寝るところがありません。そこへ持つて来て私たちの方でも不慮な、いぢやつきが出来なくなつて、ちよつと二人でふざけるのにも何だか窮屈な思ひをする。ナオミは人手が離れたとなると、いよいよ横着を發揮して、横のもの

を縦にもしないで、一一女中をコキ使ひます。そして相變らず「何屋へ行つて何を注文して来い」と、却つて前より便利になつただけ、餘計な深を並べます。結局女中といふものは非常に不経済でもあり、われわれの「遊び」の生活に取つて邪魔でもあるので、向うも恐れをなしたでせうが、此方も斷つて居て貰ひたくはなかつたのです。

さう云ふ譯で、月月の暮らしがそれだけ懸るとして、あとの百圓か百五十圓のうちから、月に十圓か二十圓づつでも貯金をしたいと思つたのですが、ナオミの錢遣ひが激しいので、そんな餘裕はありませんでした。彼女は必ず、一月に一枚は着物を作ります。いくらめりんすや銘仙でも裏と表とを買つて、両も自分で縫ふことはせず、仕立て賃をかけますから、五十圓や六十圓は消えてなくなる。さうして出来上つた品物は、氣に入らなければ押し入れの奥へ突っ込んだ儘で着ないし、氣に入つたとなると膝が抜ける迄着殺してしまふ。ですから彼女の戸棚の中には、ぼろぼろになつた古着が一杯詰まつてゐました。それから下駄の費澤を云ひます。草履、駒下駄、足駄、日下駄、雨下駄、餘所行きの下駄、不遜の下駄——此れ等が一足

七八圓から二三圓とまりで、十日間に一遍ぐらゐは買ふのですから、積つて見ると安いものではありません。「斯う下駄を穿いちや溜らないから、靴にしたらいぢやないか。」

と云つて見ても、昔は女學生らしく袴をつけて靴で歩くのを喜んだ癖に、もう此の頃では積古に行くにも着流しのまま、いやなりしやなりと出かける云ふ風で、

「あたし斯う見えても江戸ッ兒よ、なりはどうでも穿きものだけはチャンとしないぢや氣が済まないわ。」

と、此方を田舎者扱ひにします。小遣ひなども、音楽會だ、電車賃だ、教科書だ、雑誌だ、小説だ、三圓五圓ぐらゐづつ三日に上げず持つて行きます。此の外に又英語と音楽の授業料が二十五圓、これは毎月規則的に拂はなければなりません。と、四百圓の収入で以上の負債に堪へるのは容易でなく、貯金どころかあべこべに貯金を引き出すやうになり、獨身時代にいくらか用意して置いたものもチビチビ成し崩しに崩れて行きます。そして、金と云ふものは手をつけ出したら誠に早いもので、すから、此の三四年間にすつかり蓄へを使ひ

果して、今では一文もないのでした。

因果な事には私のやうな男の常として、借金に断りを云ふのは不得手、従つて勘定はキンキンチンと拂はなければどうも落ち着いて居られないので、晦日が来ると云ふに云はれない苦勞をしました。「さう使つちや晦日が越せなくなるぢやないか」とたしなめても、

「越せなければ、待つて貰へばいいわよ。」と、云ひます。

「——三年も四年も一つ所に住んで居ながら、晦日の勘定が延ばせないなんて法はないわよ。半期半期にはきつと拂ふからつて云へば、何處でも待つてきまつてゐるわ。誠治さんは氣が小さくつて融通が利かないからいけないのよ。」

さう云つた調子で、彼女は自分の買ひたいものは凡べて現金、月月の拂ひはボーナスが這入る迄後廻しと云ふやり方。そのくせ矢張り借金の言葉をするのは嫌ひで、

「あたしそんなこと云ふのは厭だわ、それは男の役ぢやないの。」

と、月末になればツイと何處かへ飛び出して行きます。

ですから私は、ナオミのために自分の収入を全部捧げてゐたと云つてもいいのでした。彼

女を少しでもよりよく身綺麗にさせて置くこと、不自由な思ひや、ケチ臭いことはさせないで、のんびりと成長させてやること、——それは素より私の本懐でしたから、困る困ると思

痛りながらも彼女の費澤を許してしまひます。するとそれだけ他の方面を切り詰めたければならない譯で、幸ひ私は自分自身の交際費はちつとも懸りませんでした。それでもたまに會社関係の會合などがあつた場合、義理を缺いても逃げられるだけは逃げるやうにする。その外自分の小遣ひ、被服費、辨當代などを、思ひ切つて節約する。毎日通ふ省線電車もナオミは二等の定期を買ふのに、私は三等で我慢をする。飯を焚くのが面倒なので、んや物を取ら

れては大變だから、私が御飯を焚いてやり、おかずを拵へてやることもある。が、さう云ふ風になつて来るとそれが又ナオミには氣に入ります。

「男のくせに臺所なんぞ働かなくつてもいいことよ、見ツともないわよ。」

と、さう云ふのです。

「誠治さんはまあ、年が年中同じ服ばかり着てゐないで、もう少し氣の利いたなりをしたらどうなの？ あたし、自分ばかり良くなつたつて

誠治さんがそんな風ぢやあやつぱり厭だわ。それぢや一緒に歩けやしないわ。」

彼女と一緒に歩けなければ何の樂しみもありませんから、私にしても所謂「氣の利いた」服の一つも拵へなければならなくなる。そして彼女と出かける時は電車も二等へ乗らなければならぬ。つまり彼女の虚榮心を傷けないやうにするためには、彼女一人の費澤では濟まない結果になるのでした。

そんな事情で遣り繰りに困つてゐたところへ、此の頃又シムレムスカヤ夫人の方へ四十圓づつ取られますから、此上ダンスの衣裳を買つてやつたりしたら、つちもきつちも行かなくなりません。けれどもそれを聞き分けるやうなナオミではなく、ちやうど月末のことなので、私のおふところに現金があつたのですから、尙更

それを出せといつて承知しません。

「だつてお前、今此の金を出しちゃまつたら、直ぐに晦日に差支へるのが分つてゐるさうなもんぢやないか。」

「差支へたつてどうにかなるわよ。」

「どうにかなるつて、どうなるのさ。どうにもなりやうはありやしないよ。」

「ぢやあ何のためにダンスなんか習つたのよ。」

「いいわ、そんなら、もう明日から何處にも行かないから。」

さう云つて彼女は、その大きな眼に涙を流して、恨めしさうに私を睨んで、つんと黙つてしまふのでした。

「ナオミちゃん、お前怒つてゐるのかい、……え、ナオミちゃん、ちよつと、……此方をおいておくれ。」

その晩、私は床の中に這入つてから、背中を向けて寝たふりをしてゐる彼女の肩を揺す振りながら、さう云ひました。

「よう、ナオミちゃん、ちよつと此方をお向きつてば……」

そして優しく手をかけて、魚の骨つきを裏返すやうに、ぐるりと此方へ引つくり渡すと、抵抗のないしなやかな體は、うつすらと半眼を開ちたまま、素直に私の方を向き直した。

「どうしたの？ まだ怒つてるの？」

「……」

「え、おい、……怒らないでもいいぢやないか、どうにかするから……」

「おい、眼をお開きよ、眼を……」

云ひながら、睫毛がぶるぶる顫へてゐる眼臉

の肉を吊りあげると、たとへば貝の質のやうに中からそつと覗いてゐるむつくりとした眼の玉は、寝てゐるところか眞正面に私の顔を覗いてゐるのでした。

「あの金で買つて上げるよ、ね、いいだらう、……」

「だつて、さうしたら困りやしない？……」

「困つてもいいよ、どうにかするから。」

「ぢやあ、どうする？」

「國へさう云つて、金を送つて貰ふからいいよ。」

「送つてくれる？」

「ああ、それ送つてくれるとも、僕は今迄一度も國へ迷惑をかけたことはないんだし、一人で一軒持つてゐればいろいろ物が應るだらうぐらゐるなことは、おふくろだつて分つてゐるに違ひないから……」

「さう？ でもおかあさんに悪くはない？」

ナオミは氣にしてゐるやうな口ぶりでしたが、その實彼女の服の中には、用舎へ云つてやればいいのに」と、とうからそんな考へがあつたことは、うすうす私にも讀めておりました。

私がそれを云ひ出したのは彼女の思ふ壺だつたのです。

「なあに、悪い事なんかなんにもないよ。けれども僕の主義として、さう云ふ事は厭だつたからしなかつたんだよ。」

「ぢや、どう云ふ譯で主義を變へたの？」

「お前がさつき泣いたのを見たら可哀さうになつちやつたからさ。」

「さう？」

と云つて、波が寄せて来るやうな工合に胸をうねらせて、羞しさうなほほ笑みを浮かべながら、

「あたし、ほんとに泣いたかしら？」

「もうどつこへも行かないつて、眼に一杯涙をためてゐたぢやないか。いつまで立つてもお前はまるでだだッ兒だね、大きなべどもちゃん……」

「私、私、可愛いパパちゃん！」

ナオミはいきなり私の頸にしがみつき、その唇の朱の捺印を、さながら繁忙な郵便局のスタンプ掛りが捺すやうに、額や、鼻や、眼の上や、耳朶の裏や、私の顔のあらゆる部分へ、寸分の隙間もなくべたべたと消けました。

それは私に、何か、椿の花のやうな、どつしりと重い、そして露けく軟かい無數の花びらが降つて来るやうな快さを感じさせ、その花びらの瀾りの中に、自分の首がすつかり埋まつてし

まつたやうな夢見心地を覺えさせました。

「おしたの、ナオミちゃん、お前はまるで氣違ひのやうだね。」

「ああ、氣違ひよ……あたし今夜は氣違ひになるほど謙治さんが可愛いんだもの……それともうるさい？」

「うるさいことなんかあるものか、僕も嬉しいよ、氣違ひになるほど嬉しいよ、お前のためならどんな犠牲を拂つたつて構やしないよ……おや、どうしたの？ 又泣いてるの？」

「ありがとよ、パパさん、あたしパパさんに感謝してゐるよ、だからひとりで涙が出るの……ね、分つた？ 泣いちゃいけない？ いけなけりやあ拭いて頂戴。」

ナオミは懐から紙を出して、自分では拭かずに、それを私の手の中へ握らせました。が、瞳はちいさく私の方へ注がれたまま、今拭いて貰ふその前に、一層涙を滾滾と睫毛の縁まで溢れさせてゐるのでした。ああ何と云ふ潤ひを持つた、綺麗な眼だらう。此の美しい涙の玉をさうつと此のまま結晶させて、取つて置く譯には行かないものかと思ひながら、私は最初彼女を拭いてやり、その圓潤と盛り上つた涙の玉に觸れないやうに眼窩の周りを拭

うてやると、皮がたるんだり引つ張れたりする度毎に、ちやうど微風が蓮の葉の露を揺らす如く、玉はいろいろの形に揉まれて、凸面レンズのやうになつたり、凹面レンズのやうになつたり、しまひにははらはらと崩れて折角拭いた頬の上に再び光の線を曳きながら流れて行きます。すると私はもう一度その頬を拭いてやり、まだいくらかは濡れてゐる眼玉の上を撫でてやり、それからその紙で、かすかな唸鳴をつづけてゐる彼女の鼻の孔をおさへ、

「さ、鼻をおかみ。」

と、さう云ふと、彼女は「チーン」と鼻を鳴らして、幾度も私に涙をかませました。

その明くる日、ナオミは私から二百圓買つて、一人で三越へ買物に行き、私は會社で午の休みに、母親へ宛てて始めて無心状を書いたものでした。

「……何分此の頃は物價高く、二三年前とは驚くほどの相違にて、さしたる贅澤を致さざるに不拘、月月の經費に追はれ、都會生活もなかなか容易に無之、……」

と、さう書いたのを覚えてゐますが、手紙にもせよ、親に向つてこんな上手な書を云ふほど、それほど自分が大膽になつてしまつたかと

思ふと、私は我ながら恐ろしい氣がしました。母は私を信じてゐる上に、仲の大事な嫁としてナオミに對しても戀愛を持つてゐたことは、二三日してから手許に届いた返辭を見ても分りました。手紙の中には「なをみに着物でも買つておやり」と私が云つてやつたよりも百圓餘計な替が封入してあつたのです。

な船が浮かんでゐます。
「どう？ あたしの見立ては巧いでせう？」
ナオミは両手にお白粉を滑き、まだ湯煙の立つてゐる肉つきのおい肩から項を、その手のひらで右左からヤケにびたびた叩きながら云ひました。

が、正直のところ、肩の厚い、背の大きい、胸のつき出た彼女の體には、その水のやうに柔かい地質が、あまり似合ひませんでした。めりんとすや就仙を着てゐると、混血兒の娘のやうな、エキゾティックな美しさがあるのですけれど、不思議な事にかう云ふ眞面目な衣裳を纏ふと、却つて彼女は下品に見え、模様が派手であればあるだけ、横濱あたりのチャブ屋か何かの女のやうな、粗野な感じがするばかりでした。
私は彼女が一人で得意になつてゐるので、強ひて反対はしませんでした。此の毒毒しい装ひの女と一緒に、電車へ乗つたりダンス・ホールへ現はれたりするのは、身が凍むやうな気がしました。

ナオミは衣裳をつけてしまふと、
「さ、讓治さん、あなたは紺の背廣を着るのよ。」
と、珍らしくも私の服を出して来てくれ、

埃を拂つたり火災斗をかけたたりしてくれまし
た。
「僕は紺より茶の方がいいがな。」
「馬鹿ねえ！ 讓治さんは！」
と、彼女は例の、叱るやうな口調で「と脱み
脱んで、

一夜の宴會は紺の背廣かタキシードに極まつ
てゐるもんよ。さうしてカラーもソフトをしな
いでステイツフのを着けるもんよ。それがエテ
イケットなんだから、此れから覚えてお置きな
さい。」
「へえ、さう云ふもんかね、」
「さう云ふもんよ、ハイカラがつてゐる癖にそ
れを知らないでどうするのよ。此の紺背廣は随
分汚れてゐるけれど、でも洋服はびんと皺が伸
びてゐて、型が崩れてゐなけりやいよ。さ、
あたしがちゃんとして上げたから、今夜は此れ
を着ていらつしやい。そして近いうちにタキシ
ードを揃へなけりやいわ。でなけりやあ
たし踊つて上げないわ。」
それからネクタイは紺か黒無地で、蝶結びに
するのがいいこと、靴はエナメルにすべだけ
れど、それがなければ普通の黒の短靴にすること、赤皮は正式に外れてゐること、靴下もほん

たうは紺がいいのだが、さうでなくても色は黒
無地を揃ふべきこと。——何處から聞いて来た
ものか、ナオミはそんな講義をして、自分の服
装ばかりでなく、私のことにも一つ一つ、囁
きを入れ、いよいよ家を出かける迄にはなかなか
手間が懸りました。
向うへ着いたのは七時半を過ぎてゐたので、
ダンスは既に始まつてゐました。騒々しいジャ
ズ・バンドの音を聞きながら梯子段を上つて行
くと、食堂の椅子を取り拂つたダンス・ホール
の入口に、Special Dance-Admission: Ladies Free, Gentlemen ¥3.00」と記した貼紙が
あり、ボーイが一人番をしてゐて、會費を取り
ます。勿論カフェエのことですから、ホールと云
つてもそんなに立派なものではなく、見わたした
ところ、踊つてゐるのは十組ぐらゐもあつた
でせうが、もうそれだけの人数でも可なりガヤ
ガヤ賑つてゐました。部屋の一方にテーブルと
椅子を二列にならべた席があつて、切符を買つ
て入場した者は、各その席を占領し、ときど
きそこで休みながら、他人の踊るのを見物する
やうな仕組になつてゐるのでせう。そこには見
知らない男や女が彼方に一團、此方に一團とか
たまりながらしゃべつてゐます。そしてナオミ

が這入つて来ると、彼等には互ひ何かコソコソ
囁き合つて、かう云ふ所でなければ見られな
い、一種異様な、半ば敬意を含んだやうな、半
ば輕蔑したやうな胡散な眼つきで、ケバケバし
い彼女の姿を攫るやうに眺めるのでした。

「おい、おい、あそこにあんな女が来たぞ。」
「あの連れの男は何者だらう？」
と、私は彼等に云はれてゐるやうな気がし
ました。彼等の視線が、ナオミばかりか、彼女
のうしろに小さくなつて立つてゐる私の上にも
注がれてゐることを、はつきりと感じました。

私の耳にはオーケストラの音楽がガンガン鳴
り響き、私の目の前には踊りの群衆が、……み
んな私より遙に巧さうな群衆が、大きな一
つの環を作つてぐるぐる廻つてゐます。同時
に私は、自分がたつた五尺二寸の小男であるこ
と、色が土人のやうに黒くて亂杭齒であること、
二年も前に拵へた甚だ振はない紺の背廣を着
てゐることなどを考へたので、顔がカツカツと
火照つて来て、體中に馴染むひが来て、「もう
こんなところへ来るもんぢやない」と思はない
ではゐられませんでした。

「こんな所に立つてゐたつて仕様がなわ。
……何處か彼方の……テーブルの方へ行かうぢ

やないの。」
ナオミもさすがに氣法れがしたのか、私の耳
へ口をつけて、小さな聲でさう云ふのでした。

「でも何か知ら、此の踊つてゐる連中の間を
突ツ切つてもいいのかしら？」
「いいのよ、きつと、……」
「だつてお前、衝きあたつたら悪いぢやない
か。」
「衝きあたらないやうに行けばいいのよ、……
ほら、御覽なさい、あの人だつて彼處を突ツ切
つて行つたぢやないの。だからいいのよ、行つ
て見ませうよ。」

私はナオミのあとに附いて廣場の群衆を横
切つて行きましたが、足が願へてゐる上に床が
つるつる滑りさうなので、無事に向うへ渡り着
く迄がひと苦勞でした。そして一通ガタンと轉
びさうになり、
「チョツ」
と、ナオミに睨みつけられ、しかめツ面をさ
れたことを覚えてゐます。

「あ、あそこが一つ空いてゐるやうだわ、あの
テーブルにしようぢやないの。」
と、ナオミはそれでも私よりは臆面がなく、
デロデロ見られてゐる中をすうツと済まして通

り越して、とあるテーブルへ就きました。が
あれ程ダンスを樂しみにしてゐたくせに、すぐ
踊らうとは云ひ出さないで、何だか斯う、ちよ
つとの間着を着かないやうに、手提げ袋から鏡
を出してこつそり鏡を直したりして、
「ネクタイが左へ曲つてゐるわよ。」
と、内證で私に注意しながら、廣場の方を
見守つてゐるのでした。

「ナオミちゃん、津田君が来てゐるぢやない
か。」
「ナオミちゃんなんて云ふもんぢやないわよ、
さうして仰つしやいよ。」
さう云つてナオミは、又むづかしいしかめツ
面をして、
「濱さんも来てるし、まアちゃんも来てるの
よ。」
「どれ、何處に？」
「ほら、あそこ……」
そして慌てて聲を落して、「指さしをしちや失
禮だわよ。」と、そつと私をたしなめてから、
「ほら、あそこにあの、ピンク色の洋服を着た
お嬢さんと一緒に踊つてゐるでせう、あれが
まアちゃんよ。」
「やあ」

と、云ひながら、その時、まア、ちやんは我れ我れの方へ寄つて来て、相手の女の肩越しに、やにや笑つて見せました。ピンク色の洋服は、せいの高い、肉感的な長い腕をムキ出しにした太つた女で、豊かな云ふよりは鬱陶しいほど澤山ある、眞つ黒な髪を肩の邊りでザクリと切つて、そいつをばやばやと縮らせた上に、リボンの鉢巻をしてゐるのですが、顔はと云ふと、頬つべたが赤く、眼が大きく、唇が厚く、そして何處までも純日本式の、浮世繪にでもありさうな細長い鼻つきをした瓜實顔の輪廓でした。私も随分女の顔には氣をつけてゐる方ですけれど、こんな不思議な、不調和な顔はまだ見たことがありません。思ふに此の女は、自分の顔があまり日本人過ぎるのを此の上もなく不祥に感じて、成るだけ西洋臭くしようと苦心修養してゐるらしく、よくよく見ると、凡そ外部へ露出してゐる肌と云ふ肌には粉が吹いたやうにお白粉が塗つてあり、眼の周りにはペンキのやうにざらざら光る緑青色の輪の具がほかしてゐるのです。あの頬つべたの眞つ赤な鼻も、疑ひもなく頬紅をつけてゐるので、おまけにそんなリボンの鉢巻をした恰好は、氣の毒ながらどう考へても化粧物としか思はれません。

「おい、ナオミちゃん、……」
うっかり私はさう云つてしまつて、急いでさんと云ひ直してから、
「あの女はあれでもお嬢さんなのかね？」
「ええ、さうよ、まるで淫賣みたいだけれど、……」
「お前あの女を知つてゐるのかい？」
「知つてゐるんぢやないけれど、よくまアちゃんから話を聞いたわ。ほら、頭へリボンを巻いてるでせう。あのお嬢さんは眉毛が顔のうんと上の方にあるので、それを隠すために鉢巻をして、別に眉毛を上の方へ書いてゐるんだつて。ね、見て御覧なさいよ、あの眉毛は贋物なのよ。」
「だけど顔だけはそんなに悪くないぢやないか。赤いものだの青いものだの、あんなにゴチヤゴチヤ塗り立ててるから可笑しいんだよ。」
「つまり馬鹿よ。」
ナオミはだんだん自信を恢復して来たらしく、己惚れの強い平素の口調で、云つてのけて、
「お前だつていい事なんかありやしないわ。あんな女を調治さんは美人だと思ふの？」
「美人と云ふほどぢやないけれども、鼻も高いし、體つきも悪くはないし、普通に作つたら見られるだらうが。」

「まあ厭だ！ 何が見られるもんぢやない！ あんな顔ならいくらだつてざらにあるわよ。おまけにどうせう、西洋人臭く見せようと思つて、いろんな細工をしてゐるところはいいけれど、それがちつとも西洋人に見えないんだから、お慰みぢやないの。まるで猿だわ。」
「ところで濱田君と踊つてゐるのは、何處かで見たやうな女ぢやないか。」
「そりや見た筈だわ、あれは帝劇の春野綺羅子よ。」
「へえ、濱田君は綺羅子を知つてゐるのかい？」
「ええ知つてゐるのよ、あの人はダンスが巧いもんだから、方方で女優と友達になるの。」
濱田は茶つぽい背廣を着て、チョコレート色のボックスの靴にスパットを穿いて、群集の中でも一と際目立つ巧者な足取で踊つてゐます。そして甚だ怪しからんことには、或ひは斯う云ふ踊り方があるのかも知れませんが、相手の女とべつたり顔を着け合つてゐます。きやしやな、象牙のやうな指を持つた、ぎゅつと抱きしめたら揺つて折れてしまひさうな小柄な綺羅子は、舞臺で見るとは違ひに美人で、その名の如く綺羅を極めたあでやかな衣裳に、縞子と云ふのか朱珍と云ふのか、黒地に金線と濃い緑と

で顔を描いた丸帯を締めてゐるのです。女の方がせいが低いので、濱田は恰も髪毛の匂ひを嗅ぎでもするやうに、頭をぐつと斜めにかしげで、耳のあたりを綺羅子の襟袂に嗅つ着けてゐる。綺羅子は綺羅子で、眼尻に皺が寄るほど強く男の頬つべたへ顔をあててゐる。二つの顔は四つの眼玉をバチクサさせながら、體は離れることがあつても、首と首とはいつかな離れずに踊つて行きます。
「調治さん、あの踊り方を知つてゐる？」
「何だか知らないが、あんまり見つともいいもんぢやないね。」
「ほんたうよ、實際下品よ。」
ナオミはベツベツと唾を吐くやうな口つきをして、
「あれはチーク・ダンスつて云つて、眞面目な場所であるものぢやないんだつて。アメリカあたりであれをやつたら、退場して下さいつて云はれるんだつて。濱さんもしいけれど、全く氣障よ。」
「だが、女の方も女の方だね。」
「そりやさうよ、どうせ女優なんて者はあんな者よ、全體此處へ女優を入れるのが悪いんだわ、そんなことをしたらほんたうのレディーは來な

くなるわ。」
「男にしたつて、お前はひどくやましいことを云つたけれど、紺の背廣を着てゐる者は少いぢやないか。濱田君だつてあんななりをしてゐるし、……」
此れは私が最初から氣がついてゐた事でした。知つたか振りをしたがるナオミは、所謂エチケットなるものを聞きかじつて来て、無理に私に紺の背廣を着せましたけれど、さて来て見ると、そんな服装をしてゐる者は二三人ぐらゐで、タキシードなどは一人もなく、あとは大抵髪り色の、凝つたスーツを着てゐるのです。
「そりやさうだけれど、あれは濱さんが間違つてゐるのよ、紺を着るのが正式なのよ。」
「さう云つたつて……ほら、あの西洋人を御覧、あれもホームズパンチぢやないか。だから何だつていいんだらう。」
「さうぢやないわよ、人はどうでも自分だけは正式ななりをして來るもんよ。西洋人があんな云ふなりをして來るのは、日本人が悪いからなのよ。それに何だわ、濱さんのやうに場数を踏んでゐて、踊りが巧い人なら格別、調治さんなんかなりでもキチンとしてゐなけりや見つともないわよ。」

廣場の方のダンスの流れが一時に停まつて、盛んな拍手が起りました。オーケストラが止んだので、彼等はみんな少しも長く踊りたさうに、熱心なのは口笛を吹き、地團太を踏んで、アンコールをしてゐるのです。すると音楽が又始まる、停まつてゐた流れが再びぐるぐる動き出す。一としきり立つと又止んでしまふ、又アンコール……二度も三度も繰り返して、とうとういくら手を叩いても聴かれなくなると、踊つた男は相手の女の後に従つてお供のやうに躊躇しながら、一同ぞろぞろとテーブルの方へ歸つて來ます。濱田とまアちゃんは綺羅子とピンク色の洋服をめいめいのテーブルへ送り届けて、椅子にかけさせて、女の前で紙傘にお辭儀をしてから、やがて揃つて私たちが方へやつて來ました。
「やあ、今晚は、大分ゆつくりでしたね。」
さう云つたのは濱田でした。
「どうしたんだい、踊らねえのかい？」
まアちゃんは例のぞんざいな口調で、ナオミの後ろに突つ立つたまま、低い彼女の盛装を上からしげしげと見おろして、
「約束がなけりやあ、此の次に己と踊らるか？」

「いやだよ、まアちゃん、下手くそなもの！」
 「馬鹿云ひねえ、月謝は出さねえが、此れでも
 ちゃんと踊れるから不思議だ。」
 と、大きな陶子ツ鼻の孔をひろげて、唇を
 「へ」の字なりに、えへらえへら笑つて見せて、
 「根が御器用でいらつしやるからね。」
 「ふん、威張るなよ！ あのピンク色の洋服と
 踊つてゐる恰好なんざあ、あんまりいい圖ちや
 なかつたよ。」

「驚いたことには、ナオミは此の男に向ふと、
 忽ちこんな亂暴な言葉を使ふのでした。」
 「や、此奴アいけねえ、」
 と、まアちゃんは首をちぢめて頭を掻いて、
 ちらりと遠くのテーブルにゐるピンク色の方を
 振り返りながら、
 「己もづうづうしい方ちや退けを取らねえ積り
 だけれど、あの女には敵はねえや、あの洋服で
 此處へ押し出して来ようてんだから。」
 「何だありやあ、まるで猿だよ。」
 「あははは、猿か、猿たあうめえことを云つた
 な、全く猿にちげへねえや。」
 「巧く云つたらあ、自分が連れて来たんぢやな
 いか。——ほんたうにまアちゃん、見つともな
 いから注意しておやりよ。西洋人臭く見せよ

うとしたつて、あの御面相ぢや無理だわよ。ど
 だいな造作が、ニツボンもニツボンも、純ニ
 ツボンと来てるんだから。」
 「要するに悲しき努力だね。」
 「あははは、さうよほんとに、要するに猿の悲
 しき努力よ。和服を着たつて、西洋人臭く見
 える人は見えるんだからね。」
 「つまりお前のやうにかな。」
 ナオミは「ふん」と鼻を高くして、得意のせせ
 ら笑ひをしながら、
 「さうさ、まだあたしの方が混血兒のやうに見
 えるわよ。」

「熊谷君」
 と、濱田は私に気がぬするらしく、もちも
 ちしてゐる様子でしたが、その名でまアちゃん
 を呼びかけました。
 「さう云へば君は、河合さんとは始めてなんぢ
 やなかつたかしら？」
 「ああ、お顔はたびたび見たことがあるがね、
 ——」
 「熊谷」と呼ばれたまアちゃんは、矢張りナオミの
 背中越しに、椅子の後に背つ立つたまま、私
 の方へデロリと厭味な視線を投げました。
 「僕は熊谷政太郎と云ふもんです、——自己紹

介をして置きます、どうか何分——」
 「本名を熊谷政太郎、一名をまアちゃんと呼ん
 ます。」
 ナオミは下から熊谷の顔を見上げて、
 「ねえ、まアちゃん、ついでにもう少し自己紹
 介をしたらどうなの？」
 「いいや、いけねえ、あんまり云ふとボロが出
 るから。——詳しいことはナオミさんから御聞
 きを願ひます。」
 「アラ、いやだ、詳しい事なんかあたしが何を
 知つてゐるのよ。」

「あははは」
 この連中に取り巻かれるのは不愉快だとは
 思ひながら、ナオミが機嫌よくはいやぎ出した
 ので、私も仕方なく笑つて云ひました。
 「さ、いかがです、濱田君も熊谷君も、此れへ
 お掛けになりませんか。」
 「謙治さん、あたし喉が渴いたから、何か飲む
 物を云つて頂戴。濱田さん、あんた何がいい？
 レモン・スクワツシュ？」
 「え、僕は何でも結構だけれど、……」
 「まアちゃん、あんたは？」
 「どうせ御馳走になるのなら、ウイスキー・タン
 サンに願ひたいね。」

「まあ、呆れた、あたし酒飲みは大嫌ひさ、口
 が臭くつて——」
 「臭くつてもいいよ、臭い所が捨てられない
 ツて云ふんだから。」
 「あの猿がかい？」
 「あ、いけねえ、そいつを云はれると詫まる
 よ。」
 「あははは」
 と、ナオミは逸擧げからず、體を前後に揺す振
 りながら、
 「ぢや、謙治さん、ボーイを呼んで頂戴。——
 ウイスキー・タンサンが一つ、それからレモン・
 スクワツシュが三つ。……あ、待つて、待つ
 て！ レモン・スクワツシュは止めにするわ、フ
 ルーツ・カクテルの方がいいわ。」
 「フルーツ・カクテル？」
 私は聞いたこともないそんな飲み物を、どう
 してナオミが知つてゐるのか不思議でした。
 「カクテルならばお酒ぢやないか。」
 「うそよ、謙治さんは知らないのよ、——まあ、
 濱ちゃんもまアちゃんも聞いて頂戴、此の人
 は此の通り野暮なんだから、」
 ナオミは「此の人」と云ふ時に人差し指で私の
 肩を軽く叩いて、

「だからほんとに、ダンスに来たつて此の人と
 二人ぢや間が抜けてゐて仕様がないわ。ぼんや
 りしてゐるもんだから、さつきも滑つて轉びさ
 ろになつたのよ。」
 「床がつるつるしてますからね、」
 と、濱田は私を辯護するやうに、
 「初めのうちは誰でも間が抜けるもんですよ、
 馴れると追ひ追ひ板につくやうになりますけれ
 ど、……」
 「ぢや、あたしはどう？ あたしもやつぱり板
 につかない？」
 「いや、君は別さ、ナオミ君は度胸がいいか
 ら、……まあ社交術の天才だね。」
 「濱さんだつて天才でない方でもないわ。」
 「へえ、僕が？」
 「さうさ、春野綺羅子といつの間にお友達に
 なつたりして！ ねえ、まアちゃん、さう思は
 ない？」
 「うん、うん」
 と、熊谷は下唇を突き出して、頭をしやく
 つて頷いて見せます。
 「濱田、お前綺羅子にモーションをかけたのか
 い？」
 「ふざけちやいかんよ、僕あそんなことをする

もんかよ。」
 「でも濱さんは臭つ赤になつて云ひ謝するだけ
 可愛いわ。何處か正直な所があるわ。——ね
 え、濱さん、綺羅子さんを此處へ呼んで来ない？
 よう！ 呼んでらッしやいよ！ あたしに紹介
 して頂戴。」
 「なんかんで、又冷やかさうツて云ふんだら
 う？ 君の毒舌に懸つた日にやあ敵はんからな
 ア。」
 「大丈夫よ、冷やかさないから呼んでらッしや
 いよ、服やかな方がいいぢやないの。」
 「ぢやあ、己もあの猿を呼んで来るかな。」
 「あ、それがいい、それがいい、」
 と、ナオミは熊谷を振り返つて、
 「まアちゃんも猿を呼んどいでよ、みんな一緒
 にならうぢやないの、」
 「うん、よからう、だがもうダンスが始まつた
 ぜ、一つお前と踊つてからにしようぢやない
 か。」
 「あたしまアちゃんぢや厭だけけれど、仕方がな
 い、踊つてやらうか。」
 「云ふな云ふな、習ひたての舞にしががつて、」
 「ぢや謙治さん、あたし一週踊つて来るから見
 てらッしやい。後であなたと踊つて上げるか

「私は定めし悲しきうな、變な表情をしてゐたらうと思ひますが、ナオミはフイと立ち上つて、熊谷と腕を組みながら、再び盛んに動き出した群衆の流れの中へ這入つて行つてしまひました。」

「や、今度は七番のフォックス・トロットか、と、濱田も私と二人になると何となく話題に困るらしく、ボケツトからプログラムを出して見て、こそこそ臂を持ち上げました。」

「あの、僕ちよつと失禮します、今度の番は綺羅子さんと約束がありますから。」

「さあ、どうぞ、お構ひなく、——」

私は倒り、三人が消えてなくなつた跡へボーイが持つて来たワイスキー・タンサンと、所謂「フルーツ・カクテル」なるものと、四つのコップを前にして、茫然と廣場の景氣を眺めてゐなければなりません。が、もともと私は自分が踊りたいのではなく、斯う云ふ場所ではナオミがどれほど引き立つか、どう云ふ踊りッ振りをするか、それを見たいのが主でしたから、結局此の方が氣楽でした。で、ほつと解放されたやうな心地で、人波の間に見え隠れするナオミ

の姿を、熱心な眼で追つて見ました。

「ウム、なかなかよく踊る……あれなら見つともない事はない……ああ云ふ事をやらせるとやつぱりあの兒は器用なものだ……」

可愛いダンスの草履を穿いた白足袋の足を爪立てて、くるりくるりと身を翻すと、華やかな長い袂がひらひらと舞ひます。一步を踏み出す度毎に着物の上前の裾が、蝶蝶のやうにハタハタと跳ね上ります。藝者が撥を持つ時のやうな、巧者なもつきで熊谷の肩を掴まんでゐる眞つ白な指、重くどつしり、體を締めつけた拘羅な帯地、一茎の花のやうに、此の群衆の中に目立つてゐる項、横、正面、後の襟足、——かうして見ると、成る程和服も捨てたものではあり

ません、のみならず、あのピン、色の洋服を始め突飛な意匠の婦人たちが居るせむか、私が密かに心配してゐた彼女のケバケバしい好みも、決してそんなに卑しくはありません。

「ああ、暑、暑、暑！ どうだつた、誠治さん、あたしの踊るのを見てゐた？」

踊りが済むと彼女はテーブルへ戻つて来て、急いでフルーツ・カクテルのコップを前へ引き寄せました。

「ああ、見てゐたよ、あれならどうして、とて

も始めてとは思へないよ。」

「さう？ ちや今度、ワン・ステツプの時に誠治さんと踊つて上げるわ、ね、いいでしょ？……ワン・ステツプなら易しいから。」

「あの連中はどうしたんだい、濱田君と熊谷君は？」

「え、今来るわよ、綺羅子と熊谷を引つ張つて、——フルーツ・カクテルをもう二つ、云つたらいいわ。」

「さう云へば何だね、今ピンク色は西洋人と踊つてゐたやうだね。」

「ええ、さうなのよ、それが滑稽ぢやないの、——」

と、ナオミはコップの底を視つめ、ゴクゴクと喉を鳴らして、渴いた口を海ほしながら、

「あの西洋人は友達でも何でもないので、それがいきなり熊谷の所へやつて来て、踊つて下さってゐるのよ、紹介もなしにそんな事を云ふなんて、きつとあの熊谷を淫賣か何かと間違へたのよ。」

「ぢや、断ればよかつたぢやないか。」

「だからさ、それが滑稽ぢやないの。あの熊谷が又、相手が西洋人だもんだから、断り切れないで

踊つたところが！ ほんたうにいい馬鹿だわ、取ツ晒しな！」

「だけどお前、さうツケツケと口を云ふもんぢやないと、傍で聞いてゐてハラハラするから。」

「大丈夫よ、あたしにはあたしで考へがあるわよ。——なあに、あんな女にはそのくらゐのことを云つてやつた方がいいのよ、でない」と此方まで迷するから、まあ、ちやんだつて、あれぢや困るから注意してやるつて云つてゐたわ。」

「そりや、男が云ふのはいいだらうけれど、……」

「ちよいと！ 濱ちゃんを綺羅子を連れて来たわよ、レディーが来たなら直ぐに椅子から立つてもらよ。——」

「あの、御紹介します、——」

と、濱田は私たち二人の前に、兵士の「氣をつけ」のやうな姿勢で立ち止まりました。

「これが春野綺羅子嬢です。——」

かう云ふ場合、此の女はナオミに比べて優つてゐるか、劣つてゐるか」と、私は自然、ナオミの美しさを標準にしてしまふのですが、今濱田の後から、しとやかないなを作つて、そ

の口もとに悠然と自信のあるほほ笑みを浮かべながら、一と足そこへオミ出た綺羅子は、ナオミより一つか二つ歳かさでもありません。が、生き生きとした、娘嬢した點に於いては、小柄なせむもあるせむが、少しもナオミと變りなく、そして衣裳の豪華なことは寧ろナオミを無倒するものがありました。

「初めまして、……」

と、慣ましやかな態度で云つて、相巧さうな、小さく圓く、パツチリとした眸をさせて、こころも胸を引くやうにして挨拶する、その身のこなしには、さすがに女優だけあつてナオミのやうなガサツな所がありません。

ナオミは爲る事成す事が活潑の域を通り越して、寵辱過ぎます。口の利き方も、けんししてゐて女としての優しみに缺け、ややともすると下品になります。要するに彼女は野生の眼で、此れに比べると綺羅子の方は、物の言ひやう、眼の使ひやう、聲のひねりやう、手の舉げやう、凡べてが洗練されてゐて、注意深く、紳士

質に、人工の極致を盡して研ぎをかけられた貴重品の感がありました。たとへば彼女が、テーブルに就いてカクテルのコップを握つた時の、掌から手首を見ると、實に細い。そのしつと

りと垂れてゐる袂の重みにも堪へぬほどに、しなしなと細い。きめのこまやかさと色つやのなまめかしさは、ナオミと執れ劣らずで、私は幾度卓上に置かれた四枚の掌を、代る代る打ち眺めたか知れませんが、しかし二人の顔の趣は大變に違ふ。ナオミがメリー・ピクフォードで、ヤンキー・ガールであるとするなら、彼女はどうしても伊太利か佛蘭西あたりの、しとやかなうちに仄かなる媚びを流した麗麗な美人です。同じ花でもナオミは野に咲き、綺羅子は室に咲いたものです。その引き締まつた圓顔の中にある小さな鼻は、まあ何と云ふ肉の薄い、透き徹るやうな綺麗な鼻でせう！ 餘程の名工が拵へた人形か何かでない限り、赤ん坊の鼻だつてもよやこんなに繊細ではありますまい。そして最後に氣がついたことは、ナオミが日頃自慢してゐる見事な歯並び、それと全く同じ物の眞珠の粒が、眞つ赤な瓜を割いたやうな綺羅子の可愛い口腔の中に、その種子のやうに生え揃つてゐたことです。

私が引け目を感じると同時に、ナオミも引け目を感じたに違ひありません。綺羅子が席へ交つてから、ナオミはさつきに微慢にも似ず、冷やかすどころか俄かにしんと黙つてしまつて、一

ナオミはいよいよ怪しに乗りながらいたつら好きの眼を、らして、

「ええ、飼つて居りますの、菊子さんは猫がお好き？」

「わたくし、動物は何でも好きでございますわ、犬でも猫でも——」

「さうして猫でも？」

「ええ、猫でも」

その問答があまり可笑しいので、熊谷は側方を向いて腹を抱へる、濱田はハンケチを口へあててタスクス笑ふ、綺羅子もそれと感づいたらしくニヤニヤしてゐる。が、菊子は素外人の好い女だと見えて、自分が嘲弄されてゐるとは気がつきません。

「ふん、あの女はよつほど馬鹿だよ、少し血の循りが悪いんぢやないかね。」

やがて八番目のワン・ステツプが始まつて、熊谷と菊子が踊場の方へ行つてしまふと、ナオミは綺羅子の居る前をも懼からず、口汚い調子で云ふのでした。

「ねえ、綺羅子さん、あなたさうお思ひにならなかつた？」

「まあ、何でございますか……」

「いいえ、あの方が猫みたいな感じがするので

成所で、本式に稽古したんだから。」

「まあ、あんなことを仰つしやつて——」

と、綺羅子はぼろろとほにかんだやうな素振りを見せて、袖向いてしまひます。

「でもほんたうにお上手よ、見わたしたところ、男で一番巧いのは濱さん、女では綺羅子さん……」

「まあ」

「何だい、ダンスの品評會かい？ 男で一番うめえのは何と云つても己ぢやあねえか——」

と、そこへ熊谷がピンク色の洋服を連れて割り込んで來ました。

此のピンク色は、熊谷の紹介に依ると青山の方に住んでゐる實業家のお嬢さんで、井上菊子と云ふのでした。もはや婚期を過ぎかけてゐる二十五六の歳頃で、——此れは後で聞いたのですが、二三年前或る所へ嫁いだのに、あまりダンスが好きなので近頃離婚になつたのださうです。——わざとさう云ふ夜會服の下に肩から腕を露にした装ひは、人方豊饒なる肉體美を賣り物にしてゐるのでせうが、さて斯うやつて向ひ合つた様子では、豊饒と云はんより脂ぎつた大年増と云ふ形でした。尤も實業家體格よりは此のくらゐな肉づきの方が、洋服には

しよ、だからあたし、わざと飾つて云つてやつたんですよ。」

「まあ」

「みんながあんなに笑つてゐるのに、気が付かないなんてよつほど馬鹿だわ。」

綺羅子は半ば呆れたやうに、半ば蔑むやうな眼つきでナオミの顔を見ながら、何處までも「まあ」の一點張りでした。

十一

「さあ、讓治さん、ワン・ステツプよ、踊つて上げるから入らつしやい。」

と、それから私はナオミに云はれて、やつと彼女とダンスをする光榮を有しました。

私にしたつて、きまりが悪いとは云ふものの、日頃の稽古を實地に試すのは此の際でもあり、殊に相手可愛いナオミであつてみれば、決して嬉しくないことはありません。よしんば物笑ひの種になるほど下手糞だつたとしたところでも、その下手糞は却つてナオミを引き立てるところになるのですから、寧ろ私は本望なのです。それから又、私には妙な虚榮心もありました。と云ふのは、「あれがあんな女の亭主だと見える」と、評判されて見たいことです。云ひかへれば

似合ふ譯ですけれど、何を云ふにも困つたのはその顔だちです。西洋人形へ京人形の首をつけたやうな、洋服とは甚だ縁の遠い目鼻立ち、——それもそのままにして置けばいいのに、成るべく縁を近くしようと骨を折つて、彼方此方へ餘計な手入れをして、折角の器量をダイナシにしてしまつてゐる。見ると成る程、本物の眉毛は鉢巻の下に隠されてゐるに違ひなく、その眼の上に引いてあるのは明かに作り物なのです。それから眼の縁の青い隈取り、頬紅、入れぼくろ、唇の線、鼻筋の線、と、殆んど顔のあらゆる部分が不自然に作つてあります。

「まあ、あんたどう思ふ？」

「ああ、そんなことはありませんわ。ねえ濱さん、あんたどう思ふ？」

「そりや巧い筈ですよ、綺羅子さんののは女優養成所

「まあ、あんなことを仰つしやつて——」

と、綺羅子はぼろろとほにかんだやうな素振りを見せて、袖向いてしまひます。

「でもほんたうにお上手よ、見わたしたところ、男で一番巧いのは濱さん、女では綺羅子さん……」

「まあ」

「何だい、ダンスの品評會かい？ 男で一番うめえのは何と云つても己ぢやあねえか——」

と、そこへ熊谷がピンク色の洋服を連れて割り込んで來ました。

此のピンク色は、熊谷の紹介に依ると青山の方に住んでゐる實業家のお嬢さんで、井上菊子と云ふのでした。もはや婚期を過ぎかけてゐる二十五六の歳頃で、——此れは後で聞いたのですが、二三年前或る所へ嫁いだのに、あまりダンスが好きなので近頃離婚になつたのださうです。——わざとさう云ふ夜會服の下に肩から腕を露にした装ひは、人方豊饒なる肉體美を賣り物にしてゐるのでせうが、さて斯うやつて向ひ合つた様子では、豊饒と云はんより脂ぎつた大年増と云ふ形でした。尤も實業家體格よりは此のくらゐな肉づきの方が、洋服には

「ああ、あんなことを仰つしやつて——」

と、綺羅子はぼろろとほにかんだやうな素振りを見せて、袖向いてしまひます。

「でもほんたうにお上手よ、見わたしたところ、男で一番巧いのは濱さん、女では綺羅子さん……」

「まあ」

「何だい、ダンスの品評會かい？ 男で一番うめえのは何と云つても己ぢやあねえか——」

と、そこへ熊谷がピンク色の洋服を連れて割り込んで來ました。

此のピンク色は、熊谷の紹介に依ると青山の方に住んでゐる實業家のお嬢さんで、井上菊子と云ふのでした。もはや婚期を過ぎかけてゐる二十五六の歳頃で、——此れは後で聞いたのですが、二三年前或る所へ嫁いだのに、あまりダンスが好きなので近頃離婚になつたのださうです。——わざとさう云ふ夜會服の下に肩から腕を露にした装ひは、人方豊饒なる肉體美を賣り物にしてゐるのでせうが、さて斯うやつて向ひ合つた様子では、豊饒と云はんより脂ぎつた大年増と云ふ形でした。尤も實業家體格よりは此のくらゐな肉づきの方が、洋服には

ツカリしないちや駄目ぢやないの！」
 と、そこへ持つて来てナオミは始終耳元で叱
 言を云ひます。
 「ほら、ほら又すべつた！ そんなに急いで廻る
 からよ！ もつと静かに！ 静かにッたら！」
 が、さう云はれると私は一層のぼせ上りま
 す。おまけにその床は特に今夜のダンスのため
 に、うんと滑りをよくしてあるので、あの積古
 場の積りでうつつかりしてゐると、忽ちつるりと
 来るのです。
 「それそれ！ 肩を上げちやいけないでば！
 もつと此の肩を下げて！ 下げて！」
 さう云つてナオミは、私が一生懸命に握つ
 てゐる手を振りもぎつて、ときどきグイと、邪
 慥に肩を抑へつけます。
 「チョッ、そんなにぎゅつと手を握つてどうす
 るのよ！ まるであたしにしがみついてゐるぢや、
 此方が窮屈で仕様がないわよ！ ー、それ、それ
 又肩が！」
 此れでは何の事はない、全く彼女に怒鳴ら
 れるために踊つてゐるやうなものでしたが、そ
 のガミガミ云ふ言葉へが私の耳には這入ら
 ないくらゐでした。
 「讓治さん、あたしもう止めるわ。」

と、そのうちにナオミは腹を立てて、まだ人
 人は盛んにアンコールを浴びせてゐるのに、ど
 んどん私を置き去りにして席へ戻つてしまひ
 ました。
 「ああ、驚いた、まだまだとても讓治さんとは
 踊れやしないわ、少し内で積古なさいよ。」
 濱田と綺羅子がやつて来る、熊谷が来る、菊
 子が来る、テールアルの周囲は再び賑やかに
 りましたが、私はすつかり幻滅の悲哀に浸つ
 て、黙つてナオミの嘲弄的になるばかりでし
 た。
 「あははは、お前のやうに云つた日にやあ、氣
 の弱え者は尚更踊れやねえぢやねえか。まあ
 さう云はずに踊つてやんなよ。」
 私は此の、熊谷の言葉が又喉に觸りました。
 「踊つてやんな」とは何と云ふ言ひ草だ、己を
 何だと思つてゐるのだ？ 此の青二才が！
 「なあに、ナオミ君が云ふほど拙かありません
 よ、もつと下手なのがいくらも居るぢやありま
 せんか。」
 と濱田は云つて、
 「どうです、綺羅子さん、今度のフォックス・
 トロットに何合さんと踊つて上げたら？」
 「はあ、何卒……」

「ええ、……どうぞほんとに。」
 「いやあいいけません、とてもいけません、巧く
 なつてから願ひますよ。」
 「踊つて下さるつて云ふんだから、踊つて頂
 いたらいぢやないの。」
 と、ナオミはそれが、私に取つての身に能
 る面目でもあるかのやうに、おッ被せて云つ
 て、
 「讓治さんはあたしとばかり踊りたがるから
 いけないんだわ。さあ、フォックス・トロット
 が好まつたから行つてらつしやい、ダンスは他
 流試合がいいのよ。」
 Will you dance with me?
 その時さう云ふ聲が聞えて、つかつかとナオ
 ミの傍へやつて来たのは、さつき菊子と踊つて
 ゐた、すうとした體つき、女のやうなにか
 やけた顔へお白粉を塗つてゐる、歳の若い外
 人でした。さういふ外人は、身ががめ
 て、ニコニコ笑ひながら、大方お世辭でも云ふの
 でせうか、何か早口にべらべらとしやべります。
 そして厚かましい調子で「ブリースブリース」と
 云ふところだけが私に分ります。と、ナオミ
 も困つた顔つきをして、火の出るやうに眞つ赤
 になつて、その尊怒ることも出来ずに、ニヤニ
 ヤしてゐます。踊りたいには踊りたいのだが、
 何と云つたら最も妙曲に表はされるか、彼女
 の英語では難解の間に一と言も出て来ないので
 す。外人の方はナオミが笑ひ出したので、好
 意があると見て取つたらしく、「さあ」と云つて
 促すやうな素振りしながら、押しつけがま
 しく彼女の返辭を要求します。
 さう云つて彼女が不承不承に立ち上つたと
 き、その頬ッべたは一層激しく、燃え上るやう
 に紅くなりしました。
 「あははは、とうとう奴さん、あんなに威張つ
 てるたけれど、西洋人にかかつちやあ意氣地が
 ねえね。」
 と、熊谷がガラガラ笑ひました。
 「西洋人はぶらぶらしくつて困りますのよ。さ
 つきもわたくし、ほんとに弱つてしまひました
 わ。」
 さう云つたのは菊子でした。
 「では一つ願ひますかな。」
 私は綺羅子が持つてゐるので、否でも應
 てもさう云はなければならぬハメになりました。
 一體、今日に限つたことでありませぬけれど
 も、嚴格に云ふと私の眼にはナオミより外に
 女と云ふものは一人もありません。それは勿
 論、美人を見ればきれいだとは感じます。が、
 きれいであればきれいであるだけ、ただ遠くか
 ら手にも觸れずに、そうツと眺めてゐたいと思
 ふばかりでした。シュレムスカヤ夫人の場合は
 例外でしたが、あれにしたつて、私がああの時
 細腰した恍惚とした心持ちは、恐らく普通の
 情態ではなかつたでせう。一情態と云ふには
 餘りに神韻漂渺とした、捕捉し難い夢見心地だ
 つたでせう。それに相手は全然われわれとかけ
 離れた外人であり、ダンスの教師なのですか
 ら、日本人で、帝爵の女優で、おまけに眼もあ
 やな衣裳を纏つた綺羅子に比べれば氣が榮で
 した。
 然るに綺羅子は、意外なことに、踊つて見ると
 實に輕いものでした。體全體がふわりとして、

「ああ、驚いた、まだまだとても讓治さんとは
 踊れやしないわ、少し内で積古なさいよ。」
 濱田と綺羅子がやつて来る、熊谷が来る、菊
 子が来る、テールアルの周囲は再び賑やかに
 りましたが、私はすつかり幻滅の悲哀に浸つ
 て、黙つてナオミの嘲弄的になるばかりでし
 た。
 「あははは、お前のやうに云つた日にやあ、氣
 の弱え者は尚更踊れやねえぢやねえか。まあ
 さう云はずに踊つてやんなよ。」
 私は此の、熊谷の言葉が又喉に觸りました。
 「踊つてやんな」とは何と云ふ言ひ草だ、己を
 何だと思つてゐるのだ？ 此の青二才が！
 「なあに、ナオミ君が云ふほど拙かありません
 よ、もつと下手なのがいくらも居るぢやありま
 せんか。」
 と濱田は云つて、
 「どうです、綺羅子さん、今度のフォックス・
 トロットに何合さんと踊つて上げたら？」
 「はあ、何卒……」

「ええ、……どうぞほんとに。」
 「いやあいいけません、とてもいけません、巧く
 なつてから願ひますよ。」
 「踊つて下さるつて云ふんだから、踊つて頂
 いたらいぢやないの。」
 と、ナオミはそれが、私に取つての身に能
 る面目でもあるかのやうに、おッ被せて云つ
 て、
 「讓治さんはあたしとばかり踊りたがるから
 いけないんだわ。さあ、フォックス・トロット
 が好まつたから行つてらつしやい、ダンスは他
 流試合がいいのよ。」
 Will you dance with me?
 その時さう云ふ聲が聞えて、つかつかとナオ
 ミの傍へやつて来たのは、さつき菊子と踊つて
 ゐた、すうとした體つき、女のやうなにか
 やけた顔へお白粉を塗つてゐる、歳の若い外
 人でした。さういふ外人は、身ががめ
 て、ニコニコ笑ひながら、大方お世辭でも云ふの
 でせうか、何か早口にべらべらとしやべります。
 そして厚かましい調子で「ブリースブリース」と
 云ふところだけが私に分ります。と、ナオミ
 も困つた顔つきをして、火の出るやうに眞つ赤
 になつて、その尊怒ることも出来ずに、ニヤニ
 ヤしてゐます。踊りたいには踊りたいのだが、
 何と云つたら最も妙曲に表はされるか、彼女
 の英語では難解の間に一と言も出て来ないので
 す。外人の方はナオミが笑ひ出したので、好
 意があると見て取つたらしく、「さあ」と云つて
 促すやうな素振りしながら、押しつけがま
 しく彼女の返辭を要求します。
 さう云つて彼女が不承不承に立ち上つたと
 き、その頬ッべたは一層激しく、燃え上るやう
 に紅くなりしました。
 「あははは、とうとう奴さん、あんなに威張つ
 てるたけれど、西洋人にかかつちやあ意氣地が
 ねえね。」
 と、熊谷がガラガラ笑ひました。
 「西洋人はぶらぶらしくつて困りますのよ。さ
 つきもわたくし、ほんとに弱つてしまひました
 わ。」

「ええ、……どうぞほんとに。」
 「いやあいいけません、とてもいけません、巧く
 なつてから願ひますよ。」
 「踊つて下さるつて云ふんだから、踊つて頂
 いたらいぢやないの。」
 と、ナオミはそれが、私に取つての身に能
 る面目でもあるかのやうに、おッ被せて云つ
 て、
 「讓治さんはあたしとばかり踊りたがるから
 いけないんだわ。さあ、フォックス・トロット
 が好まつたから行つてらつしやい、ダンスは他
 流試合がいいのよ。」
 Will you dance with me?
 その時さう云ふ聲が聞えて、つかつかとナオ
 ミの傍へやつて来たのは、さつき菊子と踊つて
 ゐた、すうとした體つき、女のやうなにか
 やけた顔へお白粉を塗つてゐる、歳の若い外
 人でした。さういふ外人は、身ががめ
 て、ニコニコ笑ひながら、大方お世辭でも云ふの
 でせうか、何か早口にべらべらとしやべります。
 そして厚かましい調子で「ブリースブリース」と
 云ふところだけが私に分ります。と、ナオミ
 も困つた顔つきをして、火の出るやうに眞つ赤
 になつて、その尊怒ることも出来ずに、ニヤニ
 ヤしてゐます。踊りたいには踊りたいのだが、
 何と云つたら最も妙曲に表はされるか、彼女
 の英語では難解の間に一と言も出て来ないので
 す。外人の方はナオミが笑ひ出したので、好
 意があると見て取つたらしく、「さあ」と云つて
 促すやうな素振りしながら、押しつけがま
 しく彼女の返辭を要求します。
 さう云つて彼女が不承不承に立ち上つたと
 き、その頬ッべたは一層激しく、燃え上るやう
 に紅くなりしました。
 「あははは、とうとう奴さん、あんなに威張つ
 てるたけれど、西洋人にかかつちやあ意氣地が
 ねえね。」
 と、熊谷がガラガラ笑ひました。
 「西洋人はぶらぶらしくつて困りますのよ。さ
 つきもわたくし、ほんとに弱つてしまひました
 わ。」

「はあ」
「音楽がよくないと、折角踊つても何だか張り合ひがございせんわ。」

「気がついて見ると、綺羅子の唇はちやうど私のこめかみの下にあるのでした。此れが此の女の鼻だとみえて、さつき濱田としたやうに、その横顔は私の頬へ觸れてゐました。やんわりとした髪の毛の撫で心地、……そしてをりをり渡れて来るほのかな囁き、……長い間、馬のやうなナオミの蹄にかけられてゐた私には、それは想像したこともない「女らしさ」の極みでした。何だか斯う、其に刺された傷の痕を、親切な手でさすつて貰つてもゐるやうな、……」

「あたし、よつほど驚つてやらうと思つたんだけれど、西洋人は友達がないんだから、同情してやらないぢや可哀さうよ。」

「やがてテールへ戻つて来ると、ナオミがいささかしよげた形で、解してゐるのです。十六番のワルツが終つたのは彼れ此れ十一時半でしたらうか。まだ此のあとにエキストラが数番ある。おそくなつたら自動車で歸らうとナオミが云ふのを、やうやうなだめて最後の電車

ね。」

「どうだね、君、君が此の女を連れて歩いて、果して君の註文通り、世間はあつと驚いたかね？」

「と、私は自ら嘲るやうな心持ちで、自分の心にさう云はないでは居られませんでした。」「君、君、盲人蛇に怖ぢずとは君のことだよ。そりやあ成る程、君に取つては此の女は世界一の寶だらう。だがその寶を晴れの舞臺へ出したところはどなんだつたい！ 虚榮心と己惚れの集團！ 君は巧いことを云つたが、その集團の代表者は此の女ぢやあなかつたかね？ 自分獨りで偉がつて、無闇に他人の悪口を云つて、ハタで見てゐて一番鼻ツ摘まみだつたのは、一體君は誰だつたと思ふ？ 西洋人に淫蕩と間違へられて、両も簡単な英語一つがしやべれないで、ヘドモドしながら相手になつたのは、菊子嬢だけではなかつたやうだぜ。それに此の女の、あの亂暴な口の利き方は何と云ふぞまだ。假りにレディーを氣取つてゐながら、あの言ひ草は殆んど閉くに堪へないぢやないか、菊子嬢や綺羅子の方が遙かにたしなみがあるぢやないか。」

「此の不愉快な、悔恨と云はうか失望と」

「間に合ふやうに新橋へ歩いて行きました。熊谷や濱田も友達と一緒に、銀座通りをぞろぞろと繋がりながら其處まで私たちを送つて来ました。みんなの耳にはジャズ・バンドが未だに響いてゐるらしく、誰か一人が成るメロディを唄ひ出すと、男も女も直ぐその節に和して行きました。歌を知らない私には、彼等の器用さと、物憂えのよさと、その若々しい晴れやかな聲とが、ただ好ましく感ぜられるばかりでした。」

「ラ、ラ、ラララ」
と、ナオミは一向高い調子で、拍子を取つて歩いてゐました。

「濱さん、あなたは何かいい？ あたしキヤラペンが一番好きだわ。」

「おお、キヤラペン！」
と、菊子が頓狂な聲で云ひました。

「でもわたくし、——」
と、今度は綺羅子が引き取つて、

「ホイスバリングも悪くはないと存じますわ。大へんあれは踊りよくつて、——」

「蝶々さんがいいぢやないか、僕はあれが一番好きだよ。」

「云はうか、ちよつと何とも形容の出来ない厭な氣持ちは、その晩家へ歸るまで私の胸にこびり着いてゐました。」

「電車の中でも、私はわざと反對の側に腰かけて、自分の前に居るナオミと云ふものを、一度つくづくと眺める氣になりました。全體己は此の女の何處がよくつて、斯うまで惚れてゐるのだらう？ あの鼻かしら？ あの眼かしら？ と、さう云ふ風に數へ立てると、不思議なことに、いつもあんなに私に對して魅力のある顔が、今夜は實に詰まらなく、下らないものに思へるのです。すると私の記憶の底には、自分が始めて此の女に會つた時分、——あのダイヤモンド・カフェの頃のナオミの姿がぼんやり浮かんで來るのです。が、今に比べるとあの時分はずつと好かつた。無邪氣で、あどけなく、内氣な、可愛なところがあつて、こんなガサツな、生意氣な女とは似ても似つかないものだつた。己はあの頃のナオミに惚れたので、その情勢が今日まで續いて來たのだけれど、考へて見れば知らない間に、此の女は随分たまらないイヤな奴になつてゐるのだ。あの精巧な女は私でござい」と云はんばかりに、チンと濟まして腹かけてゐる恰好はどう

「そして濱田は「蝶々さん」を早速口笛で吹くのでした。改札口で彼等に別れて、冬の夜風が吹き通すプラットホームに立ちながら、電車を持つてゐる間、私とナオミとはあんまり口を利きませんでした。飲樂のあとの物淋しさ、とても云ふやうな心持ちが私の胸を支離してゐました。尤もナオミはそんなものを感じなかつたに違ひなく、

「今夜は面白かつたわね、又近いうちに行きませうよ。」
と、話しかけたりましたけれど、私は興奮が止まらなかつた。口のうちで答へただけでした。

「何だ？ 此れがダンスと云ふものなのか？ 親を欺き、未婚嬢を苦しめ、さんざ泣いたり笑つたりした揚句の果てに、己が味はつた舞踏會と云ふものは、こんな馬鹿げたものだつたのか？ 奴等はみんな虚榮心とおべつかと己惚れと、氣障の集團ぢやないか？」

「が、そんなら己は何の爲めに叫び出したのだ？ ナオミを奴等へ見せびらかすため？——さうだとすれば己もやつぱり虚榮心のかたまりなのだ。ところで己がそれほど遂に自慢して居た寶

だ、天下の美人は私ですといふやうな、「私ほどハイカラな、西洋人臭い女は居なからう」と云ひたげな、あの傲然とした面つきはどうだ。あれで英語の「え」の字もしやべれず、パツシヴ・グオイスとアクティヴ・グオイスの區別さへも分らないとは、誰も知るまいが己だけはちやんと知つてゐるのだ。……」

「私はこつそり頭の中で、こんな悪罵を浴びせて見ました。彼女は少し反り身になつて、顔を何向けにしてゐるので、ちやうど私の座席からは、彼女が最も西洋人臭さを誇つてゐるところの獅子ツ鼻の鼻の孔が、黒黒と覗けました。そして、その洞穴の左右には分厚い小鼻の肉がありました。思へば私は、此の鼻の孔と鼻の肉が、朝夕深い馴染みです。毎晩毎晩、私が此の女を抱いてやる時、常に斯う云ふ角度から此の洞穴を覗き込み、つい此の間もしたやうにその澳を飲んでやり、小鼻の周りを愛撫してやり、又或る時は自分の鼻と此の鼻とを、換のやうに喰ひ違はせたりするので、つまり此の鼻は、——此の女の顔のまん中に附着してゐる小さな肉の塊は、まるで私の體の一部も同じことで、決して他人の物のやうには思へません。が、さう云ふ感じを以て見ると、一

層それが憎らしく、汚らしくなつて来るのでした。よく、腹が減つた時などにまづい物を夢中でムシヤムシヤ喰ふことがある、だんだん腹が膨れて来るに随つて、急に今迄詰め込んだ物のまづき加減に気がつくや否や、一度に胸がムカムカし出して吐きさうになる、――まあ云つてみれば、それに似通つた心地でせうが、今夜も相變らず此の鼻を相手に、顔突き合はせて寝ることを想像すると、もう此の御馳走は澤山だ、と云ひたいやうな、何だか腹がモタレて来てゲンナリしたやうになるのです。

「此れもやつぱり親の罰だ。親を欺して面白い目を見ようとしたつて、ロクな事はありやしないんだ。」
と、私はそんな風に考へました。
しかし讀者よ、此れで私がすつかりナオミに飽きが来たのだと、推測されては困るのです。いや、私自身も今迄こんな覚えはないので、一時はさうかと思つたくらいでしたけれど、さて大森の家へ歸つて、二人きりになつて見ると、電車の中あの「満腹」の心持ちは次第に何處かへすつ飛んでしまつて、再びナオミのあらゆる部分も、眼でも鼻でも手でも足でも、鼻に充ちて来るやうになり、そしてそれらの一つ

十二

一つが、私に取つて味はひ盡せぬ無上の物になるのです。
私はその後、始終ナオミとダンスに行くやうになりましたが、その度毎に彼女の缺點が鼻につくので、歸り途にはきつと厭な気分になる。が、いつでもそれが長続きしたことはなく、彼女に對する愛憎の念は一と晩のうちに幾回でも、猫の眼のやうに變りました。

閑散であつた大森の家には濱田や、熊谷や、彼等の友達や、主として舞踏會で近づくになつた男たちが、追ひ追ひ頻りに出入りするやうになりました。
やつて来るのは大概夕方、私が會社から戻る時分で、それからみんなで音響機をかけてダンスをやります。ナオミが客好きであるところへ、氣兼ねをするやうな泰公人や年寄は居ず、おまけに此處のアトリエはダンスに持つて來いでしたから、彼等は時の移るのを忘れて遊んで行きます。始めのうちはいくらか遠慮して、飯時になれば歸ると云つたものですが、
「ちよいと！ どうして歸るのよ！ 御飯をたべていらつしやいよ。」

と、ナオミが無理に引き止めるので、しまひにはもう、來れば必ず「大森亭」の洋食を取つて、晩飯の馳走をするのが例のやうになりました。じめじめとした入梅の季節の、或る晩のことでした。濱田と熊谷が遊びに來て、十一時過ぎまでしゃべつてゐましたが、外は非常な吹き降りになり、雨がざあざあガラス窓へ打ちつけて来るので、二人とも歸らう歸らうと云ひながら、暫く躊躇してゐると、
「まあ、大變なお天気だ、此れぢやあとも歸れないから、今夜は泊まつていらつしやいよ。」
と、ナオミがふいとさう云ひました。
「ねえ、いいぢやないの、泊まつたつて。――まあ、俺は無論いいんだらう？」
「うん、已アどうでもいいんだけれど、……濱田が歸るなら已も歸らう。」
「濱さんだつて構やしないわよ、ねえ、濱さん」
さう云つてナオミは私の顔色を窺つて、
「いいのよ、濱さん、ちつとも遠慮することは無いのよ、多だと布圍が足りないけれど、今なら四人ぐらゐりかななるわ。それに明日は日曜だから、談治さんも内にゐるし、いくら寝坊してもいいことよ。」
「どうです、泊まつて行きませんか、全く此の

雨ぢや大變だから。」
と、私も仕方なしに勧めました。
「ね、さうなさいよ、そして明日は又何かして遊ばうぢやないの、さう、さう、夕方から花月園へ行つてもいいわ。」
結局二人は泊まることになりましたが、

「ところで蚊帳はどうしようね、」
と、私が云ふと、
「蚊帳は一つしかないんだから、みんな一緒に寝ればいいわよ。その方が面白いぢやないの。」
と、そんな事がひどくナオミには珍らしいのか、修學旅行にでも行つたやうに、きやつきやつと喜びながら云ふのでした。

此れは私には意外でした。蚊帳は二人に提供して、私とナオミとは蚊やリ線香でも焚きながら、アトリエのソファで夜を明かしても済むことだと考へてゐたので、四人が一つ部屋の中へごろごろかたまつて寝ようなどは、思ひ設けても居ませんでした。が、ナオミがその氣になつてゐるし、二人に對してイヤな顔をするでもないし、……と、俄の通り私がぐづぐづしてゐるうち、彼女はさつさと締めてしまつて、
「さあ、布圍を敷くから三人とも手傳つて頂

と、先に立つて命令しながら、屋根裏の四疊半へ上つて行きました。
布圍の順序はどう云ふ風にするのかと思ふと、何分蚊帳が小さいので、四人が一列に枕を並べる譯には行かない。それで三人が並行になり、一人がそれと直角になる。
「ね、かうしたらいいぢやないの。男の人が三人そこへお並びなさいよ、あたしが此方へ獨りで寝るわ。」
と、ナオミが云ひます。

「やあ、えれえ事になつちやつたな。」
蚊帳が吊れると、熊谷は中を透かして見ながらさう云ひました。
「此れぢやあどうしても豚小屋だぜ。みんなごちやごちやになつちまふぜ。」
「ごちやごちやだつていいぢやないか、夢澤なことを云ふもんぢやないわ。」
「ふん！ 人様の家に御厄介になりながらか。」
「當り前さ、どうせ今夜はほんとに寝られやしないんだから。」
「已あ寝るよ、グウグウ鼻をかいて寝るよ。」
どしんと熊谷は地響きを立てて、着物のまま眞つ先にもぐり込みました。

「さあ、まあさうだな。」

「寝ようつたつて寝かしやしないわよ。――濱さん、まあちゃんを寝かしや駄目よ、寝さうになつたら揉みつけてやるのよ。」
「ああ、寝かしや、とても此れぢやあ寝られやしないよ。――」
まん中の布圍にふん反り返つて膝を立ててゐる熊谷の右側に、洋服の濱田はズボンと下着のシャツ一枚で、瘦せた體を仰向けに、べこんと腹を四ましてゐました。そして解かした戸外の雨を聞き流してでもゐるやうに、片手を額の上に載せて、片手でばたばたと扇扇を使つてゐる音が、一層暑苦しさうでした。

「それに何だよ、僕ア女の人があると、どうもおち寝られないやうな氣がするよ。」
「あたしは男よ、女ぢやないわよ、濱さんだつて女のやうな氣がしないつて云つたぢやないか。」
蚊帳の外、うす暗い所で、ぱつと寝間着に着換へる時のナオミの白い背中が見えました。
「そりや、云つたことは云つたけれど、……」
「……やつぱり傍へ寝られると、女のやうな氣がするのかい？」
「ああ、まあさうだな。」

「ああ、まあさうだな。」

「ぢや、ま、ぢやんは？」
「已ア平氣さ、お前なんか女の數に入れちゃあぬええさ。」
「女でなけりや何なのよ？」
「うむ、まあ前は海豹だな。」
「あははは、海豹と狼と執方がいい？」
「執方も已ア御免だよ。」

と、熊谷はわざと眠さうな聲を出しました。私は熊谷の左側に寝ころびながら、三人がしきりにべちやくちや云ふのを黙って聞いておりましたが、ナオミが此處へ這入つて来ると、濱田の方が、私の方か、いづれ執方かへ頭を向けなければならぬのだが、と、内内それを氣にしてみました。と云ふのは、ナオミの枕が執方つかずに、暖味な位置に放り出してあつたからです。何でもさつき布團を賣く時に、彼女はわざとさう云ふ風に、あとでどうでもなるやうに置いたのぢやないかと思はれました。と、ナオミは純色の縮みのガウンに着換へてしまふと、やがて這入つて来て御つ立ちながら、
「電氣を消す？」
と、さう云ひました。
「ああ、消して貰ひてえ、……」
さう云ふ熊谷の聲がしました。

「ぢやあ消すわよ、……」
「あ、痛え！」
と、熊谷が云つたとたん、いきなりナオミはその胸の上に飛び上つて、男の體を踏み臺にして、蚊帳の中からバチリとスキツチを切りました。
暗くはなつたが、表の電信柱にある街燈の灯先が窓ガラスに映つてゐるので、部屋の中はお互ひの顔や着物が見分けられるほど、ちやちやと明るく、ナオミが熊谷の首を踏んで、自分の布團へ飛び降りた刹那、寝間着の裾のさつとはだけた風の勢が私の鼻を襲りました。
「まアぢやん、一服煙草を吸はない？」
ナオミは直ぐに寝ようとはしないで、男のやうに眼を開いて枕の上にとつかと腰かけ、上から熊谷を見おろしながら云ふのでした。
「よう！ 此方をお向きよ！」
「畜生、どうしても己を寝かさねえ算段だな、」
「うふふふ、よう！ 此方をお向きよ！ 向かなけりやいぢめてやるよ。」
「あ、いてえ！ よせ、止せ、止せツたら！ 生き物だから少し軋重にしてくんねえ、踏み臺にされたり蹴られたりしちや、いくら頑丈でも溜らぬえや。」

「うふふふ」
私は蚊帳の天井を見てゐるのでハツキリ分りませんでした。ナオミは足の爪先で男の頭をグイグイ押したもので、
「仕方がねえな」
と云ひながら、やがて熊谷は寝返りを打ちました。
「まアぢやん、起きたのかい？」
さう云ふ濱田の聲がしました。
「ああ、起きちやつたよ、盛んに迫害されるんでね。」
「濱さん、あなたも此方をお向きよ、でなけりや迫害してやるわよ。」
濱田はつづいて寝返りを打つて、腹這ひになつたやうでした。
同時に熊谷がガチャガチャと袂の中からマツチを捜り出す音がしました。そしてマツチを擦つたので、ぼろと私の眼の上の明りが来ました。
「濱治さん、あなたも此方をお向いたらどう？」
「う、うん、……」
「どうしたの、眠いの？」
「う、うん、……少しとろとろしかけた所だ、」

……
「うふふふ、巧く云つてらア、わざと寝たふりをしてるんぢやないの、ねえ、さうぢやない？ 氣が揉めやしない？」
私は鬮星を指されたので、眼をつぶつてはみましたけれど、顔が眞つ赤になつたやうな氣がしました。
「あたし大丈夫よ、ただ斯うやつて騒いでるだけよ、だから安心して寝てもいいわ、……それともほんとに氣が揉めるなら、ちよつと此方を見て見ない？ 何も瘦せ我慢をしないでつて、」
「……」

「やつぱり迫害されたいんぢやないかね、」
さう云つたのは熊谷で、煙草に火をつけて、すばつと口を鳴らしながら吸ひ出しました。
「いやよ！ こんな人を迫害したつて仕様がないわよ、毎日してやつてゐるんだもの。」
「御馳走様だなア」
と濱田の云つたのが、心からさう云つたのでなく、私に對する一種のお世辭のやうにしか取れませんでした。
「ねえ、濱治さん、——だけれど、迫害されたんなら上げて上げようか。」
「いや、深山だよ、」

「深山ならあたしの方をお向きなさいよ、そんな、一人だけ仲間外れをしてゐるなんて妙ぢやないの。」
私はぐるりと向き直つて、枕の上へ頭を載せました。と、立て膝をして兩脛を八の字に踏ん張つてゐるナオミの足の、一方は濱田の鼻先に、一方は私の鼻先にあるのです。そして熊谷はと云ふと、その八の字の間へ首を突つ込んで、無慈悲と敷島を吹かしてゐます。
「どう？ 濱治さん、此の光景は？」
「うん、……」
「うんとは何よ、」
「呆れたもんだね、まさに海豹に違ひないね。」
「ええ、海豹よ、今海豹が米の上で休んでるところよ。前に三匹寝てゐるのも、これも男の海豹よ。」
低く、密雲の閉ざすやうに、頭の上に垂れ下がつてゐる萌黃の蚊帳、……夜目にも黒く、長長と解いた髪の毛の中の白い顔、……しどけないガウンの、ところどころに露はれてゐる胸や、腕や、膝らツ脛や、……此の恰好は、ナオミがいつも此れで私を誘惑するポーズの一つで、かう云ふ姿を見せられると私は恰も餌を投げられた眼のやうにさせられるのです。私は

「うふふふ」
明かに、ナオミが例のそそのかすやうな表情をして、意地の悪い眼で微笑しながら、ちよつと此方を見おろしてゐるのを、うす暗い中で感じました。
「呆れたなんて誰なのよ。あたしにガウンを着られるとたまらないツて云ふ癖に、今夜はみんなが居るもんだから我慢してゐるよ。ねえ、濱治さん、中つたでせう。」
「馬鹿を云ふなよ、」
「うふふふ、そんなに威張るなら、降参させてやらうか。」
「おい、おい、ちと穏やかでねえね、さう云ふ話は明日の晩に願ひてえね。」
「賛成！」
と、濱田も熊谷の尾に附いて云つて、
「今夜はみんな公平にして貰ひたいなア。」
「だから公平にしてるぢやないの。恨みツこがないやうに、濱さんの方へは此方の足を出してゐるし、濱治さんの方へは此方を出してゐるし、——」
「さうして已はどうなんだい？」
「まアぢやんは一番得してるわよ、一番あたしの傍にゐて、こんな所へ首を突ン出してるぢやないの。」

「大いに光榮の至りだね、」
 「さうよ、あんたが一番優待よ、」
 「だがお前、まさかさうして」と晩ちゆう起き
 てる譯ぢやねえだらう。一體寝る時はどうなる
 んだい？」
 「さあ、どうしようか、執方へ頭を向けようか。
 濱さんによろしく、濱治さんによろしくか。」
 「そんな頭は執方へ向けたつて、格別問題にな
 りやねえよ。」
 「いや、さうでないよ、まあ、あんはまん中だ
 からいいが、僕に取つちや問題だよ。」
 「さう？ 濱さん、ぢや、濱さんの方を頭にな
 しようか。」
 「だからそいつが問題なんだよ、此方へ頭を
 向けられても心配だし、さうかと云つて河合さ
 んの方へ向けられても、やつぱり何だか気が揉
 めるし、……」
 「それに、此の女は寝像が悪いぜ、一
 と、熊谷が又口を挟んで、
 用心しないと、足を向けられた方の奴は夜中
 に眠ッ飛ばされるかも知れんぜ。」
 「どうですか河合さん、ほんとに寝像が悪いで
 すか。」
 「ええ、悪いですよ、それも一と通りぢやあり
 ます。」

「ナオミちゃん……」
 と、私はみんなの静かな寝息をうかがひな
 がら、口のうちにさう云つて、私の布団の下に
 ある彼女の足を撫でてみました。ああ此の足、
 此のすやすやと眠つてゐる眞つ白な美しい足、
 此れはたしかに己の物だ。己は此の足を、彼女
 が小娘の時分から、毎晩毎晩お湯へ入れてシ
 ヤボンで洗つてやつたのだ。そしてまあ此の皮
 膚の柔かさは、——十五の歳から彼女の體は、
 ずんずん伸びて行つたけれど、此の足だけはま
 らで發達しないかのやうに依然として小さく可愛
 い。さうだ、此の拇趾もあの時の通りだ。小
 趾の形も、踵の圓味も、ふくれた甲の肉の盛
 り上りも、凡てあの時の通りぢやないか……
 私は覺えず、その足の甲へそらつと自分の唇
 をつけずには居られませんでした。
 夜が明けてから、私は再びうとうとした
 やうでしたが、やがてどつと云ふ笑ひ聲に眼が
 さめて見ると、ナオミが私の鼻の孔へかんじ
 んよりを突つ込んでゐました。
 「どうした？ 濱治さん、眼がさめた？」
 「ああ、もう何時だね。」

「もう十時半よ、だけど起きたつて仕様がな
 いらんが鳴るまで寝てゐようぢやないの。」
 雨が止んで、日曜の空は青々と晴れてしま
 したが、部屋の中にはまだ人いきれが残つてゐま
 した。

十三

當時、私のこんなふしだらな有様は、會社
 の者は誰も知らない筈でした。家に居る時と會
 社に居る時と、私の生活は全然と二分されて
 ました。勿論事務を執つてゐる際でも、頭の中
 にはナオミの姿が始終チラついてゐました
 けれど、別段それが仕事の邪魔になるほどでは
 なく、まして他人は気がつく譯もありません。
 で、同僚の眼には私は矢張り君子に見えてゐる
 のだらうと、さう思ひ込んでゐたことでした。
 ところが或る日——まだ梅雨が明けきれない
 頃で、鬱陶しい晩のことでしたが、同僚の一人の
 波川と云ふ技師が、今度會社から洋行を命ぜら
 れ、その別會が築地の煉炭軒で催されたこ
 とがありました。私は例に依つて義理一遍に
 出席したに過ぎませんから、會食が済み、デ
 ザートコースの挨拶が終り、みんながぞろぞろ
 食堂から喫煙室へ流れ込んで、食後のリキウ

「おい、濱田、」
 「ええ？」
 「寢惚けて足の裏を舐めたつてね、」
 さう云つて熊谷がゲラゲラ笑ひました。
 「足を舐めたつていいぢやないの。濱治さんな
 んか始終だわよ、狐より足の方が可愛いくら
 だつて云ふんだもの。」
 「そいつあ一種の拜物教だね、」
 「だつてさうなのよ、ねえ、濱治さん、さうぢ
 やなかつた？ あなたは實は足の方が好きなん
 だわね？」
 それからナオミは、公平にしなければ悪い。
 と云つて、私の方へ足を向けたり、濱田の方へ
 向け變へたり、五分おきぐらゐに、何度も何度
 も布団の上を被方此方へ寝そべりました。
 「さあ、今度は濱さんが足の番！」
 と云つて、寝ながら體をぶん廻しのやうに
 ぐるぐる廻したり、廻す拍子に兩脚を上げて
 蚊帳の天井を蹴つ飛ばしたり、向うの端から此
 方の端へほんとと枕を投げつけたりする。その海
 豹の活躍ぶりが激しいので、それでなくても
 布団の半分はみ出してゐる蚊帳の裾がばつぱつ
 とめくられて、蚊が幾匹も舞ひ込んで来る。「此奴

あいつねえ、大變な奴だ。」と、熊谷がムツクリ
 起き上つて、蚊退治を始める。誰かが蚊帳を踏
 んづけて、釣り手を切つて落してしまふ。その
 落ちた中でナオミが一層ばたばたと暴れる。釣
 り手を繕つて、蚊帳を吊り直すのに又長いこ
 と時間がかかる。そんな騒ぎで、やつといくら
 か落ち着いたやうな気がしたのは、東の方が明
 るみかけた時分でした。
 雨の音、風の響き、隣りに寝てゐる熊谷の鼾、
 ……私はそれらが耳について、ついとろとろ
 としたかと思ふと、ややともすれば眼がさめま
 した。一體此の部屋は二人で寝てさへ狭苦しい
 上に、ナオミの肌や着物にこびりついてゐる汗
 香と汗の匂ひとが、醜態したやうに籠つてゐ
 る。そこへ今夜は犬の男が二人も餘計殖えたの
 ですから、尚更たまらない人いきれがして、密閉
 された壁の中は、何だか地震でもありさうな、息
 の詰まるやうな蒸し暑さでした。ときどき熊谷
 が寢返りを打つと、べつと汗ばんだ手だの膝
 だのが互ひにぬるぬると觸りました。ナオミは
 と見ると、枕は私の方にありながら、その枕
 へ片足を載せ、一方の膝を立てて、その足の甲
 を私の布団へ突つ込み、首を濱田の方へかしげ
 て、兩手は一杯にひらいたまま、さすがのお轉

ルを飲みながらガガヤ雑談をし始めた時分、
 もう歸つても好からうと思つて立ち上ると、
 「おい、河合君、まあかけ給へ、」
 と、ニヤニヤ笑ひながら呼び止めたのは、S
 と云ふ男でした。Sはほんのり微醜を帯びて、
 TやKやHなど一つソオファを占領して、そ
 のまん中へ私を無理に取り込めようとするの
 でした。
 「まあ、さう逃げんでもいいぢやないか、此れ
 から何處かへお出かけかね、此の雨の降るのに。」
 と、Sはさう云つて、執方つかずに街つ立つ
 たままの私の顔を見上げながら、もう一度ニヤ
 ニヤ笑ひました。
 「いや、さう云ふ譯ぢやないけれど、……」
 「ぢや、眞つ直ぐにお歸りかね。」
 さう云つたのはHでした。
 「ああ、済まないけれど、失敬させてくれ給へ。
 僕の所は大森だから、こんな天気には路が悪
 くつて、早く歸らないと俵がなくなつちまふ
 んだよ。」
 「あははは、巧く云つてるぜ。」
 と、今度はTが云ひました。
 「おい、河合君、種はすつかり上つてるんだぜ。」

「何が?」
 「種」とはどう云ふ意味なのか、Tの言葉を判じかねて、私は少し狼狽しながら聞き返しました。
 「驚いたなアどうも。君は君子とばかり思つてゐたのになア...」
 と、次ぎにはKが無闇と感心したやうに首をひねつて、
 「河合君がダンスをするに云ふに至つちやあ、何しろ時勢は進歩したもんだよ。」
 「おい、河合君。」
 と、Sはあたりを遠慮しながら、私の耳に口をつけるやうにしました。
 「その、君が連れて歩いてゐる素晴らしい美人と云ふのは何者かね? 一週僕等にも紹介し給へ。」
 「いや、紹介するやうな女ぢやないよ。」
 「だつて、帝劇の女優だつて云ふ話ぢやないか...え、さうぢやないのか。活動の女優だと云ふ噂もあるし、混血兒だと云ふ説もあるんだが、その女の鼻を云ひ給へ。云はなけりや露さんよ。」
 私が明かに不愉快な顔をして、口を吃らしてゐるのも気が付かず、Sは夢中で膝を乗りあつたのかい?」
 「いや、そりやどうか知らないが、友達のうちに二三人はあるさうだよ。」
 「止せ、止せ、河合が心配するから。——ほら、ほら、あんな顔をしてるぜ。」
 Tがさう云ふと、みんな一度に私を見上げて笑ひました。
 「なあに、ちつとぐらゐ心配させたつて構はんさ。われわれに内蔵でそんな美人を専有しようとするなんて、その心がけが怪しからんよ。」
 「あはははは、どうだ河合君、君子もたまにはイキな心配をするのもよからう?」
 「あははははは」
 もはや私は、怒るところではありませんでした。誰が何と云つたのかまるで聞えませんでした。ただどつと云ふ笑ひ聲が、兩方の耳にががんと響いただけでした。唯、私の當惑は、どうして此の場を切り抜けたらいいか、泣いたらいいのか、笑つたらいいのか、——が、うつかり何か云つたりすると、尙更嘲弄されやしなやかと云ふことでした。

「出して、ムキになつて尋ねるのでした。」
 「え、君、その女はダンスでなけりやあ呼べないのか?」
 私はもう少しで「馬鹿ッ」と云つたかも知れませんでした。まだ會社では恐らく誰も気がつくまいと思つてゐたのに、豈に聞らんや喚きつけてゐたばかりでなく、道樂者の名を博してゐるSの口吻から察すると、奴等は私たちを夫婦であるとは信じないで、ナオミを何處へでも呼べる種類の女のやうに考へてゐるのです。
 「馬鹿ッ、人の細君を掴まへて『呼べるか』とは何だ! 失敬な事を云ひ給ふな」
 此の堪へ難い侮辱に對して、私は當然、血相を變へて斯う怒鳴りつけるところでした。いや、たしかにほんの瞬間、私はさつと顔色を變へました。
 「おい、河合河合、教へるよ、ほんとに!」
 と、奴等は私の人の好いのを見込んでゐるので、何處までもぶらぶらしく、Hがさう云つてKの方を振り向きながら、
 「なあ、K、君は何處から聞いたんだつて云つたつてな。——」
 「僕ア慶應の學生から聞いたよ。」
 「ふん、何だつて?」
 ...ナオミが非常な發展家だ。學生たちを荒らし廻る? ...そんな事が有り得るだらうか? 有り得る、たしかに有り得る、近頃のナオミの様子を見れば、さう思はないのが不思議なくらゐる。實は己だつて内氣にしてはゐただけれど、彼女を取り巻く男の友達が多過ぎて、知つて安心してゐたのだ。ナオミは子供だ、そして活潑だ。「あたし男よ」と彼女自身が云つてゐる通りだ。だから男を大勢集めて、無邪気に、賑やかに、馬鹿ッ騒ぎをするのが好きなだけなんだ。假に彼女に下心があつたとしたつて、

「僕の親戚の奴なんぞね、ダンス氣遣ひだもんだから始終ダンス場へ出入りするんで、その美人を知つてゐるんだ。」
 「おい、名前は何て云ふんだ?」
 と、Tが横合から首を出しました。
 「名前は...ええと、...妙な名だつたよ、...ナオミ、...ナオミと云ふんぢやなかつたかな。」
 「ナオミ?...ぢやあやつぱり混血兒かな。」
 さう云つてSは、冷やかすやうに私の顔を覗いて、
 「混血兒だとすると、女優ぢやないな。」
 「何でも偉い發展家ださうだぜ、その女は。盛んに慶應の學生なんかを荒らし廻るんださうだから。」
 私は變な、痲痺のやうな薄笑ひを浮かべたまま、口もとをびくびく顫はせてゐるだけでしたが、Kの話が此處まで来ると、その薄笑ひは俄かに凍りついたやうに、頬ツツたの上で動かなかくなり、眼玉がグッと眼窩の奥へ凹んだやうな氣がしました。
 「ふん、ふん、そいつお顔もしいや!」
 と、Sはすつかり恐悅しながら云ふのでした。
 「君の親戚の學生と云ふのも、其の女と何か

「僕が...」
 「種」とはどう云ふ意味なのか、Tの言葉を判じかねて、私は少し狼狽しながら聞き返しました。
 「驚いたなアどうも。君は君子とばかり思つてゐたのになア...」
 と、次ぎにはKが無闇と感心したやうに首をひねつて、
 「河合君がダンスをするに云ふに至つちやあ、何しろ時勢は進歩したもんだよ。」
 「おい、河合君。」
 と、Sはあたりを遠慮しながら、私の耳に口をつけるやうにしました。
 「その、君が連れて歩いてゐる素晴らしい美人と云ふのは何者かね? 一週僕等にも紹介し給へ。」
 「いや、紹介するやうな女ぢやないよ。」
 「だつて、帝劇の女優だつて云ふ話ぢやないか...え、さうぢやないのか。活動の女優だと云ふ噂もあるし、混血兒だと云ふ説もあるんだが、その女の鼻を云ひ給へ。云はなけりや露さんよ。」
 私が明かに不愉快な顔をして、口を吃らしてゐるのも気が付かず、Sは夢中で膝を乗りあつたのかい?」
 「いや、そりやどうか知らないが、友達のうちに二三人はあるさうだよ。」
 「止せ、止せ、河合が心配するから。——ほら、ほら、あんな顔をしてるぜ。」
 Tがさう云ふと、みんな一度に私を見上げて笑ひました。
 「なあに、ちつとぐらゐ心配させたつて構はんさ。われわれに内蔵でそんな美人を専有しようとするなんて、その心がけが怪しからんよ。」
 「あはははは、どうだ河合君、君子もたまにはイキな心配をするのもよからう?」
 「あははははは」
 もはや私は、怒るところではありませんでした。誰が何と云つたのかまるで聞えませんでした。ただどつと云ふ笑ひ聲が、兩方の耳にががんと響いただけでした。唯、私の當惑は、どうして此の場を切り抜けたらいいか、泣いたらいいのか、笑つたらいいのか、——が、うつかり何か云つたりすると、尙更嘲弄されやしなやかと云ふことでした。

「出して、ムキになつて尋ねるのでした。」
 「え、君、その女はダンスでなけりやあ呼べないのか?」
 私はもう少しで「馬鹿ッ」と云つたかも知れませんでした。まだ會社では恐らく誰も気がつくまいと思つてゐたのに、豈に聞らんや喚きつけてゐたばかりでなく、道樂者の名を博してゐるSの口吻から察すると、奴等は私たちを夫婦であるとは信じないで、ナオミを何處へでも呼べる種類の女のやうに考へてゐるのです。
 「馬鹿ッ、人の細君を掴まへて『呼べるか』とは何だ! 失敬な事を云ひ給ふな」
 此の堪へ難い侮辱に對して、私は當然、血相を變へて斯う怒鳴りつけるところでした。いや、たしかにほんの瞬間、私はさつと顔色を變へました。
 「おい、河合河合、教へるよ、ほんとに!」
 と、奴等は私の人の好いのを見込んでゐるので、何處までもぶらぶらしく、Hがさう云つてKの方を振り向きながら、
 「なあ、K、君は何處から聞いたんだつて云つたつてな。——」
 「僕ア慶應の學生から聞いたよ。」
 「ふん、何だつて?」
 ...ナオミが非常な發展家だ。學生たちを荒らし廻る? ...そんな事が有り得るだらうか? 有り得る、たしかに有り得る、近頃のナオミの様子を見れば、さう思はないのが不思議なくらゐる。實は己だつて内氣にしてはゐただけれど、彼女を取り巻く男の友達が多過ぎて、知つて安心してゐたのだ。ナオミは子供だ、そして活潑だ。「あたし男よ」と彼女自身が云つてゐる通りだ。だから男を大勢集めて、無邪気に、賑やかに、馬鹿ッ騒ぎをするのが好きなだけなんだ。假に彼女に下心があつたとしたつて、

「僕の親戚の奴なんぞね、ダンス氣遣ひだもんだから始終ダンス場へ出入りするんで、その美人を知つてゐるんだ。」
 「おい、名前は何て云ふんだ?」
 と、Tが横合から首を出しました。
 「名前は...ええと、...妙な名だつたよ、...ナオミ、...ナオミと云ふんぢやなかつたかな。」
 「ナオミ?...ぢやあやつぱり混血兒かな。」
 さう云つてSは、冷やかすやうに私の顔を覗いて、
 「混血兒だとすると、女優ぢやないな。」
 「何でも偉い發展家ださうだぜ、その女は。盛んに慶應の學生なんかを荒らし廻るんださうだから。」
 私は變な、痲痺のやうな薄笑ひを浮かべたまま、口もとをびくびく顫はせてゐるだけでしたが、Kの話が此處まで来ると、その薄笑ひは俄かに凍りついたやうに、頬ツツたの上で動かなかくなり、眼玉がグッと眼窩の奥へ凹んだやうな氣がしました。
 「ふん、ふん、そいつお顔もしいや!」
 と、Sはすつかり恐悅しながら云ふのでした。
 「君の親戚の學生と云ふのも、其の女と何か

うになりはしないか？そして結局、お互ひの意地ッ張りから別れるやうになつてしまつたら——それが私には何より恐ろしいことでした。露骨に云へば彼女の真摯その物よりも、ずつと此の方が頭痛の種でした。彼女を礼明し、或ひは慰撫するにしても、その際、處する自分の腹を豫め決めて置かなければならぬ。「そんならあたし出て行くわよ。」と云はれたとき、「勝手に出て行け。」と云へるだけの覺悟が出来るならいいが……

しかし私は、此の點になるとナオミの方にも同じ弱點があることを知つてゐました。なぜなら彼女は、私と一緒に暮らしてこそ思ふ存分の養澤が出来ますけれども、一と度此處を退ひ出されたら、あのむさくろしい千束町の家より外、何處に身を置く場所があるでせう。もうさうなれば、それこそほんとに賣笑婦にでもならない以上、誰も彼女にチャホヤ云ふ者はなくなるでせう。昔は兎に角、我が儘一杯に育つてしまつた今の彼女の虚榮心では、それは到底思ひ得ないに極まつてゐます。或ひは濱田や熊谷などが引き取ると云ふかも知れませんが、學生の身で、私がさせて置いたやうな榮耀榮華がさせられないのは、彼女にも分つてゐる筈です。

「さうだ、己はかういづいづしてゐる場合ぢやないんだ。」

さう思ふと私は、急いで田町の停車場へ駆けつけました。一分、二分、三分……と、やつと三分目に電車が来ましたが、私は嘗てこんなに長い三分間を経験したことがありませんでした。

ナオミ、ナオミ！己はどうして今夜彼女を置き去りにして来たのだらう。ナオミが傍に居ないからいけないんだ、それが一番悪い事なんだ。——私はナオミの顔さへ見れば、此のイライラした心持ちが幾分か救はれる氣がしました。彼女の調達な言葉を聞き、罪のなさうな腫を見れば疑念が晴れるであらうことを祈りました。

が、それにしても、若しも彼女が再び雅魚をしようなどと云ひ出したら、自分は何と云ふべきだらうか？此の後自分は、彼女に對し、彼女に寄りつく濱田や熊谷や、その他の有無無象に對し、どんな態度を執るべきだらうか？自分は彼女の怒りを犯しても、敢然として警告を嚴にすべきであらうか？それで彼女が大人しく自分に承服すればいいが、反抗したらどうなるだらう？いや、そんなことはない。——自

「ああ、一人で留守番をしてゐるんだな、——」

私はほつと胸を撫でました。「此れでよかつた、ほんたうに仕合せだつた。」と、そんな氣がしないでは居られませんでした。

縮まりのしてある玄関の扉を合鍵で開け、中へ這入ると私は直ぐにアトリエの電氣をつけました。見ると、部屋は相變らず取り散らかしてありますけれど、矢張り客の来たやうな形跡はありません。

「ナオミちゃん、唯今……歸つて来たよ、……」

さう云つても返辭がないので、梯子段を上つて行くと、ナオミは一人四疊半に床を取つて、安らかに眠つてゐるのでした。此れは彼女に珍らしいことではないので、退屈すれば晝でも夜でも、時間を構はず布団の中へもぐり込んで小説を読み、そのまますやすやと寝入つてしまふのが常でしたから、その罪のない寝顔に接しては、私はいよいよ安心するばかりでした。

「此の女が己を欺いてゐる？ そんな事があ

「さうだ、己はかういづいづしてゐる場合ぢやないんだ。」

さう思ふと私は、急いで田町の停車場へ駆けつけました。一分、二分、三分……と、やつと三分目に電車が来ましたが、私は嘗てこんなに長い三分間を経験したことがありませんでした。

ナオミ、ナオミ！己はどうして今夜彼女を置き去りにして来たのだらう。ナオミが傍に居ないからいけないんだ、それが一番悪い事なんだ。——私はナオミの顔さへ見れば、此のイライラした心持ちが幾分か救はれる氣がしました。彼女の調達な言葉を聞き、罪のなさうな腫を見れば疑念が晴れるであらうことを祈りました。

が、それにしても、若しも彼女が再び雅魚をしようなどと云ひ出したら、自分は何と云ふべきだらうか？此の後自分は、彼女に對し、彼女に寄りつく濱田や熊谷や、その他の有無無象に對し、どんな態度を執るべきだらうか？自分は彼女の怒りを犯しても、敢然として警告を嚴にすべきであらうか？それで彼女が大人しく自分に承服すればいいが、反抗したらどうなるだらう？いや、そんなことはない。——自

「ああ、一人で留守番をしてゐるんだな、——」

私はほつと胸を撫でました。「此れでよかつた、ほんたうに仕合せだつた。」と、そんな氣がしないでは居られませんでした。

縮まりのしてある玄関の扉を合鍵で開け、中へ這入ると私は直ぐにアトリエの電氣をつけました。見ると、部屋は相變らず取り散らかしてありますけれど、矢張り客の来たやうな形跡はありません。

「ナオミちゃん、唯今……歸つて来たよ、……」

さう云つても返辭がないので、梯子段を上つて行くと、ナオミは一人四疊半に床を取つて、安らかに眠つてゐるのでした。此れは彼女に珍らしいことではないので、退屈すれば晝でも夜でも、時間を構はず布団の中へもぐり込んで小説を読み、そのまますやすやと寝入つてしまふのが常でしたから、その罪のない寝顔に接しては、私はいよいよ安心するばかりでした。

「此の女が己を欺いてゐる？ そんな事があ

分は今夜会社の奴等に甚だしい侮辱を受けた。だからお前も仲間から誤解されないやうに、少し行動を慎んでおくれ。」と云へば、外の場合とは違ふから、彼女自身の名譽のために、でも、恐らく云ふことを聴くであらう。若しその名譽も誤解も顧みないやうなら、正しく彼女は怪しいのだ。Kの語は事實なのだ。若し、……ああ、そんな事があつたら……

私は努めて冷静に、出来るだけ心を落ち着けて、此の最後の場合を想像しました。彼女が私を欺いてゐたことが明かになつたとしたら、私は彼女を許せるだらうか？——正直のところ、既に私は彼女なしには一日も生きて行けません。彼女が墮落した罪の一半は勿論私にもあるのですから、ナオミが素直に前非を悔いて詫まつてさへくれるなら、私はそれ以上彼女を責めたくはありませんし、責める資格もないのです。けれども私の心配なのは、あの剛情な、殊に私に對しては——と入強面になりたがる彼女が、假りに證據を突きつけたとしても、さう易易と私に頭を下げるだらうかと云ふことでした。たとへ一旦は下げたとしても、實は少しも改心しないで、此方を甘く見くびつて、二度も三度も同じ過を繰り返すや

「あたし今夜は寝られず、さうして話さなかつたわ。誰か来るかと思つたら、誰も遊びに来ないんだもの。……ねえ、パパさん、もう寝ない？」

「寝てもいいけれど、……」
「よう、寝てよう！……さうして話さなかつたんだから、方方蚊に喰はれちやつたわ。ほら、こんなよ！……こんな所を少し掻いて！……」

「ああ、ありがと、痒くて痒くて仕様がないわ。——濟まないけれど、そこにある寝間着を取つてくれない？ さうしてあたしに着せてくれない？」
私はガウンを持って来て、大の字なりに倒れてゐる彼女の體を抱き抱きました。そして私が帯を解き、着物を着換へさせてやる間、ナオミはわざとぐつたりとして、死骸のやうに手足をぐにやぐにやにさせておきました。
「蚊帳を吊つて、それからパパさんも早く寝てよう。——」

十四

その夜の二人の寝物語は、別にくだくだしく書く迄もありません。ナオミは私から精養軒で

く見たり白く見たりするのですが、ぐつすり寝込んでゐる時や起きたばかりの時などは、いつも非常に涼んでゐました。眠つてゐる間に、すつかり體中の脂肪が脱けてしまふかのやうに、きれいになりました。普通の場合「夜」と「暗黒」とは附き物ですけれど、私は常に「夜」を思ふと、ナオミの肌の「白さ」を連想しないでゐられませんでした。それは眞つ黒間の、限なく明るい「白さ」とは違つて、汚れた、きたない、垢だらけな布團の中の、云はば襦袢に包まれた「白さ」であるだけ、餘計私を惹きつけました。で、かうしてつくづく眺めてみると、ランプの笠の蔭になつてゐる彼女の胸は、まるで眞つ青な水の底にでもあるもののやうに、鮮やかに浮き上つて來るのでした。起きてゐる時はあんなに暗れやかな、變幻絢麗ないその顔つきも、今は愛嬌に眉根を寄せて苦い薬を飲まされたやうな、頭を締められた人のやうな、神秘的な表情をしてゐるのですが、私は彼女の此の愛嬌が大へん好きでした。お前は寝ると別人のやうな表情になるね、恐ろしい夢でも見てゐるやうに。——と、よくそんなことを云ひ云ひしました。「これでは彼女の死顔もきつと美しいに違ひない」と、さう思つたことも屢ありました。

私はよしや此の女が狐であつても、その正體がこんな妖艶なものであるなら、寧ろ喜んで魅せられることを望んでせう。……
私は大凡そ三十分ぐらゐ、さうして黙つて据わつてゐました。笠の蔭から明るい方へはみ出してゐる彼女の手は、甲を下に、掌を上へ、結びかけた花びらのやうに柔かに振られて、その手首には静かな脈の打つてゐるのがハッキリと分りました。
「いつ歸つたの？……」
「うう、うう、と、安らかに繰り返されてゐた寝息が少し亂れたかと思ふと、やがて彼女は眼を開きました。その愛嬌な表情をまだ何處やらに残しながら、……
「今、……もう少し前。」
「なぜあたしを起きなかつた？」
「呼んだんだけれど起きなかつたから、さうして置いて置いたんだよ。」
「そこに据わつて、何をしていたの？——寝顔を見てゐた？」
「ああ、」
「ふツ、可笑しな人！」
さう云つて彼女は、子供のやうにあどけない笑つて、伸ばしてゐる手を私の膝に載せました。

しい気持ち少しもないとか、センチメンタルな、甘ったるい口調で繰り返して、最後には例の「十五の歳から育てて貰った恩を忘れたことではない」とか、讀治さんを親とも思ひ夫とも思つてゐます」とか、極まり文句を云ひながら、さめざめと涙を流したり、又その涙を私に拭かせたり、矢張り早に接吻の雨を降らせたりするのでした。

が、そんなに長く話をしながら濱田と熊谷の名前だけは、故意にか偶然にか、不思議に彼女が云ひませんでした。私も實は此の二つの名を云つて、彼女の顔に現はれる反應を見たいと思つてゐたのに、とうとう云ひそびれてしまいました。勿論私は彼女の言葉を一から十まで信じた譯ではありませんが、しかし疑へばどんな事でも疑へますし、強ひて過ぎ去つた事までも論議立てする必要はない、此れから先を注意して監督すればいいのだと、……いや、始めはもつと強硬に用ゐるつもりでゐたにも拘らず、次第にさう云ふ曖昧な態度にさせられました。そして涙と接吻の中から、すすり泣きの音に交つて囁かれる聲を聞いてゐると、誰でもないかとの足を踏みながら、やつぱりそれが本當のやうに思はれて来るのでした。

こんな事があつてから後、私はそれとなくナオミの様子に氣をつけましたが、彼女は少しづつ、あまり不自然でない程度に、在來の態度を改めつつあるやうでした。ダンスにも行くことは行きますけれど、今迄のやうに頭黨ではなく、行つても餘り澤山は踊らずに、程よい處で切り上げて来る。客もうるさくはやつて来ない。私が會社から歸つて来ると、獨りで大人しく留守番をして、小説を讀むとか、編み物をするとか、靜かに蓄音器を聴いてゐるとか、花壇に花を植ゑるとかしてゐる。

「今日も獨りで留守番かね？」
「ええ、獨りよ、誰も遊びに来なかつたわ。」
「ちや、淋しくはなかつたかね？」
「初めから獨りとしまつてゐれば、淋しいことなんかないやしないわ、あたし平氣よ。」
さう云つて、
「あたし、賑やかなのも好きだけれど、淋しいのも嫌ひぢやないわ。子供の時分にはお友達なんかつともなくつて、いつも獨りで遊んでゐたのよ。」
「ああ、さう云へばそんな風だつたね。ダイヤモンド・カフェにゐた時分なんか、仲間の者ともあんまり口を利かないで、少し陰鬱なくら

みだつたね。」
「ええ、さう、あたしはお熱々なやうだけれど、ほんたうの性質は陰鬱なのよ。——陰鬱ぢやいけない？」
「大人しいのは結構だけれど、陰鬱になられても困るなア。」
「でも此の間ちゆうのやうに、暴れるよりはよくはなかつて？」
「そりやいくらいいか知れやしないよ。」
「あたし、好い兒になつたでしよ。」
そしていきなり私に飛び着いて、兩手で首玉を握きしめながら、眼が瞬むほど切なく激しく、接吻したりするのでした。

「どうだね、暫くダンスに行かないから、今夜あたり行つて見ようか。」
と、私の方から誘ひをかけても、
「どうでも——讀治さんが行きたいなら、——」と、浮かぬ顔つきで生返事をしたり、
「それより活動へ行きませうよ、今夜はダンスは氣が進まないわ。」
と云ふやうなこともよくありました。
又あの、四五年前の、純な楽しい生活が、二人の間に戻つて来ました。私とナオミとは水入らずの二人きりで、毎晩のやうに淺草へ出かけ、

活動小屋を覗いた歸りには何處かの料理屋で飯をたべながら、「あの時分は斯うだつた」とか「ああだつた」とか、互ひになつかしい昔のことと語り合つて、思ひ出に耽る。「お前はなりが小さかつたものだから、帝國館の横木の上へ腰をかけて、私の肩に寄りなから給を見ただよ」と私が云へば、「讀治さんが始めてカフェエへ来た時分には、イヤにむつつりと黙り込んで、遠くの方からデロデロ私の顔ばかり見て、氣味が悪かつた」とナオミが云ふ。

「さう云へばババさんは、此の頃あたしをお湯へ入れてくれないのね、あの時分にはあたしの體を始終洗つてくれたぢやないの。」
「ああ、さうさう、そんな事もあつたつねね。」
「あつたつちぢやないわ、もう洗つてくれないの。こんなにあたしが大きくなつちや、洗ふのは厭？」
「厭なことがあるもんか、今でも洗つてやりた

び、彼女の體を洗つてやるやうになりました。「大きなベビさん」と、嘗てはさう云つたものですけれど、あれから四年の月日が過ぎた今のナオミは、そのたつぷりした身長を湯船の中へ横たへて見ると、もはや立派に成人し切つて、完全な大人になつてゐました。ほどけば夕立雲のやうに、一杯にひろがる豐滿な髪。ところどころの關節に、糸くぼの出来てゐるまるやかな肉づき。そしてその肩に更に一層の厚みを増し、胸と背とはいやが上にも弾力を帯びて、堆く波うち、優雅な脚はいよいよ長くなつたやうに思はれました。

「讀治さん、あたしいくらかせいが伸びた？」
「ああ、伸びたとも、もう此の頃ちや僕とあんまり違はないやうだね。」
「今にあたし、讀治さんより高くなるわよ。此の間目方を計つたら十四貫二百あつたわ。」
「驚いたね、僕だつてやつと十六貫足らずだよ。」
「でも讀治さんはあたしより重いの？ ちびの癖に。」
「そりや重いき、いくらちびでも男は骨組みが頑丈だからな。」
「ちや、今でも讀治さんは馬になつて、あたし

を乗せる勇氣がある——来たての時分にはよくそんなことをやつたぢやないの。ほら、あたしが背巾へ跨つて、手拭ひを手綱にして、ハイドウドウつて云ひながら、部屋の中を廻つたりして、——」
「うん、あの時分には軽かつたね、十二貫ぐらゐなもんだつたらうよ。」
「今だつたら讀治さんは濡れちまふわよ。」
「濡れるもんかよ。讀だと思ふなら乗つて御覽。」
二人は冗談を云つた末に、昔のやうに又馬ごつこをやつたことがありました。

「さ、馬になつたよ。」
と、さう云つて、私が四つん這ひになると、ナオミはどしんと背巾の上へ、その十四貫二百の重みでのしかかつて、手拭ひの手綱を私の口に咬へさせ、
「まあ、何て云ふ小ぢなやたよ馬だらう！ もつとしつかり！ ハイハイ、ドウドウ！」と叫びながら、面白さうに脚で私の腹を締めつけ、手綱をグイグイとしごきます。私は彼女に潰されまいと一生懸命に力み返つて、汗を掻き掻き部屋を廻ります。そして彼女は、私

「納治さん、今年の夏は久しぶりで鎌倉へ行かない？」

「八月になると、彼女は云ひました。『あたし、あれつきり行かないんだから行つて見たいわ。』」

「成る程、さう云へばあれつきりだつたかね。」

「さうよ、だから今年には鎌倉にしませうよ、あたしたちの記念の土地ぢやないの。」

「ナオミの此の言葉は、どんなに私を喜ばしたことでせう。ナオミの云ふ通り、私たちが新婚旅行——まあ云つて見れば新婚旅行に出かけたのは鎌倉でした。鎌倉ぐらゐれわれに取つて記念になる土地はない筈でした。あれから後、毎年何處かへ避暑に行きながら、すつかり鎌倉を忘れてゐたのに、ナオミがそれを云ひ出してくれたのは、全く素晴らしい思ひつきでした。」

「行かう、是非行かう！」

「私はさう云つて、一も二もなく賛成しました。相談が極まるそこそこに、會社の方は十日間の休暇を貰ひ、大森の家に片じまりをして、月の初めに二人は鎌倉へ出かけました。宿は長

谷の通りから御用邸の方へ行く道の、植木と云ふ植木屋の離れ座敷を借りました。

「私は最初、今度はまさか金波樓でもあるまいから、少しの利いた旅館へ泊まるつもりでしたが、それが圓らずも間借りをするやうになつたのは、『大森都合のいいことを杉崎女史から聞いた』と云つて、此の植木屋の離れの話をナオミが持つて来たからでした。ナオミの云ふには、旅館は不経済でもあり、あたり近所に氣がねもあるから、間借りが出来れば一番いい。で、仕合はせなことに、女史の初威の東洋石油の重役の人が、借りたまま使はずにゐる貸間があつて、それを此方へ譲つて貰へるさうだから、いつそ其の方がいいぢやないか。その重役は、六、七、八、と三ヶ月間五百圓の約束で借り、七月一杯は居ただけけれど、もう鎌倉も飽きて来たから誰でも借りたい人があつたら喜んで貸す。杉崎女史の周旋とあれば家賃などはどうでもいいと云つてゐるから、……と云ふのでした。」

「ね、こんな旨い話はないからさうしませうよ。それならお金もかからないから、今月一杯行つて居られるわ。」

「おーい、と、ナオミは云ひました。」

「おーい、と、沖の方でも、と、誰かが返辭をしました。」

「誰？ 彼處に泳いでゐるのは？」

「濱田だよ、濱田と關と中村と、四人で今日来て来たんだよ、——てつきりお前にちげねえと思つたら、やつぱりさうだつた。」

「おーい、と、誰かが返辭をしました。」

「誰？ 彼處に泳いでゐるのは？」

「濱田だよ、濱田と關と中村と、四人で今日来て来たんだ。」

「まあ、そりや大分賑やかだわね、何處の宿屋に泊まつてゐるの？」

「へッ、そんな景氣のいいんぢやねえんだ。あんまり暑くつて仕様がねえから、ちよつと日歸りでやつて来たのよ。」

「ナオミと彼とがしやべつてゐる所へ、やがて濱田が上つて来ました。」

「やあ、暫く！ 大へん御無沙汰しちまつて、お見えになりませんね。」

「さう云ふ譯でもないんですが、ナオミが飽きたと云ふもんだから。」

「だつてお前、會社があるからそんなに長くは遊べないよ。」

「だけど鎌倉なら、毎日汽車で通へるぢやないの、ね、さうしない？」

「しかし、そこがお前の氣に入るかどうか見て来ないぢやあ、……」

「ええ、あたし明日でも行つて見て来るわ、そしてあたしの氣に入つたら極めてもいい？」

「極めてもいいけれど、ただと云ふのも氣持が悪いから、そこを何とか話をつけて置かなければあ、……」

「そりや分つてるわ。納治さんは忙しいだらうから、いいとなつたら杉崎先生の所へ行つて、お金を取つてくれるやうに頼んで来るわ。まあ百圓か百五十圓は拂はなくつちや、……」

「こんな調子で、ナオミは獨りでばたばたと進行させて、家賃は百圓と云ふことに折れ合ひ、金の取引も彼女がすつかり済ませて来ました。」

「私はどうかと案じてゐましたが、行つて見ると思つたよりも好い家でした。貸間とは云ふものの、母屋から獨立した平家建ての一と棟で、八畳と四畳半の座敷の外に、玄關と湯殿と臺所があり、出入口も別になつてゐて、庭から

「さうですか、そりや怪しからんな。——あなた方はいつから此方へ？」

「つい二三日前からですよ、長谷の植木屋の離れ座敷を借りてゐるんです。」

「そりやほんとにいい所よ、杉崎先生のお世話でもつて今月一杯の約束で借りたの。」

「乙う洒落てるね。」

「と、誰かが云ひました。」

「ちや、當分此處に居るんですか。」

「濱田は云つて、」

「だけど鎌倉にもダンスはありますよ。今夜も濱田はホテルにあるんだけど、相手があれば行きたいところなんだがなあ。」

「いやだわ、あたし」

「と、ナオミはにべもなく云ひました。『此の暑いのにダンスなんか禁物だわ、又そのうちに涼しくなつたら出かけるわよ。』」

「それもさうだね、ダンスは夏のものぢやないね。」

「ナオミさん？」

「と、不意に私たちの顔の上で、さう呼んだ者がありました。」

「見ると、それは熊谷でした。たつた今海から上つたらしく、濡れた海水着がべつたりと胸に吸ひ着き、その毛むくぢやいな尻を傳はつて、

「直ぐと往來へ出ることが出来、植木屋の家族とも顔を合はせる必要はなく、此れなら成る程、二人が此處で新世帯を構へたやうなものでした。私は久しぶりで、純日本式の新しい畳の上に腰をおろし、長火鉢の前にあぐらを掻いて、伸び伸びとしました。」

「や、此れはいい、非常に氣分がゆつたりするね。」

「いい家でせう？ 大森と執事がよくつて？」

「ずつと此の方が落ち着くね、此れなら幾らでも居られさうだよ。」

「それ御覽なさい、だからあたしが此處にしよらうつて云つたんだわ。」

「さう云つてナオミは得意でした。或る日——此處へ来てから三日目ぐらゐ立つた時だつたでせうか、午から水を浴びに行つて、一時間ばかり泳いだ後、二人が池濱にころがつてゐると、

「ナオミさん？」

「と、不意に私たちの顔の上で、さう呼んだ者がありました。」

「見ると、それは熊谷でした。たつた今海から上つたらしく、濡れた海水着がべつたりと胸に吸ひ着き、その毛むくぢやいな尻を傳はつて、

「さう云つてナオミは得意でした。或る日——此處へ来てから三日目ぐらゐ立つた時だつたでせうか、午から水を浴びに行つて、一時間ばかり泳いだ後、二人が池濱にころがつてゐると、

「ナオミさん？」

「と、不意に私たちの顔の上で、さう呼んだ者がありました。」

「見ると、それは熊谷でした。たつた今海から上つたらしく、濡れた海水着がべつたりと胸に吸ひ着き、その毛むくぢやいな尻を傳はつて、

「さう云つてナオミは得意でした。或る日——此處へ来てから三日目ぐらゐ立つた時だつたでせうか、午から水を浴びに行つて、一時間ばかり泳いだ後、二人が池濱にころがつてゐると、

「これから行くつて」と休みして、東京へ歸ると日が暮れるぞ。」

「これから行くつて、何處へ行くのよ？」

「何か面白い事でもあるの？」
「なあに、扇が谷に關の叔父さんの別荘があるんだよ。今日はみんなでそこへ引つ張つて來られたんで、御馳走するつて云ふんだけれど、扇加だから飯を喰はずに逃げ出さうと思つてゐるのさ。」

「さう？ そんなに扇加なの？」
「扇加も扇加も、女中が出て來て三つ指を御きやがるんで、ガツカリよ。あれぢや御馳走になつたつて飯が喰へ通りやしねえや。——なあ、濱田、もう歸らうや、歸つて東京で何か喰はうや。」

さう云ひながら、熊谷は直ぐに立たうとはしないで、脚を伸ばしてどつかり濱へ腰を据えたまま、砂を掴んで膝の上へ打つかけてゐました。

「ではどうです、僕等と一緒に晩飯をたべませんか。折角來たもんだから、——」
「ナオミも濱田も熊谷も、一ときり黙り込んでしまつたので、私はどうもさう云はなけれ

ば、バツが悪いやうな気がしました。

十五

その晩は久しぶりで賑やかな晩飯をたべました。濱田に熊谷、あとから關や中村も加はつて、離れ座敷の八畳の間に六人の主客がチャヤを囲み、十時頃までしゃべつてゐました。私も始めは、此の連中に今度の宿を薦められるのは厭でしたが、かうしてたまに會つて見れば、彼等の元氣な、サツパリとしたことはありせん。年らしい肌合が愉快でないことはありせん。ナオミの態度も、人をそらさぬ愛嬌があつて、蓮ツ葉でなく、座敷の添へ方やもてなし振りは、すつかり理想的でした。

「今夜は非常に面白かつたね、あの連中にとときき會ふのも悪くはないよ。」
「私とナオミとは、終列車で歸る彼等を停車場まで送つて行つて、夏の夜道を手を携へて歩きながら話しました。星のきれいな海から吹いて來る風の涼しい晩でした。」

「さう？ そんなに面白かつた？」
「ナオミも私の機嫌のいいのを喜んでゐるやうな口調でした。そして、ちよつと考へてから云ひました。」

「あの連中も、よく附き合へばそんなに悪い人たちぢやないのよ。」

「ああ、ほんたうに悪い人たちぢやないね。」
「だけど、又そのうちに押しかけて來やしないかしら？ 關さんは叔父さんの別荘があるから、此れからちよいちよみんなを連れてやつて來るつて、云つてたぢやないの。」

「だが何だらう、僕等の所へさう押しかけや來ないだらう。」
「たまにはいいけれど、度び度び來られると迷惑だわ。もし今度來たら、あんまり招待しない方がいいことよ。御飯なんか御馳走しないで、大概にして歸つて貰ふのよ。」

「けれどもまさか、追ひ立てる譯にも行かんからなあ。」
「行かない事はありやしないわ、邪魔だから歸つて頂戴つて、あたしとつと追ひ立ててやるわ。——そんな事を云つちやいやいな。」

「ふん、又熊谷に冷やかされるぜ。」
「冷やかされたつていいぢやないの、人が折角鎌倉へ來たのに、邪魔に來る方が悪いんだもの。」
二人は暗い松の木蔭へ來てゐましたが、さう云ひながらナオミはそつと立ち止まりました。

「謙治さん。」
甘い、かすかな、訴へるやうなその聲の意味が私に分ると、私は無言で彼女の顔を両手の中へ包みました。がぶり、と一滴、潮水を呑んだ時のやうな、激しく強い、唇を味はひながら、……

それから後、十日の休暇はまたたくうちに過ぎ去りましたが、私たちは依然として幸福でした。そして最初の計畫通り、私は毎日鎌倉から會社へ通ひました。「ちよいちよい來る」と云つてゐた關の連中も、ほんの一週、一週間はど立つてから立ち寄つたときり、殆んど影を見せませんでした。

すると、その月の末になつてから、或る緊急な調べ物をする用事が出來て、私の歸りがおそくなることになりました。いつもは大抵七時迄には歸つて來て、ナオミと一緒に夕飯をたべられるのが、九時まで會社に居残つて、それから歸ると彼れ此れ十一時過ぎになる、——そんな晩が、五六日はつづく豫定になつてゐた、そのちやうど四日目のことでした。

その晩私は、九時までかかる筈だつたのが、仕事早く片附いたので、八時頃に會社を出ました。いつものやうに大井町から省線電車

で横濱へ行き、それから汽車に乗り換へて、鎌倉へ降りたのは、まだ十時には間のある時分でしたらうか。毎晩毎晩、——と云つても僅か三日か四日でしたけれど、——此のところ引きつづいて、歸りのおそい日が多かつたものですから、私は早く宿へ戻つてナオミの顔を見、ゆつくりくつろいで夕飯を喰へたいと、いつもよりは氣がせいりてゐたので、停車場前から御用居の傍の路を傳で行きました。

夏の日盛りの熱いさなかを一日會社で働いて、それから再び汽車に揺られて歸つて來る身には、此の海岸の夜の空気が何とも云へず柔かな、すがすがしい開觸りを感じさせます。それは今夜に限つたことではありませんが、その晩はまた、日の暮れ方にさつと一通、夕立があつた後だつたので、濡れた草葉や、露のしたたる松の枝から、しづかに上る水蒸氣にも、こつそり忍び寄るやうなしめやかな香が感ぜられました。ところどころに、夜目にもしるく水たまりが光つてゐましたけれど、沙地の路はもはや埃を揚げぬ程度にまれに乾いて、走つてゐる車火の足音が、びろうどの上をでも踏むやうに、軽く、しとしとと地面に落ちて行きました。何處かの別荘らしい家の、生垣の奥から蓄

音が聞えたり、たまに一人か二人づつ、白地の浴衣の人影がそこを徘徊してゐたり、いかにも避暑地へ來たらしい心持がするのでした。

木戸口のところで傳を歸して、私は庭から離れ座敷の縁側の方へ行きました。私の靴の音を聞いてナオミが直ぐにその縁側の障子を明けて出るであらうと豫期してゐたのに、障子の中は明りがかんかん燈つてゐながら、彼女の居さうなけはひはなく、ひつそりとしてゐるのでした。

「ナオミちゃん、……」

私は二三度呼びましたが、返答がないので、縁側へ上つて障子を明けると、部屋はからツぽになつてゐました。海水浴だの、タオルだの、浴衣だのが、壁や、換や、床の間や、そこらぢうに引つかけてあり、茶器や、灰皿や、座布團などが出しつ放しになつてゐる座敷の様子は、いつもの通り亂雑で、取り散らかしてはありましたが、それは決して、つい今しがた留守になつたのではない筈かさがそこにあるのを、私は戀人に特有な感覺を以て感じました。

「何處かへ行つたのだ、……恐らく二三時間も

前から、……」
それでも私は、便所を覗いたり、湯殿を覗いたり、なほ念のために勝手口へ降りて、流しもとの電燈をつけて見ました。すると私の眼に觸れたのは、誰かが盛んに吸ひ荒らし、飲み荒らして行つたらしい正宗の一升壺と、西洋料理の残骸でした。さうだ、さう云へばあの灰皿にも煙草の吸殻が澤山あつた。あの同勢が押しつけて来たのに違ひないのだ。……
「おかみさん、ナオミが居ないやうですが、何處かへ出て行きましたか？」
私は母屋へ歸つて行つて、植窓のかみさんに尋ねました。

「ああ、お嬢さんでいらつしやいますか。——」
かみさんはナオミのことを「お嬢さん」と云ふのでした。夫婦ではあつても、世間に対しては單なる同僚者、若しくは許婚と云ふ風にとつて貰ひたいので、さう呼ばなければナオミは機嫌が悪かつたのです。
「お嬢さんはあの、夕方一通お歸りになつて、御飯をお上りになつてから、又皆さんとお出かけになりましたか？」
「皆さんと云ふのは？」
「あの、……」

と云つて、かみさんはちよつと云ひ渡りながら、
「あの熊谷さんの若様や何か、皆さん御一緒でございましたが、……」
私は何のかみさんが、熊谷の名を知つてゐるのみか、「熊谷さんの若様」などと彼を呼ぶのを不思議に思ひましたけれど、今そんな事を聞いてゐる暇はなかつたのです。
「夕方一通お歸つたと云ふと、晝間もみんなと一緒にしたか？」
「お午過ぎに、お一人で泳ぎにいらつしやいまして、それからあの、熊谷さんの若様と御一緒にお歸りになりましたか？」
「熊谷君と二人きりで？」
「はあ、……」

「はあ、……」
私は實は、まだその時はそんなに慌ててはゐませんでした。かみさんの言葉が何となく云ひにくさうで、その顔つきに當惑の色がますます強く表れて来るのが、次第に私を不安にさせました。此のかみさんに腹を見られるのはイヤだと思ひながら、私の口調は性急にならずにはゐませんでした。
「ちやあ何ですか、大勢一緒ぢやないんですか？」

「はあ、その時はお二人きりで、今日はホテルに晝間のダンスがあるからと仰つしやつて、お出かけになつたんでございますが、……」
「それから？」
「それから夕方、大勢さんで戻つていらつしやいました。」
「晩の御膳は、みんな内で食べたんですか？」
「はあ、何ですか大さうお賑やかに、……」
さう云つてかみさんは、私の眼つきを判じながら、苦笑ひするのでした。
「晩飯を食つてから又出かけたのは、何時頃でしたらうか？」
「さあ、あれは、八時頃でございますたせうか、……」
「ちや、もう二時間にもなるんだ。」
と、私は覺えず口へ出して云ひました。
「するとホテルにでも居るのかしら？ 何かおかみさんは、お聞きになつちや居ませんかしら？」
「よくは存じませんが、御別荘の方ぢやございませぬか、……」
成程、さう云はれば關の叔父さんの別荘と云ふのか、扇が谷にあつたことを私は思ひ出しました。

「ああ別荘へ行つたんですか。それぢや此れから僕は迎ひに行つて来ますが、どの邊にあるか、おかみさんは御存知ありませんか？」
「あの、直きそこの、長谷の海岸でございますが、……」

「へえ、長谷ですか？ 僕はたしか扇が谷だと聞いてたんですが、……あの、何ですよ、僕の云ふのは、今夜も此處へ来たかどうだか知らないけれど、ナオミのお友達、關と云ふ男の叔父さんの別荘なんだが、……」
私がさう云ふと、かみさんの顔には、いつとかな驚きが走つたやうでした。
「その別荘と違ふんでせうか？……」
「はあ、……あの、……」
「長谷の海岸にあると云ふのは、一體誰の別荘なんですか？」
「あの、——熊谷さんの御親戚の、……」
「熊谷君の？……」

私は急に驚つ青になりました。
停車場の方から長谷の通りを左へ切れて、海濱ホテルの前の路を直つ直ぐに行つて御覽なさい。路は自然と海岸へつきあたりです。その出はづれの角にある大久保さんの御別荘が、熊谷さんの御親戚なのでございます。——さうか

みさんは云ふのでしたが、全く私には初耳でした。ナオミも熊谷も、今まで嘗てそんな話をおくびにも出しはしませんでした。
「その別荘へはナオミはたびたび行くんでせうか？」
「はあ、いかがでございますかしら、……」
さうは云つても、そのかみさんのオドオドした素振りを、私は見逃しませんでした。
「しかし勿論、今夜が始めてぢやないんでせうな？」

私はひとりでに呼吸が迫り、聲がふるへるのをどうすることも出来ませんでした。私の胸に恐れをなしたのか、かみさんの顔も青くなりました。
「いや、御迷惑はかけませんから、構はずに仰つしやつて下さい。昨夜はどうでした？ 昨夜も出かけたんですか？」
「はあ、……ゆうべもお出かけになつたやうでございましたが、……」
「ちや、一昨日の晩は？」
「はあ、」
「やつぱり出かけたんですね？」
「はあ、」
「その前の晩は？」

「はあ、その前の晩も、……」
「僕の歸りがおそくなつてから、ずつと毎晩さうなんですわね？」
「はあ、……ハツキリ覚えてはをりませぬけれど、……」
「で、いつも大概何時ごろに戻つて来るんです？」
「大概何でございますか、……十一時ちよつと前ごろには、……」
では初めから二人で己を擔いでゐたのだ！
それでナオミは鎌倉へ来たがつたのだ！——私の頭は暴風のやうに迴轉し始め、私の記憶は非常な速さで、此の間ちゆうのナオミの言葉と行動とを、一つ残らず心の底に映し出した。一瞬間、私を取り巻くからくりの絲が驚く程の明瞭さで露はれました。そこには殆んど、私のやうな單純な人間には到底想像も出来なかつた、二重にも三重にももの證があり、念には念を入れた譯し合はせがあり、両もどれ程大勢の奴等がその陰謀に加擔してゐるか分らないくらゐ、それは複雑に思はれました。私は突然、平な、安全な地面から、どしんと深い陷阱へ叩き落され、穴の底から、高い所をガヤガヤ笑ひながら通つて行くナオミや、熊谷や、濱

田や、圃や、その他無数の人影を羨ましさうに見送つてゐるのでした。

「おかみさん、僕はこれから出かけて来ますが、もし行き違ひに戻つて来ても、僕が帰つて来たことは何卒黙つて下さい、少し考へがあるんですから。」

「さう云ひ捨てて、私は表へ飛び出しました。海濱ホテルの前へ出て、教へられた路を、成るべく暗い路に寄りながら進んで行きました。そこは雨に大きな別荘の並んでゐる、森閑とした、夜は人通りの少ない街で、いい雨粒にさう明るくはありませんでした。とある門燈の光の下で、私は時計を出して見ました。十時がやつと越つたばかりのところでした。その大久保の別荘と云ふのに、熊谷と二人きりでゐるのか、それとも例の御定連と騒いでゐるのか、兎に角現場を突き止めてやりたい。若し出来るなら彼等に感づかれないやうにコソコソ證據を掴んで来て、あとで彼等がどんなしらしらしい出まかせを云ふか試してやりたい。そして動きが取れないやうにして置いて、トツチメてやりたいと思つたので、私は歩調を早めて行きました。目的の家はすぐ分りました。私は暫くその

所で聞きました。それが今まで聞えなかつたのは、大方風の加減か何かだつたのでせう。——「ちよつと！靴の中へ砂が這入つちやつて、歩けやしないよ。誰か此の砂を取つてくれない？……まあちゃん、あんた靴を脱がしてよ！」「いやだよ、已あ。已あお前の奴隷ぢやあねえよ。」

前よりを往つたり来たりして、掃へる様子を窺ひましたが、立派な石の門の内にはこんもりとした植込みがあり、その植込みの間を縫うて、ずつと奥まった玄關の方へ砂利を敷き詰めた道があり、一大久保別邸と記された標札の文字の古さと云ひ、ひろい庭を圍んでゐる苦のついた石垣と云ひ、別荘と云ふよりは年数を經た屋敷の感じで、こんな所にこんな宏壯な邸宅を持つた熊谷の親戚があらうなどは、思へば思ふほど意外でした。

「ハテナ、裏の方にでも熊谷の部屋があるのぢやないか。」私はさう思つて、又足音を殺しながら、母屋に添つて後ろ側へ廻りました。すると果して、二階の一と間と、その下にある勝手口に、明りがついてゐるのでした。

のです。私と小屋との間隔は五間と離れてゐませんでしたが、まだ會社から歸つたままの茶のアルパカの背廣座を着てゐた私は、上衣の襟を立て、前のボタンをすつかり嵌めてカラトとワイシャツが目立たぬやうにし、妻籠帽子を脇の下に隠しました。そして身を屈めて這ふやうにしながら、小屋のうしろの井戸側の藪へついでと走つて行きましたが、とたんに彼等は、一さあ、もういいわよ、今度は彼方へ行つて見ようよ。」

と、ナオミが音頭を取りながら、ぞろぞろ繋がつて出て来ました。彼等は私には気が付かないで、小屋の前から波打ち際へ降りて行きました。濱田に熊谷に關に中村、——四人の男は浴衣の着流しで、そのまん中に挟まつたナオミは、黒いマントを引つけて、踵の高い靴を穿いてゐるのだけが分りました。彼女は饅頭の箱の方へ、マントや靴を持つて来てはゐないので、それは誰かの借り物に違ひありません。風が吹くのでマントの裾がばたばたためくれさうになる、それを内側から兩手でしつかり體へ巻きつけてゐるらしく、歩く度毎にマントの中で大きな響が聞くむづいりと動きます。そして彼女は聲つ拂ひのやうな

その二階が熊谷の居間であることを知るには、たつた一日で十分でした。なぜかと云ふのに、縁側を見ると例のフラット・マンドリンが手すりに寄せかけてあるばかりか、座敷の中には、たしかに私の見覚えのあるタスカンの折帽子が柱にかかつてゐたからです。が、障子が明け放されてゐるのに、話聲一つ洩れて来ないので、今その部屋に誰もゐないことは明らかでした。

「事に依ると、已と行き違ひになつたのぢやないか。熊谷の奴、その邊までナオミを送つて行つたのぢやないか。」さう云へば勝手口の方の障子も、今しがた誰かがそこから出て行つたらしく、矢張り明け放しになつてゐました。と、私の注意は、勝手口から地面へさしてゐる仄かな明りを傳はつて、つい二三間先のところに裏門のあるのを發見しました。門は扉がついてゐない古い二本の木で、柱と柱の間から、由比が濱に碎ける波が關にカツキリと白い線になつて見え、強い海の香が嗅つて来ました。「きつと此處から出て行つたんだな。」そして私が裏門から海岸へ出ると殆んど同時に、疑ふべくもないナオミの聲がすぐと近

歩調で、兩方の肩を左右の男に打つつけながら、わざとよろけて行くのでした。それまでちよつと小さくなつて息をこらしてゐた私は、彼等との距離が半町ぐらゐ隔たつて、白い浴衣が遠くの方にほんのちらちら見える時分、始めて立ち上つてそつとその跡を追ひました。最初彼等は、海岸を眞つすぐに、材木座の方へ行くのだらうかと思はれましたが、中途でだんだん左へ曲つて、街の方へ出る沙山の向うたやうでした。彼等の姿が、その沙山の向うへ隠れきつてしまふと、私は急に全速力で山を駆け上り始めました。なぜなら私は、ちやうど彼等の出る路が、松林の多い、身を隠すのに屈竟な物産のある、暗い別荘街であるのを知つてゐたので、そこならもつと傍へ寄つても、多分彼等に發見される恐れはないと思つたからです。

降りると忽ち、彼等の陽氣な叫聲が私の耳朶を打ちました。それもその筈、彼等は僅か五六歩に足らぬところを、合唱しながら拍子を取つて進んで行くのです。
Just before the battle, mother,
I am thinking must of you, ...
それはナオミが口癖にうたふ唄でした。熊谷

は先に立つて、指揮棒を振るやうな手つきをし
てゐます。ナオミは矢張り彼方へよろよろ、此
方へよろよろと、肩を打つつけて歩いて行きま
す。すると打つつけられた男も、ボートでも滑
いでゐるやうに、一緒にたつて端から端へよろ
けて行きます。
「ヨイショヨ！ ヨイショヨ！……ヨイショヨ！
ヨイショヨ！」
「アア、何よ！ そんなに押しちや探へ打つつ
かるぢやないの。」
「ばらばらばらつと、誰かが扇をステッキで
殴つたやうでした。ナオミがきやつきやつと笑
ひました。」
「さ、今度はホニカ、ウワ、ウイキ、ウイキ
だ！」
「よし来た！ 此奴あ布の鬚振りダンスだ、
みんな唄ひながらけつを振るんだ！」
ホニカ、ウワ、ウイキ、ウイキ！ スウィート、
ブラウン、メイドウン、セツド、トウー、ミー、
……そして彼等は一度に鬚を振り出しました。
「あつははは、おけつ、の振り方は關さんが一
番うまいよ。」
「そりやさうさ、己あ此れでも大いに研究した
んだからな。」

「何處で？」
「上野の平和博覽會でさ、ほら、萬國館で土
人が踊つてるだらう？ 己あ彼處へ十日も通つ
たんだ。」
「馬鹿だな貴様は。」
「お前もいつそ萬國館へ出るんだつたな、お前
の面ならたしかに土人とまちげへられたよ。」
「おい、まあちゃん、もう何時だらう？」
さう云つたのは濱田でした。濱田は酒を飲ま
ないので一番眞面目のやうでした。
「さあ、何時だらう！ 誰か時計を持つてゐね
えか？」
「うん、持つてゐる、——」
と、中村が云つて、マツチを握りました。
「や、もう十時二十分だぜ。」
「大丈夫よ、十一時半にならなければパパは歸
つて来ないんだよ。此れからぐるりと長谷の通
りを一と廻りして歸らうぢやないの。あたし此
のなりで賑やかな所を歩いて見たいわ。」
「賛成賛成！」
と、關が大聲で怒鳴りました。
「だけど此の風で歩いたら一體何に見えるだら
う？」
「どう見ても女團長だわ。」

「あたしが女團長なら、みんなはあたしの部
下なんだよ。」
「白波四人男ぢやねえか。」
「それぢやあたしは猶天小僧よ。」
「エエ、女團長河合ナオミは……」
と、熊谷が活辯の口調で云ひました。
「……夜陰に乗じ、黒きマントに身を包み、
……」
「うふふ、お止しよそんな下司張つた聲を出
すのは！」
「……四名の悪漢を引率いたして、由比が濱の
海岸から……」
「お止しよまあちゃん！ 止さないかつた
ら！」
「お止しよとナオミが、平手で熊谷の頬ツペた
を打ちました。」
「あ痛え……」下司張つた聲は己の地聲さ、己
あ浪花節語りにならなかつたのが、天下の恨事
だ。」
「だけれどメリー・ピクフオードは女團長に
やならないぜ。」
「それぢや誰だい？ プリシラ・デインか
い？」
「うん、さうだ、プリシラ・デインだ。」

「ラ、ラ、ラ、ラ、」
と濱田が再びダンス・ミュージックを唄ひな
がら、踊り出した時でした。私は彼がステツ
クを踏んで、ふいと後ろ向きになりさうにした
ので、素早く木蔭へ隠れましたが、同時に濱田
の「おや！」と云ふ聲がしました。
「誰？——河合さんぢやありませんか？」
みんな俄かに、しーんと黙つて、立ち止まつた
まま、闇を透かして私の方を振り返りました。
「しまつた」と思つたが、もう駄目でした。
「パパさん？ パパさんぢやないの？ 何して
るのよそんな所で？ みんなの仲間へお這入
んなさいよ。」
ナオミはいきなりツツカツカと私の前へやつ
て来て、ばつとマントを開くや否や、腕を伸ばし
て私の肩へ載せました。見ると彼女は、意外
も意外、マントの下に一糸をも纏つてゐませ
んでした。
「何だお前は！ お前は己に恥を掻かせたな！
ばいた！ 淫褻！ ちごくー！」
「おほほほほ、」
その笑ひ聲には、酒の匂ひがぶんぶんしまし
た。私は今迄、彼女が酒を飲んだところを一
度も見たことはなかつたのです。

ナオミが私を嵌めてゐたからくりの一端は、
その晩とその明くる日と二日ばかりで、やつと
剛情な彼女の口から聞き出すことが出来まし
た。
私が推察した通り、彼女が鎌倉へ来たがつた
のは、矢張り熊谷と遊びたかつたからのなさ
うです。扇が谷に關の親類が居ると云ふのは眞
つ赤な嘘で、長谷の大久保の別荘こそ、熊谷の
叔父の家だつたのです。いや、そればかりか、
私が現に借りてゐる此の離れ座敷も、實は熊
谷の世話なのでした。此の植木屋は大久保の
邸のお出入りなので、熊谷の方から談じ込んで、
どう話をつけたものか、前に居た人に立ち退
いて貰ひ、そこへ私たちを入れるやうにした
のでした。云ふ迄もなく、それはナオミと熊谷
とが相談の上でやつたことで、杉崎女史の周旋
だとか、東洋石油の重役云々は、全くナオミ
の出脚目に過ぎなかつたのです。さてこそ彼女
は、自分でどんな事運んだ譯でした。植樹
のかみさんの話に依ると、彼女が始めて下檢
分に來た折には、熊谷の「若様」と一緒にやつて
来て、恰も「若様」の一家の人であるかのやうに

振る舞つてゐたばかりでなく、前からさう云ふ
觸れ込みだつたものだから、よんどころなく先
のお客を購つて、部屋を此方へ明け渡したのだ
と云ふことでした。
「おかみさん、まことに飛んだ係り合ひで御迷
惑をかけて済みませんが、どうかおかみさんの
知つていらつしやるだけの事を私に話してく
れませんか。どんな場合でもあなたの名前を出
すやうなことはしませんが、私は決して此
の事に就いて、熊谷の方へ談じ込む氣はない
です。事實を知りたいだけなんです。」
私は明くる日、今まで休んだことのない會
社を休んでしまひました。そして嚴重にナオ
ミを監視して、「一歩も部屋から出てはならな
い」と堅く云ひつけ、彼女の衣類、穿き物、財
布を悉く纏めて母屋に運び、その一室でか
みさんを監視しました。
「ぢや何ですか、もうずつと前から、私の留
守中二人は往き來してゐたんですか？」
「はあ、それは始終でございました。若様の方
からお越しになりましたり、お嬢さまの方から
お出かけになりましたり、……」
「大久保さんの別荘には全體誰がゐるんです
ね？」

「今年に皆さんが本宅の方へお引き揚げにな
りまして、時にお見えにはなりませんけれど、い
つも大崎熊谷さんの若様お一人でございます
の。」

「ではあの、熊谷君の友達はどうでしたらう？
あの連中も折折やつて来たでせうか？」

「はあ、ちよくちよくおいでになりましたござ
います。」

「それは何ですか、熊谷君が連れて来るん
で、めいめい勝手に来るんですか？」

「さあ」と云つて、——これは私が後で気がついた
事なのですが、その時かみさんは非常に困つ
たらしい様子でした。

「御めいめでおいでになつたり、若様と
御一緒だつたり、いろいろのやうでございま
したが、……」

「誰か、熊谷君の外にも、一人で来た者があ
るでせうか？」

「あの濱田さんと仰つしやるお方や、それから
外のお方たちも、お一人でお越しになつた事
がございましたかと存じますが、……」

「ちやあそんな時は何處かへ誘つて出るの
かね？」

「昨夜のあめざまは、あれは何だ？ お前はあ
んなざまをしなからそれでも潔白だと云へる積
りか？」

「あれはみんながあたしを無理に酔つ排はし
て、あんななりをさせたんだもの。——ただあ
あやつて表を歩いただけぢやないの。」

「よし！ それぢや飽く迄潔白だと云ふん
だな？」

「ええ、潔白だわ。」

「お前はそれを誓ふんだな！」

「ええ、誓ふわ。」

「よし！ その一言を忘れずに居ろよ！ 己
はお前の云ふことなんか、もう一言も信用し
ちや居ないんだから。」

それきり私は、彼女と口をききませんでし
た。

私は彼女が、熊谷に通牒したりすることを
恐れて、書翰箋、封筒、インキ、鉛筆、万年筆、郵便
切手、一切のものを取り上げてしまひ、それを
彼女の荷物と一緒に植巻のかみさんに預けまし
た。そして私が留守の間にも決して外出す
ることが出来ないやうに、赤いちぢみのガウン
一枚を着せて置きました。それから私は、三日
日の朝、會社へ行くやうな風を装つて鎌倉を

「いいえ、大抵内でお話しになつていらつしや
いました。」

「私に一番不可解なのは此の一事でした。ナオ
ミと熊谷とが怪しいとすれば、なぜ邪魔になる
連中を引つ張つて来たりするのだらう？ 彼等
の一人が訪ねて来た時、ナオミがそれと話して
ゐるとはどう云ふ譯だらう？ 彼等がみんなナ
オミを狙つてゐるとしたら、何故喧嘩が起らな
いだらう？ 昨夜もあんなに四人の男は仲好
くぶざけてゐたぢやないか。さう考へると再び
私は分らなくなつて、果してナオミと熊谷と
が怪しいかどうかさへ、疑問になつてしまふの
でした。」

ナオミはしかし、此の點になると容易に口を
開きませんでした。自分は別に深い企みがあつ
たのではない、ただ大勢の友達と騒ぎたかつ
ただけなのだ、何處までもさう云ひ張るのです。
では何のためにああ危険に、私を欺したの
かと云ふと、

「だつて、パパさんがあの人たちを疑つてゐ
て、餘計な心配をするんだもの。」

と云ふのでした。

「それぢや、關の親類の別荘があると云つたの
はどう云ふ譯だ？ 關と熊谷とどう違ふんだ
い？」

さう云はれると、ナオミははたと深辭に窮し
たやうでした。彼女は急に下を向いて、黙つて、
唇を噛みながら、上眼づかひに穴のあくほど
私の顔を見込んでゐました。

「でもまあやんが一番疑ぐられてゐるんだも
の、——まだ關さんにして置いた方がいくら
いいと思つたのよ。」

「まあやんなんて云ふのはお止し！ 熊谷と
いふ名があるんだから！」

我慢に我慢をしてゐた私は、そこでどうと
う爆發しました。私は彼女が「まあやん」と
呼ぶのを聞くと、むしづが走るほどイヤだつた
のです。

「おい！ お前は熊谷と關係があつたんだら
う？ 正直のことを云つておしまひ！」

「關係なんかありやしないわよ、そんなにあた
しを疑ぐるなら、證據でもあるの？」

「證據がなくつても己にはちやんと分つて
るんだ。」

「どうして？——どうして分るの？」

ナオミの態度は凄く落ち着いたものでし
た。その口邊には小憎らしい薄笑ひさへ浮かん
でゐました。

「どうして？——どうして君が？」

「ナオミさんから貰つたんです。——もうさう
云へば、僕がどうして此處に來て居るか、大凡そ
あなたはお察しになつたと思ひますが、……」

「鍵を？——どうして君が？」

「ナオミさんから貰つたんです。——もうさう
云へば、僕がどうして此處に來て居るか、大凡そ
あなたはお察しになつたと思ひますが、……」

「鍵を？——どうして君が？」

「ナオミさんから貰つたんです。——もうさう
云へば、僕がどうして此處に來て居るか、大凡そ
あなたはお察しになつたと思ひますが、……」

「鍵を？——どうして君が？」

「ナオミさんから貰つたんです。——もうさう
云へば、僕がどうして此處に來て居るか、大凡そ
あなたはお察しになつたと思ひますが、……」

「鍵を？——どうして君が？」

「ナオミさんから貰つたんです。——もうさう
云へば、僕がどうして此處に來て居るか、大凡そ
あなたはお察しになつたと思ひますが、……」

濱田は静かに面を上げて、啞然としてゐる私の顔を、まともに、そして眩しさに、ちつと見ました。その表情にはいざとなると正直な、お坊つちやんらしい氣品があつて、いつもの不良少年の彼ではありませんでした。

「河合さん、僕はあなたが今日出し抜けに此處へおいでになつた理由も、想像がつかなくはありませぬ。僕はあなたを欺してゐたんです。それに就いてはたとへどんな制裁でも、甘んじて受ける積りなんです。今更こんな事を云ふのは變ですけれど、僕はとうから、一度あなたにかう云ふ所を發見される迄もなく、自分の罪を打ち明けようと思つてゐました。……」

「河合さん、どうか僕を救つて云つてくれませぬか、……」

「しかし、濱田君、僕にはまだよく分つてゐないんだ。君はナオミから鍵を貰つて、此處へ何

も三月ぐらゐ立つてから、——」

「その時分は何處で逢つてたんです？」

「やつぱり此處の、大森のお宅でした。午前中はナオミさんは何處へも稽古に行かないし、獨りで淋しくつて仕様がなから遊びに来てくれと云はれたんで、最初はそのつもりで訪ねて来たんです。」

「ふん、ぢや、ナオミの方から遊びに来いと云つたんですね？」

「いえ、さうでした。それに僕はあなたと云ふものがあることを、全く知りませんでした。自分の國は田舎の方だものだから、大森の親類へ来てゐるので、あなたとは従兄弟同士の間柄だと、ナオミさんは云つてゐました。それがさうでないと知つたのは、あなたが始めてエルドラドのダンスに來られた時分でした。けれども僕は、……もうその時はどうすることも出来なくなつてゐたのです。」

「ナオミが此の夏、鎌倉へ行きたがつたのは、君と相談の結果なのぢやないでせうか？」

「いいえ、あれは僕ぢやないんです、ナオミさんに鎌倉行きをすすめたのは熊谷なんです。」

濱田はさう云つて、急に一段と語氣を強めて、「河合さん、欺されたのはあなたばかりぢやなしに來てゐたと云ふんですか？」

「此處で、……此處で今日……ナオミさんと逢ふ約束になつてゐたんです。」

「え？ ナオミと此處で逢ふ約束に？」

「ええ、さうです、……それも今日だけぢやないんです。今迄何度もさうしてたんです。……」

「だんだん聞くと、私たちが鎌倉へ引き移つてから、彼とナオミとは此處で三度も密會してゐると云ふのでした。つまりナオミは、私が會社へ出て行つたあとで、一と汽車か二た汽車おくらせて、大森へやつて來るのださうです。いつも大森朝の十時前後に來て、十一時半には歸つて行く。それで鎌倉へ戻るのはおそくも午後一時頃なので、彼女がまさかその間に大森まで行つて來たらうとは、宿の者にも氣がつかれないやうにしてある。そして濱田は、今朝も十時に落ち合ふ手筈になつてゐたので、さつき私が上つて來たのを、てつきりナオミが來たのだとばかり思つてゐた、と、さう彼は云ふのでした。」

此の驚くべき自白に對して、最初に私の胸を一杯に充たしたものは、ただ茫然たる感じより外ありませんでした。開いた口が塞がらない、何とも彼とも話にならない、事實その通り

の氣持ちでした。斷つて置きますが私はその時三十二歳で、ナオミの歳は十九でした。十九の娘が、斯くも大膽に、斯くも好みに、私を欺いて居ようとは！ ナオミがそんな恐ろしい少女であるとは、今の今まで、いや、今になつても、まだ私には考へられないくらゐりました。

「君とナオミとは、一體いつからさう云ふ關係になつてゐました？」

濱田を敵す敵さないは寧ろ二の次ぎの問題として、私は飽く迄も根掘り葉掘り、事實の真相を知りたいと思ふ願ひに燃えました。

「それはよほど前からなんです、多分あなたが僕を御存じにならない時分、……」

「ぢや、いつだつたか君に始めて會つたことがありましたっけね、——あれは去年の秋だつたでせう、僕が會社から歸つて來ると、花壇のところまで君がナオミと立ち話をしてゐたのは？」

「ええ、さうでした、彼れ此れちやうど一年になりませぬ。——」

「すると、もうあの時分から？」

「いや、あれよりもつと前からでした。僕は去年の三月からピアノを習ひに、……」

「通ひ出したんですが、あそこで始めてナオミさんを知つたんです。それから間もなく、何で

つてゐました。事實はどうか知りませんが、ナオミさんの話だと、あなたはナオミさんに學問を仕込むつもりで美育なすつただけなので、同棲はしてゐるけれど、夫婦にならなけりやいけないと云ふ約束がある譯でもない。それにあなたとナオミさんとは歳も大變違つてゐるから、結婚しても幸福に暮らせるかどうか分らないと云ふやうな、……」

「そんな事を、……そんな事をナオミが云つたんですね。」

「ええ、云ひました。近いうちにあなたに話して、僕と夫婦になれるやうにするから、もう少し時期を待つてくれると、何度も何度も僕に堅い約束しました。そして熊谷とも手を切ると云ひました。けれどもみな出目だつたんです。ナオミさんは初めツから、僕と夫婦になるつもりなんかまるツきりなかつたんです。」

「ナオミはそれぢや、熊谷君ともそんな約束をしてゐるんでせうか？」

「さあ、それはどうだか分りませんが、恐らくさうぢやなからうと思ひます。ナオミさんは飽きッばいたぢですし、熊谷の方だつてどうせ眞面目ぢやないんです。あの男は僕なんかよりずつと狡猾なんですから、……」

「それは一昨日、あなたに見つかつたあの晩でした。ナオミさんは、僕があつたの晩すねてゐたもんですから、御機嫌を取つてもりか何かで、明後日大森へ来てくれるつて云つたんですが、勿論僕も悪いんですよ。僕はナオミさんと絶交するか、でなけりや熊谷と喧嘩をするのが當り前だのに、それが僕には出来ななんです。自分も卑屈だと思ひながら、気が弱くつて、ついぐずぐずに双等と附き合つてゐたんです。ですからナオミさんに欺されたとは云ふもの、つまり自分が馬鹿だつたんですよ。」

「私は何だか、自分のことを云はれてゐるやうな気がしました。そして「松淺」の座敷へ通つて、さし向ひに据わつて見ると、どうやら此の男が可愛くさへなつて来るのでした。」

十七

「さあ、濱田君、君が正直に云つてくれたので、僕は非常に氣持がいい。兎に角一杯やりませんか。」

不思議なもので、私は最初から濱田を憎む心はなかつたのですが、こんな話をきかされて見ると、寧ろ同情相憐れむ——と、云ふやうな氣持になつてしまつた。そしてそれだけ、一層熊谷が憎くなりました。熊谷こそは二人の共同の敵である云ふ感じを強く抱きました。

「濱田君、まあ何にしてもこんな所でしゃべつてもゐられないから、何處かで飯でも喰ひながら、ゆつくり話さうぢやありませんか。まだまだ澤山聞きたいことがあるんですから。」

「私は彼を誘ひ出して、洋食屋では工合が悪いので、大森の海岸の「松淺」へ連れて行きました。」

「それぢや河合さんも、今日は會社をお休みになつたんですか。」

「ええ、昨日も休んぢまつたんです。會社の方も此の頃は又意地悪く忙しいんで、出なけりや悪いんですけれど、一昨日以来頭がむしむしや、しちまつて、とてもそれどころぢやないもんだから、……」

「ナオミさんは、あなたが今日大森へ入らつたさう云つて私は、杯をさしました。」

「ぢや河合さんは、僕を救つて下さるんですか。」

「救すも救さないもありませんよ。君はナオミに欺されてゐたので、僕とナオミとの間柄を知らなかつたと云ふのだから、ちつとも罪はない譯です。もう何とも思つてやしません。」

「いや、有り難う、さう云つて下されば僕も安心するんです。」

やるのを、知つてゐますかしら？」

「僕は昨日は一日内にゐましたけれど、今日は會社へ出ると云つて来たんです。あの女のこゝとだから、或ひは内氣がついたかも知れないが、まさか大森へ來るとは思つてゐないでせう。僕は彼奴の部屋を捜したら、ラブ・レターでもありやしないかと思つたもんだから、それで突然寄つて見る氣になつたんです。」

「ああ、さうですか、僕はさうぢやない、あなたが僕を掴まへに來たと思つたんです。しかしそれだと、後からナオミさんもやつて來やしないでせうか。」

「いや、大丈夫、……僕は留守中、着物は財布も取り上げちまつて、一歩も外へ出られないやうにして來たんです。あのなりぢや門口へだつて出られやしませんよ。」

「へえ、どんななりをしてゐるんですか。」

「ほら、君も知つてゐる、あの桃色のちぢみのガウンがあつたでせうか。」

「ああ、あれですか。」

「あれ一枚で、細帯一つ締めてゐないんだから、大丈夫ですよ。まあ私眼が極へ入れられたやうなもんです。」

「しかし、さつき彼處へナオミさんが這入つてよ。」

云ふのも可笑しいですが、熊谷は悪い奴ですか、注意なさいといけませんよ。僕は決して恨みがあるから云ふんぢやないんです。熊谷でも國でも中村でも、あの連中はみんな良くない奴等なんです。ナオミさんはそんなに悪い人ぢやありません。みんな彼奴等が悪くさせてしまったんです。……」

濱田は感動の籠つた聲で云ふと同時に、その両眼には再び涙を光らせておりました。さては此の青年は、これほど眞面目にナオミを戀してゐたのだつたか、さう思ふと私は感謝したいやうな、濟まないやうな気がしました。若しも濱田は、私と彼女とが既に完全な夫婦であると云はれなかつたら、進んで彼女を譲つてくれと云ひ出すつもりだつたのでせう。いやそれどころか、たつた今でも、私が彼女をあきらめさへしたら、彼は即座に彼女を引き取ると云ふのでせう。此の青年の眉宇の間に溢れてゐるいぢらしいほどの熱情から、その決心があることは疑ふべくもないのでした。

濱田君、僕は御忠告に従つて、いづれ何とか二三日のうちに處置をつけます。そしてナオミが熊谷とほんとうに手を切つてくれればよし、さうしなければもう一日も一緒にゐるのは不

快ですから、……」

「けれど、けれどあなたは、どうかナオミさんを捨てないで上げて下さい。」

と、濱田は急いで私の言葉を遮つて云ひました。

「もしもあなたに捨てられちまへば、きつとナオミさんは墮落します、ナオミさんに罪はないんですから。……」

「有り難う、ほんとに有り難う！僕はあなたの御好意をどんなに嬉しく思ふか知れない。そりや僕だつて十五の時から面倒を見てゐるんですもの、たとへ世間から笑はれたつて、決してあれを捨てようなんて氣はないんです。ただあの女は剛情だから、何とか巧く悪い友達と切れるやうに、それを察してゐるだけなんです。」

「ナオミさんはなかなか意地張りですからね。詰まらないことでも、いゝ喧嘩になつちまふと、もう取り返しがつきませんから、その處を上手におやりになつて下さい、生意氣なことを云ふやうですけれど。……」

私は濱田に何となく、「ありがと」といふ言葉を繰り返しました。二人の間に年餘の相違、地位の相違と云ふやうなものもなかつたら、そして私たちが前からもつと親密な仲であつたら、

私は恐らく彼の手を執り、互ひに抱き合つて泣いたかも知れません。私の氣持ちは少くともそのくらゐまで行つてゐました。

「どうか濱田君、これから後君だけは遊びに来て下さい。遠慮するには及びませんから。」

と、私は別れ際にさう云ひました。

「ええ、だけれど當分は何へないかも知れませんよ。」

と、濱田はちよつともちもちして、顔を見られるのを厭ふやうに、下を向いて云ひました。

「どうしてですか？」

「當分、……ナオミさんのことを忘れることが出来る迄は。……」

さう云つて彼は、涙を隠しながら帽子を冠つて、「さよなら」と云ひさま、「松濤」の前を品川の方へ、電車にも乗らずに歩いて行きました。

私はそれから兎に角會社へ出かけましたが、勿論仕事など手につく筈はありません。ナオミの奴、今頃はどうしてゐるだらう。寢間着一枚で放つたらかして来たのだから、よもや何處へも出られる筈はないだらう。と、さう思ふ傍からやつぱりそれが氣にならずにはゐませんでした。それと云ふのが、何しろ實に意外な

事が後から後からと起つて来て、欺された上にも欺されてゐたことが分るに随ひ、私の神経は異常に鋭く、病的になり、いろいろな場合を想像したり臆測したりし始めるので、さうなつて来るとナオミと云ふものが、とても私の智慧では及ばない神變不可思議の通力を備へ、又いつの間にか何をしてゐるか、ちつとも安心はならないやうに思はれて来ると、己はかうしてはゐられない、どんな事件が留守の間

に降つて湧いてゐるかも知れない。——私は會社を去つてそこにして、大急ぎで鎌倉へ歸つて来ました。

「やあ、唯今、」

と、私は門口に立つてゐる上さんの顔を見るなり云ひました。

「はあ、いらつしやるやうでございますよ、」

「それで私はほつとしながら、」

「誰か訪ねて来た者はありませんかね？」

「いいえ、どなたも、」

「どうですか？ どんな様子ですかね？」

私は頭で離れの方をさしながら、上さんに眼くばせしました。そしてその時氣が附いたのですが、ナオミの居るべきその座敷は、障子が

締まつて、ガラスの中は薄暗く、ひつそりとして、人氣がないやうに見えるのでした。

「さあ、どんな御様子か、——今日は一日ぢつと被處に這入つていらつしやいますけれど、……」

ふん、とうとう一日引つ込んでゐたか。だがそれにしてもイヤに様子がおかしいのはどうしたんだらう、どんな顔つきをしてゐるだらうと、まだ幾分かは胸騒ぎに驅られながら、私はそつと縁側へ上り、離れの障子を明けました。

と、もう夕方の六時が少し廻つた時分、明りのとどかない部屋の奥の隅の方に、ナオミはだらしない恰好をして、ふん反り返つてうぐうぐう眠つてゐるのでした。蚊に喰はれるので、彼方へ

轉がり、此方へ轉がりしたものでせう、私のク

レベネットを出して腰の周りを包んでゐました

たが、それで器用に隠されてゐるのはほんの下の腹のところだけで、紅いちぢみのガウンから

眞つ白な手足が、湯立つたキヤベツの莖のやうに浮き出でゐるのが、さう云ふ時には又運悪く、

變に蠱惑的に私の心を掻き撚りました。私は

は黙つて電燈をつけ、獨りでさつさと和服に着

換へ、押し入れの戸をわざとガタビシ云はせま

したけれど、それを知つてか知らないでか、ナ

オミの氣息はまだすやすやと聞えました。

「おい、起きないか、夜ぢやないか。……」

三十分ばかり、用もないのに机に凭れて、手紙を書くやうな風を装つてゐた私は、とうとう根負けがしてしまつて聲をかけました。

「ふむ、……」

と云つて、不承不承に、臨さうな返辭をしたのは、私が二三度怒鳴つてからでした。

「おい！ 起きないかつたら！」

「ふむ、……」

さう云つたとき、又暫くは起きさうにもしませんでした。

「おい！ 何してるんだ！ おいつたら！」

私は立ち上つて、足で彼女の腰のあたりを亂暴にぐんぐん揺す振りました。

「あーあ」

と云つて、先づによつきりとそのしなしなしした二本の腕を眞つ直ぐに伸ばし、小さな、紅い握り拳をぎゅつと固めて前へ突き出し、生あくびを噛み殺しながらやをら體を擡げたナオミ

は、私の顔を手と倫んで、すぐ側方を向いてしまつて、足の甲だの、腰のあたりだの、背筋の方だの、蚊に喰はれた痕を顔りにぼりぼり掻き始めました。寢過ぎたせゐか、それともこつ

そり泣いたのであらうか、その眼は充血して、髪は化粧物のやうに亂れて、両方の肩へ垂れてゐました。

「さ、着物を着換へる、そんな風をしてゐないで。」
母屋へ行つて着物の包みを取つて来てやり、彼女の前へ放り出すと、彼女は一言も云はないで、つんとしてそれを着換へました。それから晩飯の膳が運ばれ、食事を済ましてしまふ間、二人はとうとう孰方からも物を云ひかけませんでした。

此の、長い、鬱陶しい眠み合ひの間に、私はどうして彼女に泥を吐かせたらいいか、此の剛情な女を素直に詫まらせる道はないだらうかと、ただそればかりを考へました。濱田の云つた忠告の言葉、——ナオミは意地ツ張りだから、ふいとしたことで喧嘩をすれば、もう取り返しがつかなくなると云ふことも、無論私の頭にもありました。濱田があんな忠告をしたのは、恐ら、彼の言動から來てゐるのでせうが、私にしてもさう云ふ覺えはたびたびあります。何より彼より彼を怒らせてしまつては一番いけない。彼女が、つむじを曲げないやうに、決して喧嘩にならないやうに、さうかと云つて此方

が甘く見られないやうに、上手に切り出さなければならぬ。で、それには此方が裁判官のやうな態度で問ひ詰めて行くのは最も危険だ。「お前は熊谷と此れ此れだらう？」と、斯う正面から肉迫すれば、「へえ、さうです」と恐れ入るやうな女ではない。きつと彼女は反抗する、飽くまで知らぬ存ぜぬと云ひ返る。すると此方もチリチリして来て細癢を起す。もうさうなつたらおしまひだから、押し問答をすることは兎に角よくない。此れは彼女に泥を吐かせると云ふやうな考へは止めにし、いつそ此方から今日の出来事を話してしまつた方がいい。さうすればいくらか剛情でもそれを知らないとは云へないだらう。よし、さうしようと思つたので、「僕は今日、朝の十時頃に大森へ寄つたら濱田に遇つたよ。」と、先づそんな風に云つて見ました。

に飯を喰つたんだ。——」
もうそれからはナオミは返辭をしませんでした。私は彼女の顔色に絶えず注意を配りながら、あまりに皮肉にならないやうに諄諄と話して行きましたが、語り終つてしまふまで、ナオミはちつと下を向いて聴いてゐました。そして恐びれた様子はなく、ただ頬の色が心持ち青ざめただけでした。
「濱田がさう云つてくれたので、僕はお前に聞く迄もなくみんな分つてしまつたんだ。だからお前は何も剛情を張ることはない。悪かつたらば悪かつた、さう云つてくれさへすればいいんだ。……どうだい、お前、悪かつたかね？」
「ナオミがなかなか答へないので、ここで私の心配してゐた押し問答の形勢が持ち上りさうになりましたが、どうだね？ ナオミちゃん」と、私は出来るだけ優しい口調で、

するとナオミは、好い聲に、頭で「うん」と頷きました。

「さつと分つたね？ 此れから決して熊谷やんかと遊びはしないね？」

「うん」

「きつとだらうね？ 約束するね？」

「うん」

十八

その晩、私とナオミとは最早や何事もなかつたやうに寢物語をしましたけれど、しかし正直の氣持を云ふと、私は決して心の底から綺麗サツパリとはしませんでした。自分が今、……此の女は、既に清浄潔白ではない。

……此の考へは私の胸を……
……此の考へは私の胸を……
……此の考へは私の胸を……

云ふことに、その大半があつたのですから、つまりナオミと云ふものは、私に取つては自分が栽培したところの一つの果實と同じことです。私はその實が今日のやうに立派に成熟する迄に随分さまざまの丹精を凝らし、努力をかけた。だからそれを味はふのは栽培者たる私の當然の報酬であつて、他の何人にもそんな権利はない筈であるのに、それが何時の間にかあかの他人に皮を剥がられ、齒を立てられてゐたのです。さうしてそれは、一旦汚されてしまつた以上、いかに彼女が罪を詫びても取り返しのつかないことです。彼女の肌と云ふ貴い聖地には、二人の賊の泥にまみれた足痕が永久に印せられてしまつたのです。これは思へば思ふほど口惜しいことの限りでした。ナオミが憎いと云ふのでなしに、その出来事が憎くて滴りませんでした。

「讓治さん、勘忍してね、……」
ナオミは私が黙つて泣いてゐるのを見ると、晝間の態度とは打つて變つて、さう云つてくれましたけれど、私はやはり泣いて頷くばかりでした。「ああ勘忍するよ」と口では云つても、取り返しのつかないと云ふ無念さは消すことが出来ませんでした。

の時分、私は彼女を「ナオミ」と呼びつけにしてゐたのです。

「何だつてそんな……寝たふりなんぞしてゐるんだ？ そんなに己が嫌ひなのかい？……」

「寝たふりなんかしてゐるやしないわ、寝ようと思つて眼を潰つてゐるだけなんだわ。」

「ぢやあ眼をお開き、人が話をしようとするのに眼を潰つてゐる法はなからう。」

さう云ふとナオミは、仕方なしにうつつりと眼瞼を開きましたが、睫毛の蔭から凄かに此方を覗いてゐる細い眼つきは、その表情を一層冷酷なものにしました。

「え？ お前は己が嫌ひなのかい？ さうならさうと云つておくれ。……」

「なぜそんなことを尋ねるの？……」

「己には大概、お前の素振り分つてゐるんだ。此の頃の己たちは喧嘩こそしないが、心の底では互ひに鎗を削つてゐる。これでも己たちは夫婦だらうか？」

「あたしは鎗を削つてやしない、あなたこそ削つてゐるんじゃないの。」

「それはお互ひさまだと思ふ。お前の態度が己に安心を與へないから、己の方でもつい疑ひの眼を以て……」

「ふん」

とナオミは、その鼻先の皮肉な笑ひで私の言葉を打つ切つてしまつて、

「ぢやあ聞きますが、あたしの態度に何か怪しい所があるの？ あるなら證據を見せて頂戴。」

「そりや、證據と云つてはありやしないが、……」

「證據がないのに疑ふなんて、それはあなたが無理ぢやないの。あなたがあたしを信用しないで、妻としての自由も権利も與へないで置ながら、夫婦らしくしようとしたつてそりや駄目だわ。ねえ、讓治さん、あなたはあたしが何も知らずにゐると思つて？ 人の手紙を内證で讀んだり、探偵みたいに跡をつけたり、……あたしちやんと知つてゐるのよ。」

「それは己も悪かつたよ、けれども己も以前の事があるもんだから、神経過敏になつてゐるんだ。それを察してくれないぢや困るよ。」

「ぢや、一體どうしたらいいのよ？ 以前の事はもう云はないつて約束ぢやないの。」

「己の神経がほんたうに安まるやうに、お前が心から打ち解けてくれ、己を愛してくれたらいいんだ。」

「でもさうするにはあなたの方で信じてくれなけりやあ、……」

「ああ信じてよ、もう此れからはきつと信じてよ。」

私はここで、男と云ふものの淺ましさを白狀しなければなりません、書間は兎に角、夜の場合になつて来ると私はいつも彼女に負けました。私が負けたと云ふよりは、私の中にある獸性が彼女に征服されました。事實を云へば私は彼女をまだまだ信じる氣にはなれない、にも拘らず私の獸性は盲目的に彼女に降伏することを強ひ、凡べてを捨てて妥協するやうにさせてしまひます。つまりナオミは私に取つて、最早や貴い寶でもなく、有り難い偶像でもなくなつた代りに、一個の娼婦となつた譯です。そこには戀人としての清さも、夫婦としての情愛もない。もうそんなものは昔の夢と消えてしまつた！ それならどうしてこんな不貞な、汚れた女に未練を残してゐるのかと云ふと、全く彼女の肉體の魅力、ただそれだけに引き摺られつゝあつたのです。此れはナオミの墮落であつて、同時に私の墮落でもありました。なぜなら私は、男子としての節操、潔癖、純情を捨て、過去の誇りを抛つてしまつて、娼婦の前に身

を屈しながら、それを取とも思はないやうになつたのですから。いや時としてはそのしむべき娼婦の姿を、さながら女神を打ち仰ぐやうに崇拜さへもしたのであります。

ナオミは此の此の弱點を面の憎いほど知り抜いてゐました。自分の肉體が男に取つては抵抗し難い靈感であること、夜にさへなれば男を打ち負かしてしまへること、——かう云ふ意識を持ち始めた彼女は、書間は不思議なくらい不愛想な態度を示しました。自分はここにある一人の男に自分の「女」を賣つてゐるのだ、それ以外には何も此の男に興味もなければ因縁もない、と、そんな様子をありありと見せて、恰も路傍の人のやうにむらツとそつけない清まし返りで、たまに私が話しかけてもろくすつぽう返辭もしません。是非必要な場合にだけ「はい」とか「いいえ」とか答へるだけです。かういふ彼女のやり方は、私に對して消極的に反抗してゐる心を現はし、私を極度に侮蔑する意を示さうとするものであるとしか、私には思へませんでした。讓治さん、あたしがいくら冷淡だつて、あなたは怒る權利はないわよ。あなたはあたしから取れる物だけ取つてゐるんじゃないぢやありませんか。それであなたは満足してゐるぢやありませんか。

「ふん」

とナオミは、その鼻先の皮肉な笑ひで私の言葉を打つ切つてしまつて、

「ぢやあ聞きますが、あたしの態度に何か怪しい所があるの？ あるなら證據を見せて頂戴。」

「そりや、證據と云つてはありやしないが、……」

「證據がないのに疑ふなんて、それはあなたが無理ぢやないの。あなたがあたしを信用しないで、妻としての自由も権利も與へないで置ながら、夫婦らしくしようとしたつてそりや駄目だわ。ねえ、讓治さん、あなたはあたしが何も知らずにゐると思つて？ 人の手紙を内證で讀んだり、探偵みたいに跡をつけたり、……あたしちやんと知つてゐるのよ。」

「それは己も悪かつたよ、けれども己も以前の事があるもんだから、神経過敏になつてゐるんだ。それを察してくれないぢや困るよ。」

「ぢや、一體どうしたらいいのよ？ 以前の事はもう云はないつて約束ぢやないの。」

「己の神経がほんたうに安まるやうに、お前が心から打ち解けてくれ、己を愛してくれたらいいんだ。」

「でもさうするにはあなたの方で信じてくれなけりやあ、……」

「ああ信じてよ、もう此れからはきつと信じてよ。」

私はここで、男と云ふものの淺ましさを白狀しなければなりません、書間は兎に角、夜の場合になつて来ると私はいつも彼女に負けました。私が負けたと云ふよりは、私の中にある獸性が彼女に征服されました。事實を云へば私は彼女をまだまだ信じる氣にはなれない、にも拘らず私の獸性は盲目的に彼女に降伏することを強ひ、凡べてを捨てて妥協するやうにさせてしまひます。つまりナオミは私に取つて、最早や貴い寶でもなく、有り難い偶像でもなくなつた代りに、一個の娼婦となつた譯です。そこには戀人としての清さも、夫婦としての情愛もない。もうそんなものは昔の夢と消えてしまつた！ それならどうしてこんな不貞な、汚れた女に未練を残してゐるのかと云ふと、全く彼女の肉體の魅力、ただそれだけに引き摺られつゝあつたのです。此れはナオミの墮落であつて、同時に私の墮落でもありました。なぜなら私は、男子としての節操、潔癖、純情を捨て、過去の誇りを抛つてしまつて、娼婦の前に身

「お前は誤解してゐるんだ。僕はお前を友達のやうに愛してゐた、だが此れからは眞實の妻として愛する。……」

「それであなたは、昔のやうな幸福が戻つて来ると思ふのかしら？」

「昔のやうではないかも知れない、けれども眞の幸福が、……」

「いや、いや、あたしはそれなら澤山だわ。」

「さう云つて彼女は、私の言葉が終らないうちに激しく冠を振るのでした。」

十九

「あたし、昔のやうな幸福が欲しいのでなければ、あなたにも欲しくはないの。あたしさう云ふ約束であつたの所へ来たんだから。」

「ナオミがどうしても子供を産むのが厭だと云ふなら、私の方には又もう一つ手段がありまして。それは大森の『お伽草紙』の家を雇んで、もつと眞面目な、常識的な家庭を持つと云ふ一事です。全體私はシンプル・ライフと云ふ美名に憧れて、こんな奇妙な、甚だ實用的でない給かきのアトリニに住んだのですが、われわれの

生活を自堕落にしたのは此の家のせりも確かにあるのです。かう云ふ家に若い夫婦が女中も置かずに住まつてゐれば、却つてお互ひに我が儘が出て、シンプル・ライフがシンプルでなくなり、ふいだらになるのは已むを得ない。それで私は、私の留守中ナオミを監視するために、小間使ひを一人と飯焚きを一人置くことにする。主人夫婦と女中が二人、これだけが住まへるやうな、所謂『文化住宅』でない純日本式の、中流の紳士向きの家へ引き移る。今迄使つてゐた西洋家具を賣り拂つて、凡べてを日本風の家具に取り換へ、ナオミのために特にピアノ一臺買つてやる。かうすれば彼女の音楽の稽古も移住してやる。かうすれば彼女の音楽の稽古も移住してやる。かうすれば彼女の音楽の稽古も移住してやる。……

「小間使ひには大へん都合のいいのがある、内使で使つてゐた太郎の娘がお花と云つて、今年十五になつてゐるから、あれならお前も氣心がついて安心して置けるだらう。飯焚きの方も心あたりを捜してゐるから、引つ越し先が極まるまでには上京させるよ。……」

「でもいいわ。冬の魚所行きを拵へて頂戴。」

「僕は自分そんな物は買つてやらんよ。」

「どうしてなの？」

「着物は腐るほどあるぢやないか。」

「腐るほどあつたつて、飽きちやつたから又欲しいんだわ。」

「そんな贅澤はもう絶対に許さないんだ。」

「へえ、ぢや、あのお金は何に使ふの？」

「とうとう来たな！ 私はさう思つて空惚けながら、」

「お金？ 何處にそんなものがあるんだ？」

「謙治さん、あたし、あの本箱の下にあつた書留の手紙を見たのよ。謙治さんだつて人の手紙を勝手に見るから、そのくらゐな事をあたしがしたつていいだらと思つて、——」

「これは私には意外でした。ナオミが金のことと云ふのは、書留が来たから爲替が這入つてゐたのだらうと見當をつけてゐるだけなので、まさか私があの本箱の下に隠した手紙の中味を見てゐるやうとは、全く豫期してゐなかつたのです。が、ナオミはどうかして私の秘密を嗅ぎ出さうと、手紙のありかを捜し廻つたに違ひなく、あれを讀まれてしまつたとすると、爲替の金額は勿論のこと、移轉のことも女中のこ

とも、凡べてを知られてしまつたのです。『あなたにお金が澤山あるのに、あたしに着物の一枚ぐらゐ拵へてくれないと思ふわ。』

「ねえ、あなたはいつか何と云つて？ お前の爲めならどんな狭苦しい家に住んでも、どんな不自由でも我慢をする。さうしてそのお金で、お前に出来るだけ贅澤をさせるつて、さう云つたのを忘れちまつたの？ まるであなたはあの時分とは違つてゐるのね。」

「さうお、そりやどうも有りかと、……」

は疾うから、引つ越しの準備に頭を使つてゐる一方、直覺的にナオミを怪しいと睨んでゐたので、例の探偵的行動を少しも認めずに居た結果、或る日彼女と熊谷とが、大膽にもつい大森の家の近所の暗探で密會した歸りを、どうとう抑へてしまつたのです。

その日の朝、私はナオミの化粧の仕方がいつもよりも派手であるのに、疑ひを抱き、家を出るなり直ぐ引つ返して、裏口にある物置小屋の炭俵の蔭に隠れてゐたのです。さう云ふ譯でその頃の私は、會社を休んでばかり居ました。すると果して、九時頃になつた時分、今日は隠古に行く日でもないのに彼女はひどくめかし込んで出て來ましたが、停車場の方へは行かないで、反対の方へ、足を早めてさつきと歩いて行くのでした。私は彼女を五六間やり過してから大急ぎで家へ飛び込み、學生時代に使つてゐたマントと帽子を引き取り出して洋服の上へそれを被り、素足に下駄穿きで表へ駆け出すと、ナオミの跡を追く方から追つて行きました。そして彼女が暗探へ這入つて行き、それから十分ぐらゐ後れて熊谷がそこへやつて來たのを確かに見届けて置いてから、やがて彼等の出て來るのを待ち構へてゐたのです。

歸りもやはり別で、今度は熊谷が居残つたらしく、一と足先にナオミの姿が往來へ現はれたのは、彼れ此れ十一時頃でした。——私は殆んど一時間半も暗探の近所をうろろしてゐた譯です。——彼女は來た時と同じやうに、そこから十丁餘りある自分の家まで、傍目もふらずに歩いて行きました。そして私も次第に歩調を早めて行つたので、彼女が裏口のドアを開けて中へ這入る、すぐその跡から、五分とは立たずに私が這入つて行つたのです。

遣入つた刹那に私の見たものは、暗探の据わつた、一種凄惨な感じの籠つたナオミの眼でした。彼女はそこに、棒のやうに突つ立つたまま、私の方を鋭く睨んでゐるのですが、その足もとには私がさつき履き換へて行つた帽子や、外套や、靴や、靴下があの時のまま散らばつてゐました。彼女はそれで一切を悟つてしまつたのでせう、麗かに晴れた秋の朝の、アトリエの明りを反射してゐる彼女の顔は種やかに青ざめ、凡べてをあきらめてしまつたやうな深い静けさがそこにありました。

何とも涙腺をしません。二人は恰も白刃を抜いて立ち向つた者がビタリと青眼に構へたやうに、相手の隙を狙つてゐました。その瞬間私は實にナオミの顔が美しいと感じました。女の顔は男の憎しみがかければかかる程美しくなるのを知りました。カルメンを殺したドン・ホセは、憎めば憎むほど一層彼女が美しくなるので殺したのだと、その心境が私にハッキリ分りました。ナオミがぢいッとして涙を流して、顔面の筋肉は微動だもせず、血の氣の失せた唇をしっかりと結んで立つてゐる邪惡の化身のやうな姿。——ああ、それこそ淫婦の面魂を遺憾なく露はした形相でした。

「出て行け！」
と、私はもう一度叫ぶや否や、何とも知れない憎さと恐ろしさと美しさに驅り立てられつつ、夢中で彼女の肩を掴んで、出口の方へ突き飛ばしました。

するやうに私の顔を見ました。
「讀治さん、怒かつたから勘忍してツてば！……勘忍して、勘忍して、勘忍して……」
こんなに脆く彼女が赦しを乞ふだらうとは豫期してゐなかつたことなので、はつと不意打ちを喰つた私は、そのために尙憤激しました。私は兩手の拳を固めてつづけさまに彼女を殴りました。

ぞー！
私はナオミが今すぐ荷物を運ぶと云ふのを一種の威嚇と見て取つたので、負けない氣でさう云つてやると、彼女は二階へ上つて行つて、そこらぢゆうをガタピンと引つ掻き廻して、バスケツトだの、風呂敷包みだの、背負ひ切れないほどの荷造りをして、自分でとツとと俵を呼んで積み込みました。

二十

「よし！ 直ぐに出て行け！」
「ええ、直ぐ行くわ、——二階へ行つて、着換へを持って行つちやあいけない？」
「貴様は此れから直ぐに歸つて、使ひを寄越せ！ 荷物はみんな渡してやるから！」
「だつてあたし、それぢや困るわ、今すぐゐる入用なものがあるんだから。——」
「ぢや勝手にしろ、早くしないと承知しない

彼女の俵が行つてしまふと、私はどう云ふ積りだつたか直ぐに懐中時計を出して、時間を見ました。ちやうど午後零時三十六分。ああさうか、さつき彼女が暗探を出て來たのが十一時、それからあんな大喧嘩をしてあツと云ふ間に形勢が變り、今まで此處に立つてゐた彼女がもう居なくなつてしまつたんだ。その間に僅かに一時間と三十六分。……人は、看護してゐた病人が最後の息を引き取る時とか、又は大地震に出つ會した時とかに、覺えず知ら

ず時計を見る癖があるのですが、私とその時ふいと時計を出して見たのも大方それに似たやうな氣持ちだつたでせう。大正〇年十一月〇日午後零時三十六分、——自分は此の日の此の時刻に、遂にナオミと別れてしまつた。自分と彼女との關係は、此の時を以て或は終焉を告げるかも知れない。

のやうにどんより重く、ふいと立ち上ると眩暈がしきうで、仰反けさまに後ろへ打つ倒れさうになる。そしていつでも二日酔ひのやうな心地で、胃が悪く、記憶力が衰へ、すべての事に興味がなく、まるで病人か何ぞのやうに元気がない。頭のなかには奇妙なナオミの幻ばかりが浮かんで来て、それが時時おくびのやうに胸をむかつかせ、彼女の臭ひや、汗や、脂が、始終むらうつと鼻についてゐる。で、見れば「眼の毒」のナオミが居なくなつたことは、入梅の空が一時にからつと晴れたやうな工合でした。

が、今も云ふやうにそれは全く咄嗟の感じ、正直のところ、そのせいせいで心持ちが續いたのは、一時間ぐらゐなものだつたでせう。まさか私の肉體がいくら頑健だからと云つて、ほんの一時間やそこらの間に疲勞が恢復し切つた譯でもありませんが、椅子に腰かけてはつと息ついたかと思ふと、間もなく胸に浮かんで来たのは、さつきのナオミの、あの喧嘩をした時の異常に凄惨な容姿でした。「男の憎しみがかかればかかる程美しくなる」と云つた、あの一刹那の彼女の顔でした。それは私が刺し殺しても飽き足りないほど憎い憎い淫婦

の相で、頭の中へ永久に焼きつけられてしまつたまま、消さうとしてもいつかな消えずにゐたのでしたが、どう云ふ譯か時間が立つに随つていよいよハッキリと眼の前に現はれ、未だにちいさな瞳を据ゑて私の方を睨んでゐるやうに感ぜられ、何もだんだんその憎らしさが底の知れない美しさに變つて行くのでした。考へて見ると彼女の顔にあんな妖艶な表情が溢れ、阿修羅の如き神神しさが加つたところを、私は今日まで嘗て一度も見ることがありません。疑ひもなくそれは「邪惡の化身」であつて、そして同時に、彼女の體と魂とが持つ、悉くその美が、最高潮の形に於いて發揚された姿なのです。私はさつきも、あの喧嘩の眞つ最中に「あゝ美、美、美」と心の中で叫んでゐたのでありながら、どうしてあの時彼女の足下に跪いてしまはなかつたか。いつも優柔で意氣地なしの私が、いかに憤激してゐたとは云へ、あの恐ろしい女神に向つて、どうしてあれほどの卑屈を浴びせ、手を振り上げることが出来たか。自分のどこからそんな無鐵砲な勇氣が出たか。——それが私には今更不思議なやうに思はれ、その無鐵砲と勇氣とを恨むやうな心持ちさへ、次第に湧き上つて

来るのでした。「お前は馬鹿だぞ、大變なことをしちまつたんだぞ。ちつとやそつとの不都合があつても、それと「あの顔」と引き換へになると思つてゐるのか。あれだけの美は此の後決して、二度と世間にはありはしないぞ。」

私は誰かにさう云はれてゐるやうな氣がし始め、ああ、さうだつた、自分は既に詰まらなことをしてしまつた。彼女を怒らせないやうにと、あんなに不審から用心してゐながら、かういふ結末になつたと云ふのは魔がさしたのに違ひないんだと、そんな考へが何處からともなく頭を擡げて来るのでした。

たつた一時間前まではあれほど彼女を荷厄介にし、その存在を呪つた私が、今は反對に自分を呪ひその輕卒を悔いるやうになつたと云ふのは？ あんなに憎らしかつた女が、忽ちのうちにこんなにも戀しくなつて来るとは？ 此の急激な心の變化は私自身にも到底説明の出来ないことで、恐らく戀の神様ばかりが知つてゐる譯でありませう。私はいつの間にか立ち上つて、部屋を往つたり來たりしながら、どうしたら此の惡意の情を癒やすことが出来るだらうかと、長い間考へました。と、どう考へ

ても癒やす方法は見付からないで、ただただ彼女の美しかつたことばかりが想ひ出される。過去五年間の共同生活の場面場面が、ああ、あの時にはかう云つた、あんな顔をした、あんな眼をしたと云ふ風に、後から後からと浮かんで来て、それが一一未練の種でないものはない。殊に私の忘れられないのは、彼女が十五六の娘の時分、毎晩私が西洋風呂へ入れてやつて體を洗つてやつたこと。それから私が馬になつて彼女を背中へ乗せながら「ハイハイ、ドウドウ」と部屋の中を這ひ廻つて遊んだこと。——どうしてそんな下らない事がそんなに遙か昔なのか、實に馬鹿げてゐましたけれど、若しも彼女が此の後もう一度私の所へ歸つて来てくれたら、私は何より眞つ先にあの時の遊戯をやつて見よう。再び彼女を背中の上へ跨がらせて、此の部屋の中を這つて見よう。それが出来たら己はどんなに嬉しいか知れないと、まるでその事を此の上もない幸福のやうに空想したりするのでした。いや、單に空想したばかりでなく、私は彼女が戀しさの餘り、思はず床に四つ這ひになつて、さながら今も彼女の體が背中へぐつとしかかつてでもゐるかのやうに、部屋をグルグル廻つてみました。それから

私は、——此處に書くのも取かしい事の限りですが、——二階へ行つて、彼女の古着を引つ張り出してそれを何枚も背中に載せ、彼女の足袋を兩手に嵌めて、又その部屋を四つ這ひになつて歩きました。

此の物語を最初から讀んで居られる讀者は、多分覚えて居られるでせうが、私は「ナオミの成長」と題する一冊の記念帖を持つてゐました。それは私が彼女を風呂へ入れてやつて、體を洗つてやつてゐた頃、彼女の四肢が日増しに發達する様子を詳しく記して置いたもので、つまり少女としてのナオミがだんだん大人になるところを、——ただそればかりを専門のやうに書き止めて行つた一種の日記帳でした。私はその日記のところどころに、當時のナオミのいろいろな表情、ありとあらゆる姿態の變化を眞實に撮つて貼つて置いたのを思ひ出し、せめて彼女を思ふよすがに、長い間埃にまみれて突つ込んであつたその帳面を、本箱の底から引き摺り出して順順にページをはぐつて見ました。それらの眞實は私以外の人間には絶対に見せるべきものではないので、自分で現像や焼き付けなどをしたのですが、大方水洗ひが完全でなかつたのでせう。今ではポツポツそばかすのやう

な斑點が出来、物によつてはすつかり時代が過ぎてしまつて、まるで古めかしい遺像のやうに醜態としたものもありましたけれど、しかしそのために却つて懐かしさは増すばかりで、もう十年も二十年もの昔のこと、……幼い頃の遠い夢をでも辿るやうな氣がするものでした。そしてそこには、彼女があの時好んで装つたさまざまな衣裳やなりかたが、奇抜なものも、輕快なものも、贅澤なものも、滑稽なものも、殆んど稱す所なく寫されてゐました。或るページには天鵝絨の背廣服を着て男装した眞實がある。次をめぐると薄いコットン・ポイルの布を身に纏つて、彫像の如く立してゐる姿がある。又その次にはきらきら光る襦子の羽織に襦子の着物、幅の狭い帯を胸高に締め、リボンの半襟を着けた様子が現はれて来る。それから種種多様な表情動作や活動女優の眞實の數數、——メリー・ピクフォードの笑顔だの、ゲロリア・スワソンの眸だの、ポーラ・ネグリの猛り立つたところだの、ビドブ・ダニエルの乙に氣取つたところだの、憤然たるもの、嬌然たるもの、疎然たるもの、恍惚たるもの、見るに隨つて彼女の體や體のこなしは一變化しいかに彼女がさう云ふことに敏感であり、器用であり、伶俐であ

つたかを語らないものではないのでした。「ああ飛んでもない！己はほんとに大變な女を逃がしてしまった。ピクフォードと、スワンソンと、ポーラ・ネグリと、ビーブ・ダニエルが一人になつてゐるやうな女を！」

私は心も狂ほしくなり、口惜しまぎれに地團太を踏み、なほも日記を繰つて行くと、まだまだ寫眞が幾色となく出て來ました。その撮り方はだんだん微に入り、細を穿つて、部分部分を大映しにして、鼻の形、眼の形、唇の形、指の形、腕の曲線、肩の曲線、背筋の曲線、脚の曲線、手頸、足頸、肘、膝頭、足の趾までも寫してあり、さながら希臘の彫刻や、或ひは奈良の佛像か何かを扱ふやうにしてあるのです。ここに至つてナオミの體は全く藝術品となり、私の眼には實際奈良の佛像以上に完璧なものであるかと思はれ、それをしみじみ眺めてゐると、宗教的な感激さへが湧いて來るやうになるのです。ああ、私は一體どう云ふ積りでこんな精密な寫眞を撮つて置いたのでせうか。此れがいつかは悲しい記念になると云ふことを、豫覺してでもゐたのでせうか？

私のナオミを戀ふる心は加速度を以て進みました。もう日が暮れて窓の外には夕の星が

りに來さうなものではないか。「歸つたらびぐに使ひを寄越せ、荷物はみんな渡してやるから」とさう云つてやつたのに、未だに誰も來ないと云ふのはどうしたんだらう？着換への衣類や手周りの物は一通り持つて行つたけれど、彼女の「命から二番目」である嗜れ着の衣裳はまだ幾通りも残つてゐる。どうせ彼女はあのむさくろしい千束町に一日燃つてゐる筈はないから、毎日毎日、近所隣を驚ろかすやうな派手な風俗で出歩くだらう。さうだとすれば尙更衣裳が必要だ、それがなくてはとて辛抱出來ないだらうに……

けれどもその晩、待てど暮らせどナオミの使ひは來ませんでした。私はあたりが眞つ暗になるまで電燈をつけずに置いたので、若しも空家と間違へられたら大變だと思つて、慌てて家ちゆうの部屋と云ふ部屋へ明りを燈し、門の標札が落ちてゐるやしないかと改めて見、戸口のところへ椅子を持つて來て何時間となく戸外の足音を聞いてゐましたが、八時が九時になり、十時になり、十一時になつても、……とうとう朝からまる一日立つてしまつても、結局何の便りもありません。そして悲觀のどん底に落ちた私の胸には、又いろいろな取り止めのな

またたき始め、うすら寒くさへなつて來ました。私は朝の十一時から御飯もたべず、火も起さず、電氣をつける氣力もなく、暗くなつて來る家の中を二階へ行つたり、階下へ降りたり、「馬鹿」と云ひながら自分で自分の頭を打つたり、空家のやうに蠢動したアトリエの壁に向ひながら「ナオミ、ナオミ」と叫んでみたり、揚句の果ては彼女の名前を呼び續けつつ床に顔を擦りつけたりしました。もうどうして、どうあらうとも彼女を引き戻さなければならぬ。己は絶対無條件で彼女の前に降伏する。彼女の言ふところ、欲するところ、凡べてに己は服従する。……が、それにしても今頃彼女は何してゐるだらう？あんなに荷物を持つてゐたから、東京驛からきつと自動車で行つたらう。さうだとすると淺草の家へ着いてから五六時間は立つてゐる筈だ。彼女は實家の人人に對し、追ひ出されて來た理由を正直に話したらうか？それとも例の負けず嫌ひで、一時遅れの出勤日を云ひ、姉や兄貴を煙に巻いてでもゐるだらうか？千束町で卑しい稼業をしてゐる實家、その煩だと言はれることをひどく嫌つて、親兄弟を無智な人種のやうに扱ひ、めつたに里に歸つたことのない彼女。——此の不調和な一族の

間、今頃どんな善後策が講ぜられてゐるだらう？姉や兄貴は勿論論議まりに行くと云ふ、「あたしは決して論議まりに行くと云ふ、誰か荷物を取つて來てくれろ」と、ナオミは何處までも強氣に出る。そして殆んど心配などはしてゐないやうに、平氣な顔で冗談を云つたり、氣短を吐いたり、英語交りにまくし立てたり、ハイカラな衣裳や持ち物などを見せびらかしたり、まるで貴族のお嬢様が貧民窟を訪れたやうに、威張り散らしてゐるやしないか……

いかに生じて來るのでした。ナオミが使ひを寄越さないのは、事に依つたら事件を軽く見てゐる證據で、二三日したら解決がつくとたかを括つてゐるんぢやないかな。「なに大丈夫だ、向うはあたしに惚れてゐるんだ、あたしなしには一日も居られやしないんだから、迎ひに來るに極まつてゐる」と、懸け引きをしてゐるんぢやないかな。彼女にしたつて今迄實澤に馴れて來たのが、あんな社會の人間の中で暮らせないことは分つてゐるんだ。さうかと云つて外の男の所へ行つても、己ほど彼女を大事にしてやり、氣遣氣遣をさせて置く者はありやしないんだ。ナオミの奴はそんなことは百も承知で、口では強がりを云ひながら、迎ひに來るのを心待ちにしてゐるんぢやないかな。それとも明日の朝あたりでも、姉か兄貴がいよいよ仲裁にやつて來るかな。夜が忙しい商賣だから、朝でなければ出られない事情があるかも知れない。何しろ使ひが來ないと云ふのは却つて一漣の望みがあるんだ。明日になつても音沙汰がなければ、己は強ひに行つてやらう。もうかうなれば意地も外聞もあるもんぢやない、もともと己はその意地でもつて失策つたんだ。實家の奴等に笑はれようと、彼女に内兜を見

透かされようと、出かけて行つて、本論まりに説まつて、姉や兄貴にも口添へを頼んで、一夜一生のお願ひだから歸つておくれと、百萬通も繰返す。さうすれば彼女も顔が立つて、大手を振つて戻つて來られよう。

「おや、河合さん」と、姉は私の言葉を聞きつけて大きな間の方から首を出しましたが、やがて評評さうな顔つきをして云ふのでした。

「へえ、ナオちゃんか？——いいえ、参つては居りませんが、」
「そりや可笑しいな、来て居ない筈はないんですがな、昨夜此方へ何ふと云つて出たんですから。……」

二十一

最初私は、姉が彼女の意を含んで隠してゐるものと邪推したので、いろいろに云つて頼んで見ましたが、だんだん聞くと、事實ナオミは此處へ来てゐないらしいのです。

「をかしいな、どうも、……荷物も澤山持つてゐたんだし、あのまま何處へも行かれる筈はないんだけれど。……」

「へえ、荷物を持つて？」

「バスケットだの、靴だの、風呂敷包みだの、大分持つて行つたんですよ。實は昨日、つまらないことでちつと喧嘩をしたもんですから、……」
「それで當人は、此處へ来ると云つて出たんですか。」

「當人ぢやあない、僕がさう云つてやつたんですよ、此れから直ぐに淺草に歸つて、人を寄越せて。——誰かあなた方が来て下されば話が分ると思つたもんですから。」

「へえ、成る程、……だけど兎に角手前共へは参りませんのよ、さう云ふことなら追つ付け来るかも知れませんが。」
「だけでもお前、昨夜ツからなら分りやしねえぜ。」
と、さうかうするうちに兄貴も出て来て云ふのでした。

「そりや何處か、お心當りがおあんなすつたら外を捜して御覽なさい。もう今まで来ねえやうぢやあ、此處へ歸つちや来ますまいよ。」

「それにナオちゃんはさつぱり家へ寄り付かないんで、あれはかうツと、いつだつたか知ら？——もう二た月も顔を見せたことはないんですよ。」

「では済みませんが、もしも此方へ参りましたら、たとへ當人が何と云はうと、早速どうか僕の所へ知らして頂きたいんですが。」

「ええ、そりやあもう、あつしの方ぢや今更あの兒をどうするツて氣はねえんですから、来れば直ぐにも知らせますがね。」

上り框へ腰をかけて、出された濃茶をすすりながら、私は暫く途方に暮れてゐましたけれど、妹が家を出たと聞いても別に心配をすることも無い姉や兄貴が相手では、ここで裏

の苦勞と云ふものは？——それが一月で済むものやら、二た月、三月、或ひは半年もかかるものやら？——いや、さうなつたら大變だ。そんな事をしてゐるうちにだんだん歸りそびれてしまつて、又ひよつとすると第二第三の男が出て来ないもんでもない。すると此奴はぐつぐつしてゐる所ぢやないんだ。かうして離れてゐればゐるだけ彼女との縁が薄くなるんだ。一刻と彼女は遠くへ去りつつあるんだ。己れやれ！逃げようとしたツて逃がすもんか！己はどうしても引き戻してやるから！

苦しい時の神頼み、——私はつひぞ神信心をしたことなどはなかつたのですが、その時ふと思ひ出して、觀音様へお参りをしました。そして「ナオミの居所が一時も早く知れますやうに、明日にも歸つてくれますやうに」と、眞心籠めて祈りました。それから何處をどう歩いたか、二三軒のバアへ寄つて、ぐでんぐでんに酔つ拂つて、大森の家へ歸つたのは夜の十二時過ぎでした。が、酔つてはゐてもナオミの事が始終頭の中にあつて、寝ようとしても容易に寝つかれず、そのうちに酒が醒めてしまふと、又しても一つ事をよくよくと考へる。どうしたら居所が突き止められるか、事實熊谷と逃

昨日出て行く時に、「だつてあたし、それぢや困るわ、今すぐいろいろ入用なものがあるんだから」とさう云つたのも、成る程思ひ中のでした。さうだ、やつぱりさうだつたんだ、熊谷の所へ行く積りだから、あんなに荷物を持つて行つたんだ。或ひは前から、かう云ふ時にはかうしようん、二人で内内打ち合はせがしてあつたかも知れん。さうだとすると此れは申中むづかしいかも知れんぞ。第一己は熊谷の家が何處にあるのかも知らない。それは調べれば分るとしても、まさか彼奴が兩親の家へ彼女を匿まつては置けなからう。彼奴は不良少年だけれど、親は相當な者らしいから、自分の息子にそんな不都合を働かしては置かないだらう。彼奴も家を呼び出して、二人で何處かに隠れてゐやしないか？ 親の金でも引ッ渡つて、今日は鎌倉、明日は箱根と、遊び歩いてゐやしないか？ が、それならそれと、ハツキリ分つてくれればいい。さうすれば己は熊谷の親に談判して、激しい干渉を加へて貰ふ。たとへ彼奴が親の意見を聴かないにしたつて、金が盡きれば二人で暮らせる筈がないから、結局彼奴は自分の家へ戻らだらうし、ナオミは此方へ歸つて来る。ト下の詰まりはさうなるだらうが、その間の己

情を訴へたところでもうにも仕様がありません。で、私は重ねて、萬一彼女が立ち廻つたら時を移さず、晝間だつたら會社の方へ電話をかけてくれること。尤も此の頃は時時會社を休んでゐるから、もしも會社に居なかつた場合は直ぐ大森へ電報を打つて貰ひたいこと。さうしたら私が迎ひに来るから、それまで必ず何處へも出さずに置いてくれること。などをくどくど頼み込んで、それでも何だか此の連中のずべらののがアチにならないやうな氣がして、なほ念のために會社の電話番號を教へたり、此の様子では大森の家の番地なんぞも知らないのではないかと思つて、それを詳しく書き止めたりして出て来ました。

さて、どうしたらいいんだらう？ 何處へ行くちまつたららう？

「私は殆んどべそを掻かないばかりの氣持ちで、——いや、實際べそを掻いてゐたかも知れませんが、——千束町の路次を出ると、何と云ふ目的もなく、公園の中をぶらぶら歩きながら考へました。實は歸らないところを見ると、事實は明かに豫想したよりも重大なのです。」

「此れはきつと熊谷の所だ、彼奴の所へ逃げに行つたんだ。——さう氣がつくと、ナオミが

げたかどうか、彼奴の家へ談判するにも其奴を確めた上でなければ難卒過ぎるし、さうかと云つて秘密探偵でも頼まなければ、ちよつと確める方法はなし、——と、散散思案に陥つた揚句、ひよつこり考へついで例の濱田のことでした。さうさう、濱田と云ふ者が居たわけ、己はウツカリ忘れてゐたが、あの男なら己の味方になつてくれよう。己は「松濱」で別れた時にあの男の住所を控へて置いた筈だから、明日にも早速手紙を出すかな。手紙なんかぢや焦れつたいから電報を打つか？ そいつもちよつと大袈裟なやうだが、多分電話があるだらうから、電話をかけて来て貰ふか？ いやいや、来て貰ふには及ばないんだ、その暇があつたら熊谷の方を探つて貰ふ方がいいんだ。此の際何より肝要なのは熊谷の動靜を知ることにある。濱田だつたら手藁があるから直ぐに報告を齎らしてくれよう。目下のところ、己の苦しみを察してくれ、己を救つてくれる者はあの男より外にないんだ。此れもやつぱり「苦しい時の神頼み」かも知れないんだが、……

明くる日の朝、私は七時に飛び起きて近所の自動電話へ馳せ付け、電話帳を繰ると、好い胸梅に濱田の家が見つかりました。

「ああ、坊つちやまでございますか、まだお休
みでございますが、……」

「女中が出て来てさう云ふのを、
誠に恐れ入りますが、急な用事でございま
すので、ちよつと何卒お取り次ぎを、……」

と、押し返して頼むと、暫く立つてから電
話口へ出て来た濱田は、

「あなたは河合さんですか、あの大森の？」

と、寝惚けた聲で云ふのでした。

「ええ、さうですよ、僕は大森の河合ですよ、
どうもいつぞやは大へん御迷惑をかけてしまつ
て、それに突然、こんな時刻に電話をかけてま
だ失禮なんです、實はあの、ナオミが逃げて
しまひましてね、——」

此の、「逃げてしまひましてね」と云ふ時、私
は覺えず泣き聲になりました。非常に寒い、も
う冬のやうな朝のことで、寝間着の上にとてら
を一枚引つ懸けたまま慌てて出て来たものです
から、私は受話器を握りながら、胸騒ぎが止ま
りませんでした。

「ああ、ナオミさんが、——矢つ張りさうだつ
たんですか。」

すると濱田は、意外にも、いやに落ち着いて
さう云ふのでした。

「濱田君、僕は此の場合、君より外に頼り
にする人がないもんだから、飛んだ御迷惑をか
けるんですけれど、僕は、……どうかし
てナオミの居所を知りたいんです。熊谷の所
にゐるんだか、それとも誰か外の男の所にゐ
るんだか、それをハッキリと突き止めたんで
す。就いては誠に、勝手なお願ひなんです、
君の御盡力でそれを調べて頂くには行かな
いでせうか。……僕が自分で調べるよりも、君が
調べて下さる方がいろいろ手筈がありがたいに
はしないかと、さう思ふもんですから、……」

「ええ、そりや、僕が調べれば直ちに分るかも
知れませんがね、」

と、濱田は造作もなさうに云つて、

「ですが河合さん、あなたの方にも大凡何處
と云ふ心當りはないんですか？」

「僕はテツキリ熊谷の所だと思つてゐたんで
す。實は君だからお話ししますが、ナオミは未だ
に僕に内證で、熊谷と關係してゐたんです。
それが此の間バレたもんだから、とうとう僕
と喧嘩になつて、家を飛び出しちまつたんで
……」

「ふむ、……」

「ところが君の話だと、西洋人だのいろんな男

「それぢやあ、君はもう知つてゐるんですか？」

「僕は昨夜遇ひましたよ。」

「えッ、ナオミに？……ナオミに昨夜遇つた
んですか？」

今度私は、前とは違つた調子で、體中が
ガクガクしました。あまり激しく顔へたので前
齒をカチリと送話器の口に打つつけました。

「昨夜僕はエルドラドオのダンスに行つたら、
ナオミさんが来てゐましたよ。別に事情を聞
いた譯ではないんですけど、どうも様子が變
でしたから、大方そんな事なんだろうと思つた
んです。」

「誰と一緒に来てゐましたか？ 熊谷と一緒に
やないんですか？」

「熊谷ばかりぢやありません、いろんな男が
五六人も一緒に、中には西洋人もゐました。」

「西洋人が？」

「ええ、さうですよ、さうして大さう立派な洋
服を着てゐましたよ。」

「家を出る時、洋服なんぞ持つてゐなかつたん
ですが、……」

「それが兎に角、洋服でしたよ。而も非常に
堂々たる夜會服を着てゐましたよ。」

私は氣につままれたやうに、ボカンとした

が一緒だと云ふし、洋服なんか着てゐると云ふ
んで、僕には全く見當がつかなくなつちやつ
たんです。でも熊谷に會つて下されば大概の様
子は分るだらうと思ふんですが、……」

「ああ、よござんす、よござんす、」

と、濱田は私の愚痴っぽい言葉を打ち切る
やうに云ふのでした。

「それぢや兎に角調べて見ますよ。」

「それもどうか、成るべく至急にお願ひしたい
んですけれど、……若し出来るなら今日のうち
にでも結果を知らして下さると、非常に助かる
んですけれど、……」

「ああ、さうですか、多分今日ぢゆうには分る
でせうが、分つたら何處へお知らせしませう？
あなたは此の頃、やつぱり大井町の會社です
か？」

「いや、此の事件が起つてから、會社はザツ
と休んでゐるんです。萬一ナオミが歸つて來な
いもんでもないと、そんな氣がするもんですか
ら、成るだけ家を空けないやうにしてゐるんで
す。それで何れも勝手な話ですけど、電話で
はちよつと工合が悪いし、お目に懸れば大變好
都合なんです、……どうでせうか？ 様子
が知れたら大森の方へ来て頂くことは出來ない

きり、何を尋ねていいのやらか、いれ見當が付
かなくなつてしまひました。

二十二

「ああ、もし、もし、どうしたんですか、河
合さん、……もし、……」

私があまり電話口で黙つてゐるので、濱田
はさう云つて催促しました。

「ああ、もし、もし、……」

「ああ、……」

「河合さんですか、……」

「ああ、……」

「どうしたんですか、……」

「ああ、……どうしたらいいか分らないんです、
……」

「しかし電話口で考へてゐたつて、仕様がな
いぢやありませんか？」

「仕様がなことは分つてゐるんですが、……しか
濱田君、僕は實に困つてゐるんですよ。どうし
たものか途方に暮れてゐるんですよ。彼奴が
なくなつてから、夜もロクク寝ないくらゐに
苦しんでゐるんですよ。……」

ここで私は、濱田の同情を求めするために精
一杯の哀れみを籠めてつづけました。

「ええ、構ひません、どうせ遊んでゐるんで
すから。」

「ああ、有り難う、さうして下さればほんたう
に僕は有り難いんです！」

さてさうなると、濱田の來るのが一割千秋の
思ひなので、私は尙もセカセカしながら、

「ちや、おいでになるのは大概何時頃になるで
せうか？ おそくも二時か三時頃には分るでせ
うか？」

「さあ、分るだらうとは思ひますが、しかし此
奴は一應尋ねて見からでなけりやあハッキリ
したことは云へませんねえ。最善の方法を取つ
ては見ますが、場合に依つたら二三日かかるか
も知れませんが、……」

「え、そりや仕方がありません、明日になつて
も明後日になつても、僕は君が来て下さるまで、
ちつと内で待つてゐますよ。」

「承知しました、詳しい事はいづれお目に懸
つてからお話しませう。——ちや、左様なら
——」

「あ、もし、もし、」

電話が切れさうになつた時、私は慌ててもう
一度濱田を呼び出しました。

「もし、もし、...あのう、それから、...此れはその時の事情次第でどうでもいいことなんです。君が直接ナオミにお会いになるやうだつたら、そして話を聞く機会があつたら、さう云つて頂きたいんですがね。僕は決して彼女の罪を責めようとはしない、彼女が墮落したに就いては自分の方にも罪のあることがよく分つた。それで自分の悪かつたことは幾重にも詫まるし、どんな條件でも聞き入れるから、一切の過去は水に流して、是非もう一度歸つて来てくれるやうに。それも厭なら、せめて一通だけ僕に會つてくれるやうに。」

「どんな條件でも聞き入れると云ふ文句の次ぎに、もつと正直な気持ちを云ふと、一彼女が土下座しろと云ふなら、僕は喜んで土下座します。大地に顔を擦りつけろと云ふなら、大地に顔を擦りつけます。どうにでもして詫まります。」と、寧ろさう云ひたいくらいでしたが、さすがにそこまでは云ひかねました。

「僕がそれほど彼女のことを思つてゐると云ふことを、若し出来るなら傳へて頂きたいんですがね。」

「ああ、さうですか、機会があつたらそれも十分さう云つて見ますよ。」

「それから、あのう、或ひはああ云ふ氣象です。だから、歸りたいには歸りたくつても、意地を突ツ張つてゐるのぢやないかと思ふんです。そんな風なら、僕が非常にシヨゲてゐるからとさう仰つしやつて、無理にも當人を連れて来て下さると向いいんですが、...」

「分りました、分りました、どうもそこ迄は請け合ひかねますが、出来るだけの事はやつてみますよ。」

餘り私がつつこいので、濱田も聊かウツザリしたやうな口調でしたが、私はその自動電話で、墓口の中の五銭銅貨がなくなるまで、三通話ほど立て続けにしやべりました。恐らく私が泣き聲を出したり、顔へ涙を出したりして、こんなに卑屈に、こんなにづうづうしくしやべつたことは、生れて始めてだつたせう。が、電話が済むと、私はほつとするとどころでなく、今度は濱田の来てくれるのが、無上の特権になりました。多分今日ちゆうには云つたけれども、若し今日ちゆうに来ないやうなら、どうしたらいいだらう? いや、どうしたらと云ふよりも、自分はどうなつてしまふだらう? 自分は今、一生懸命ナオミを懇ひ慕つてゐるより外、何の仕事も持つてゐないのだ。

どうすることも出来ずにゐるのだ。寝ることも、食ふことも、外へ出ることも出来ないで、家の中にチーツと籠つて、あかの他人が自分のために奔走してくれ、或る報道を賣してくれるのを、手を束ねて待つてゐなければならぬのだ。實際人は、何もしないでゐる程の苦痛はありませんが、私はその上に死ぬほどナオミが懇しいのです。その懇しさに身を焦らしながら、自分の運命を他人に委ねて、時計の針を眺めてゐると云ふことは、考へて見ても測らないことです。ほんの一分の間にしても、「時」の歩みと云ふものが驚くほど遅延として、無限に長く感ぜられます。その一分が六十回でやつと一時間、百二十回でやつと二時間、假りに三時間待つものとしても、此のしよざいがない、どうにかうにもしやうのない「一分」を、セコンドの針がチクタク、チクタクと、圓を一周する間を、百八十回こらへねばならない! それが三時間どころではなく、四時間になり、五時間になり、或ひは半日、一日になり、二日も三日にもなつたとしたら、まるで牢屋にでも繋がれたやうで、待ち遠しさと懇しさの餘り、私はきつと發狂するに違ひないやうな気がしました。

が、いくら早くても濱田の来るのは夕方になるだらうと、覺悟をきめてゐたのですが、電話をかけてから四時間の後、ちやうど十二時頃になつて、表の呼鈴がけたたましく鳴り、續いて濱田の、

「今日は」

と云ふ意外な聲が聞えた時には、私は覺えず、嬉し紛れに飛び上つて、急いでドアを開けに行きました。そしてソハッとした口調で、

「ああ、今日は。今すぐ此處を開けますよ、鍵が懸つてゐるもんですから。」

と、さう云ひながらも、「こんなに早く来てくれようとは思はなかつたが、事に依つたら譯なくナオミに會へたんぢやないかな。會つたら直ちに話が分つて、一緒に彼女を連れて来てでもくれたんぢやないかなと、ふとそんな風に考へると、尙更嬉しさが込み上げて来て、胸がドキドキするのでした。

ドアを開けると、私は濱田の後ろの方に彼女が寄り添つてゐるかと思つて、邊りをキョロキョロ見廻しましたが、誰も居ません。濱田がひとりポーチに立つてゐるだけでした。

「やあ、先刻は失禮しました。どうでしたかしら? 分りましたか?」

私はいきなり噛み潰すやうな調子で尋ねると、濱田はイヤに落ち着き掛つて、私の顔を見ればむが如く眺めながら、

「ええ、分ることは分りましたが、...しかし河合さん、もうあの人はとても駄目です、あきらめた方がよござんすよ。」

と、キツパリ云ひ切つて、首を振るのでした。

「そ、そ、ソリヤあどう云ふ譯なんです?」

「どう云ふ譯ツて、全く話の外なんですから、僕はあなたの爲めを思つて云ふんですが、もうナオミさんのことなんぞは、忘れておしまひになつたらどうです。」

「さうすると君は、ナオミに會つてくれたんですか? 會つて話して見たけれども、とても絶望だと云ふんですか?」

「いや、ナオミさんには會やしません。僕、熊谷の所へ行つて、すつかり様子を聞いて来たんです。そしてあんまりヒド過ぎるんで、實に驚いちゃつたんです。」

「だけど濱田君、一體全體ナオミは何處に居るんです? 僕は第一にそれを聞かして貰ひたいんだ。」

「それが何處と云つて、極まつた所がある譯ぢやなく、彼方此方を泊まり歩いてゐるんです。」

「ふうん、それから?」

「それで仕方がないもんだから、荷物だけを熊谷の部屋へ隠して、二人で兎も角も戶外へ出て、それから何でも怪しげな旅館へ行つたと云ふんですが、而もその旅館が、此の大森のお宅の近所の何とか横とか云ふ家で、その日の朝もそこで出會つてあなたに見付かつた場所だと云ふから、實に大膽ぢやありませんか?」

「それぢや、あの日に又彼處へ行つたんですか?」

「ええ、さうだつて云ふんですよ。それを熊谷

が得意さうに、のろけ交りにしゃべり散らすんで、僕は聞いてゐて不愉快でした。」

「するとその晩は、二人で彼處へ泊まつたんですね？」

「ところがさうぢやないんです。夕方までは其處にゐたけれど、それから一緒に銀座を散歩して、尾張町の四つ角で別れたんださうです。」

「けれども、それはをかしいな。熊谷の奴、誰をついてゐるんぢやないかな。」

「いや、まあ聞きなさい、別れる時に熊谷が少し気の毒になつたんで、今夜は何處へ泊まるんだい」ツてさう云ふと、「泊まる所なんか無らもあるわよ。あたしこれから横濱へ行くわ」ツて、ちつともシヨゲでなんかゐないで、そのままスタスタ新橋の方へ行くんださうです。

「横濱と云ふのは、そりやあ誰の所なんです？」

「そいつが奇妙なんですよ、いくらナオミさんが顔が廣いツて、横濱なんか泊まる所はないだらうから、ああ云ひながら多分大森へ歸つたんだらうと、さう熊谷が思つてゐると、明る目の夕方電話が懸つて、『エルドラドで待つてゐるから直ぐ来ないか』と云ふ調なんです。」

「何處の人だか分らない女を、泊める方も泊める方だな。」

それで行つて見ると、ナオミさんが目の覚めるやうな夜會服を着て、孔雀の羽根の扇を持つて、頸飾りだの腕環だのをキラキラさせて、西洋人だのいゝんな男に圍まれながら、盛んにはしゃいでゐるんださうです。」

濱田の話の聞いてゐると恰もビツクリ箱のやうで、「おやツ」と思ふやうな事實がビヨンビヨン跳び出して來るのです。つまりナオミは、最初の晩はその西洋人の所へ泊まつたらしいのですが、その西洋人はウイリアム・マツカネルとか云ふ名前前で、いつぞや私が初めてナオミとエルドラドオヘダンスに行つた時、紹介もなしに傍へ寄つて來て、無理に彼女と一緒に踊つた、あのぶらぶらしい、お白粉を塗つた、にやけた男がそれだつたのです。ところが更に驚くことには、——此れは熊谷の觀察ですが、——ナオミはあの晩泊まりに行くまで、そのマツカネルと云ふ男とは何もそれほど懇意な仲ではなかつたのだと云ふのです。尤もナオミも、前から内内の男に思ひ召しがあつたらしい。何しろちよつと女好きのする氣だちで、すつきりとした、役者のやうな所があつて、ダンス仲間で「色魔の西洋人」と云ふ噂があつたばかりでなく、ナオミ自身も「あの西

お伽噺のシンデレラと云ふ風でしたよ。」

私は濱田にさう云はれて、そのシンデレラのナオミの姿がどんなに美しかつたかと思ふと、はつと我知らず胸が躍つて來るのでした。又その次ぎの瞬間には、あまりな不行跡に呆れてしまつて、淺ましいやうな、情ないやうな、口惜しいやうな、何とも云へないイヤな氣持になるのでした。熊谷ならばまだしものこと、性の知れない西洋人の所へなんぞ出かけて行つて、ずるずるべつたり泊まり込んで、着物を揃へて貰ふなんて、それが昨日まで假りにも亭主を持つてゐた女のすべき業だらうか？ ああ、己が長年同様してゐたナオミと云ふのは、そんな汚れた、賣春婦のやうな女だつたのか？ 己には彼女の正體が今の今まで分らないで、愚かな夢を見てゐたのか？ ああ、成るほど濱田の云ふやうに、己はどんなに戀しくつても、もうあの女はあきらめなければならぬのだ。己は見事に恥を掻かされた、男の面へ泥を塗られた。……

洋人は横顔がいいわね、何處かジョン・ペリに似てるぢやないの。——ジョン・ペリと云ふのは亞米利加の俳優で、活劇寫眞でお馴染のジョン・バリモアのことなのです。——と、さう云つてゐたくらゐるから、確かにあれに眼を着けてゐたのだ。或ひはちよいちよい色眼ぐらゐは使つたことがあるかも知れない。それでマツカネルの方でも、「此奴は俺に氣がある」と見て、「私の家へ來ませんか」とか、「あなた大變ハイカラで可愛らしいです」とか、からかつたことがあるんだらう。だから友達と云ふのもなく、ほんのそれだけの縁故でもつて押しかけて行つたに違ひないんだ。そして訪ねて行つて見ると、マツカネルの方や面白い島が飛び込んだと思つて、「あなた今晚私の家へ泊まりませんか」「ええ、泊まつても構はないわ」と云ふやうなことになつたんだらう。——

「何ぼ何でも、そいつは少し信じかねるな、初めて男の所へ行つて、その晩すぐに泊まるなんて。」

「だけど河合さん、ナオミさんはさう云ふことは平氣でやると思ひますがね、マツカネルもいづらか不思議に感じたと思つて、『此のお嬢さんは一體何處の人ですか』ツて、昨夜熊谷に聞

濱田は私の眼の中に涙が湧いて來たのを見て、氣の毒さうに頷きながら、

「さう云はれると僕はあなたのお心持をお察して、云ひ辛くなつて來るんですが、現に昨夜は僕もその場に居合はせられたし、大體熊谷の云ふことは本當だらうと思はれるんです。まだ此の外にもお話しすればいろいろな事が出て來るので、成る程と思ひになるでせうが、何卒そこまではお聞きにならずに、僕を信じて下さいませんか。僕が決して、面白半分にならずに強いてゐるのではないと云ふことを、——」

「僕は、ほんたうの事を云ふと、ナオミさんには最早や望みが無いと云ふことを、今日はあなたに宣告する氣で来たんですよ。そりや彼の人のことですから、又いつ何時、あなたの所へ平氣な顔で現はれるかも知れませんが、今では事實、誰も眞面目でナオミさんを相手にする者はありやしないんですよ。熊谷さんに云はせると、まるでみんなが慰み物にしてゐるんで、とても口には出来ないやうなヒドイ仇名さへ聞かしてゐるんですよ。あなたは今まで、知らない間にどれほど恥をかかれてゐるか分りやしません。

「僕は、ほんたうの事を云ふと、ナオミさんには最早や望みが無いと云ふことを、今日はあなたに宣告する氣で来たんですよ。そりや彼の人のことですから、又いつ何時、あなたの所へ平氣な顔で現はれるかも知れませんが、今では事實、誰も眞面目でナオミさんを相手にする者はありやしないんですよ。熊谷さんに云はせると、まるでみんなが慰み物にしてゐるんで、とても口には出来ないやうなヒドイ仇名さへ聞かしてゐるんですよ。あなたは今まで、知らない間にどれほど恥をかかれてゐるか分りやしません。」

「僕は、ほんたうの事を云ふと、ナオミさんには最早や望みが無いと云ふことを、今日はあなたに宣告する氣で来たんですよ。そりや彼の人のことですから、又いつ何時、あなたの所へ平氣な顔で現はれるかも知れませんが、今では事實、誰も眞面目でナオミさんを相手にする者はありやしないんですよ。熊谷さんに云はせると、まるでみんなが慰み物にしてゐるんで、とても口には出来ないやうなヒドイ仇名さへ聞かしてゐるんですよ。あなたは今まで、知らない間にどれほど恥をかかれてゐるか分りやしません。」

二二三

「どうです河合さん、さう閉ぢ籠つてばかりしないで、氣晴らしに散歩して見ませんか」と、濱田に元氣をつけられて、「それではちよつと待つて下さい」と、此の二日間口も涙がず、髭も剃らずにゐた私は、剃刀をあてて、鬚を洗つて、セイセイとした心持ちになり、濱田と一緒に外へ出たのは彼れ此れ二時半頃でした。 「かう云ふ時には、却つて郊外を散歩しまして」と濱田が云ふので、私もそれに賛成しましたが、

「どうです河合さん、さう閉ぢ籠つてばかりしないで、氣晴らしに散歩して見ませんか」と、濱田に元氣をつけられて、「それではちよつと待つて下さい」と、此の二日間口も涙がず、髭も剃らずにゐた私は、剃刀をあてて、鬚を洗つて、セイセイとした心持ちになり、濱田と一緒に外へ出たのは彼れ此れ二時半頃でした。 「かう云ふ時には、却つて郊外を散歩しまして」と濱田が云ふので、私もそれに賛成しましたが、

二二三

すると濱田は、今度はグレルと反對を向いて、停車場の方へ歩き出しましたが、考へて見ると、その方角も無理な事はないことはない。ナオミが未だに、囈言へ行くのだとすれば、ちやうど今頃熊谷を連れて出て来ないとも限らないし、例の毛唐と京濱間を往復しないものでもないし、いづれにしても省線電車の停車場の所は禁物だと思つたので、

すると濱田は、今度はグレルと反對を向いて、停車場の方へ歩き出しましたが、考へて見ると、その方角も無理な事はないことはない。ナオミが未だに、囈言へ行くのだとすれば、ちやうど今頃熊谷を連れて出て来ないとも限らないし、例の毛唐と京濱間を往復しないものでもないし、いづれにしても省線電車の停車場の所は禁物だと思つたので、

「いや、僕はまだですが、あなたは？」
「僕は一昨日から、酒は飲んだが飯は殆んどたべないんで、今になつたら非常に腹が減つて来ました。」
「そりやさうでせう、そんな無茶をなさらない方がよござんすね、體を壊しちゃ詰まりませんから。」
「いや、大丈夫、君のお蔭で情りを閉ぢまつたから、もう無茶な事はしやしません。僕は明日から生れ變つた人間になります、さうして会社へも出る積りで。」
「ああ、その方が氣が紛れますよ。僕も失戀した時分、どうかして忘れようと思つて、一生懸命音楽をやりましたつけ。」

「いや、僕はまだですが、あなたは？」
「僕は一昨日から、酒は飲んだが飯は殆んどたべないんで、今になつたら非常に腹が減つて来ました。」
「そりやさうでせう、そんな無茶をなさらない方がよござんすね、體を壊しちゃ詰まりませんから。」
「いや、大丈夫、君のお蔭で情りを閉ぢまつたから、もう無茶な事はしやしません。僕は明日から生れ變つた人間になります、さうして会社へも出る積りで。」
「ああ、その方が氣が紛れますよ。僕も失戀した時分、どうかして忘れようと思つて、一生懸命音楽をやりましたつけ。」

「ええ、いいでせう、それなら一番安全です。」
「へえ、どう云ふ調子で？」
「さつきの話の、囈言と云ふ家がその方角にあるんですよ。」
「あ、そいつはいけない！ ちやあどうしませう？ 此れからずつと海岸へ出て、川崎の方へ行つて見ませうか。」
「ええ、いいでせう、それなら一番安全です。」

「ええ、いいでせう、それなら一番安全です。」
「へえ、どう云ふ調子で？」
「さつきの話の、囈言と云ふ家がその方角にあるんですよ。」
「あ、そいつはいけない！ ちやあどうしませう？ 此れからずつと海岸へ出て、川崎の方へ行つて見ませうか。」
「ええ、いいでせう、それなら一番安全です。」

「ふむ、君から見たら、僕と云ふものは随分滑稽に見えたでせうね。」
「けれど僕も、一時は滑稽だつたんだから、あなたを笑ふ資格はありません。僕はただ、自分の熱が冷めて見ると、あなたを非常に氣分毒だとは思ひましたよ。」
「しかし君は若いんだからまだいいですよ、僕がやうに三十幾つにもなつて、こんな可憐な目つて、悲しいのだから嬉しいのだから何もう分らなくなつて来ました。」
「ところで濱田君、僕は聞きたいことがあるんだ。」
「と、私は頃合を見計らつて、一段と腰を進めながら、

「ふむ、君から見たら、僕と云ふものは随分滑稽に見えたでせうね。」
「けれど僕も、一時は滑稽だつたんだから、あなたを笑ふ資格はありません。僕はただ、自分の熱が冷めて見ると、あなたを非常に氣分毒だとは思ひましたよ。」
「しかし君は若いんだからまだいいですよ、僕がやうに三十幾つにもなつて、こんな可憐な目つて、悲しいのだから嬉しいのだから何もう分らなくなつて来ました。」
「ところで濱田君、僕は聞きたいことがあるんだ。」
「と、私は頃合を見計らつて、一段と腰を進めながら、

「それも随分ヒドイんですよ、お聞きになったらいくら何でも、きつと気持ち悪くしますよ。」

「いいです、いいです、構はないから云つて下さい！ 僕は今やあんなに好奇心から、あの女の秘密を知りたいんです。」

「ぢやあその秘密を少少ばかり云ひませうか、——あなたは一體、此の夏鎌倉にいらした時分、ナオミさんに幾人男があつたと思ひますか？」

「さあ、僕の知つてゐる限りでは、君と熊谷だけだけれど、まだその外にもあつたんですか？」

「河合さん、あなた驚いちゃいけませんよ、——聞も中村もさうだつたんですよ。」

「私は解つてはゐましたけれど、ビリリと體に電気が来たやうな気がしました。そして思はず、眼の前にあつた杯をガブガブ五六杯引つけてから、始めて口を開きました。」

「するとあの時の連中は、一人残らず？——」

「ええ、さうですよ、さうしてあなた、何處で會つてゐたと思ふんですか？」

「あの大久保の別荘ですか。」

「あなたの借りていらした、植木屋の離れ座敷ですよ。」

「ええ、河合さん、僕はいつぞや『松茂』でお目に懸つた時、こんなことまではあなたに云はなかつたでせう。——」

「あの時の君の話だと、ナオミを自由にしてゐるものは熊谷だと云ふ——」

「ええ、さうでした、僕はあの時さう云ひました。尤もそれは論ぢやないので、ナオミさんと熊谷とはガツツな所が性に合つたのか、一番仲好くしてゐました。だから誰よりも熊谷が巨魁だ。悪いことはみんな彼奴が教へるんだと思つたので、ああ云ふ風に云つたのですが、まさかそれ以上は、あなたがナオミさんを捨てないやうに、そして善良な方面へ導いておやりになるやうにと、祈つてゐたのですから。」

「それが導くどころぢやない、却つて此方が引き摺られて行つちまつたんだから、——」

「ナオミさんに懸つた日には、どんな男でもさうなりませう。」

「あの女には不思議な魔力があるんですよ。」

「確かにあれは魔力ですなあ！ 僕もそれを感じたから、もうあの人には近寄るべからず、近寄つたら此方が危いと悟つたんです。」

「ナオミ、ナオミ、——互ひの間にその名が

「ふうむ、……」

と云つたなり、まるで息でも詰まつたやうにいと沈んでしまつた私は、

「ふうむ、さうか、實際驚きましたなあ、——と、やつと叫ぶやうな聲を出しました。」

「だからあの時分、恐らく一番迷惑したのは植木屋のかみさんだつたでせうよ。熊谷の義理があるもんだから、出てくれるとも云ふ譯に行かず、さうかと云つて自分の家が一種の魔窟になつてしまつて、いろんな男がしつきりなしに入り入るんで、近所隣りには噂が悪いし、それに萬一、あなたに知れたら大變だと思ふもんだから、ハラハラしてゐたやうでしたよ。」

「はあ、成る程、さう云はれりやあ、いつだか僕がナオミのことを尋ねると、かみさんがひどく面喰つて、オドオドしてゐたやうでしたが、さう云ふ譯があつたんですか。大森の家は君の密會所にされるし、植木屋の離れは魔窟になるし、それを知らずにゐたなんて、イヤハヤどうも、散々な目に遭つてたんだな。」

「あ、河合さん、大森のことは云ひっこなし！ それを云はれると説まります。」

「あはははは、なあにいいですよ、もう何も彼も一切過去の出来事だから、差支へないぢやあ

「だがいいですよ、まあ一遍はああ云ふ女に欺されて見るのも。」

と、私は感情無量の體でさう云ひました。「そりやさうですよ！ 僕は兎に角あの人のお蔭で初戀の味を知つたんですもの。たとへ僅かの間でも美しい夢を見せて貰つた、それを思へば感謝しなげりやなりませんよ。」

「だけでも今にどうなるでせう、あの女の身の行く末は？」

「さあ、これからどんどん墮落して行くばかりでせうね。熊谷の話ぢや、マツカネルの所にだつて長く居られる筈はないから、二三日したら又何處かへ行くだらう、己ンところにも荷物があつたら来るかも知れないツて云つてゐましたが、全體ナオミさんは、自分の家がないんでせうか？」

「家は浅草の飲屋なんですよ、——彼奴に可哀さうだと思つて、今まで誰にも云つたことはありませんがね。」

「あ、河合さん、僕はあの時さう云ひました。尤もそれは論ぢやないので、ナオミさんと熊谷とはガツツな所が性に合つたのか、一番仲好くしてゐました。だから誰よりも熊谷が巨魁だ。悪いことはみんな彼奴が教へるんだと思つたので、ああ云ふ風に云つたのですが、まさかそれ以上は、あなたがナオミさんを捨てないやうに、そして善良な方面へ導いておやりになるやうにと、祈つてゐたのですから。」

「それが導くどころぢやない、却つて此方が引き摺られて行つちまつたんだから、——」

「ナオミさんに懸つた日には、どんな男でもさうなりませう。」

「あの女には不思議な魔力があるんですよ。」

「確かにあれは魔力ですなあ！ 僕もそれを感じたから、もうあの人には近寄るべからず、近寄つたら此方が危いと悟つたんです。」

「ナオミ、ナオミ、——互ひの間にその名が

「ふうむ、……」

と云つたなり、まるで息でも詰まつたやうにいと沈んでしまつた私は、

「ふうむ、さうか、實際驚きましたなあ、——と、やつと叫ぶやうな聲を出しました。」

「だからあの時分、恐らく一番迷惑したのは植木屋のかみさんだつたでせうよ。熊谷の義理があるもんだから、出てくれるとも云ふ譯に行かず、さうかと云つて自分の家が一種の魔窟になつてしまつて、いろんな男がしつきりなしに入り入るんで、近所隣りには噂が悪いし、それに萬一、あなたに知れたら大變だと思ふもんだから、ハラハラしてゐたやうでしたよ。」

「はあ、成る程、さう云はれりやあ、いつだか僕がナオミのことを尋ねると、かみさんがひどく面喰つて、オドオドしてゐたやうでしたが、さう云ふ譯があつたんですか。大森の家は君の密會所にされるし、植木屋の離れは魔窟になるし、それを知らずにゐたなんて、イヤハヤどうも、散々な目に遭つてたんだな。」

「あ、河合さん、大森のことは云ひっこなし！ それを云はれると説まります。」

「あはははは、なあにいいですよ、もう何も彼も一切過去の出来事だから、差支へないぢやあ

「だがいいですよ、まあ一遍はああ云ふ女に欺されて見るのも。」

と、私は感情無量の體でさう云ひました。「そりやさうですよ！ 僕は兎に角あの人のお蔭で初戀の味を知つたんですもの。たとへ僅かの間でも美しい夢を見せて貰つた、それを思へば感謝しなげりやなりませんよ。」

もいづれ、ナオミさんはあふ風に四方八方飛び廻つてゐるんだから、きつと何處かで打つかりますよ。」

「さうなつて来ると、ラツかり戸外も歩かせんね。」

「盛んにダンス場へ出入りしてゐるに違ひないから、銀座あたりは最も危険区域ですね。」

「大森だつて危険区域でないこともない、横濱があるし、花月園があるし、例の噴橋があるし、事に依つたら、僕はあの家を、墓んでしまつて下宿生活をするかも知れません。當分の間、此のホトボリが冷める迄は彼奴の顔を見たくないから。」

私は濱田に京濱電車を附き合つて貰つて、大森で彼と別れました。

二十四

私が斯う云ふ孤獨と失意に苦しめられてゐる際に、又もう一つ悲しい事件が起りました。

と云ふのは外でもなく、郷里の母が腦溢血で突然逝つてしまつたことです。

危篤だと云ふ電報が来たのは、濱田に會つた翌翌日の朝のこと、私はそれを會社で受け取ると、すぐその足で上野へ駆けつけ、日の暮

死のために大事な未来をむざむざ埋めてしまふでもなからう。誰でも親に死に別れると一時は失望するものだけれど、月日が立てばその悲しみも薄らいで来る。だからお前さんも、さうするならばさうするで、もつとゆつくり考へてからにしたらよからう。それに第一、突然罷めてしまつたんでは會社の方へも悪いだらうから」と云ふのでした。私は「實はそれだけでは、まだみんなには云はなかつたが、女房の奴に逃げられてしまつて、……と、つい口もとまで出ましたけれど、大勢の前で取返しもあり、ごたごたしてゐる最中なので、それは云はずにしまひました。(ナオミが田舎へ顔を見せないうことに就いては、病氣だと云つて取り繕つて置いたのです。)そして初七日の法要が済むと、後後の事は、私の代理人として財産の管理をしてゐてくれた叔父夫婦に頼み、兎に角みんなの云ふ言を聞いて」と先づ東京へ出て来ました。

死のために大事な未来をむざむざ埋めてしまふでもなからう。誰でも親に死に別れると一時は失望するものだけれど、月日が立てばその悲しみも薄らいで来る。だからお前さんも、さうするならばさうするで、もつとゆつくり考へてからにしたらよからう。それに第一、突然罷めてしまつたんでは會社の方へも悪いだらうから」と云ふのでした。私は「實はそれだけでは、まだみんなには云はなかつたが、女房の奴に逃げられてしまつて、……と、つい口もとまで出ましたけれど、大勢の前で取返しもあり、ごたごたしてゐる最中なので、それは云はずにしまひました。(ナオミが田舎へ顔を見せないうことに就いては、病氣だと云つて取り繕つて置いたのです。)そして初七日の法要が済むと、後後の事は、私の代理人として財産の管理をしてゐてくれた叔父夫婦に頼み、兎に角みんなの云ふ言を聞いて」と先づ東京へ出て来ました。

れ方に田舎の家へ着きました。もうその時は、母は意識を失つてゐて、私を見て分らないらしく、それから二三時間の後に息を引き取つてしまひました。

幼い折に父を失ひ、母の手一つで育つた私は、「親を失ふ悲しみ」と云ふものを始めて體驗した譯です。況んや母と私の仲は世間普通の親子以上であつたのですから。私は過去を回想しても、自分が母に反抗したことや、母が私を叱つたことや、さう云ふ記憶を何一つとして持つてゐません。それは私が彼女を尊敬してゐたせもあるでせうが、寧ろそれより、母が非常に思ひやりがあり、慈愛に富んでゐたからです。よく世間では、息子がだんだん大きくなり、郷里を捨てて都會へ出るやうになつてしまふと、親は何かと心配したり、その子の素行を疑つたり、ひはそれが原因で疎遠になつたりするものですが、私の母は、私が東京へ行つてから後、私を信じ、私の心持ちを理解し、私の爲めを思つてくれました。私の下に二人の妹があるだけで、總領息子を解放すことは、女親としては淋しくもあり心細くもあつたでせうに、母は一度も愚痴をこぼしたことはなく、常に私の立身出世を祈つて

なりました。それ故私は、彼女の膝下にゐた時よりも遠く離れてしまつた時に、一層強く、彼女の慈愛のいかに深いかを感じたものです。殊にナオミとの結婚前後、それに引き續いてゐるの我が儘を、母が快く聞いてくれる度毎に、その温情を涙ぐましく思はないことはなかつたのです。

その母親にからも急激に、思ひがけなく死なれた私は、亡骸の傍に侍りながら夢に夢見る心地でした。つい昨日まではナオミの色香に身も魂も狂つてゐた私、そして今では佛の前に跪いて線香を手向けてゐる私、此の二つの「私」の世界は、どう考へても連絡がないやうな気がしました。昨日の私がほんたうの私か、今日の私がほんたうの私か?——歎き、悲しみ、悔きの涙に暮れつつも、自分で自分を省ると、何處からともなくさう云ふ聲が聞えます。

「お前の母が今死んだのは、偶然ではないのだ。母はお前を戒めるのだ、教訓を垂れて下すつたのだ」と、又一方からそんな囁きも聞えて来ます。すると私は、今更のやうに在りし日の母の偉を偲び、濟まない事をしたのを感じて、再び悔恨の涙が堰きあへず、あまり泣くので、極まりが悪いので、そつと後ろの真山へ登つて、

の部屋のこと、そこには今でも彼女の荷物が置いてあり、過去五年間の不秩序、放埒、荒色の匂ひが、壁にも柱にも滲み着いてゐます。その匂ひとはつまり彼女の肌の臭ひで、不精な彼女は汚れ物などを洗濯もせずに、丸めて突つ込んで置くもので、それが今では風通しの悪い室内に籠つてしまつてゐるのです。私は此れでは耐れないと思つて、後にはアトリエのソファに寝ましたが、そこでも容易に寝つかれないことは同じでした。

母が死んでから三週間過ぎて、その年の十二月に這入つてから、私は遂に辭職の決心を固めました。そして會社の都合上、今年一杯で罷めると云ふことに極まりました。尤も此れは誰にも豫め相談をせず、獨りで運んでしまつたので、國の方ではまだ知らないでゐたのですが、さうなつて見ると後一と月の辛抱です。私は少し落ち着きました。いくらか心にも餘裕が出来、暇な時には讀書するとか、散歩するとかしましたけれど、しかしそれでも危険區域には、決して近寄りませんでした。或る晩あまり退屈なので品川の方まで歩いて行つた時、時間つぶしに松之助の映画を見る氣になつて活動小屋に這入つたところが、ちやうどロイド

の喜劇を映してゐて、若い亞米利加の女優たちが、珠にビープ・ダニエルなどが現はれて來ると、矢張りいろいろ考へ出されてイケませんでした。「もう西洋の活動寫眞は見ないことだ」と、私はその時思ひました。

すると、十二月の半ばの、或る日曜の朝でした。私が二階に寝てゐると、私はその頃、アトリエでは寒くなつて來たので、再び屋根裏へ引越してゐました。階下で何か音がきこえて、ふ物音がして、人のけはひがするのです。ハテ、をかしいな、表は戸締まりがしてある筈だが、……と、さう思つてゐるうちに、やがて聞き覚えのある足音がして、それがづかづか階段を上つて、私が胸をヒヤリとさせる暇もなく、

「今日はア」と、晴れやかな聲で云ひながら、いきなり鼻先のドアを開けて、ナオミが私の目の前に立ちました。「今日はア」と、彼女はもう一度さう云つて、キョトンとした顔で私を見ました。「何しに來た？」私は寢床から起きようとしたもので、靜かに、冷淡にさう云ひました、よくもづうづうし

く來られたものだ」と心のうちでは呆れながら。「あたし？——荷物を取りに來たのよ。」「荷物は持つて行つてもいいが、お前、河處から這入つて來たんだ。」「表の戸から。——あたしん所に鍵があつたの。」

「ちやあその鍵を置いて行つておくれ。」「ええ、置いて行くわ。」それから私は、ぐるりと彼女に背中を向けて黙つてゐました。暫くの間、彼女は私の枕もとでばたばた云はせながら、風呂敷包みを拵へてゐるのだけれど、そのうちにきゅつと帯を解くやうな音がしたので、氣が付いて見ると、彼女は部屋の隅の方の、しかし私の視線の届く場所へやつて來て、後ろ向きになつて、荷物を拵へてゐるのです。私はさつき、彼女が此處へ這入つて來た時、早くも彼女の服装に注意したのですが、それは見覚えのない飾仙の衣類で、両も毎日そればかり着てゐたものか、襟垢が付いて、膝が出て、よれよれになつてゐるのでした。彼女は帯を解いてしまふと、その汚くない飾仙を脱いで、此れも汚いメリンスの長襦袢一つになりました。それから、今引き

二十五

出した飾仙の長襦袢を取つて、それをふはりと肩に纏つて、體中をもくもくさせながら、下に着てゐたメリンスの方を、するすると袋を脱ぐやうに盛の上へ落します。そしてその上へ、好きな衣裳の一つであつた藤甲織の火鳥を着て、紅と白との市松格子の伊達巻を巻いてぎゅつと胸がくびれるくらゐ固く緊め上げ、今度は帯の香かと思ふと、私の方を向き直つて、そこにしゃがんで、足袋を穿き換へるのでした。

私は何より、彼女の素足を見せられるのが一番強い誘惑なので、成るべく其方を見ないやうにはしましたけれど、それでもちよいちよい眼を向けたいではゐられません。彼女も無論それを意識してやつてゐるので、わざと足を襦袢のやうにくねくねさせながら、時々探りを入れるやうに、私の眼つきにそつと注意を配りました。が、穿き換へてしまふと、脱ぎ捨てた着物をさつさと始末して、

と彼女は云つて、手探袋から鍵を出して、「ちや、此處へ置いて行くわよ。——だけでもあたし、とても一通ちや荷物が運びきれないから、もう一度來るかも知れないわよ。」「來ないでもない、己の方から淺草の家へ届けやうから。」「淺草へ届けられちや困るわ、少し都合があるんだから。——」

「そんなら何處へ届けたいんだ。」「何處ツてあたし、まだ極まつちやあるないんだけれど、……」

「あたしよ」云ふと同時にボタンと戸が開いて、黒い、大きな、熊のやうな物體が戸外の闇から部屋へ闖入して來ましたが、忽ちばつとその黒い物を脱ぎ捨てると、今度は襦袢のやうに白い肩だの腕だのを露にした、うすい水色の佛蘭西ちりめんドレスを纏つた、一人の見馴れない若い西洋の婦人でした。肉つきのいい項には虹のやうにキラキラ光る水晶の頸飾りをして、眼深に被つた黒天鵝絨の帽子の下には、一種神秘的な感じがするほど恐ろしく白い鼻の尖端と頰の先が見え、生々しい朱の色をした唇が、燃えるやうに際立つてゐました。

「今晩はア」と、さう云ふ聲がして、その西洋人が帽子を取つた時、私は始めて「おや、此の女は？」とさう思ひ、それからしみじみ顔を見詰めてゐるうちに、漸く彼女がナオミであることに氣がつきました。かう云ふと不思議なやうですけれども、事實それほどナオミの姿はいつもと變つてゐたのです。いや、姿だけならいくら變つ

でも見違へる管はありますが、何よりも先づ私の顔を欺いたものはその顔でした。いかなる魔法を施したのか、顔がすつきり、皮膚の色から、眼の表情から、輪廓までが變つてゐるので、私はその聲を聞かなかつたら、帽子を脱いだ今になつても、まだ此の女は何處かの知らない西洋人だと思つてゐたかも知れません。次ぎには前にも云ふ通り、その肌の色の恐ろしい白さです。洋服の外へはみ出してゐる豊かな肉體のあらゆる部分が、林檎の實のやうに白いです。ナオミも日本の女としては黒い方ではありませんでしたが、しかしこんなに白い管はない。現に殆んど肩の方まで露出してゐる腕腕を見ると、それがどうしても日本人の腕とは信じられない。いつぞや帝冠でバンドマンのオペラがあつた時、私は若い西洋の女優の腕の白さに見惚れたことがありましたつけが、ちやうど此の腕があれに似てゐる、いや、あれよりも白いくらゐな感じでした。

するとナオミは、その水色の柔かい衣と頭飾りとをゆらりとさせて、踵の高い、漆のやうな光澤のある、新ダイヤの石を飾つたバテントレザー靴の爪先でチヨコチヨコと歩いて、——ああ、此れが此の間瀬田の話ししたシンデレラの

顔なんだと、私はその時思ひました。——片手を腰にあてて、肘を張つて、さも得意さうに胸をひねつて奇妙ななを作りながら、啞然としてゐる私の鼻の先へ、いきなり無遠慮に寄つて来たものです。

「誰治さん、あたし荷物を取りに来たよ。」

「お前が取りに来ないでもいい、使ひを寄越せと云つたぢやないか。」

「だつてあたし、使ひを頼む人がなかつたんだもの。」

さう云ふ間も、ナオミは始終、體をぢつとしてはゐませんでした。顔はむづかしく、眞面目腐つた風をしながら、胸をびたりと喚つ着けて立つて見るとか、片足を一步踏み出して見るとか、踵でコツンと床板を叩いて見るとか、その度毎に手の位置を換へ、肩を聳やかし、恰も全身の筋肉を針線のやうに緊張させ、凡べての部分に運動神經を働かせておました。すると私の視覚神經もそれに従つて緊張し出して、彼女の一舉手、一投足、その體中の一寸一寸を、残る限なく看取らないではゐませんでした。が、よくよくその顔に注意すると、成るほど面變りをしたのも道理、彼女は生え際髪の毛を、二三寸ぐらゐに短く切つて、一本一本毛の先を

つては、一夜のうちに白哲人種と化したのであらうか、いくら視詰めても、全く生地の皮膚のやうで、お白粉らしい痕がありません。それに白いのは顔ばかりでなく、肩から、胸から、指の先までがさうなのです。もしお白粉を塗つたとすれば全身へ塗つてゐなければならぬ。で、この不可解なえたいの分らぬ妖しい少女、——それはナオミであると云ふよりも、ナオミの魂が何かの作用で、或る理想的な美しさを待つ幽霊になつたのぢやないのか知らんかと、私はそんな氣さへしました。

「ねえ、いいでせう、二階へ荷物を取りに行つても？」

と、ナオミの幽霊はさう云ひました、が、その聲を聞くと矢張りいつものナオミであつて、確かに幽霊ではありません。

「うん、それはいい、……それはいいが、……」

と、私は明かに慌ててゐたので、少し上ずつた口調で云ひました。

「……お前、どうして表の戸を開けたんだ？」

「どうしてツて、鍵で開けたわ。」

「鍵は此の前、此處へ置いて行つたぢやないか。」

「鍵なんかあたし、獲つもあるわよ、一つツッキ

リぢやないことよ。」

その時始めて、彼女の紅い唇が突然微笑を浮かべたかと思ふと、媚びるやうな、囁るやうな眼つきをしました。

「あたし、今だから云ふけれど、合鍵を澤山持へて置いたの、だから一つぐらゐ取られたつて困りやしないわ。」

「けれども己の方が困るよ、さう度度やつて来られちゃ。」

「大丈夫よ、荷物さへすつきり運んでしまへば、来いと云つたつて来やしないわよ。」

そして彼女は、踵でクルリと身を翻して、トン、トン、トンと階段を昇つて、屋根裏の部屋へ駆け込みました。

……それから一體、何分ぐらゐ立つたでせうか？ 私がアトリエのソファアに凭れて、彼女が二階から降りて来るのをぼんやり待つてゐた間、……それは五分とは立たない程の間だつたか、或ひは半時間、一時間ぐらゐもさうしてゐたのか？……私にはどうも此の間の「時の長さ」と云ふものがハッキリしません。私の胸にはただ今夜のナオミの姿が、或る美しい音楽を聴いた後のやうに、恍惚とした快感となつて尾を曳いてゐるだけでした。その音楽は非

常に高い、非常に淨らかな、此の世の外の世界なる境から響いて来るやうなツプラノの叫びです。もうさうなると情慾もなく戀愛もありません、……私の心に感じたものは、さう云ふものとは凡そ最も遠い深淵とした幽霊でした。私は幾度も考へて見ましたが、今夜のナオミは、あの汚らひしい淫婦のナオミ、多くの男にヒドイ仇名を付けられてゐる賣春婦に等しいナオミとは、全く兩立し難いところの、そして私のやうな男はただその前に跪き、崇拜するより以上のことは出来ないところの、貴い憧れの的でした。もしも彼女の、あの眞つ白な指の先がちよつとでも私に觸れたとしたら、私はそれを喜ぶどころか寧ろ畏懼するでせう。その冒瀆に恐れわななき、一時のうち

しきの餘りコンコンと選り行つてしまふ。——その時の親父の、淋しいやうな、有り難いやうな心持ち。それでなければ許嫁の女に捨てられた男が、五年も十年も立つてから、或る日横濱の埠頭に立つと、そこに一艘の商船が着いて、歸朝者の群が降りて来る。そして歸らずもその群の中から彼女を見出す。さては彼女は洋行をして歸つて来たのかとさう思つても、男は最早や彼女に近づく勇氣もない。自分は昔に變らない一介の貧乏生、女は見れば野暮臭い娘時代の体はなく、巴里の生活、細育の貴澤に馴れたハイカラな婦人、二人の間には既に千里の差が出来てゐる。——その時の書生の、捨てられた自分を我と我が身で罵むやうな、思ひの外な彼女の出世をせめても己れの喜びとする心持ち。——かう云つてみても、矢張り十分に説き盡してはゐませんけれども、強ひて譬へればさう云つたやうなものでせうか。兎に角今迄のナオミには、いくら拭つても拭ききれない過去の汚點がその肉體に滲み着いてゐた、然るに今夜のナオミを見るとそれらの汚點は天使のやうな純白な肌で消されてしまつて、思ひ出すさへ思まはしいやうな気がしたものが、今はあべこべに、その指先に觸れるだけでも勿體

ないやうな感じがする。——これは一體夢でせうか？ さうでなければナオミはどうして、何處からそんな魔法を授かり、妖術を覚えて来たのでせうか！ 二三日前にはあの汚汚い銘仙の着物を着てゐた彼女が……トシ、トシ、トシと、再び威勢よく階段を降りる足音がして、その新ダイヤの靴の爪先が私の目の前で止まりました。「讀治さん、二三日うちに又来るわよ。」と、彼女は云ふのです。……眼の前に立つてはゐますけれども、顔と顔とは三尺ほどの間隔を保ち、その清冽な手足は勿論、風のやうに軽い衣の裾をも決して私に觸れようとはしないで、……

同じ香水を着けてゐるのだ……私はナオミが何と云つても、ただ「うんうん」と頷いただけでした。彼女の姿が再び夜の闇に消えてしまつても、まだ部屋の中に漂ひつつ次第にうすれて行く匂ひを、幻を越えやうに鋭い嗅覺で越ひかけながら……

二十六

細細した物で、「今夜は何を取りに来たんだい？」と尋ねて見ても、「此れ？ 此れは何でもないので、ちよいとした物なの。」と、曖昧に答へて、「あたし、喉が潤いてゐるんだけど、お茶を一杯飲ましてくれない？」などと云ひながら、私の傍へ腰かけて、二三分しやべつて行くと云ふ風でした。「お前は何處か此の近所にゐるのかね？」と、私は或る晩、彼女とテーブルに向ひ合つて、紅茶を飲みながらさう云つたことがありました。「なぜそんな事を聞きたがるの？」「聞いたつて差支へないぢやないか。」「だけでも、なぜよ。——聞いてどうする積りなのよ。」

「どうすると云ふ積りはないさ、好奇心から聞いて見たのさ。——え、何處にゐるんだよ？」「いや、云はないわ。」「なぜ云はない？」「あたしは何も、讀治さんの好奇心を満足させないやうな感じがする。——これは一體夢でせうか？ さうでなければナオミはどうして、何處からそんな魔法を授かり、妖術を覚えて来たのでせうか！ 二三日前にはあの汚汚い銘仙の着物を着てゐた彼女が……トシ、トシ、トシと、再び威勢よく階段を降りる足音がして、その新ダイヤの靴の爪先が私の目の前で止まりました。」

すると彼女は、仰向きになつて眞つ白な顔を見せ、紅い口を一杯に開けて、俄かにきやつきやつと笑ひこけました。「でも大丈夫よ、そんな悪い事はしやしないわよ。それよりかあなた、昔のことは忘れてしまつて、此れから後またのお友達として、讀治さんと付き合ひたいの。ねえ、いいでしょ？」それならちつとも差支へないでしょ？」「それも何だか、考へて見ると妙なもんだよ。」「何が妙なの？ 昔夫婦でゐた者が、友達になるのがなぜ可笑しいの？ それこそ舊式な、時勢後れの考へぢやなくつて？ ——ほんたうにあたし、以前のことなんか此れツバかしも思つてゐないのよ。そりや今だつて、若し讀治さんを誘惑する氣なら、此處で直ぐにもさうしてしまふのは譯なだけけれど、あたし誓つて、そんな事はきつとしないわ。折角讀治さんが決心したのに、それをグラツカせちや氣の毒だから……」

「ところがそれが怪しいんだよ、今はシツカリしてゐる積りだが、お前と付き合いとだんだんグラツキ出すかも知れんよ。」

「馬鹿ね、讓治さんは。―それぢや友達になるのはいや？」

「ああ、まあいやだね。」

「いやならあたし、誘惑するわよ。―讓治さんの決心を踏み躓つて、滅茶苦茶にしてやるわよ。」

ナオミはさう云つて、冗談ともつかず、眞面目ともつかず、變な眼つきでニヤニヤしました。

「友達として清く附き合ふのと、誘惑されて又ヒドイ目に遭はされるのと、孰方がよくつて？」

「あたし今夜は讓治さんを脅迫するのよ。」

「一體此の女は、どんな積りで己と友達にならうと云ふのかと、私はその時考へました。彼女が毎晩訪ねて来るのは、單に私をからかふだけの興味ではなく、まだ何かしらもろもろがあるに違ひありません。先づ友達になつて置いて、それから次第に丸め込んで、自分の方から降参をする形式でなく再び夫婦にならうと云ふのか？ 彼女の眞意がさうであるなら、そんな面倒な策略を弄してくれないでも、私は

「ふん」
と云つて、ナオミは例の鼻の先で笑ひました。こんな事があつてから後、彼女はますます足繁く出入りするやうになりました。夕方會社から歸つて来ると、
「讓治さん」と、いきなり彼女が燕のやうに飛び込んで来て、
「今夜晩飯を御馳走しない？ 友達ならばそのくらの事はしてもいいでしょ。」
と、西洋料理を奢らせて、たらふく喰べて歸つたり、さうかと思ふと雨の降る晩に遅くやつて来て、寢室の戸をトントンと叩いて、
「今晚は、もう寝ちまつたの？―寝ちまつたらば起きないでもいいわ。あたし今夜は泊まる積りでやつて来たのよ。」
と、勝手に隣りの部屋へ這入つて、床を敷いて寝てしまつたり、或る時などは朝起きて見ると、彼女がちゃんと泊まり込んでゐて、ぐうぐう眠つてゐたりすることもありました。そして彼女は二た言目には「友達だから仕方がないわよ」と云ふのでした。
私はその時分、彼女をつくづく天稟の淫婦であると感じたことがありましたが、それはど

譯なく同意したでせう。なぜなら私の胸の中には、彼女と夫婦になれるのであつたら決して「いや」とは云へない気持ちがある、もういつの間にかムラムラと燃えてゐたのですから。
「ねえ、ナオミや、ただの友達になつたつて無意味ぢやないか。そのくらゐならいつそ元通り夫婦になつてくれないかね。」
と、私は時と場合によつては、自分の方からさう切り出してもいいのでした。けれども今夜のナオミの様子では、私が眞面目に心を打ち明けて頼んだところで、手帳に「うん」とは云ひさうもない。
「また讓治さんと夫婦になる？ そんなことは眞つ平御免よ、ただの友達でなければいいよ。」
と、此方の腹が見えたとなつて、いよいよ圖に乗つて茶化すかも知れない。私の折角の心持ちがそんな扱ひを受けるやうでは詰まらなしいし、それに第一、ナオミの眞意が夫婦になると云ふのではなく、自分は何處までも自由の立場にゐて、いろいろの男を手玉に取らう、そして私を手玉の一つに加へてやらうと、さう云ふ魂膽だとすれば、尙更迂闊なことは云へない。現に彼女は其の住所をさへハッキリ云はないくらゐだから、今でも誰か男があると思

うふふと云ふと、彼女はもともと多情な性質で、多くの男に肌を見せるのを恥とも思はない女でありながら、それだけに又、不逞は非常にその肌を秘密にすることを知つてゐて、たとへばかな部分でも、決して無意味に男の眼には觸れさせないやうにしてゐたことだ。誰にでも許す肌であるものを、不逞は隠し隠しに隠さうとする。―これは私に云はせると、確かに淫婦が本能的に自己を保護する心理なのである。なぜなら淫婦の肌と云ふものは、彼女に取つて何より大切な「賣り物」であり、「商品」であるから、場合によつては眞女が肌を守るよりも、一層嚴重にそれを守らねばならない譯で、さうしなければ「賣り物」の値打ちはだんだん下落してしまひます。ナオミは實に此の間の機微を心得てゐて、會て彼女の夫であつた私の前では、尙更その肌を押し包むやうにするのでした。が、では絶対に慎しみ深くするのかと云ふと、それが必ずしもさうではなく、私があるときと着物を着換へたり、着換へる拍子にずりりと襦袢を滑り落して、

「あら」
と云ひながら、兩手で裸體の肩を隠して隣りの部屋へ逃げ込んだり、一と風呂浴びて歸つ

はなければならぬし、それをそのままするずるべつたり、妻に持つたら、私は又しても憂き目を見るのだ。
そこで私は咄嗟の間に思案をめぐらして、「では友達になつてもいいよ、脅迫されちゃ罰らないから。」
と、此方もニヤニヤ笑ひながらさう云ひました。と云ふのは、友達として付き合つてゐれば、追ひ追ひ彼女の眞意が分つて来るだらう。そして彼女にまだ少しでも眞面目なところが残つてゐたら、その時始めて此方の胸を打ち明けて、夫婦になるやうに説きつける機会もあるだらうし、今より有利な條件で妻にすることが出来るであらうと、私は私で腹に一物あつたからです。
「ぢやあ承知してくれたのね？」
ナオミはさう云つて、揉ぐつたさうに私の顔を見込んで、
「だけど讓治さん、ほんたうにただの友達よ。」
「ああ、勿論さ。」
「イヤらしいことなんか、もうお互ひに考へないのよ。」
「分つてゐるとも。―それでなけりやあ己も困るよ。」

て来て、鏡臺の前で肌を脱ぎかけ、そして始めて氣が付いたやうに、
「あら、讓治さん、そんな所にちやいやけないわ、彼方へ行つてらつしやいよ。」
と、私を追ひ立てたりするのでした。
かう云ふ風にして見せるともなく折折ちらと見せられるナオミの肌の僅かな部分は、たとへば頭の周りとか、肘とか、脛とか、膝とか云ふ程の、ほんのちよつとした片鱗だけではありましたが、憎いけれども、彼女の體が前よりも尙つややかに、憎いけれども、美しさを増してゐることは、私の眼には決して見逃せませんでした。私はしばしば想像の世界で、彼女の全身の衣を剥ぎ取り、その曲線を飽かずに眺め入ることを餘儀なくされました。

「讓治さん、何をそんなに見てゐるの？」
と、彼女は或る時、私の方へ背中を向けて着換へながら云ひました。
「お前の體つきを見てゐるんだよ、何だか斯う、先より水水しくなつたやうだね。」
「まあ、いやだ、―レディーの體を見るもんぢやないわよ。」
「見やしないけれど、着物の上からでも大抵分かるさ。先から出ツ替だつたけれど、此の頃は又

「膨れて来たね。」
 「ええ、膨れたわ、だんだんお腎が大きくなるわ。けれども脚はすつきりして、大根のやうぢやなくつてよ。」
 「うん、脚は子供の時分から眞つ直ぐだつたね。立つとどどとと唄つ着いたけれど、今でもさうかね。」
 「ええ、唄つ着くわ。」
 さう云つて彼女は、着物で體を圍ひながらピンと立つて見て、
 「ほら、ちやんと着くわよ。」
 その時私の頭の中には、何かの寫眞で覺えのあるロマンの彫刻が浮かびました。
 「謙治さん、あなたあたしの體が見たいの？」
 「見たければ見せてくれるのかい？」
 「そんな譯には行かないわよ、あなたとあたしは友達ぢやないの。さ、着換へてしまふ迄ちよいと彼方へ行つてらっしゃい。」
 そして彼女は、私の背中へ叩きつけるやうにびしやんとドアを締めました。
 こんな調子で、ナオミはいつも私の情熱を募らせるやうにばかり仕向ける、そして際どい所までおびき寄せて置きながら、それから先へは嚴重な關を設けて、一步も這入らせないので

やうに感じたものでした。
 私の頭はかうして次第に混亂され、彼女の思ふ存分に振り回されて行きました。私は今では、正式な結婚でなければ厭だの、手玉に取られるだけでは困ると、もうそんなことを云つてゐる餘裕はなくなりました。いや、正直を云ふと斯うなることは初めから分つてゐた筈なので、若しほんたうに彼女の誘惑を恐れるならば、附き合はなければいゝものを、彼女の眞意を探るためとか、有利な機會を窺ふためとかか云つたのは、自分で自分を欺かうとする口實に過ぎなかつたのです。私は誘惑が恐い恐いと云ひながら、本音を吐けばその誘惑を心待ちにしてゐたのです。ところが彼女はいつ迄も立つてもそのつまらない友達ごつこを繰り返すばかりで、決してそれ以上は誘惑しません。此れは彼女がいやが上にも私を焦らす計略だらう、焦らして焦らし抜いて、「時分はよし」と見た頃に突然「友達」の假面を脱ぎ、得意の魔の手を伸ばすのであらう、今に彼女はきつと手を出す、出さないで済ます女ではない、此方はせいぜい彼女の計略に載せられてやつて、「ちんちん」と云へば「ちんちん」をする、「お預け」と云へば「お預け」をする、何でも彼女の註文通りの戯

す。私とナオミとの間にはガラスの壁が立つてゐて、どんなに接近したやうに見えても、實は到底這入ることの出来ない隔りがある。ウツカリ手出しをしようものなら必ずその壁に突き當つて、いくら焦れても彼女の肌には觸れる譯に行かないのです。時にはナオミはヒョイとその壁を除けさうにするので、「おや、いいのかな」と思つたりしますが、近寄つて行けば矢張り元通り詰まつてしまひます。
 「謙治さん、あなた好い兒ね、一つ接吻して上げるわ。」
 と、彼女はからかひ半分によくそんなことを云つたものです。からかはれるとは知つてゐながら、彼女が唇を向けて來るので私もそれを吸ふやうにすると、アハヤと云ふ時その唇は逃げてしまつて、はつと二三寸離れた所から私の口へ息を吹つけ、
 「此れが友達の接吻よ。」
 と、さう云つて彼女はニヤリと笑ひます。
 此の「友達の接吻」と云ふ風變りな挨拶の仕方、女の唇を吸ふ代りに、息を吸ふだけで満足しなければならぬところの不思議な接吻、——此れはその後習慣のやうになつてしまつて、別れ際などに、
 「ちや左様なら、又來るわよ。」
 と、彼女が唇をさし向けると、私はその前へ顔を出して、恰も吸入器に向つたやうにポカンと口を開きます。その口の中へ彼女がはつと息を吹つ込む、私がそれをすうと深く、目を潰つて、おいしいさうに胸の底に嚙み下します。彼女の息は温り氣を帯びて生温く、人間の肺から出たとは思へない、甘い、花のやうな薫りがします。
 「彼女は私を迷はせるやうに、そつと唇へ香水を塗つてゐたのださうですが、さう云ふ仕掛けがしてゐることを無論その頃は知りませんでした。——私は斯う、彼女のやうな妖婦になると、内臓までも普通の女と違つてゐるのぢやないか知らん、だから彼女の體内を這つて、その口腔に含まれた空氣は、ちやうど花園を這つて來た風のやうに、こんなまめかしい匂ひがするのぢやないか知らん、と、よくさう思ひ思ひしました。そして眼を潰つて、ちつと味はふと、それが單なる空氣であり、水蒸氣でありながら、何だか彼女の肉體の一部であるやうな心地がして、舌や唇で觸られるのと全く同じ觸感を覺え、その軟かいいぶきの中には正しく彼女の生命が通ひ、彼女の心臓から沸き出る血潮が、動悸を打つて流れてゐる

當をやつてゐれば、しまひには獲物に有りつけるだらうと、毎日毎日、鼻をうごめかしてゐましたが、私の豫想は容易に實現されさうもなく、今日はいよいよ假面を脱ぐか、明日は魔の手が飛び出すかと思つても、その日になると危機一髪と云ふところでスルリと逃げられてしまふのです。
 さうなると私は、今度はほんたうに焦れ出しました。「己は此の通り待ちかねてゐるんだ、誘惑するなら早くしてくれ」と云はねばかりに、體中に隙を見せたり、弱點をさらけ出したリして、果ては此方からあべこべに誘ひをかけたりました。しかし彼女は一向取り上げてくれな

いで、
 「何よ謙治さん！ それぢや約束が違ふぢやないの。」
 と、子供をたしなめるやうな眼つきで、私を叱りつけるのです。
 「約束なんかどうだつていい、己はもう……」
 「駄目、駄目！ あたしたちはお友達よ！」
 「ねえ、ナオミ……そんなことを云はないで、……お願ひだから……」
 「まあ、うるさいわね！ 駄目だつたら……」
 さ、その代りキッスして上げるわ。」

「ね、いいでしょ？ 此れで我慢しなけりや駄目よ、此れだけだつて友達以上かも知れないけれど、謙治さんだから特別にして上げるんだわ。」
 が、此の「特別」な愛撫の手段は、却つて私の神經を異常に刺激する力があつても、決して静めてはくれません。
 「畜生！ 今日駄目だつたか、又ゴマかされてしまつたか。」
 と、私はますます苛立つて來ます。彼女がふいと風のやうに出て行つてしまふと、暫くの間は何事も手に着かず、自分で自分に腹を立てて、檻に入れられた猛獸の如く部屋の中をウロウロしながら、そこらちゆうの物を八つ中りに叩きつけたリ、破いたりします。
 私は實に、此の氣遣ひじみた、男のヒステリックとも云ふべき發作に悩まされたものですが、彼女の來るのが毎日であるので、發作の方も極まつて一日に一遍づつは起るのでした。おまけに私のヒステリーは普通のそれと性質が違ひ、發作が止んでしまつても、後でケロリと氣が軽くなりはしませんでした。寧ろ氣分が落ち着いて來ると、今度は前よりも一層明瞭に、一層執

地に、ナオミの肉體の細細した部分がチツと思ひ出されました。着換へをした時にちよいと着物の裾から洩れた足であるとか、息を吹つかけてくれた時について二三寸傍まで寄つて来た唇であるとか、さう云ふものがそれらを実際に見せられた時より、却つて後になつて一人またまざと目の前に浮かび、その唇や足の線を傳はつて次第に空想をひろげて行くと、不思議や實際には見えなかつた部分までも、恰も種板を現像するやうにだんだん見え出して、遂には全く大理石のグイナスの像にも似たものが私の心の間の底に忽然と姿を現はすのです。私の頭は天鵞絨の靴で圍まれた舞臺であつて、そこに「ナオミ」と云ふ一人の女優が登場します。八方から注がれる舞臺の照明は、眞暗な中に揺らいでゐる彼女の白い體だけを、カツキリと強い圓光を以て包みます。彼女は絶え間なくゆらゆらと、霜のやうに冴えた、館のやうにねつとりとした手足を波打たせて踊つてゐますが、その踊りの意味は外の人には分らないでも、私にはよく分るのである。私が一心に視詰めてみると、彼女の肌は燃える光りはいよいよ明るさを増して来る、時には私の眉を灼きさうに迫つて来る、活動寫眞の「大映し」のやうに、部分

部分が非常に鮮やかに擴大される、その幻影が實感を以て私の官能を脅かす程度は、本物と少しも變りはなく、物足りないのは手で觸れることが出来ないといふ一點だけで、その他の點では本物以上に生き生きとしてゐる。あんまりそれを視詰めると、私はしまひにグラグラと眩暈がするやうな心地を覺えて、體中の血が一度にかアツと顔の方へ上つて来て、ひとりりで動悸が激しくなります。すると再びヒステリーの發作が起つて、椅子を蹴飛ばしたり、カーテンを引きちぎつたり、花瓶を打つ壊したりします。

私の妄想は日増しに狂暴になつて行き、眼を潰りさへすればいつでも暗い眼瞼の陰にナオミがゐりました。私はよく、彼女の芳はしい息の匂ひを想ひ出して、虚空に向つて口を開け、さながら彼女のいぶきを吸ふやうに、はつとその邊の空気を吸ひました。往來を歩いてゐる時でも、部屋に籠居してゐる時でも、彼女の「唇が熱しくなると、私はいきなり天を仰いで、はつはつとやりました。私の眼には現る所にナオミの紅い唇が見え、そこらちゆうにある空気が云ふ空気が、みんなナオミのいぶきであるかと思はれました。つまりナオミは天地の間に充

満して、私を取り巻き、私を苦しめ、私の呻きを聞きながら、それを笑つて眺めてゐる悪魔のやうなものでした。

「謙治さんは此の頃變よ、さうしどうかしてゐるわよ。」

と、ナオミは或る晩やつて来て、さう云ひました。

「そりやあどうかしてゐるだらうさ、こんなにお前に焦らされりやあ、……」

「ふん、……」

「何がふんだい？」

「あたし、約束は嚴重に守る積りよ。」

「いつ迄守る積りなんだい？」

「永久に。」

「冗談ぢやない、かうしてゐると己はだんだん氣が變になるよ。」

「ぢや、いいことを教へて上げるわ、水道の水を頭からザツと打つかけるといいわ。」

「おい、ほんたうにお前。」

「又始まつた！ 謙治さんがそんな眼つきをするから、あたし尙更からかつてやりたくなんんだわ。そんなに傍へ寄つて来ないで、もつと離れていらつしやいよ、指一本でも觸らないやうにして頂戴よ。」

「ぢやあ仕方がない、女達のキッスでもしておくれよ。」

「大人しくしておれば上げて上げるわ、けども後で氣が變になりやしくつて？」

「なつてもいいよ、もうそんな事を構つてなんかゐられないんだ。」

二十七

その晩ナオミは、指一本でも觸らないやうに「私をテーブルの向う側にかけさせ、ヤキモキしてゐる私の顔を面白さうに眺めながら、夜遅くまで無駄口を叩いてゐましたが、十二時が鳴ると、

「謙治さん、今夜は泊めて貰ふわよ。」

と、又しても人をつからかふやうな口調で云ひました。

「ああ、お泊まり、明日は日曜で己も一日内にゐるから。」

「だけでも何よ、泊まつたからつて、謙治さんの注文通りにはならないわよ。」

「いや、御念には及ばないよ、注文通りになるやうな女でもないからな。」

「なれば都合が好いと思つてゐるんぢやないの。」

さう云つて彼女は、タスクスと鼻を鳴らして、「さ、あなたから先へお休みなさい、寢語を云はないやうにして。」

と、私を二階へ追ひ立てて置いて、それから隣りの部屋へ這入つて、ガチンと鍵をかけた。

私は勿論、隣りの部屋が氣にかかつて容易に寝つかれませんでした。以前、夫婦でゐた時分にはこんな馬鹿なことはなかつたんだ、己が斯うして寝てゐる傍に彼女もゐたんだ、さう思ふと、私は無上に口惜しくなりました。

壁一重の向うでは、ナオミが頻りに、——

或ひはわざとさうするか、——ドタンバタンと、床に地響きをさせながら、布団を敷いたり、枕を出したり、寢衣度をしてゐます。あ、今髪を解かしてゐるな、着物を脱いで寢間着に着換へてゐるところだなと、それらの様子が手に取るやうに分ります。それからばつと夜具をまくつたけはひがして、續いてどしんと、彼女の體が布団の上へ打つ倒れる音が聞えました。

「えらい音をさせるなあ、」

と、私は半ば獨り言のやうに、半ば彼女に聞えるやうに云ひました。

「まだ起きてるの？ 寢られないの？」

と、壁の向うから直ぐとナオミが應じました。

「ああ、なかなか寢られさうもないよ、——己はいろいろ考へ事をしてゐるんだ。」

「うふふふ、謙治さんの考へ事なら、聞かないでも大概分つてゐるわ。」

「けども、實に妙なもんだよ。現在お前が此の壁の向うに寢てゐるのに、どうすることも出来ないなんて。」

「ちつとも妙なことはないわよ。ずつと昔はさうだつたぢやないの、あたしが始めて謙治さんの所へ来た時分は、——あの時分には今夜のやうにして寢たぢやないの。」

私はナオミにさう云はれると、ああさうだつたか、そんな時代もあつたんだつて、あの時分にはお互ひに純なものでつたのにと、ホロリとするやうな氣になりましたが、此れは少しも今の私の愛感を解めてはくれませんでした。却つて私は、二人がいかに深い因縁で結び着けられてゐるかを思ひ、到底彼女と離れられない心持ちを、痛切に感じるばかりでした。

「あの時分にはお前は無邪氣なもんだつたがね。」

「今だつてあたしは至極無邪氣よ、有邪氣なのは謙治さんだわ。」

「何とでも勝手に云ふがいいさ、己はお前を何處迄も追つ返す積りだから。」
「うふふふ」

「おい！」
私はさう云つて、壁をどんと打ちました。

「あら、何するのよ、此處は野中の一軒家ぢやあないことよ。何卒お静かに願ひます。」

「此の壁が邪魔だ、此の壁を打つ壊してやりた

いもんだ。」
「まあ厭らしい。今夜はひどく鼠が暴れる。」

「そりや暴れるとも、此の鼠はヒステリーになつてゐるんだ。」

「あたしはそんなお爺さんの鼠は嫌ひよ。」
「馬鹿を云へ、己はぢぢいぢぢやないぞ、まだやつと三十二だぞ。」

「あたしは十九よ、十九から見れば三十二の人はお爺さんよ。悪いことは云はないから、外に奥さんをお貰ひなさいよ、さうしたらヒステリーが直るかも知れないから。」

「ナオミは私が何を云つても、しまひにはもう、うふうふ笑ふだけでした。そして間もなく、

「もう寝るわよ。」
と、ぐうぐう空軒をかき出しましたが、やがてほんたうに寝入つたやうでした。

るのが流行つてゐるのよ。ね、あたしの眉毛を御覽なさい、亞米利かの女はこんな工合にみんな眉毛を剃つてゐるから。」

「ははあ、さうか、お前の顔が此の間から面變りがして、眉の形まで違つちまつたのは、そこをそんな風に剃つてゐるせむか。」

「ええ、さうよ、今頃になつて気が付くなんて、時勢後れね。」

「ナオミはさう云つて、何か別な事を考へてゐる様子でしたが、

「讀治さん、もうヒステリーはほんたうに直つて？」

と、ふいとそんなことを尋ねました。

「うん、直つたよ。なぜ？」

「直つたら讀治さんにお願ひがあるの。——此れから床屋へ出かけて行くのは大儀だから、あたしの顔を剃つてくれない？」

「そんな事を云つて、又ヒステリーを起させようツて氣なんだらう。」

「あら、さうぢやないわよ、ほんとに眞面目で頼むんだから、そのくらの親切があつてもいいでしょ？ 尤もヒステリーを起されて、怪我でもさせられちゃ大變だけれど。」

「安全剃刀を貸してやるから、自分で剃つたら

明くる日の朝、眼を覺まして見ると、ナオミはしどけない寝間着姿で、私の枕もとに据わつてゐます。

「どうした？ 讀治さん、昨夜は大變だつたわね。」

「うん、此の頃は、時々あんな風にヒステリーを起すんだよ。恐かつたかい？」

「恐かなかつたわ、面白かつたわ、又あんな風になさして見たいわ。」

「もう大丈夫だ、今朝はすつかり治まつちまつた。——ああ、今日は好い天氣だなあ。」

「好い天氣だから起きたらどう？ もう十時過ぎよ。あたし一時間も前に起きて、今朝湯に行つて来たの。」

私はさう云はれて、寝ながら彼女の湯上り姿を見上げました。一體女の「湯上り姿」と云ふものは、——その眞の美しきは、風呂から上つたばかりの時よりも、十五分なり二十分なり、多少時間を置いてからがいい。風呂に漬かるとどんなに皮膚の綺麗な女でも、一時は肌が茹り過ぎて、殊に指の先などが赤くふやけるものですが、やがて體が適當な温度に冷やされると、始めて肌が固まつたやうに透き徹つて来る。ナオミは今しも、風呂の隅りに戸外の風に

「いいぢやないか。」
「ところがさうは行かないの。顔だけならいいけれど、頸の周りから、ずうつと肩の後ろの方まで剃るんだから。」

「へえ、どうしてそんな所まで剃るんだ？」

「だつてさうでしょ、夜會服を着れば肩の方まですつかり出るでしょ。——」

そしてわざわざ、肩の内をちよつとばかり出して見せて、

「ほら、ここいらまで剃るのよ、だから自分ちや出来やしないわ。」

さう云つてから、彼女は慌てて又その肩をスボリと引つ込めてしまひましたが、毎度してやられる手ではありながら、それは私には矢張り抵抗し難いところの誘惑でした。ナオミの切、顔が剃りたいのでも何んでもないんだ、己を練習するつもりで、湯にまで這入つて来やがつたんだ。——と、さう分つてはあましたけれども、兎に角肌を剃らせると云ふのは、今迄にない一つの新しい挑戦でした。今日こそうんと近くへ寄つて、あの肌理の細かな、滑らかな皮膚をしてみじみと見られる、もちろん觸つてみることも出来る。さう考へただけでも私は、とても彼女の申し出でを斷る勇氣はありませんでした。

吹かれて来たので、湯上り姿の最も美しい瞬間にゐました。その脆弱な、うすい皮膚は、まだ水蒸氣を含みながらも眞つ白に浮え、着物の襟に隠れてゐる胸のあたりには、水彩畫の繪の具のやうな紫色の影があります。顔はつやつやと、セラチンの膜を張つたかの如き光澤を帯び、ただ眉毛だけがじつとり濡れてゐて、その上にはカラリと晴れた冬の空が、窓を透してほんのり青く映つてゐます。

「どうしたんだい、朝ッぱらから湯になんぞ這入つて。」

「どうしたつて大きなお世話よ。——ああ、いい心持だつた。」

と、彼女は鼻の兩側を平手でハタハタと軽く叩いて、それからぬうツと、顔を私の目の前へ突き出しました。

「ちよいと！ よく見て頂戴、能が生えてる？」

「ああ、生えてるよ。」

「ついでにあたし、床屋へ寄つて顔を剃つて来ればよかつたつて。」

「だつてお前は剃るのが嫌ひだつたぢやないか。西洋の女は決して顔を剃らないと云つて。」

ナオミは私が、彼女のために瓦の煤で湯を沸かしたり、それを金盥へ取つてやつたり、安全剃刀のジレットの刃を附け換へたり、いろいろ支度をしてやつてゐる間に、窓のところへ机を持ち出してその上に小さな鏡を立て、兩足の間へ臂をびたんこに落して据わつて、次ぎには白い大きなタオルを襟の周りへ巻き着けました。が、私が彼女の後ろへ廻つて、コイルゲートのシャボンの棒を水に塗らして、いよいよ剃らうとするとなんか、

「讀治さん、剃つてくれるのはいいけれど、——」

「條件があることよ。」

と、云ひ出しました。

「條件？」

「ええ、さう、別にむづかしい事ぢやあないの。」

「どんな事さ？」

「剃るなんて云つてゴマカシで、指で方方摘まんだらしちや厭だわよ、ちつとも肌に觸らないやうにして、剃つてくれないけりや。」

「だつてお前、——」

「何がだつてよ、觸らないやうに剃れるぢやないの、シャボンはブラシで塗ればいいんだし、剃刀はジレットを使ふんだし、床屋へ行つても上手な職人は觸りやしないわ。」

「床屋の職人と一緒にされちやあ遣り切れな
いな。」
「生意氣云つてらあ、實は刺らして貰ひたい癖
に！...それがイヤなら、何も無理には頼まな
いわよ。」
「イヤぢやあないよ。さう云はないで刺らして
おくれよ、折角支度までしちやつたんだから。」
私はナオミの、抜き衣紋にした長い襟足を
覗きめると、さう云ふより外はありませんでし
た。

「ぢや、條件通りにする？」
「うん、する。」
「絶対に觸つちやいけないわよ。」
「うん、觸らない。」
「もしちよつとでも觸つたら、その時直ぐに止
めにするわよ。その左の手を、ちやんと膝の上
に載せていらつしやい。」
私は云はれる通りにしました、そして右の
方の手だけを使つて、彼女の口の周りに刺つ
て行きました。
彼女はうつとりと、剃刀の刃に撫でられて行
く快感を味はつてゐるかのやうに、顔を鏡の
面に据ゑて、大人しく私に刺らせてゐました。
私の耳には、すうすうと引く睡いやうな呼吸

「さ、今度は腋の下。」
と云ふのでした。
「え、腋の下？」
「ええ、さう、洋服を着るには腋の下を刺
るもんよ、此處が見えたら失禮ぢやないの。」
「意地悪！」
「どうして意地悪よ、可笑しな人ね。...あた
し海冷めがして来たから早くして頂戴。」
その一刹那、私はいきなり剃刀を捨てて、被
女の肘へ飛び着きました。...飛び着くと云ふ
よりは噛み着きました。と、ナオミはちやんと
それを豫期してゐたかの如く、直ぐその肘で私
をグンと撥ね返しましたが、私の指はそれで
も何處かに觸つたと見え、シャボンでツルリと
滑りました。彼女はもう一度、力一杯私を壁
の方へ突き除けるや否や、
「何するのよ！」
と、鋭く叫んで立ち上りました。見るとその
顔は、私の顔が眞つ青だつたからでせうが、
彼女の顔も...冗談ではなく、眞つ青でした。
「ナオミ！ ナオミ！ もうからかふのは好い
加減にしてくれ！ よ！ 何でもお前の云ふこ
とは聴く！」
何を云つたか全く前後不覚でした、ただせ

が開え、私の眼には、その頭の下でビクビクし
てゐる頸動脈が見えてゐます。私は今や、長
い睫毛で刺されるくらゐ彼女の顔に接近しまし
た。窓の外には乾燥し切つた空氣の中に、朝の
光りが朗らかに照り、一つ一つの毛孔が数へら
れるほど明るい。私はこんな明るい所で、こ
んなにいつ迄も、そしてこんなにも精細に、自
分の愛する女の目を凝視したことはめつた
にありません。かうして見るとその美しさは
五人のやうな偉人さを持ち、容積を持つて差つ
て来ます。その恐ろしく長く切れた眼、立派な
建築物のやうに秀でた鼻、鼻から口へつがが
つてゐる突元とした二本の線、その線の下に、た
つぷり深く刺まれた紅い唇。ああ、これが「ナ
オミの顔」と云ふ一つの靈妙な物質なのか、此の
物質が己の煩悩の種となるのか。...さう考へ
ると實に不思議になつて来ます。私は思はず
ブラシを取つて、その物質の表面へ、ヤケにシ
ヤボンの泡を立てます。が、いくらブラシで搔
き廻しても、それは靜かに、無抵抗に、ただ柔か
な弾力を以て動くのみです。
私の手にある剃刀は、銀色の虫が這ふ
やうにしてなだらかな眼を這ひ下り、その項か
ら肩の方へ移つて行きました。かつぶくのいい

ツカチに、早口に、さながら熱に浮かされた如く
しやべりました。それをナオミは、黙つて、まじ
まじと、棒のやうに突つ立つたまま、呆れ返つた
と云ふ風に眺みてゐるだけでした。
私は彼女の足下に身を投げ、跪いて云ひ
ました。
「よ！ なぜ黙つてゐる！ 何とか云つてくれ！
否なら己を殺してくれ！」
「無造ひ。」
「うん、氣遣ひだ、氣遣ひで悪いか。」
「誰がそんな氣遣ひを、相手になんかしてやる
もんか。」
「ぢやあ己を馬にしてくれ、いつかのやうに己
の背中へ乗つかつてくれ、どうしても否ならそ
れだけでもいい！」
私はさう云つて、そこへ四つん這ひになり
ました。
一瞬間、ナオミは私が事實發狂したかと思
つたやうでした。彼女の顔はその時一層、どす
黒いまでに眞つ青になり、眼を据ゑて私を見
てゐる眼の中には、死んど恐怖に近いものがあ
りました。が、忽ち彼女は猛然として、圓太い
大膽な表情を流し、どしんと私の背中の上へ
跨りながら、

彼女の背中が、眞つ白な牛乳の海のやうに、廣
く、堆く、私の視野に這入つて来ました。一
體彼女は、自分の顔は見えてゐるだらうが、背中が
こんな美しいことを知つてゐるだらうか？
彼女自身は恐らくは知るまい。それを一番よく
知つてゐるのは私だ、私は嘗て此の背中を、
毎日おに入れて洗つてやつたのだ。あの時もち
やうど今のやうにシャボンの泡を掻き立てなが
ら。...これは私の戀の古蹟だ。私の手が、
私の指が、此の濃艶な雪の上に纏結として敷
れ、此處を自由に、楽しく踏んだことがあるの
だ。今でも何處かに痕が残つてゐるかも知れな
い。
「麗治さん、手が顔へるわよ、もつとシツカリ
やつて頂戴。」
突然ナオミの云ふ聲がしました。私は頭が
ガンガンして、口の中が干涸らびて、奇態に體が
震へるのが自分でも分りました。はッと思つて、
「氣が違つたな」と感じました。それを一生懸
命に堪へると、急に顔が熱くなつたり、冷めた
くなつたりしました。
しかしナオミのいたづらは、まだこれだけで
は止まないのです。肩がすつかり刺れてしま
ふと、袂をまくつて、肘を高くさし上げて、

「さ、これでいいか。」
と、男のやうな口調で云ひました。
「うん、それでいい。」
「此れから何でも言ふことを聴くか。」
「うん、聴く。」
「あたしが要るだけ、いくらでもお金を出す
か。」
「出す。」
「あたしに好きな事をさせるか、一一干渉なん
かしないか。」
「あたしは小使を兼ねるを合へる。」
「しない。」
「あたしのことを「ナオミ」なんて呼びつけにし
ないで、「ナオミさん」と呼ぶか。」
「うん、呼ぶ。」
「きつとか。」
「きつとか。」
「よし、ぢやあ馬でなく、人間扱ひにして上げ
る、可哀さうだから。...」
そして私とナオミとは、シャボンだらけに
なりました。
ナオミは私に、身を合はせました。
「...此れで漸く夫婦になれた、もう今度こそ
逃がさないよ。」
と、私は云ひました。

「あたしに逃げられてそんなに困った？」
「ああ、困ったよ、一時はとても歸つて来ては
くれないのかと思つたよ。」

「どう？ あたしの恐ろしいことが分つた？」
「分つた、分り過ぎるほど分つたよ。」

「ぢや、さつき云つたことは忘れないわね、何
でも好きにさせてくれるわね。——お母と云つ
ても、堅い苦しい夫婦はイヤよ、でないとあた
し、又逃げ出すわよ。」

「此れから又「ナオミさん」に「譲治さん」で
行

「ときどきダンスに行かしてくれませんか？」
「うん、」

「いろいろなお友達と付き合つてもいい？
う先の方々に文句を云はない？」

「うん、」
「尤もあたし、まあ、ちゃんとは絶交したのよ。」

「へえ、熊谷と絶交した？」
「ええ、した、あんなイヤな奴はありやしない
わ。——此れから成るべく西洋人と付き合ふの、
日本人より面白いわ。」

「その横濱の、マツカネルと云ふ男かね？」
「西洋人のお友達な、大勢あるわ。マツカネル

「へえ、熊谷と絶交した？」
「ええ、した、あんなイヤな奴はありやしない
わ。——此れから成るべく西洋人と付き合ふの、
日本人より面白いわ。」

「その横濱の、マツカネルと云ふ男かね？」
「西洋人のお友達な、大勢あるわ。マツカネル

「へえ、熊谷と絶交した？」
「ええ、した、あんなイヤな奴はありやしない
わ。——此れから成るべく西洋人と付き合ふの、
日本人より面白いわ。」

二十八

さて、話は此れから三四年の後のことになり
ます。

私たちは、あれから横濱へ引き移つて、かね
てナオミの見つけて置いた山手の洋館を借り
ましたけれども、だんだん費澤が身に沁みるに
似ひ、やがてその家も手狭だと云ふので、間も
なく本牧の、前に瑞西の家族が住んでゐた家を、
家具ぐるみ買つて、そこへ遷入るやうになりま
した。あの大地震で山手の方は残らず焼けてし
まひましたが、本牧は助かつた所が多く、私の
家も壁に亀裂が出来たぐらゐで、殆んど此れと
云ふ損害もなしに済んだのは、全く何が仕合は
せになるか分りません。ですから私たちは、今
でもずつと此の家に住んでゐる譯なのです。
私はその後、計畫通り大井町の會社の方は辭
職をし、田舎の財産は整理してしまつて、學校
時代の二三の同窓と、電氣機械の製作販賣を目
的とする合資會社を始めました。此の會社は、

だつて、別に怪しい譯ぢやないのよ。」

「ふん、どうだか、——」
「それ、さう人を疑うからいけないのよ、あ
たしが斯うと云つたらば、ちゃんそれを信じて
じなさい。よくつて？ さあ！ 信じるか、信
じないか？」

「信じる！」
「まだその外にも註文があるわよ、——譲治
さんは會社を罷めてどうする積り！」

「お前に捨てられちまつたら、田舎へ引つ込ま
うと思つたんだが、もう斯うなれば引つ込まな
いよ。田舎の財産を整理して、現金にして持
てくるよ。」

「現金にしたらどのくらゐある？」
「さあ、此方へ持つて來られるものは、二三十
萬はあるだらう。」

「それッぽつち？」
「それだけあれば、お前と己と二人ツきりなら
深山ぢやないか。」

「費澤をして遊んで行かれる？」
「そりや、遊んぢやあ行かれないよ。——お前
は遊んでもいいけれど、己は何か事務所でも開
いて、獨立して仕事をやる積りだ。」

「仕事の方へみんなお金を注ぎ込んぢまつちや
ない？」
「それだけあれば、お前と己と二人ツきりなら
深山ぢやないか。」

「費澤をして遊んで行かれる？」
「そりや、遊んぢやあ行かれないよ。——お前
は遊んでもいいけれど、己は何か事務所でも開
いて、獨立して仕事をやる積りだ。」

「仕事の方へみんなお金を注ぎ込んぢまつちや
ない？」
「それだけあれば、お前と己と二人ツきりなら
深山ぢやないか。」

「費澤をして遊んで行かれる？」
「そりや、遊んぢやあ行かれないよ。——お前
は遊んでもいいけれど、己は何か事務所でも開
いて、獨立して仕事をやる積りだ。」

「仕事の方へみんなお金を注ぎ込んぢまつちや
ない？」
「それだけあれば、お前と己と二人ツきりなら
深山ぢやないか。」

私が一番の出資者であつた代りに、實際の仕事
は友達をやつてくれてゐるので、毎日事務所へ
出る必要はないのですが、どう云ふ譯か、私が
一日家にゐるのをナオミが好まないものですか
ら、イヤイヤながら日に一遍は見廻ることにし
てあります。私は朝の十一時頃に、横濱から東
京に行き、京橋の事務所へ二時間程を出し
て、大概夕方の四時頃には歸つて來ます。
昔は非常な勤家であつた朝は早起きの方でし
たけれども、此の頃の私は、九時半か十時でな
ければ起きません。起きると直ぐに、寢着の
まま、そつと爪先で歩きながら、ナオミの寢室
の前行つて、靜かに扉をノックします。しか
しナオミは私以上に寢坊ですから、まだその
時は夢現で、

「ふん」
と、微かに答へる時もあり、知らずに寢てゐ
る時もあります。答があれば私は部屋へ進入つ
て行つて、挨拶をし、答へがなければ扉の前か
ら引き返して、そのまま事務所へ出かけるので
す。

かう云ふ風に、私たち夫婦はいつの間にか、
別別の部屋へ寢るやうになつてゐるのですが、
もとはと云ふと、此れはナオミの發案でした。

イヤだわよ、あたしに費澤をさせるお金を、別
にして置いてくれなけりや。いい？」

「ああ、いい。」
「ぢや、半分別にして置いてくれる？——三十
萬圓なら十五萬圓、二十萬圓なら十萬圓、——」

「大分細かく念を押すんだね、——」
「そりやあさうよ、初めに條件を極めて置くの
よ。——どう？ 承知した？ そんなに迄して
あたしを奥さんに持つのはイヤ？」

「イヤぢやないツたら、——」
「イヤならイヤと仰つしやいよ、今のうちなら
どうでもなるわよ。」

「大丈夫だつてば、——承知したつてば、——」
「それからまだよ、——もうさうなつたらこん
な家にはゐられないから、もつと立派な、ハイ
カラな家へ引越して頂戴。」

「無論さうする。」
「あたし、西洋人のゐる街で、西洋館に住まひ
たいの、綺麗な寢室や食堂のある家へ遷入つて
コックだのボーイを使つて、——」

「そんな家が東京にあるかね？」
「東京にはないけれど、横濱にはあるわよ、横
濱の山手にさう云ふ借家がちやうど一軒空いて

婦人の間房は神聖なものである、夫と雖も安
りに思ふことはならない、——と、彼女は云つ
て、廣い方の部屋を自分が取り、その隣りにあ
る狭い方の部屋を私の部屋にあてがひました。さう
して隣り同志とは云つても、二つの部屋は直
接つながつてはゐないのでした。その間に夫
婦専用の浴室と便所が挟まつてゐる、つまりそ
れだけ、互ひに隔たつてゐる譯で、一方の室か
ら一方へ行くには、そこを通り抜けなければな
りません。

ナオミは毎朝十一時過ぎまで、起きるでもな
く睡るでもなく、寢床の中でうつらうつらと、
煙草を吸つたり新聞を讀んだりしてゐます。煙
草はデイトリノの細巻、新聞は都新聞、それ
から雑誌のクラシックやヴオーグを讀みます。
いや、讀むのではなく、中の意匠を、——主に
洋服の意匠や流行を、——一枚一枚丁寧に眺
めてゐます。その部屋は東と南が開いて、ズ
ランダの下に直ぐ本牧の海を控へ、朝は早くが
ら明るくなります。ナオミの寢室は、日本間な
らば二十疊も敷けるくらゐな、廣い室の中央に
据ゑてあるのですが、それも普通の安い寢臺で
はありません。或る東京の大旅館から賣り物
に出た、天蓋の附いた、白い、紗のやうな帳の

垂れてゐる寝臺で、此れを買つてから、ナオミは一層寢心地がよいのか、前よりもなほ床離れが惡くなりました。

彼女は顔を洗ふ前に、寢床で紅茶とミルクを飲みます。その間にアマが風呂場の用意をします。彼女は起きて、眞つ先きに風呂へ這入り、湯上りの體を又暫く横たへながら、マツサイヂをさせます。それから髪を結び、爪を研ぎ、七つ道具と云ひますが中中七つどころではない、何十種とある薬や器具で顔ちゆうをいぢくり廻し、着物を着るのに被れか此れかと迷つた上で、食堂へ出るのが大概一時半になります。

午飯をたべてしまつてから、晩まで殆んど用はありません。晩にはお客に呼ばれるか、或ひは呼ぶか、それでなければホテルへダンスに出かけるか、何かしないことはないのですから、その時分になると、彼女はもう一度化粧をし、着物を取り換へます。夜會がある時は殊に大變で、風呂場へ行つて、アマに手傳はせて、顔ちゆうへお面粉を塗ります。

ナオミの友達によく變りました。濱田の熊はあれからふつり出入りをしなくなつてしまつて、一と頃は例のマツカネルがお氣に入りのやうでしたが、間もなく彼に代つた者は、デュガンと云ふ男でした。デュガンの次ぎには、ユスタスと云ふ友達が出来ました。此のユスタスと云ふ男は、マツカネル以上に不愉快な奴で、ナオミの御機嫌を取ることが實に上手で、一度私は、腹立ち紛れに、舞踏會の時此奴を打ん殴つたことがあります。すると大變な騒ぎになつて、ナオミはユスタスの加勢をして「氣遣ひ！」と云つて私を罵る。私はいよいよ狂つて、ユスタスを追ひ廻す。みんなが私を抱き止めて「チヨーチ！ チヨーチ！」と大聲で叫ぶ。――私の名前は讓治ですが、西洋人はこの名をのりて「チヨーチ」「チヨーチ」と呼ぶのです。

――そんなことから、結局ユスタスは私の家へ来ないやうになりましたが、同時に私も、又ナオミから新しい條件を持ち出され、それに服従することになつてしまひました。

ユスタスの後にも、第二第三のユスタスが出来たことは勿論ですが、今では私は、我ながら不思議に思ふくらゐ大人しいのです。人間と云ふものは一層恐ろしい目に會ふと、それが脅迫觀念になつて、いつ迄も頭に殘つてゐると見え、私は未だに、嘗てナオミに逃げられた時の、あの恐ろしい記憶を忘れることが出来ないので。――あたしの恐ろしいことが分つたか――

と、さう云つた彼女の言葉が、今でも耳にこびり着いてゐるのです。彼女の浮氣と我が儘とは昔から分つてゐたことで、その缺點を取つてしまへば、彼女の値打ちもなくなつてしまふ。浮氣な奴だ、我が儘な奴だと思へば思ふほど、一層可愛さが増して来て、彼女の腹に陥つてしまふ。ですから私は、怒れば尙更自分の負けになることを、悟つてゐるのです。

自信がなくなると仕方がないので、目下の私は、英語をどうも到底彼女には及びません。實地に附き合つてゐるうちに自然と上達したのでせうが、夜會の席で婦人や紳士に愛嬌を振りまきながら、彼女がべらべらまくし立てるのを聞いてゐると、何しろ發音は昔から巧かつたのですから、變に西洋人臭くつて、私には聞きとれないことがよくあります。さうして彼女は、ときどき私を西洋流に「チヨーチ」と呼びます。

今日になつて、唯一つ、私が後悔してゐることは、何でも彼でも「西洋西洋」で、彼女を餘りハイカラに賣つてしまつたことです。さうしなかつたら、私はもう少し、彼女の我が儘を抑へることが出来たでせう。それに日本の「西洋流」は、寧ろ亞米利加流なので、レディーに對する

禮儀作法が、下らないことに迄やかましく、ナオミがそれを一一何處からか覺えて来て、私に實行させるのには、全く閉口してしまひます。かうなつたのも勿論私の責任なのではありませんが……

此れで私たちが夫婦の記録は終りとします。此れを読んで、馬鹿馬鹿しいと思ふ人は笑つて下さい。教訓になると思ふ人は、いい見せしめにして下さい。私自身は、ナオミに惚れてゐるのですから、どう思はれても仕方がありません。ナオミは今年二十三で、私は三十六になります。

少年

もう彼れ此れ二十年ばかりも前にならう。漸く私が十ぐらゐで、鶴岡町二丁目の家から水天宮裏の有馬學校へ通つて居た時分、櫻が咲いて空が霞んで人形町通りの紺暖簾にほかほかと日があたつて、取り止めのない夢のやうな幼心にも何となく春が感じられる陽氣な時候の頃であつた。

或るうらうらと晴れた日の事、眠くなるやうな午後の授業が済んで帰だらけの手に算盤を抱へながら學校の門を出ようとすると、

「萩原の榮ちゃん。」
と、私の名を呼んで後からばたばたと追ひ追つた者があつた。其の子は同級の鳩信一と云つて入學した當時から尋常四年の今日まで附添ひ人の女中を片時も側から放した事のない評判の意氣地なし、誰も彼も弱蟲だの泣き蟲だのと悪口をきいて遊び相手になる者のない坊ちやんであつた。

「何か用かい。」
珍らしくも信一から聲をかけられたのを不思議に思つて、

「今日あたしの内へ来て一緒に遊びな。内のお庭でお稲荷様のお祭があるんだから。」
お稲荷の打紐で括つたやうな口から、優しい、おぼつとした聲で云つて、信一は訴へるやうな顔をされた。いつも一人ぼつちでいぢけて居る子が、何でこんな意外な事を云ふのやら、私は少しうろたへて、相手の顔を読むやうにぼんやり立つた儘であつたが、日頃は弱蟲だの何だのと悪口を云つていぢめ散らしたやうなもの、かうやつて眼の前に置いて見ると、有難良家の息子だけに氣高く美しい所があるやうに思はれた。縁織の袴に博多の腹上の帯を締め、黄八丈の羽織を着てきやうこの白足袋に雪駄を穿いた様子が、色の白い瓜實顔の面立とよく似合つて、今更品位に打たれたやうに、私はうつとりして了つた。

「ねえ、萩原の坊ちゃん、内の坊ちやんと御一緒に遊びなさいませ。實は今日手前共にお開放された横町の裏木戸からは此の界隈に住む貧乏人の子供達が多勢ぞろぞろ庭内に入つて行く。私は表門の番人の部屋へ行つて信一を呼んで貰はうかとも思つたが、何となく恐ろしい氣がしたので、其の子供達と同じ様に裏木戸の潜りを抜けて構への中へ入つた。
何と云ふ大きな庭敷だらう。かう思つて私は氣取形をした池の汀の芝生にぐんぐんひろひろい庭の中を見廻した。周延が描いた千代田の大奥と云ふ三枚続きの繪にあるやうな造り水、築山、雪見燈籠、瀬戸物の鶴、洗ひ石などがお説へ向きに配置されて、水のほとりの御藍石から幾個も幾個も飛び石が長く続き、遊向うに御殿のやうな座敷が見えてゐる。彼處に信一が居るのかと思ふと、もうとても今日は會へないやうな氣がした。
多勢の子供達は毛氈のやうな青草の上を踏んで、のどかな暖かい日の下に遊んで居る。見ると綺麗に飾られた庭の片隅の稲荷の祠から裏の木戸口まで一間置き位に地口の行燈が並び、接待の甘酒だのおでんだの汁粉だの屋臺が處處に設けられて、餘興のお神樂や子供角力のみはりに山のやうに人が集まつてゐる。折角楽しみにして遊びに来たかひもなく、何だか

「おやさうでございましたねえ。ではあなたのお家までお供して参つて、お母様に私からお願ひ致しますか、さうして手前共へ御一緒に参りませう。」
「うん、いいよ。お前所は知つて居るから後から一人でも行けるよ。」
「さうでございませうか。それではきつとお待ち申しますよ。お歸りには私がお宅までお送り申しますから、御心配なさらぬやうにお家へ歸つていらつしやいませ。」
「ああ、それぢや左様なら。」
かう云つて、私は子供の方を向いてなつかしきうに挨拶をしたが、信一は例の品のある顔をして

にこりともさせず、唯廣揚になつただけであつた。

今日からあの立派の子供と仲好しになるのかと思ふと、何となく嬉しい氣持がして、日頃遊び仲間と思つた幸吉や船頭、鐵公などに見付からぬやうに急いで家へ歸り、育鰯の學校着を對の黄八丈の不躰着に着更へるや否や、

「お母さん、遊びに行つて来よう。」
と、雪駄をつっかけながら格子先に云ひ捨てて、其の儘家の前へ駆け出して行つた。

有馬學校の前から眞直ぐに中之橋を越え、濱町の岡田の堀へついで中洲に近い河岸通りへ出た所は、何となくさびれたやうな閑靜な一廓をなして居る。今はなくなつたが新大橋の袂から少し手前の右側に名代の團子屋と煎餅屋があつて、其のすぢ向うの角の、長い長い堀を渡らした殿めしい儀格子の門が堀の家であつた。前を通るとこんもりした邸内の植ゑ込みの青葉の隙から破風型の日本館の瓦が銀鼠色に輝き、其の後に西洋館の麗紅緋色の煉瓦がちらちら見えて、いかにも物持ちの住むらしい、奥床しい構へであつた。

成る程其の日は何か内にお祭でもあつたらし、陽氣な馬鹿囃しの太鼓の音が堀の外に渡れ、

「いらぬよ、いらぬよ。」
と、私は情ない聲を出して、あきらめたやうに裏木戸へ引き返さうとした時、紺の法被を着た酒臭い息の男が何處からかやつて来て、

「兄さん、お前はまだお菓子を貰はねえんだらう。歸るんならお菓子を貰つて歸りな。さ、此れを持って彼處の御座敷の小母さんの處へ行くとお菓子をくれるから、早く貰つて来るがいい。」
かう云つて眞紅に染めたお菓子の切符を渡してくれた。私は悲しさが胸へこみ上げて来たが、若しや座敷の方へ行つたら信一に會へるか知らんと思ひ、云はれる位に切符を貰つて又庭の中

を歩き出した。
幸ひと其れから間もなく附添ひの女中に見
附けられて、

「坊ちゃん、よくいらして下さいました。も
う先きからお待ち兼ねてございますよ。さあ彼
方へいらつしやいませ。かう云ふ卑しい子供達
の中で遊びになつてはいけません。」

と、親切に手を握られ、私は思はず涙ぐん
で、直ぐには返事が出来なかつた。

床の高い、子供の丈ぐらゐ有りさうな縁に沿
うて、庭に突き出た廣い座敷の蔭へ廻ると、十
坪ばかりの中庭に、萩の袖垣を結び繞らした小
座敷の前へ出た。

「坊ちゃん、お友達がいらつしやいましたよ。
青樹の木立の下から女中が呼び立てると、障
子の蔭にばたばたと小刻みの足音がして、

「此方へお上んな。」
と甲高い聲で怒鳴りながら、信一が鎌側へ駆
けて来た。あの臆病な子が、何處を押しせばこ
んな元氣の好い聲が出るのだらうと、私は不思議
に思ひながら、見違へる程盛装した女の襟子を
まぶしさうに見上げた。黒羽二重の熨斗目の紋
附に羽織袴を着けて立つた姿は、鎌側一杯に
照らす麗かな日をまともに浴びて黒い七子の羽

織地が御沙のやうにきらきら光つて居る。

女達に手をひかれて通されたのは八畳ばかり
の小綺麗な座敷で、餅菓子折の底を喰ひやう
な甘い香りが部屋の中に漂ひ、ふくよかな八反
の座蒲團が二つ人持ちに敷かれてあつた。直
ぐにお茶だのお菓子だのお強飯に口取りを添へ
た蒲團の高臺だのが運ばれて、

「坊ちゃん、お母様がお友達と仲よくこれを召
し上げるやうにつて……それから今日は好いお
召を召していらつしやるんですから、あんまり
お徒をなさらないやうに大人しくお遊びなさい
ましょ。」

と、女中は遠慮して居る私に赤飯やきんとん
を進めて夫へ退つて了つた。

物静かな、日あたりの好い部屋である。燃え
るやうな障子の紙に鎌先の木蓮の影が映つて、
遙に庭の方から、てん、てん、ととお神樂
の太鼓の音が子供達のがやがや云ふ騒ぎに交つ
て響いて来る。私は遠い不思議な國に來たやう
な氣がした。

「信ちゃん、お前はいつも此のお座敷にゐるの
かい。」
「ううん。此處は本當は姉さんの所なの、被處
にいろんな面白い姉さんの玩具があるから、見

せて上げようか。」

かう云つて信一は地袋の中から、奈良人形
の理髪や、木目込み細工の扇と、西京の芥
子人形、伏見人形、伊豆藏人形などを二人の
まはりへ綺麗に列べ、さまざまの男女の姿をし
た首人形を二層程の疊の目へ敷知れず挿し込ん
で見せた。二人は蒲團へ腹這ひになつて、襦を
生やしたり、眼をむきだしたりして居る巧緻な
人形の表情を覗き込むやうにした。さうして
かう云ふ小さい人間の住む世界を想像した。

「まだここに繪草紙が澤山あるんだよ。」
と、信一は又袋戸棚から、半四郎や菊之丞
の似顔繪のたたらに一杯詰まつて居る草雙紙を
引き取り出して、色色の繪本を見せてくれた。

何十年経つたか判らぬ木版刷の極彩色が、光澤
も褪せないで鮮かに匂つてゐる美濃紙の表紙を
開くと、儼然いけバケバの立つて居る紙の面
に、舊幕時代の美しい男女の姿が生きてしま
した目鼻立ちから細かい手足の指先まで、さなが
ら動き出すやうに描かれてゐる。丁度此の屋

敷のやうな御殿の奥庭で、多勢の腰元と一緒に
お姫様が御を退つて居るかと思へば、淋しい
橋の袂で深窓の侍が下郎の首を打ち落し、
死骸の懷中から奪ひ取つた文箱の手紙を、月に

かざして讀んで居る。其の次には黒装束に面
の曲者がお局の中へ忍び込んで、ぐつすり寝て
居る椎半の女の喉元へ蒲團の上から刀を突
き通して居る。又ある所では行燈の火影かす
かな一と間の中に、濃艶な寝姿の女が血の
したたる剃刀を口に咬へ、虚空を掴むで足許に
驚れて居る男の死に慄をぢりりと眺めて、「さま
を見やがれ。」と云ひながら立つて居る。信一も
私も一番面白がつて見たのは奇怪な殺人の
光景で、眼珠が飛び出して居る死人の顔だの、
胸斬りにされて腹から下だけで立つて居る人間
だの、眞黒な血痕が雲のやうに斑をなして居る
不思議な面を、夢中になつて覗き込んで居る
と、

「あれ、また信ちゃんは人の物を盗らして居る
んだね。」
かう云つて、友禊の振袖を着た十三四の女
の子が襖を開けて駈込んで來た。顔のつまつ
た、眼元口元の濃濃しい顔に子供らしい怒を含
んで、つツと立つた儘弟と私の方をきりきり
睨め付けて居る。信一は一と縮みに縮み上つて
蒼くなるかと思ひの外、

「何云つてるんだい。徒らなんかしやしないよ。
お友達に見せてやつてるんぢやないか。」

と、まるで取り合はないで、姉の方を振り向
きもせずに繪本を繰つて居る。

「徒らしない事があるもんか。あれ、いけない
つてばさ。」
ばたばたと姉は駆け寄つて、見て居る本を引
つたけらうとしたが、信一もなかなか放さな
い。表紙と裏とを雙方が引張つて、縦ぢ目の所
が今にも裂けさうになる、暫くさうして睨み合
つて居たが、

「姉さんのけちんぼ！ もう借りるもんかい。」
と、信一はいきなり本をたたき捨てて、有り
合ふ奈良人形を姉の顔へ投げ付けたが、狙ひが
外れて床の間の壁へ衝つた。

「それ御覽な、そんな徒らをするぢやないか。
——またあたしを打つんだね。いいよ、打つな
ら澤山お打ち。此の間もお前のお蔭で、こら、
こんなに悲になつて未だ消えやしない。これを
お父様に見せて云つつけてやるから覚えておい
で。」

恨めしさうに涙ぐみながら、姉は縮緬の裾を
まくつて、眞白な右足の脛に印せられた痣の痕
を見せた。丁度膝頭のあたりからふくらむへ
かけて、血管が青く透いて見える薄く柔い肌
の上を、紫の斑點がばかしたやうに傷傷しく

濁染んでゐる。

「云つつけるなら勝手においひつけ。けちんぼ、
けちんぼ。」
信一は人形を足で蹴滅茶に蹴倒して、
「お庭へ行つて遊ばう。」
と、私を連れて其處を飛び出してしまつた

「姉さんは泣いて居るか知ら。」
戸外へ出ると、氣の毒なやうな悲しいやうな
氣持になつて私は叫んだ。

「泣いたつていいんだよ。毎日喧嘩して泣かし
てるんだ。姉さんたつて控ればお妾の子な
んだもの。」

こんな生意氣な口をきいて、信一は西洋館と
日本館の間にある榎や樺の大木の蔭へ歩いて
行つた。其處は繁茂した老樹の枝がこんもりと
日を送つて、じめじめした地面には青苔が一面
に生え、暗い肌寒い氣流が二人の襟元へしみ入
るやうであつた。大方古井戸の跡でもあらう、
沼とも池とも付かない濁つた水溜りがあつて、
水草が緑青のやうに浮いて居る。二人は其の滑

へ腰を下ろして、濁つぽい土の匂を嗅ぎながら
ぼんやり足を投げ出して居ると、何處からとも
なく幽玄な、微妙な奏樂の響が洩れて來た。
「あれは何だらう。」

かう云ひながらも、私は油断なく耳を傾けた。

「あれは姉さんがピアノを弾いて居るんだよ。」

「ピアノって何だい。」

「オルガンのやうなものだつて、姉さんがさう云つたよ。異人の女が毎日あの西洋館へ来て姉さんに教へてやつてるの。」

かう云つて信一は西洋館の二階を指した。肉色の布のかかつた窓の中から絶えず洩れて来る不思議な響き。或る時は森の奥の妖魔が笑ふ木霊のやうな、或る時はお伽噺に出て来る侏儒共が多勢揃つて踊るやうな、幾千の細かい想像の連続で、幼い頭へ微妙な夢を織り込んで行く不思議な響は、此の古治の水底で奏でるのかも、疑はれる。

奏樂の音が止んだ頃、私はまだ消えやらぬ *ecstasy* の快感の尾を心に曳きながら、今にあの窓から異人や姉嬢が顔を出しはすまいかと思ひ憶れてちつと二階を覗つめた。

「信ちゃん、お前は被處へ遊びに行かないのか。」

「ああ、徒らをしていけないいつて、お母さんがどうしても上げてくれないの、いつかそつと行つて見ようとしたら、鏡が下りて居てどうして

も聞かなかつたよ。」

「信一も私と同じやうに好きな眼つきをして二階を見上げた。」

「坊ちゃん、三人で何かして遊びませんか。」

ふと、かう云ふ聲がして後から駆けて来た者がある。其れは同じ有馬学校の一二年上の生徒で名前こそ知らないが、毎日のやうに年下の子供をいぢめて居る名代の餓鬼大将だから顔はよく覚えて居た。どうして此奴がこんな處へやつて来たのだらうと、訝りながら黙つて様子を見て居ると、其の子は信一に仙吉仙吉と呼び捨てにされながら、坊ちゃん坊ちゃんと呼び取つて居る。後で聞いて見れば塙の家の馬丁の子であつたが、其の時私は、猛獸道ひのチャリネの美人を見るやうな眼で、信一を見ない譯には行かなかつた。

「そんなら三人で泥坊ごっこしよう。あたしと祭ちゃんがお遊査になるから、お前は泥坊におんなな。」

「なつてもいいけれど、此の間見たいに非道い亂暴をしつこなしてすよ、坊ちゃんは纏で縛つたり、鼻をくつつけたりするんだもの。」

此の間答をきいて、私は愈々驚いたが、可愛らしい女のやうな信一が、莞々とした熊のやうな

仙吉をふん縛つて苦しめて居る光景を、どう考へて見ても實際に想像することが出来なかつた。

やがて信一と私は遊査になつて、沼の周囲や木立の間を縫ひながら盗賊の仙吉を追ひ廻したが、此方は二人でも先方は年上だけに中捕まらな。漸くの事で西洋館の裏手の塙の隅にある物置小屋まで追ひ詰めた。

二人はひそひそ示し合せて、息を殺し、聲を忍ばせ、そつと小屋の中へ入つた。併し仙吉は何處へ隠れたものか妻が見えない。さうして押し潰したの味方だの醬油樽だの咽せ返るやうな古臭い匂が、薄暗い小屋の中にもつて、わらぢ蟲がぞろぞろと蜘蛛の巣だらけの屋根裏や樽の周囲に這つて居る有様が、何か不思議な面白い徒らな幼い者にそのかすやうであつた。すると何處やらでくすくすと忍び笑ひをするのが聞えて、忽ち梁に吊るしてあつた用心籠がめりめりと鳴るかと思ふと、其處から「わあ」と云ひながら仙吉の顔が現れた。

「やい、下りて来い。下りて来ないと非道い目に合はせるぞ。」

信一は下から然鳴つて、私と一緒に箒で顔

「さあ来い。誰でも傍へ寄ると小便をしつかけるぞ。」

仙吉が籠の上から、あはや小便をたれさうにしたので、信一は用心籠の真下へ廻り、有り合ふ竹竿で籠の目から仙吉の背だの足の裏だの、所縁はずつツ突き始めた。

「さあ、此れでも下りないか。」

「あいた、あいた。へい、へい、もう下りますから御免なさい。」

悲鳴を掲げてあやまりながら、痛む節節を抑へて下りて来た奴の胸ぐらを取つて、

「何處で何を盗んだか、正直に白状しろ。」

と、信一が用心籠に訊問を始める。仙吉は又、やれ白木屋で反物を五反取つたの、にんべんで盤節を盗んだの、日本銀行でお札をごまかしたのと、出鱈目ながら生意氣な事を云つた。

「うん、さうか、太い奴だ。まだ何か悪い事をしたらう。人を殺した覚えはないか。」

「へい、ごまかします。熊谷土手で按摩を殺して五十兩の財布を盗みました。さうして其のお金で吉原へ参りました。」

紙帳芝居か覗き機巧で聞いて来るものと見えて、如何にも當意即妙の返答である。

「まだ其の外にも人を殺したらう。よし、よし、

く残つて居る。
 「あたしが狼になるから、二人旅人にならないか。さうしてしまひに二人共狼に喰ひ殺されるんだよ。」
 信一が又こんな事を云ひ出したので、私は薄氣味悪かつたが、仙吉が、
 「やりませう。」
 と云ふから承知しない譯にも行かなかつた。私と仙吉とが旅人のつもり、此の物置小屋がお堂のつもりで、野宿をしてゐると、深夜中頃に信一の狼が襲つて来て、顔に戸の外で吹え始める。とうとう狼は戸を喰ひ破つてお堂の中を四つ這ひに這ひながら、犬のやうな牛のやうな稀有な呻り聲を立てて逃げ廻る二人の旅人を追ひ廻す。信一があまり眞面目でやつて居るので、捕まつたらどんな事をされるかと、私は心から少し恐くなつてにやにや不安な笑ひを浮かべながら、其の實一生懸命儀の上や這の跡を逃げ廻つた。
 「おい仙吉、お前はもう足を喰はれたから歩いてやいなよ。」
 狼はかう云つて旅人の一人をお堂の隅へ追ひ詰め、體にとび上つて方方へ喰ひ付くと、仙吉は役者のするやうな苦悶の表情をして、眼を

むき出すやら、口を歪めるやらいろいろの身振りを巧みに演じて居たが、遂に喉笛を喰ひ切られて、キヤツと致死期の悲鳴を最期に、手足の指をぶるぶるとわななかせ、虚空を掴んでバツタリ倒れてしまつた。
 さあ今度は私の番だ。かう思ふと氣が氣でなく、急いで樽の上へ跳び上ると、狼に着物の裾を喰へられ、恐ろしい力で下からぐいぐい引張られた。私は眞着になつて樽へしつかり掴まつて見たが、激しい狼の權幕に氣後れがして、「ああもうとても助からない」と觀念の眼を閉づる間もなく引きずり落され、土間へ仰向きに轉けたかと思ふと、信一は疾風のやうに私の首つたまへのしかかつて喉笛を喰ひ切つた。「さあもう二人共死體になつたんだからどんな事をされても動いちゃいけないよ。此れから骨までしゃぶつてやるぞ。」
 信一にから云はれて、二人ともだらしく大の字なりに土間へ倒れたまま、一寸も動けなかつた。急に私は體の處處方がむづ痒くなつて、着物の裾のはだけた處から冷たい風がすうすうと股ぐらに吹き込み、一方へ伸ばした右の手の中指の先が微かに仙吉の髪に毛に觸れて居るのを感じた。

「おや、坊ちゃん此處にいらつしやるんですか。まあお召物を着なして遊ばして何をなすつていらつしやるんですねえ。どうして又こんな穢い所でお遊びになるんですやう。仙ちゃん、お前が悪いんだよ、ほんとに。」
 女中は恐ろしい眼つきをして叱りながら、泥の足型が印せられて居る仙吉の鼻を、様子ありげに眺めて居る。私は未だ踏みつけられた顔の痕がびりびりするのをぢつと堪へて何か餘程の悪事でも働いた後のやうな氣になつて立ちすくんだ。
 「さあ、もうお風呂が沸きましたから、好い加減に遊ばしてお家へお入りなさいませんと、お母様に叱られますよ。萩原の坊ちゃんも亦入らして下さいますな。もう遅うございますから私がお宅までお送り申しますやうか。」
 女中も私にだけは優しくしたが、
 「一人で歸れるから、送つて貰はないでもいいの。」
 から云つて私は辭退した。
 門の所まで送つて来てくれた三人に、
 「あはよ。」
 と云つて戸外へ出ると、いつの間にか街は青い夕霧に罩められて、河岸通にはちらちら灯が

「此奴の方が太つて居て旨さうだから、此奴から先へ喰つてやらう。」
 信一はさも愉快さうな顔をして、仙吉の體へ這ひ上つた。
 「あんまり非道いことをしちゃいけませんよ。」と、仙吉は半眼を開き、小聲で訴へるやうに囁いた。
 「そんな非道い事はしないから、動くときかはいよ。」
 「むしやむしやと仰山に舌を鳴らしながら、頭から顔、腹から腹、兩腕から腕や腰の方までも喰ひ散らし土のついた草履のまま目鼻の上でも胸の上でも勝手に踏み躪るので、又しても仙吉は體中泥だらけになつた。
 「さあ此れからお臀の肉だ。」
 やがて仙吉は俯向きに臥かされ、臂を捲くられたかと思ふと、薙を二つ並べたやうに腰から下が裸體になつてぬつと隠し出された。まくり上げた着物の裾を死體の頭へ被せて背中へ跳び乗つた信一は、又むしやむしやとやつて居たが、どんな事をされても仙吉はちつと我慢をして居る。寒いと見えて栗立つた臀の肉が蕩蕩のやうに頭へて居た。
 今に私もあんな態をさせられるのだ。から

ともつて居る。私は恐ろしい不思議な感から急に人里へ出て来たやうな氣がして、今日の出来事を夢のやうに回想しながら家へ歸つて行つたが、信一の氣高く美しい器量や人を人とも思はぬ我が儘な仕打ちは、一日の中にすつかり私の心を奪つて了つた。
 明るく日學校へ行つて見ると、昨日あんな非道い目に會はされた仙吉は、相變らず多勢の健鬼大將になつて弱いやいぢめをして居る代り、信一は又いつもの通りの意氣地なで、女中と一緒に小さくなつて運動場の隅の方にぢけて居る氣の毒さ。
 「信ちゃん、何かして遊ばないか。」
 と、たまたま私が聲をかけて見ても、
 「ううん、」
 と云つたなり、眉根を寄せて不機嫌らしく首を振るばかりである。
 それから四五日立つた或る日のこと、學校の歸りがけに信一の女中は又私を呼び止めて「今日はお嬢様のお嬢様が飾つてございますから、お遊びにいらつしやいますし。」
 から云つて誘つてくれた。
 其の日は表の通用門から番人に御禮をして入つて、正面の玄関の傍にある兩格子の出入

「あはよ。」
 と云つて戸外へ出ると、いつの間にか街は青い夕霧に罩められて、河岸通にはちらちら灯が

口を開けると、直ぐに仙吉が跳んで来て廊下傳ひに中二階の十畳の間へ連れて行つた。信一と姉の光子は羅段の前に臥そべりながら、豆炒を喰べて居たが、二人が入つて来ると急にすすす笑ひ出した様子で、何か又怪しからぬ徒らな企んで居るらしいので、

「坊ちゃん、何か可笑しいことがあるんですか。」

と、仙吉は不安らしく姉弟の顔を眺めて居る。

緋羅紗を掛けた床の羅段には、淺草の觀音堂のやうな紫宸殿の燈が響え、内裏様を始め五人囃しの官女が殿中に列んで、右近の櫻左近の橋の下には、三人上戸の仕丁が酒を暖めて居る。其の次ぎ次ぎの段には、燭臺だのお膳だの鐵業の道具だの唐草の金時輪をした可愛い調度だ、此の間姉の部屋にあつたいろいろの人物と一緒になつて居る。

私は羅段の前へ立つて、つくづくと其れに見惚れて居ると、後からさうつと信一がやつて来て、

「今ね、仙吉を白酒で酔拂はしてやるんだよ。」

かう耳うちをしたが、直ぐにばたばたと仙吉の方へ駆けで行つて、

「おい仙吉、これから四人でお酒盛りをしようぢやないか。」

と何喰はぬ顔で云ひ出した。

四人は聞くなつて、豆炒を着に白酒を飲み始めた。

「これはどうも結構な御酒でございますな。」

などと大人めいた口をきいて皆を笑はせながら、仙吉は猪口を持つやうな手つきで茶飲茶碗からぐいぐい白酒を呷つた。今に酔拂ふだらうと思ふと可笑しさが胸へこみ上げて、時時姉の光子は堪りかねたやうに腹を抱へたが、仙吉が酔拂ふ時分には少しばかりお相手をした他の三人も、そろそろ怪しくなつて来た。下腹の邊に熱い酒がぶつぶつ沸き上つて、顔から雙の汗谷がほんのり汗ばみ、頭の鉢の周圍が妙に痺れて、鼻の面は船底のやうに上下左右へ揺られて居る。

「坊ちゃん私は酔ひましたよ。皆も眞赤な顔をして居るぢやありませんか。一つ立つて歩いて見ませんか。」

仙吉は立ち上つて大手を振りながら座敷を歩き出したが、直ぐに足許がよろけて倒れる拍子に、床柱へこつんと頭を打ち付けたので、三人がどつと吹き出すと、

「あいつ、あいつ。」

「おおいしい、おおいしい。」

と舌鼓を打ちながら、私も仙吉も旨さうに片端から残らず喰べてしまつたが、白酒と豆炒とは變に鹽からい味がした。

「これからあたしが三味線を弾いて上げるから、二人お皿を冠つて踊るんだよ。」

光子がはたきを三味線の代りにして、「こりやこりや」と唄ひ始めると、二人は菓子皿を頭へ載せて、「よい来た、よい来た」と足拍子を取つて踊り出した。

其所へやつて来た侍の信一が、忽ち狐の正體を見届ける。

「狐の癖に人間を欺すなどとは不届な奴だ、ふん縛つて殺して了ふからさう思へ。」

「あれッ、信ちゃん亂暴な事をすると思かないよ。」

勝氣な光子は負けるが嫌さに信一と取組み合ひ、お雛様の本性を現して剛情にも中中降参しない。

「仙吉、この狐を縛るんだからお前の帯をお借し、さうして暴れないやうに二人で此奴の足を抑へて居る。」

私は此の間見た草雙紙の中の、旗本の若

と、頭をさすつて顔を押めて居る當人も可笑しさが堪へられず、鼻を鳴らしてすすす笑ひつて居る。

やがて三人も仙吉の眞似をして立ち上り、歩いては倒れ、倒れては笑ひ、キャツキャツと圓に乗つて途方もなく騒ぎ出した。

「エーイツ、ああ好い、心持だ、己は酔つて居るんだぞ、べらんめえ。」

仙吉が臂を端折つて肩へ彌造を拵へ、職人の眞似をして歩くと、信一も私も、しまひには光子までが臂を端折つて肩へ拳骨を突つ込み、丁度お雛吉三のやうな姿をして、

「べらんめえ、己は酔拂ひだぞ。」

と、座敷中をよろよろ練り歩いては笑ひ轉げ

「あッ、坊ちゃん坊ちゃん、狐こつこをしませんか。」

仙吉がふと面白い事を考へ付いたやうにかう云ひ出した。私と仙吉と二人の田舎者が狐退治に出かけると、却つて女に化けた光子の狐の爲めに化かされて了ひ、散散な目に會つて居る所へ、侍の信一が通りかかつて二人を救つた上、狐を退治してくれると云ふ趣向である。まだ酔拂つて居る三人は直ぐに賛成して、其の

芝居に取りかかつた。

先づ仙吉と私が向鉢巻きに臂端折りで、手に手にはたきを振りかざし、

「どうも此の邊に悪い狐が出て徒らをするから、今日こそ一番退治してくれえ。」

と云ひながら登場する。向うから光子の狐がやつて来て、

「もし、もし、お前様達に御馳走して上げるから、あたしと一緒にいらつしやいな。」

かう云つて、ぼんと、二人の肩を叩くと、忽ち私も仙吉も化かされて了ひ、

「いよう、何とはあ素晴らしい別荘でねえか。」

などと、眼を細くして光子にでれつき始める。

「二人共化かされてるんだから。糞を御馳走のつもりで喰べるんだよ。」

光子は面白くて堪らぬやうにゲラゲラ笑ひながら、自分の口で喰ひちぎつた餡こころ餅だの、減茶減茶に足で踏み潰した蕎麥饅頭だの、鼻汁で練り固めた豆炒だのを、さも穢らしさうに皿の上へ堆く盛つて私達の前へ列べ、

「これは小便のお酒のつもりよ。——さあお前さん、一つ召し上れ。」

と、白酒の中へ痰や嘔吐を吐き込んで二人に

すすめる。

「おおいしい、おおいしい。」

と舌鼓を打ちながら、私も仙吉も旨さうに片端から残らず喰べてしまつたが、白酒と豆炒とは變に鹽からい味がした。

「これからあたしが三味線を弾いて上げるから、二人お皿を冠つて踊るんだよ。」

光子がはたきを三味線の代りにして、「こりやこりや」と唄ひ始めると、二人は菓子皿を頭へ載せて、「よい来た、よい来た」と足拍子を取つて踊り出した。

其所へやつて来た侍の信一が、忽ち狐の正體を見届ける。

「狐の癖に人間を欺すなどとは不届な奴だ、ふん縛つて殺して了ふからさう思へ。」

「あれッ、信ちゃん亂暴な事をすると思かないよ。」

勝氣な光子は負けるが嫌さに信一と取組み合ひ、お雛様の本性を現して剛情にも中中降参しない。

「仙吉、この狐を縛るんだからお前の帯をお借し、さうして暴れないやうに二人で此奴の足を抑へて居る。」

私は此の間見た草雙紙の中の、旗本の若

侍が仲間と力を協せて美人を掠奪する挿話の事を想ひ泛べながら、仙吉と一緒に女禪の裾襪の上から二本の脚をしつかりと抱きかかへた。其の間信一は辛うじて光子を後手に縛り上げ、漸く縁側の欄干に振り着ける。

「榮ちゃん、此奴の帯を解いて糞糞を嵌めておやり。」

「よし来た。」

と、私は早速光子の後に廻つて替金縮緬の扱帯を解き、結ひたての唐人帯がこはれぬやうに標足の長い頭すぢへ手を挿し入れしつとりと油にしめつて居る髪の下から耳を掠めて頭のあたりをぐるぐる二た廻り程巻きつけた上、あたりの限り引き絞つたから縮緬はぐいぐいと下力の限り引き絞つたから縮緬はぐいぐいと下力限りのした頬の肉へ喰ひ入り、光子は金間寺の雪姫のやうに身を悶えて苦しんで居る。

「さあ今度はあべこべに貴様を糞攻めにしてやるぞ。」

信一が餅菓子を手當り次第に口へ啣んでは、べつべつと光子の顔へ吐き散らすと見る見るうちにさしも美しい雪姫の器量も癩病やみか瘡つかまきのやうに、二日目と見られない姿になつて行く面白さ。私も仙吉もとうとう釣り込まれて、

「この畜生、よくも先己達に穢い物を喰はせやがったな。」

かう云つて信一と一緒につつべつとやり出したが、其れも手緩くなつて、しまひには額と云はず、頬と云はず、至る所へ喰ひちぎつた餅菓子を探りつけて、館ころを押し潰したり、大福の皮をなすりつけたり、またたくうちに光子の顔を萬遍なく汚してしまつた。目鼻も判らぬ眞黒なのつべらぼうな怪物が唐人船に結つて、濃艶な振袖姿をしてゐる所は、さしづめ百物語か化物合巻に出て来さうで光子はもう抵抗する張合もなくなつたと見え、何をされても大人しく死んだやうになつて居る。

「今度だけは命を助けてやる。此れから人間を化かしたりなんかすると、殺して了ふぞ。」
間もなく信一が猿轡や縛しめを解いてやる。光子はふいと立ち上つて、いきなり袂の外へ、廊下をばたばたと逃げて行つた。
「坊ちゃん、姉さんは怒つて云つつけに行つたんでせ。」

今更飛んでもない事をしたと云ふ風に、仙吉は心配らしく私と顔を見合はせる。
「なに云つつけたつて構ふもんか、女の癖に生意氣だから、毎日喧嘩していちぢめてやるんだ。」

る。」

こんな事を考へながら私は一生懸命五本の指の股をしやぶつた。

弾はますますちやれつき出して仰向に倒れて四足を虚空に踊らせ、裾を咬へてはぐいぐい引張るので、信一も面白がつて足で煙を搦でてやつたり、腹を搦んでやつたり、いろいろな事をする。私も其の眞似をして裾を引張ると、羽二重のやうな足の裏は、弾と同じやうに煙を踏んだり顔を搦でたりしてくれだが、眼球の上を搦で押された時と、土踏まずで唇を塞がれた時は少し苦しかつた。

そんな事をして、其の日も夕方まで遊んで歸つたが、明くる日からは毎日のやうに鳩の家を訪ね、いつも授業を終へるのが待ち遠しい位になつて、明けても暮れても信一や光子の顔は頭の中を去らなかつた。漸く馴れるに随つて信一の我が儘は益々つのもり、私も全く仙吉同様の手下にされ、遊ばば必ず打たれたり縛られたりする。をかした事にはあの剛情な姉までが、風退治以來すつかり降参して、信一ばかりか私や仙吉にも遊ぶやうな事はなく、時時三人の側へやつて来ては、
「狐ごつこをしないか。」

信一が突噴いて威張つて居る所へ、今度はずラツと徐かに横が開いて、光子が綺麗に顔を洗つて戻つて来た。館と一緒にお白粉までも洗ひ落して了つたと見え、却つて前よりは牙え牙えとして、つやのある玉肌が生地がと際透き徹るやうに輝いて居る。
定めし又いと喧嘩持ち上るだらうと待ち構へて居ると、
「誰かに見つかるときまりが悪いから、そうつとお湯殿へ行つて落して来たの。——ほんとに皆亂暴だつたらありやしない。」
と、光子は物柔かに恨みを列べるだけで、何もここに笑つて居る。

「今度私は人間で三人犬にならないか。私がお菓子や何かを投げてやるから、皆四つ這ひになつて其れを喰べるのさ。ね、いいだろ。」
と云ひ出した。
「よし来た、やりませう。——さあ犬になりましたよ。わん、わん、わん。」
早速仙吉は四つ這ひになつて、座敷中を威勢よく駆け廻る。其の尾について又私が駆け出すと光子も何と思つたか、
「あたしは婢犬よ。」

などと、却つていちぢめられるのを嫌ふやうな素振さへ見え出した。
信一は日曜の夜毎に淺草や人形町の玩具屋へ行つて短刀を買つて来ては、早速其れを振り廻すので、光子も私も仙吉も體に堪へた時はない。追道と芝居の種も盡きて来て、例の物置小屋だの湯殿だの裏庭の方を舞臺に、いろいろな趣向を凝らしては亂暴な遊びに耽つた。私と仙吉が光子を締め殺して金を盗むと、信一が姉さんの仇と云つて二人を殺して首を斬り落したり、信一と私と二人の悪漢がお嬢様の光子と郎黨の仙吉を毒殺して、屍體を河へ投げ込んだり、いつも一番いやな役廻りになつて非道い目に會はされたのは光子である。しまひには紅や繪の具を體へ塗り、殺された者は血だらけになつてのた打ち廻つたが、どうかすると信一は本物の小刀を持つて来て、
「此れで少ウし切らせないか。ね、ちよいと、ぼつちりだからそんなに痛かないよ。」

そんな事を云ふやうになつた。すると三人は素直に足の下へ組み敷かれて、
「そんなに非道く切つちや嫌だよ。」
と、まるで手籠でも受けるやうにちつと我慢しながら、其の辨恐ろしさうに傷口から流れ出

と、私達の中へわり込んで来て、其處ら中を這ひ廻つた。
「ほら、ちんちん。……お預けお預け。」
などと三人は勝手な薬をやらせられた揚句、「よウシ！」
と云はれれば、先を争つてお菓子のある方へ跳び込んで行く。

「ああ好い事がある。待て、待て。」
かう云つて信一は座敷を出て行つたが、間もなく辨暗編のちやんちやんを着た本當の弾を二匹連れて来て、我々の仲間入りさせ、喰ひかけの館ころだの、鼻糞や嘔吐のついた饅頭だのを疊へばらばら振り撒くと、犬も弾も我れ勝ちに獲物の上へ折り重なり、齒をむき出し舌を伸ばして、一つ餅菓子を喰ひ合つたり、どうかするとお互に鼻の頭を舐め合つたりした。
お菓子を平げて了つた弾は、信一の指の先や足の裏をべろべろやり出す。三人も負けない氣になつて其の眞似を始める。

「ああ嫌なやつ、擦ぐつたい。」
と、信一は欄干に腰をかけて、眞白な柔い足の裏を這る這る私達の鼻先へつき出した。
「人間の足は酸辛い酸味がするものだ。綺麗な人は、足の指の爪の恰好まで綺麗に出来て居る血の色を眺め、眼に一杯涙ぐんで唇や膝のあたりを少し切らせる。私は内へ歸つて毎晩母と一緒に風呂へ入る時、其の傷痕を見付けられないやうにするのがいと通りの苦勞ではなかつた。
さう云ふ風な遊びが凡そ一と月も續いた或る日のこと、例の如く鳩の家へ行つて見ると、信一は尙醫者へ行つて留守だとかで、仙吉が一人手持不沙汰でぼつ然として居る。
「光ちゃんは何？」
「今ピアノのお稽古をして居るよ。お嬢さんの居る西洋館の方へ行つて見ようか。」
かう云つて仙吉は私をあの大木の木蔵の古溜の方へ連れて行つた。忽ち私は何も彼も忘れて、年經の櫻の根方に腰を下したまま、二階の窓から洩れて来る樂の響にうつとりと耳を澄ました。
此の屋敷を始めて訪れた日に、やはり古溜の溜で信一と一緒に聞いた不思議な響……或る時は森の奥の妖艶が笑ふ木霊のやうな、ある時はお伽噺に出て来る保儀共が多勢揃つて踊るやうな、幾千の細かい想像の綾緯で、幼い頭へ微妙な夢を織り込んで行く不思議な響は、今日もある時と同じやうに二階の窓から聞えて居る。」

「仙ちゃん、お前も彼處へ上つた事はないのかい。」
 奏樂の止んだ時、私は又止み難い好奇心に光たされて仙吉に尋ねた。
 「ああ、お嬢さんと掃除番の寅さんの外は、あんまり上らないんだよ。己ばかりか坊ちゃんだつて知りやしないぜ。」
 「中はどんなになつて居るんだらう。」
 「何でも坊ちゃんのお父様が洋行して買つて来たいろいろ珍しい物があるんだつて。いつか寅さんに内證で見せてくれつて云つたら、可いかないつてどうしても聞かなかつた。——もうお稽古が済んだんだぜ、茶ちゃん、お前お嬢さんを呼んで見ないか。」
 二人は聲を揃へて、
 「光ちゃん、お遊びな。」
 「お嬢さん、遊びませんか。」
 と、二階の方へ怒鳴つて見たが、ひつそりとして返辭はない。今迄聞えて居たあの音楽は、人なき部屋にピアノとやらが自然に動いて、微妙の響を發したのかも怪しまれる。
 「仕方がないから、二人で遊ぼう。」
 私もお嬢さんが相手では、いつものやうにも騒がれず、張合が抜けて立ち上ると不意に後で

を盗んで仙吉と一緒にやつて来るのを待ち合はせる。但し私が時刻に遅れるやうであつたら、二人は一と足先へ入つて、二階の階段を昇り切つた所から二つ目の右側の部屋に待つて居ると斯う云ふ約束になつた。
 「よし、さう定まつたら敷して上げます。さあお起きなさい。」
 と、仙吉は漸くの事で手を放した。
 「ああ苦しかった。仙吉に腰をかけられたら、まるで息が出ないんだもの。頭の下に大きな石があつて痛かつたわ。」
 着物の埃を拂つて起き上つた光子は、體の節節を揉んで、上氣せたやうに頬や眼球を真紅にして居る。
 「だが一體二階にはどんな物があるんだい。」
 一旦家へ歸るとなつて、別れる時は私がかう尋ねた。
 「茶ちゃん、吃驚しちゃいけないよ。其りや面白いのが深山あるんだから。」
 から云つて、光子は笑ひながら奥へ駆け込んだつた。
 戶外へ出ると、もうそろそろ人形町通の露店にかんてらぶともされて、撃刺の見せ物の法師の貝がぶらぶらと夕暮の空に鳴り渡り、有馬

手を持ちられて身隠して居る。きやしやな腕の青白い肌が、頑丈な鐵のやうな指先にむすど掴まれて、二人の少年の血色の、快い對照は、私の心を誘ふやうにするので、
 「光ちゃん、白狀しないと湯間にかけるよ。」
 から云つて、私も片方を捻ぢ上げ、扱帯を解いて沼の側の木解の幹へ縛りつけ、
 「さあ此れでもか、此れでもか。」
 と、二人は相變らず捕つたり探つたり、夢中になつて折檻した。
 「お嬢さん、今に坊ちゃんが歸つて来ると、もつと非道い目に會ひますぜ、今の内に早く白狀しておしまひなさい。」
 仙吉は光子の胸ぐらを取つて、両手でぐつと喉を絞めつけ、
 「ほら、だんだん苦しくなつて来ますよ。」
 から云ひながら、光子が眼を白黒させて居るのを笑つて見て居たが、やがて今度は木から解いて地面へ仰向きに突き倒し、
 「へえ、此れは人間の體でございませう！」
 と、私は膝の上、仙吉は顔の上へドシリ腰をかけ、彼方此方へ身を揺す振りながら光子の體を響で踏んだり履したりした。
 「仙吉、もう白狀するから勘忍しておくれよ」

を盗んで仙吉と一緒にやつて来るのを待ち合はせる。但し私が時刻に遅れるやうであつたら、二人は一と足先へ入つて、二階の階段を昇り切つた所から二つ目の右側の部屋に待つて居ると斯う云ふ約束になつた。
 「よし、さう定まつたら敷して上げます。さあお起きなさい。」
 と、仙吉は漸くの事で手を放した。
 「ああ苦しかった。仙吉に腰をかけられたら、まるで息が出ないんだもの。頭の下に大きな石があつて痛かつたわ。」
 着物の埃を拂つて起き上つた光子は、體の節節を揉んで、上氣せたやうに頬や眼球を真紅にして居る。
 「だが一體二階にはどんな物があるんだい。」
 一旦家へ歸るとなつて、別れる時は私がかう尋ねた。
 「茶ちゃん、吃驚しちゃいけないよ。其りや面白いのが深山あるんだから。」
 から云つて、光子は笑ひながら奥へ駆け込んだつた。
 戶外へ出ると、もうそろそろ人形町通の露店にかんてらぶともされて、撃刺の見せ物の法師の貝がぶらぶらと夕暮の空に鳴り渡り、有馬

手を持ちられて身隠して居る。きやしやな腕の青白い肌が、頑丈な鐵のやうな指先にむすど掴まれて、二人の少年の血色の、快い對照は、私の心を誘ふやうにするので、
 「光ちゃん、白狀しないと湯間にかけるよ。」
 から云つて、私も片方を捻ぢ上げ、扱帯を解いて沼の側の木解の幹へ縛りつけ、
 「さあ此れでもか、此れでもか。」
 と、二人は相變らず捕つたり探つたり、夢中になつて折檻した。
 「お嬢さん、今に坊ちゃんが歸つて来ると、もつと非道い目に會ひますぜ、今の内に早く白狀しておしまひなさい。」
 仙吉は光子の胸ぐらを取つて、両手でぐつと喉を絞めつけ、
 「ほら、だんだん苦しくなつて来ますよ。」
 から云ひながら、光子が眼を白黒させて居るのを笑つて見て居たが、やがて今度は木から解いて地面へ仰向きに突き倒し、
 「へえ、此れは人間の體でございませう！」
 と、私は膝の上、仙吉は顔の上へドシリ腰をかけ、彼方此方へ身を揺す振りながら光子の體を響で踏んだり履したりした。
 「仙吉、もう白狀するから勘忍しておくれよ」

手を持ちられて身隠して居る。きやしやな腕の青白い肌が、頑丈な鐵のやうな指先にむすど掴まれて、二人の少年の血色の、快い對照は、私の心を誘ふやうにするので、
 「光ちゃん、白狀しないと湯間にかけるよ。」
 から云つて、私も片方を捻ぢ上げ、扱帯を解いて沼の側の木解の幹へ縛りつけ、
 「さあ此れでもか、此れでもか。」
 と、二人は相變らず捕つたり探つたり、夢中になつて折檻した。
 「お嬢さん、今に坊ちゃんが歸つて来ると、もつと非道い目に會ひますぜ、今の内に早く白狀しておしまひなさい。」
 仙吉は光子の胸ぐらを取つて、両手でぐつと喉を絞めつけ、
 「ほら、だんだん苦しくなつて来ますよ。」
 から云ひながら、光子が眼を白黒させて居るのを笑つて見て居たが、やがて今度は木から解いて地面へ仰向きに突き倒し、
 「へえ、此れは人間の體でございませう！」
 と、私は膝の上、仙吉は顔の上へドシリ腰をかけ、彼方此方へ身を揺す振りながら光子の體を響で踏んだり履したりした。
 「仙吉、もう白狀するから勘忍しておくれよ」

間から鏡に細長い鏡を成して洩れて居るばかり、母屋の方はすつかり雨戸がしまつて、曇天の青空に魔者の如く轟々と眠つて居る。表門の横にある通用口の冷めたい鐵格子へ、兩手をかけて暗闇の中へ押し込むやうになると、重い扉がキーンと軋んで素直に動く。私は雪駄がちらちらつかぬやうに足音を忍ばせ、自分で自分の忙しい呼吸や高まつた鼓動の響を聞きながら、闇中に光つて居る西洋館の硝子戸を見つめて歩いて行つた。

次第次第に眼が見えるやうになつた。八つ手の葉や、梅の枝や、春日燈籠や、いろいろと少年の心を怯えさすやうな姿勢を取つた黒い物が、小さい隙の中へ暴れ込んで来るので、私は御影の石段に腰を下ろし、しんしんと夜氣のしみ入る中に首をうなだれた儘、息を殺して待つて居たが、いつか二人はやつて来ない。頭上へ蓋さつて居るやうな恐怖が體中をぶるぶる震はせて、尚の根がぐくぐくわなないで居る。ああ、こんな恐ろしい所へ来なければ好かつた、と思ひながら、

と、夢中で口走つて手を合はせて。すつかり後悔して、歸る事にきめて立ち上つたが、ふと玄關の硝子障子の扉の向うに、ぼつりと一點小さな蠟燭の灯らしいものが見えた。

「おや、二人共先へ入つたのかな。」かう思ふと、忽ち又好奇心の奴隷となつて、殆ど前後の分別もなく把手へ手をかけ、グルッと廻すと造作もなく開いて了つた。中へ入ると推測に違はず正面の螺旋階の上り端に——大方光子が私の爲めに置いて行つたものであらう。半ば燃え盡きて燭がとろとろ流れ出して居る手燭が、三尺四方へ晝東ない光を投げて居たが、私と一緒に外から空気が流れ込むと、炎がゆらゆらと瞬いて、ワニス様の欄干の影がぶるぶる動揺して居る。因睡を呑んで抜き足さし足、盜賊のやうに螺旋階を上り切つたが、二階の廊下はますます眞暗で、人の居さうなわけはひもなく、カタリとも音がしない。例の約束をした二つ目の右側の扉——それへ手捜りで擦り寄つてちつと耳を付けて見ても、矢張りツソリと静まり返つて居る。半ばは恐怖、半ばは好奇の情に充たされて、まよと思ひながら私は上半身を凭せかけ、扉

をグツと押し見て見た。ぱつと明るい光線が一時に隙を刺したので、クラクラしながら眼をしばたき、妖怪の正體を見定めるやうに注意深く四壁を見廻した。誰も居ない。中央に居るされた大ラムプの、五色のレンズで飾られた燧色の傘の影が、部屋の上半部を薄暗くして、金銀を練めた椅子だの卓子だの鏡だのいろいろの裝飾物が煤然と輝き、床に敷き詰めた暗紅色の敷物の柔かさは、春草の野を踏むやうに足袋を隔てて私の足の裏を喜ばせる。

「光子ちゃん。」と呼んで見ようとしても死滅したやうな四邊の寂寥が唇を履し、舌を強張らせて聲を發する勇氣もない。始めは氣が付かなかつたが、部屋左手の隅に次の間へ通ずる出口があつて、重い鏡子の帷が深い皺を疊み、ナイヤガラの襪布を想はせるやうにとどろりと垂れ下つて居る。其れを拂して、隣室の模様を覗いて見ようとしたが帷の向うが眞暗なので手が練むやうになる。其の時不意に燧燭の上の置時計がチンと錐のやうに咬いたかと思ふと、忽ち鏗然と鳴つてキコンケンと奇妙な音楽を奏で始めた、之を合圖に光子が出て来るのではあるまいかと帷の

方を一心に視詰めて居たが、二三分の間に音楽も止んで了ひ、部屋は再び元の靜肅に復つて、鏡子の皺は一と筋も揺がず、寂然と垂れ下つて居る。

ぼんやりと立つて居る私の瞳は、左側の壁間に掛けられた、油繪の肖像畫の上に落ちて、うかうかと其の額の前まで歩み寄り、丁度ラムプの影で薄暗くなつて居る西洋の乙女の半身像を見上げた。厚い金の額縁で、長方形に割られた畫面の中に、重い暗い茶褐色の空氣が漂うて、鏡に映をお納戸色の衣に蔽ひ、裸體の儘の肩と腕とに金や珠玉の飾を飾つた下髪が、夢みるやうに黒眼がちの瞳をばつちりと開いて前方を視つめて居る。暗い中にもくつきりと鮮かに浮き出て居る純白の肌の色、氣高い鼻筋から唇、頬、額、眉へかけて見事に神しく整つた、端嚴な輪廓——これがお伽嚙に出て来る天使と云ふのであらうかと思ひながら、私は暫くうつとりと見上げて居たが、ふと額から三尺ばかり下の壁に沿つた圓卓の上に、蛇の置き物のあるのに氣が付けて其の方へ眼を轉じた。此れは又何で拵へたものか、二た廻り程とぐるを巻いて麻のやうに頭を擡げた姿勢と云ひ、ぬらぬらした青大将の鱗の色と云ひ如何にも

眞に迫つた出来栄である。見れば見る程つくづく感心して今にも動き出しさうな氣がして来たが、突然私は「おや」と思つて二三歩後へ退いた儘眼を見張つた。氣のせるか、どうやら蛇は本當に動いて居るやうである。爬虫動物の常として極めて緩漫に、注意しなければ殆ど判らないくらゐ悠長な態度で、確かに首を前後左右へ蕩かして居る。私は總身へ水をかけられたやうに寒くなり、眞蒼な顔をして死んだやうに立ち竦んでしまつた。すると鏡子の帷の間から、油繪に畫いてある通りに乙女の顔が、又一つメツと現はれた。

顔は暫くやにやと笑つて居たが、鏡子の帷が二つに割れてすると肩をすべつて背後で一つになつて了ふと、女の子は全身を現はして其處に立つて居る。鏡に膝頭へ届いて居る短いお納戸の袋裾の下は、靴足袋も類はぬ石脊のやうな素足に肉色の床靴を穿き、溢れるやうにこぼれかかる黒髪を兩肩へすべらせて、油繪の通りに腕環に頸飾を着け胸から腰のまはりへかけて肌を弄と聚めつけた衣の下にはしなやかな筋肉の微動するのが見えて居る。

「光子ちゃん一人なの？」と、牡丹の花鬘を覗んだやうな紅い唇をふるはせた一刹那、私は始めて、彼の油繪が光子の肖像畫である事に氣が付いた。「……先刻からお前の来るのを待つて居たんだよ。」かう云つて、光子は背かすやうにぢりぢり側へ歩み寄つた。何とも云へぬ甘い香が私の心を操つて眼の前に紅い霞がちらちらする。「光子ちゃん一人なの？」私は救を求めやうな聲で、おぼおぼ尋ねた。何故今夜に限つて洋服を着て居るのか、眞暗な隅の部屋には何があるのか、未だいろいろに聞いて見たい事はあつても喉嚨につかへて居て容易に口へは出て来ない。「仙吉に會はせて上げるから、あたしと一緒に此方へおいでな。」光子に手頭を把られて、俄にガタガタ顛へ出しながら、「あの蛇は本當に動いて居るんぢやないか知ら。」と、氣懸りで堪らなくなつて私は尋ねた。「動いて居やしないぢやないか、あれ御覽な。」かう云つて光子はにやにや笑つて居る。成る

程さう云はれて見れば、先は確かに動いて居たあの蛇が、今はちつととごろを巻いて少しも姿勢を崩さない。

「そんなものを見て居ないで、あたしと一緒に此方へおいでよ。」
「何か柔かな光子の掌は、とても振り放す事の出来ない魔力を持つて居るやうに軽く私の腕を捕へて、薄気味の悪い部屋の方へずるずると引張つて行き、忽ち二人の體は重い假子の帷の中へめり込んだかと思ふ間もなく、眞暗な部屋の中に入つて了つた。

「あ、何處に居るのだい。」

「今蠟燭をつけると判るから待つておいで。」

「それよりお前に面白いものを見せて上げよう。」

光子は私の手頭を放して、何處かへ消え失せて了つたが、やがて部屋の正面の暗い間にピシピシと凄じい音を立てて、細い青白い光の線が無数に飛びちがひ、流星のやうに走つたり、波のやうにのたつくつたり、圓を畫いたり、十文字を畫いたりし始めた。

「ね、面白いだろ、何でも書けるんだよ。」

「から云ふ聲がして、光子は又私の傍へ歩いて

来た様子である。今迄見えて居た光の線はだんだんに薄らいで間に消えかかつて居る。

「あれは何？」
「船來の機寸で壁を擦つたのさ。時間なら何を擦つても火が出るんだよ。茶ちゃんの着物を擦つて見ようか。」

「お止しよ、あぶないから。」

「私は吃驚して逃げようとする。」

「大丈夫だよ、ね、ほら御覽。」

と、光子は無造作に私の着物の上前前を引張つて機寸を擦ると、絹の上を螢が這ふやうに青い光がきらきらして、ハギハラと片假名の文字が鮮明に描き出された儘、暫くは消えずに居る。

「さあ、あかりを付けて仙吉に會はせて上げようね。」

ピシツと鐵火を打つやうに火花が散つて、光子の手から蠟燭が燃え上ると、やがて部屋の中程にある燭臺に灯が移された。

西洋蠟燭の光は、障壁と室内を照らして、さまざまの器物や置き物の黒い影が、驚駭題の跋扈するやうな姿を、四方の壁へ長く大きく映して居る。

「ほら仙吉は此處に居るよ。」

て、ぼんやりと燈火のまたたくのが見え、眼珠の別圍がぼうツと紅く霞んで、光子の盛な香水の匂が雨のやうに顔へ降つた。

「二人共ガツとさうやつて、もう少し我慢をしておいで。今面白いものを聞かせて上げるから。」

かう云つて、光子は何處かへ行つて了つたが、暫くすると、不意にあたり寂寥を破つて、ひつそりとした隣の部屋から幽玄なピアノの響きが洩れて来た。

銀盤の上を玉あられの走るやうな、深間の清水が潺湲と音の上にしたたるやうな不思議な響は別世界の物の音のやうに私の耳に聞えて来る。顔の蠟燭は大分知くなつたと見えて、熱い汗が顔に交つてぼたぼたと流れ出す、隣に坐つて居る仙吉の方を横眼で微かに見ると、顔中へ儼然粉に似た白い塊が二三分の厚さにこびり着いて盛り上り、牛蒡の天ぶらのやうな姿をして居る。丁度二人は「浮かれ胡弓」の唄の中の人間のやうに、微妙な樂の音に恍惚と耳を傾けた儘、いつまでもいつまでも眼臉の裏の明い世界を視詰めて坐つて居た。

其の明くる日から、私も仙吉も光子の前へ出

かう云つて、光子は蠟燭の下を指した。見ると燭臺だと思つたのは、仙吉が手足を縛られて兩肌を脱ぎ、顔へ蠟燭を載せて仰向いて坐つて居るのである。顔と云はず頭と云はず、鳥の糞のやうに溶け出した蠟の流は、兩眼を凝ひ、唇を塞いで、頭の方からぼたぼたと膝の上に立ち、七分通り燃え盡した蠟燭の火に今や睫毛が焦げさうになつて居ても、婆羅門の行者の如く胡坐をかい坐して拳を後手に括られたまま、大人しく端然と控へて居る。

光子と私が其の前へ立ち止ると、仙吉は何と思つたか蠟で強張つた顔の筋肉をもぐもぐと動かし、漸く半眼を開いて怒めしさにちつと私の方を睨んだ。さうして重苦しい切ない聲で嚴かに喋り出した。

「おい、お前も己も不羈あんまりお嬢様をいぢめたものだから、今夜は仇を取られるんだよ。」

己はもうすつかりお嬢様に降参して了つたんだ。お前も早く詫つて了はしないと、非道い目に會はされる。……」

かう云ふ間も蠟の流は洩れなくだらだらと蛇蚓の這ふやうに顔から睫毛へ傳はつて来るので再び仙吉は、眼をつぶつて固くなつた。

「茶ちゃん、もう此れから信ちゃんの云ふ事な

ると猫のやうに大人しくなつて、籠きたまふ信一が姉の言葉に逆はうとすると、忽ち取つて抑へて、何の合釋もなくふん縛つたり撲つたりするので、さしも傲慢な信一も、だんだん日を経るに従つてすつかり姉の家來となり、家に居ても學校に居る時と同じやうに全く卑屈な意氣地なしと變つて了つた。三人は何か新しく珍らしい遊戯の方法でも發見したやうに、嬉嬉として光子の命令に服従し、「腰掛けにおなり。」と云へば直ぐ四つ這ひになつて背を向けるし、「膝におなり。」と云へば直ちに長まつて口を開く。次第に光子は稍長して三人を奴隸の如く追ひ使ひ、湯上りの足の爪を切らしたり、鼻の穴の掃除を命じたり、二三日を散ませたり、始終私達を側へ侍らせて、長く此の國の女王となつた。

西洋館へは其れ切り一度も行かなかつた。彼青大將は果して本物だか贋物だか、今考へて見てもよく判らない。

光子は三人に毎日預りの小使の大使を食めせて、乳持よがつて居る。

鶯

姫 (一場五幕)

—A FAIRY PLAY—

時 第一場と第五場——現代
第二場より第四場まで——王朝時代

所 京都

登場者

(現代の部)

大伴 先生 女学校の國語の教師

壬生 野 春子 女学校の生徒、公卿

鈴木 道子 華族の姫君

木村 常子 女学校の生徒

中川 文子 同

其の他女生徒多勢

(王朝時代の部)

壬生 左大臣

鶯 姫

冷泉 親王

京極 大納言

町尻 中納言
梅小路 三位
藏人 命婦
春日 少将
阿部 晴明
羅生門の鬼
雷 神
其の他隨身、童、雜色等

第一場 京都の南の郊外にある女学校の構内。やや上手寄りに校舎の建物の一部が見えて、前方の運動場に臨んで居る。建物は軽快な脚色のベンキを座つた、新しい西洋館で、教室の硝子窓の外にはゆつくりとしたモランダが附いて居る。モランダの程よき所に、運動場へ降りる石の階段がある。建物の下手側面に満開の櫻が二三本植わり、その後ろに煉瓦塀が横いて城の

向うにはうらうらと晴れた紺青の空の中に、雲岩山が雲と霞に煙つて居る。ちやうど午後の休憩時間の最中で、多勢の生徒のガヤガヤと戯れ騒ぐ聲が、いかにも陽気らしく構内に響き渡つて居る。暖かきうな、ほかほかした春の日光がモランダの椅子に照り付けて居る。教師の年齢は五十六歳、古ぼけた紺の背廣服を着た、瘦せた小柄な人物で、カーライルの肖像をもつと貧相に、もつと思鏡にしたやうな、髯だらけの正直らしい薄顔の老翁である。今しも午の辨當を済ませて、睡気まじりに此處へ出て来たところらしく、重ねた膝の上に両手を置いたまま、ぼんやりと運動場を眺めて居る。
下手の櫻の木の下で、四五人の女生徒が、「オイチ、二一」と掛け旗をしながら、襪飛びをやつて居る。時々、鬼ごっこをして居る三四人の生徒たちが、上手から下手、下手から上手へ、きやつきやつと笑ひ興じながら、追ひつ追はれつして通り過ぎる。女生徒の或る者は路仙の箱入れに海老茶の袴を穿き、或る者は瀧河とした洋服を着

て、一様に涙手なりボンと髪に滑んで居る。いづれも十二三歳から十五六歳の少女である。

大伴老人は、未だに餘念もなく運動場を覗き詰めて居る。斜めにさし込む明かな光線を満身に浴びながら、折折眩しさに眼瞼をしばだいたいて、無邪氣な少女等の蝶々のやうに飛び廻る様子を、うつとりと見惚れて居るらしい。少女等の嬉嬉たる笑ひ聲が聞える度毎に、老人の、皺の多い、黄色い頬に微笑が浮かんで、象の眼のやうな細い瞳には、得も云はれぬ愛嬌が輝いて見える。

十三四の桃色の洋服を着た少女の一人が、片手にラケットを持って、息を切らせつつ上手から駆けて来る。

(少女の一人) 大伴先生! あたしたちと一緒にテニスをなさいませんか。
老人は何とも答へず、唯にこにこと笑つて少女の姿を打ち眺める。
(少女の一人) ねえ先生! 彼方へいらしつて、一緒にテニスをなさいませんか。あたし先生をお誘ひに参りましたのよ。
老人は何か云はうとして、口元をムズムズ

させたが再びにやにやと間の抜けた薄笑ひに紛らせてしまふ。
(少女の一人) 焦れつたさうに肩を振りながら「よう先生! それとも先生はテニスがお嫌ひなんでしょうか。」

(老人) わしいや、わしはな、文久生れの老人で、テニスなどと云ふ西洋の遊びは、好きにも嫌ひにもやつた事がないから、お付き合いが出来ないのだよ。折角誘ひに来て下さるのは有り難いが、わしは斯うやつて日にあたりながら、皆さんの遊戯を見物して居るのが一番面白い。

(少女の一人) だつて、外の先生たちは誰方だつてテニスをなさるんですもの。お出来にならなければ私が教へて上げますから、兎に角彼方へ入らつしやいませ。

(老人) いやいや、わしのやうに老碌すると、何も彼も覺えが悪くなつてな。それに體は利かなくなるし、眼は遠くなるし、此のやうに年を取つては人間もおしまひだよ。まあまああなた方のやうな若い時代が人生の花だ。わし見たいな老人を相手にせずと、子供はやつぱり子供同士で遊んだ方がつきづきしいだらう。(此の老人は話の中に時々古語を交へる

癖がある。)
(少女の一人) 先生、つきづきしいッて何のことですか。

(老人) つきづきしいと云ふのは、昔の言葉で似つかはしいと云ふ事だ。枕の草紙などによくある言葉だが、三年級の讀本には出て居なかつたかな。
(少女の一人) そんな言葉はまだ教へて頂けませんわ。私は三年生やございませぬもの。
(老人) はてな、あなたは三年生やなかつたかな。

(少女の一人) ええ、二年生ですわ。
(老人) さうだつたかね。わしは此の通り老碌して居るからなう。

(少女の一人) ですが先生は、話の中に時々昔の言葉をお使ひなさるんですね。
(老人) うん、大方人間が舊弊だから言葉まで古代になるんであらう。あはははははは。
(少女の一人) それぢやあたし彼方へ行つて誰か外の人を誘つて来ますわ。
(老人) ああさうなさい、さうなさい。
(少女の一人) ばたばたと下手へ走り去る。
老人は又暫く運動場を眺めて居たが、やがてチヨツキのポケットから取り出した紙

録の老眼鏡をかけて、上着の内蔵しに入
れてあつた小型の書物を膝の上に開きなが
ら、静かに讀書に耽り始める。しかし、一
ペエヂばかり読んで居るうちにだんだん夢
魔に襲はれて来るらしく、二三度くりこ
くり居眠りをしたかと思ふと、いつの間に
やらだらしなく首を項垂れて、ほんたうに
寝込んでしまふ。

その時まで、側面の欄の木蔭に纏結びをし
て居た四人の生徒等は、次第にゼランダの
前の方へ飛んで来る。中で一番年高なのは、
鈴木道子と云ふ四年級の生徒で、十六七歳
の、お嬢様らしい少女である。その次ぎは
十五六歳の木村常子と中川文子。最年少者
は二年生の壬生野春子。四人のうち三人は
和服を着、春子だけが純白の清涼しい洋
装をして居る。中高の瓜實顔の、際立つて
眉目の秀麗な十四五歳の少女で、背丈のス
ラリとした、優美な體つきの何處か知らに、
名門の姫君らしい高貴な品威が備はつて居
る。

(鈴木道子、と大伴老人の寝姿に心付き、纏
結びの手を休めて三人に目くばせする。ちよ
いと、しつ！ しつ！ 皆さんお静かになさ
い。

(壬生野春子、至極無死氣に) ええいいわ。あ
たし預かつて居るわ。大伴先生なら、
恐くも何ともありませんもの。(眼鏡と本とを
受け取つて、ポケットに入れる。)

(木村常子) 壬生野さん、それからね、あなた
先生の後ろへ廻つて、眼隠しをして御覽なさ
い。いくら先生が老い惚れていらしても、
さうすればきつと眼をお覺ましになるわ。
(中川文子) およしなさいよ。そんな事をしち
や、なんぼなんでもあんまり悪いと思ひます
わ。

(木村常子) いい事よ。壬生野さんなら何をな
すつても、大伴先生はお怒りにならないの。
(壬生野春子) いいわ、面白いからやつて見る
わ。

(鈴木道子、いかに大人振つた、生意氣な口調
で) ほんとに壬生野さんは無死氣だわね
え。

壬生野春子、抜き足差し足にてゼランダへ
上りちよこちよこと老人の背後へ廻つて、
可愛らしい掌を伸べて老人の両眼を塞
ぐ。

(老人、漸く眼を覺ました様子で) 誰だ、私
の眼を塞ぐのは誰だ。(少女の手頸を捕へうる

い。大伴先生が又此れを(居眠りの眞似をす
る。)なすつていらつしやるわよ。
三人、遊戯を止めてそつと石段の下に歩み
寄る。

(木村常子) あら、ほんたうよ。まあ何も知ら
ないで、いい心持ちさうに、すやすやと眠つ
ていらつしやるのね。

(壬生野春子、中川文子) おほほほほ。
兩人手を口へあててくすくすと忍び笑ひ
をする。

(鈴木道子) しつ！ しつ！ お静かになさい
つてば！ 何か徒らをして驚かして上げよう
ぢやありませんか。

(中川文子) そんな事をして、後で先生に叱ら
れると大變だわ。

(鈴木道子) 大丈夫よ中川さん。私いつでも
先生を驚かして上げるけれど、叱られた事な
んぞありやしないわ。大伴先生はもう毫末し
ていらつしやるんですもの。

(木村常子) ええさうよ、もう老い惚れていら
つしやるのよ。だから毎日日向ぼっこをして、
こつくりこつくり居眠りばかりなさるんだ
わ。

(壬生野春子、中川文子) おほほほほほ。

ささうに首を振る。)

少女等どつと笑ふ。

(老人) こら、こら、徒らをしてはいかん。誰
だ、誰だ。

(壬生野春子) 先生、私よ……誰だかお分
りになつて？

(老人、それと心付きながら、わざと惚けて彼
女の手頸を撫でて居る。) はてな、誰だらう
な。

(壬生野春子) おほほほほほ。

(鈴木道子) 先生のお氣に入りの方よ。ね、先
生、お分りになつたでせう。

(壬生野春子) おほほほほほ。

(木村常子) あの笑ひ聲がお分りにならなけれ
ば、先生は餘つぽどどうかしていらつしやい
ますわ。

(老人) わしの氣に入りの生徒と？ はてな、
誰かな。

(壬生野春子) 私よ、先生。

と云つて、いきなり兩手を放し、ゼランダ
を成勢よく駆け出して、上手へ逃げ込んで
しまふ。

(老人、眼をしょぼしょぼさせながら) こら、
こら、誰か私の眼鏡を隠したな。おやおや、本

(鈴木道子) あ、いい事がある。中川さん、あ
なたね、そうツと先生の眼鏡を外しておしま
ひなさい。

(中川文子) 外してもいいこと、ほんたうに叱
られやしなくつて？

(木村常子) 大丈夫よ、文子さん。
中川文子、足音を盛んでゼランダへ上り、
密かに老人の眼鏡を外して来る。

(木村常子) それから、其の本も隠してしまひ
ませう。(文子の後から上つて行つて、老人
の膝の上の書物を洩つて来る。)

(鈴木道子) おほほほほほ、まだ先生は氣が付
かないで眠つてらつしやるわ。まあ何て云ふ
氣樂な方でせう。

(中川文子) 誰か此の眼鏡を預かつて頂戴
な。あたし待つて居るのは嫌だわ。

(鈴木道子) あ、さう、さう、壬生野さんに預
けるのが一番いい。さ、その本と眼鏡を此方
へお出しなさい。(常子と文子から二つの品
を受け取つて、春子を手招きする。) ね、壬生
野さん、あなたに此れを預けますから、ポツ
ケットへ入れてデツと隠していらつしやい。
壬生野さんは大伴先生のお氣に入りだから、
見付かつたつて叱られやしなわ。

もなくなつて居るわい。(立ち上つて、椅子の
周囲をウロウロと捜し廻る。)

少女等手を叩いて嗤笑する。

(中川文子) 先生、御本も眼鏡も春子さんがお
持ちになつていらつしやいますの。たつた今
彼方へ逃げていらつしやいましたわ。

(老人、嬉しさに) ほほう、また壬生野さん
の徒らかね。あの兒のお機嫌にも困つたも
のだよ。

(鈴木道子) だつて壬生野さんは、先生の御氣
に入りますから、少うしぐらゐ徒らになすつ
ても仕方がありませんわ。

(文子、常子、互ひに顔を見合はせて囁るやう
に) おほほほほほ。

(老人、うろたへて) 鈴木さん、そんな事を云
ふものではありませんよ。あなたは何だか、
私が壬生野さんを他屋にして居るやうに思
つていらつしやる。

(鈴木道子) でも同級生の方が皆さう云ひます
わ。先生は教場に入らしつても、壬生野さん
ばかりちやほやなさるんですつて。

(老人) それはな、少しはさう云ふ事があるか
も知れんがな。——わしは壬生野と云ふ名前
がなつかしくて、それで彼の兒を大切にしてい

居る。壬生野と云ふと、何となく遠い古の、殿上人を想ひ浮べるのでな。

(鈴木道子) それぢや先生は、壬生野さんが華族様のお姫様で、お公卿様の御子孫だから、それで御島屋になさいませぬ。

(老人) さう云つては語弊がある。何も華族様の姫君だからと云ふ譯ではない。

(木村常子) いえさうだわ。華族様のお姫様だから大事になさるのよ。

(中川文子) 平民の子は語まらないわねえ。

(鈴木道子) ほんとなねえ。

(木村常子) ほんとなねえ。

(老人) これ、これ、あなた方は生徒の癖に、わしを年寄りだと思つて馬鹿にするのだけ。

少女等笑ふ。

(老人) わしは長らく國文の教師をして居るせゐか、兎角古風な、平安朝の昔を慕ふ癖があつてな。王朝時代の佛の残つて居るものは何でも好きだよ。壬生野さんの様子を見ると、名前ばかりか顔つきなどにも、何處となく大宮人の血が傳はつて居るやうでな。やつぱり血統と云ふものは争はれぬて。

(中川文子) そんなら先生は古風な物は何でも好きなんですね。

(老人) うん、まあさうだ。私は第一に此の京都と云ふ土地が好きだ。私の故郷は關東の相模の國でな、昔ならばむくつけき東夷の生れだが、京都が好きならばつかりに、此の學校の教師になつて、もう彼れ此れ二十年も奉職して居る。どうせ死ぬなら、私は此の都の土になりたと思つて居るよ。

(木村常子、冷やかすやうに) 死ぬなんて、先生はまだお若いぢやありませんか。

(老人) あはははは、木村さんは私の老練して居る事を知つて居ながら、なかなか人が悪いなう。

(鈴木道子) ほんたうですわ。先生はまだお若いつていらつしやいますもの。老練なすつたなんて、いみじき御事ですわ。

(老人、少女一同) あははははは。

(老人) あなた方は、多分歴史の先生に教へて頂いて、よく知つて居るでせう。——平安京の昔には、今ちやうど、此の學校の立つて居る近所に、あの有名な羅生門と云ふのがあつてな。それから此の西の方に、老人夢みる如き鐘を擧げて、西の空を指す。西寺の塔があつて、東寺の塔と向ひ合つて居たのだ。此處から北の方へ一直線に、廣さ二十八丈

の朱雀大路が続いて居て、朱雀門、應天門、大極殿と連つて行く。(眼を閉ぢて、理想に耽るが如き様子をする。) わしは今でも、あの時分の都の機がまさまと見えるやうな心地がする。緋の生絹の水干を着た童を従へて、此の邊りを徘徊して居る大宮人の風流な姿が、夢のやうに眼の前へ浮かんで来る。

(依然として眼目したまま、議論の如くに云ふ。) わしのやうに年を取ると、此の世の中には何の興味もなくなつてしまふが、わしはただ、過去の幻を夢に見るのを樂しみにして生きて居るのだ。

老人が眞面目になつて獨り語を云ふ様子の不審さに、少女等は呆然として其の顔つきを眺めて居たが、やがて一同くすくす笑ひながら下手へ逃げ去る。

壬生野春子、鶯を入れた鳥籠を、兩手で捧げながら、愉快さうに上手より走つて来る。

(壬生野春子) 先生！ 大伴先生！

(老人、漸く我に復つたやうに眼を開いて、) はい、はい、何だね。大さう急ぎ込んで居るぢやないか。

(壬生野春子) 先生私ね、彼處の櫻の木のとこ

ろで、鶯を捕まへて参りましたの。

(老人) まあ可哀さうに、そんな物を捕まへないで早く逃がしておやりなさい。

(壬生野春子) でもね、大伴先生は小鳥がお好きだから、先生に差し上げようと思つて籠へ入れて参りましたのよ。

(老人) その籠は何處にあつたんだね。

(壬生野春子) 此れですか、此れはね、いつか先生が教員室に伺つていらしたカナリヤの籠でございます。先生のカナリヤが死んでしまつたので、小使さんが此の籠を取つて置いたのですつて。——ちやうど彼處の櫻の枝に、二羽の鶯が止まつて居たのを、私漸うの事で、一羽だけ捕まへましたわ。

(老人) 捕まへるなら二羽とも捕まへてやればいいに。番ひの鳥が一羽にされては、嘘かし籠の外が懸ひしいだらう。可哀さうだから空へ放しておやりなさい。

(壬生野春子) 二羽の鶯が一羽になると、なぜそんなに可哀さうなんですか、ねえ先生。

(老人) はははは。あなたはまだ子供だから、さう云ふ理窟は分るまいがの。——しかしあなたももう直きに物の哀れを知り初めるだらう。はははは。(薄気味悪く笑ふ。)

(壬生野春子) でも先生、私が折角捕まへて来て上げたのですから、カナリヤの代りに伺つておやりなさいました、先生が可愛がつておやりになれば、鶯だつて可哀さうな事はありませぬもの。

(老人) さうかな。あなたが其れ程に云ふのだから、伺つて置くとしようかな。

老人、鳥籠を受け取つて、椅子の傍らに据ゑる。授業の知らせの鐘が鳴る。

(老人) さあ、さあ、授業が始まつたから彼方へお出で。私は此の時間は隙だから、また本でも讀むとしよう。(ポケットを捜つて急に思ひ出し) お、さう、さう、壬生野さん、あなたは何か、私の物を隠して居るだらう。

(壬生野春子) おほほほほ。先生御免なさい。春子、老人の膝の上に眼鏡と本とを投げ出して、慌しく下手へ馳せ行く。

老人は相變らずにこにこしながら、春子の後ろ影を見送つた後、眼鏡をかけて再び讀書に耽り始める。二階のガラス窓の中は音楽の教室と見えて、オルガンの音と共に多勢の女學生の合唱が、陽気に響けに聞えて来る。

(唱歌) 春の彌生の曙に、

四方の山邊を見渡せば、花盛りかも白雲の、

かからぬ隈ぞなかりける……

此の唱歌が、幾度となく繰り返されて、長く續いて居る。階下の教室には地理の授業が始まつた所らしく、一人の生徒の直立の姿勢で教科書を朗讀する様子が、ガラス越しにちらちらと隠見する。『京都市は、山城平野の北隅にあり。行政上、上京下京の二區に分る、市街極めて端正なり。此の地は桓武天皇筑都以來、一千有餘年の帝都たりし處、京都御所を始め、神社、佛閣、名所舊蹟多く、山水明媚にして近傍形勝の地に富む。就中、嵐山高塚山最も名高し。……』などと讀み上げる聲が、折折鮮明に洩れて来る。遠くの方で體操をする生徒等の掛け聲が「一、二、三、……」と、のどかに響き渡る。稍西に傾きかけた光線が、いよいよ麗かに老人の姿を照らして居る。

老人はいつの間にか又居睡りをし始める。邊には膝の書物を床に落して、伸び伸びと椅子に凭れたまま、ぐつぐつと寝入つてしまふ。唱歌、朗讀、體操の掛け聲が、まだぼ

で生きて居なさるんだね。
 (青鬼) さうともさ。己が棲んで居た羅生門も、立派だったのは僅かの間で、弘仁七年の八月の大嵐に倒れてからは、再建しても味な物は建たなかつたよ。己も王朝の末の頃には、時時姿を現はして人間界を騒がしてやつたが、それきり今日まで徒らに止めて居たんだ。しかし爺さんがあんまり昔を戀ひしがらから、つい氣の毒になつてな、王朝時代の鬼の姿をお前に見せにやつて来たのだ。さあ、爺さん、別にお前を取つて喰はうと云やあしないから、氣を落ち着けて、とつくりと己の様子を見るがいい。(眼を塞いで居た手を放す) どうだ、己の此の恰好は、そつくり昔の繪巻物にある通りだらう。
 (老人) 鬼の姿を見上げ見下ろして、つくづくと感心する。成る程なあ、お前さんがさうやつて立つて居ると、地獄草紙の古畫からでも抜け出して来たやうだなあ。——たとへ鬼だらうが爺だらうが、王朝時代の遺物だと思ふと、私は嬉しくつて體がぞくぞくして来るよ。
 (青鬼) 爺さん、お前が其れ程昔の世の中に憧がれて居るなら、一番己の神通力で、王朝

時代の都の景色を此處へ出現させてやらうか。
 (老人) えつ、お前さんにそんな事が出来るのかい。
 (青鬼) おい、おい、爺さん。あんまり己の能力を見縮つて貰ふまいぞ。己はな、斯う見えても人間以上の自在力を持つて居るのだ。望みとあらば、過去の世界でも未來の世界でも、立ち所に眼の前へ作り出して御覽に入れらう。
 (老人) わしの望みは未來にはない。ただもう過去の幻にあるのだ。
 (青鬼) よし、よし、そんなら過去を見せてやらう。だが、己がお前に見せるのは幻ではないのだぞ。實際にあつた過去の世界なのだぞ。つまりお前が王朝時代の人間に生れ變つて、その頃の平安京に住んで居るのだと考へれば、間違ひはないのだ。
 (老人) 驚びの餘り身を慄はせて、えつ、そ、そんな不思議な事が出来るのかね。
 (青鬼) 出来なくつてどうするものか。さ、己の云ふ事を聴いて、もう一廻眼を潰つて御覽。(再び老人の眼を潰す)——いいかな、お前が今、斯うして休んで居る学校の廊下は、

なら、何でも好きだと云つたつたな。
 (老人) まあ大概は好きな積りだが。
 (青鬼) すると爺さんは己を嫌ふ譯には行くまいぞ。己は此れでも、平安朝の時代から、此の近所の羅生門に東を喰つて居た鬼なのだ。ほら、お前は覺えて居るだらう。——むかしむかし、都良香に朗味の下の句を教へてやつたと云ふ、有名な羅生門の鬼は己の事なのだ。
 (老人) ははあ、あの朗味の下の句は何とか云つたな。水消 浪洗 舊 昔 體——と云ふのだつたか。
 (青鬼) うんさうだ。よく覺えて居てくれたな。確認してもさすがに爺さんは國文の教師だけある。あの時己は、都良香が困つて居たから、ちよいと下の句を附けてからかつてやつたのだ。何と此れでもなかなかえらい詩人だらう。——己は其の後あまり人間を馬鹿にしたものだから、とうとう波瀾と云ふ恐ろしい歌に墮まつたな。腕を片つ方斬り取られて、非道い目に會はされたが、直に取り返して、また元の通りに體へくつ着けてしまつた。こんな重寶な眞似は、人間には出来ないだらう。
 (老人) ではお前さんは、其の時分から今日ま

んやりと聞えて居る。
 エランダの上手から一匹の青鬼が現はれて、老人の寢息を窺ひつつ傍らに近寄り、ちやうど先刻の少女のやうに眼鏡を外して眼隠しをする。
 (老人) 誰れだね、また徒らをする者は？ 壬生野さんかね。
 (青鬼) からからと笑ふ。(おい爺さん、今度は相手が違つて居るよ。
 (老人) 訝しげに眉を擧め、) はてな、つひぞ聞き馴れない聲のやうだが、あなたは一體誰方かな。
 (青鬼) 己かい？ 己は鬼だよ。青鬼だよ、嘘だと思ふなら己の手頸に觸つて見ろ。
 (老人、眼を驚がれながら、おぼおぼと鬼の手頸を撫でる。) どうだ、壬生野子爵のお嬢さんの手とは、大分違つて居るだらう。第一己の手には指が四本しかない。それに鬼のやうな爪が生えて、熊のやうな毛がもぢやもぢや附いて居るだらう。
 (老人、俄にガタガタ顫へ出す。) た、た、たすけてくれ。私は鬼に取り憑かれるやうな悪い事をした覚えはない。
 (青鬼) あははははは。覚えがないとは云はせ

ないぞ。お前はいい年をして、おまけに学校の先生でありながら、あの無邪氣な壬生野子爵のお嬢さんに懸想して居るだらう。
 (老人) と、と、とんでもない事だ。わしは唯、過去の夢に生きて居る人間なのだ。わしはあの女の兒を、古の物語にある姫君のやうに想像して、そつと喜んで居るだけだ。いくら學校の教師だつて、そのくらゐの事は許してくれてもいいだらう。
 (青鬼) いや、いや、何と云つてもあのお嬢さんに懸想して居る。爺さんの癖に、お前はなかなか嘘をつくのが上手だな。
 (老人) 私は決して嘘は云はない。——正直を云ふと私は遠い古の夢の中で、あの兒に懸想して居るかも知れない。平安朝の昔に、わしが殿上人の公達に生れたと想像して、あの美しい春子姫のやうな、やむごとなき姫御に紅袴の小袷を着せ、清好の袴を穿かせて、古風な態を装しんだら、どんなに世の中が面白からうと、そんな妄想に耽ることはあるかも知れない。だがもう其れは至つてたわいのない、ほんの一時の幻なのだ。
 (青鬼) はは、だんだん本音を吐いて来たな。——ところで爺さん、お前は平安朝の昔の物

なら、何でも好きだと云つたつたな。
 (老人) まあ大概は好きな積りだが。
 (青鬼) すると爺さんは己を嫌ふ譯には行くまいぞ。己は此れでも、平安朝の時代から、此の近所の羅生門に東を喰つて居た鬼なのだ。ほら、お前は覺えて居るだらう。——むかしむかし、都良香に朗味の下の句を教へてやつたと云ふ、有名な羅生門の鬼は己の事なのだ。
 (老人) ははあ、あの朗味の下の句は何とか云つたな。水消 浪洗 舊 昔 體——と云ふのだつたか。
 (青鬼) うんさうだ。よく覺えて居てくれたな。確認してもさすがに爺さんは國文の教師だけある。あの時己は、都良香が困つて居たから、ちよいと下の句を附けてからかつてやつたのだ。何と此れでもなかなかえらい詩人だらう。——己は其の後あまり人間を馬鹿にしたものだから、とうとう波瀾と云ふ恐ろしい歌に墮まつたな。腕を片つ方斬り取られて、非道い目に會はされたが、直に取り返して、また元の通りに體へくつ着けてしまつた。こんな重寶な眞似は、人間には出来ないだらう。
 (老人) ではお前さんは、其の時分から今日ま

とり、賤民の童どもが、伴大納言の繪巻にあるやうな服装をして遊遊ひになつたり、あぐらを掻いたりして遊んで居る。彼等は不思議にも一様に黙黙として菓子やムシヤムシヤと頬張りながら、静かに群がって居る。時時、上手或ひは下手から男女の遊民が通り過ぎる。

(青鬼) さあ爺さん、もう眼を明いても大丈夫だ。(眼隠しの手を放す。) どうだい、見晴らしがいいだらう。かう云ふ天氣に此處から眺めると、都の景色は一目に見渡せる。ほら、彼處に高く聳えて居るのが東寺の塔。此方にあるのが西寺の塔。(順順に空の四方を指さす。) それから今度は此方を御覽。(兩人立ち上つて、側面の勾欄の方へ歩いて行き、小手を觸して遙かに朱雀大路を望む。) 此れが有名な朱雀大路だ。それ、其の右に見える町が宣風坊、左の方が官義坊、それからもつとズツと手前の大路の右側にちよいと立派な邸があるだらう。

(老人) ふん、ふん。
(青鬼) あれがな、以前は六孫王經基の住んで居た邸なのだ。
(老人) あの、ずつと向うの左側に、長い長い

築土の塙を繞らした戴めしい御殿の臺が見えるが、あれは誰方のお邸かな。

(青鬼) ああ、あれか。あれは朱雀院と云つて、上臈様のお住まいになる御殿だよ。あの築土は四町四方もあるのだから長い管さ。はてな、今日は内裏に何かお祝ひでもあるのかな。朱雀門の前の廣場に、大分牛車が立て込んで居るわい。

(老人) どれ、どれ、何處に朱雀門があるんだね。
(青鬼) ほら、此の大路を眞直ぐに行つた突あたりに、丹雫りの柱がちらちらと霞んで見えるだらう。

(老人) はあ、成る程大分遠方だな。惜しい事に霞が深くつて、私にはよくは分らんが、あの門の屋根の上に、びかびかと金色に光つて居るのは何だらう。
(青鬼) あれは樓門の鶏尾が、日に反射して輝いて居るのだ。あの先に又應天門があつて、それから若龍樓、白虎樓、大極殿となるのだが、爺さんにはとても見えまい。さあ彼方へ行つて、往來の風俗でも見る事にしよう。

兩人、再び正面へ戻つて勾欄に肘をかける。軟風がそよそよと吹いて、櫓の風鐸を

鳴らす。
(青鬼) 何だかいやに生暖かい風が吹くな。春は此れだから睡くなるよ。

(老人) おやおや、其處の橋のところに子供たちが日向ぼっこをして居るやうだ。鬼の居るのが恐くないのかね。
(青鬼) なあに彼奴等には知れやしない。己は忍術を使つて、お前と己の姿を、人間の眼に映らないやうにして居るのだ。

(老人) それにしても此の子供たちは、先から馬鹿に大人しいな。さすがに平安朝の童は違つたものだ。
(青鬼) あははははは、つまらない事に感心するな。彼奴等は物を喰つて居るから、それで大人しいんだよ。

(老人) 子供の喰つて居るものは、あれは何だらう。
(青鬼) あれはつばい餅と云つてな、櫓の葉っぱに餅をくるんだ菓子なんだ。
(老人) そんな物がよく喰へたものだ。金鈴や羊羹をたべさせてやりたいな。

(青鬼) おつと爺さん、さつきの約束を忘れてはいけないよ。お前は何處迄も王朝時代の人間なのだ。大正の世の中の女學校の先生で

はないのだよ。
(老人) おおさうだつて。わしはずつかり忘れて居た。

其の時まで無言の状態を續けて居た童共が、急に勢よく語り始める。
(童の一) おい、おい、此の羅生門に鬼が居ると云ふ噂だが本當か知ら。
青鬼、びつくりして思はず首を縮める。

(童の二) 嘘さ、嘘に極まつて居るさ。だつて誰も見つた者がないぢやないか。
(童の三) 馬鹿を云へ、見た人間が多勢居るぞ。内の親父はな、此の間東の市の町へ軒を買ひに行つてな、晩に遅く此處を通つたら、あすこの勾欄のところに、(門を指さす。) たしかに鬼が一匹居たとよ。

(童の四) 鬼なんぞ己はちつとも恐くはないぞ。己は今に親光様の家來になつて、鬼退治をしてやるんだ。
(童の五) 法螺を吹くのもいい加減にしろ。お前のやうに嘘をつく奴が、却つて鬼に渡はれるんだつて、己の知つて居る仁和寺の坊さんがさう云つたぞ。

菜を賣り歩く販婦、野菜の籠を頭に載せて、賣り聲高く呼ばはりながら、下手より上手へ通る。

(販婦) 菜はいらんかな。——すずん、すずしる、あしなづな、せり、はくべら、みつばせり、——菜はいらんかな。

販婦と入り違ひに、上手より、壺裝束の一人の貴婦人が、右の手に山吹の枝を携へて緩やかに歩み出で、市女笠を傾けて西の空の日脚を眺めながら、羅生門をくぐつて下手へ去る。

(老人) 今此の門をくぐつて行つたのは何處の女だらう。
(青鬼) さやうさ。いづれ上つ方の御殿に仕へて居る女房か何かだらう。此の近所のお寺へでも、お参りに行くところらしいな。

(老人) うつとりとして女の方を振り返りながら、わしは壺裝束と云ふものを初めて見たが、成る程風流なものだなあ。あして片手に山吹の花を提げて、笮の大路をしとやかに歩んで行く様子は、まあ何と云ふ奥床しい風情だらう。わしはどうかやら、嬉しくつて懐くつて、涙がこぼれて来る。

下手より草垂衣を着た女が、雑色の男をつれて歩いて来る。羅生門の下まで来ると、女はさきも被れたやうに石階に腰を

ち掛け、衣の間から顔だけた美しい眉根を露はして子供等に尋ねる。

(女) なう、なう、其處に居る童たち。菜は都の神泉苑のほとりまで、所用があつて行くのぢやが、道が分らないで尋ねして居る。どうぞ教へて賜らぬかいな。
(童の一) 何だつて、神泉苑へ行くのだつて? そんな所は己あ知らないや。

(童の二) 知つて居るけれどまだまだ道のりが遠つほどあるぞ。此れから此の路を東へ行つて南へ曲つて、西へ行つて北へ廻つて、五里も十里も先の方だぞ。あつはははははは。(雑色) やい、やい、此の顔鬼共は己が御主人を襲ふのだな。

(女) 手もて雑色の男を制する。(これ、これ、そのやうに強う云ふものではない。——なう、其處なお子たち、妾はな、播磨の國の飾磨の里から、はるばると都へ上つて来た者ぢやどうぞ路を教へて賜れ。

(童の三) ふん、それぢやお前は田舎者だな。
(童の四) 田舎者には都の廣さは分るまい。神泉苑へ行く迄には、大路小路が何本もある。針小路、梅小路、壺小路、北小路、綾小路、

具足小路……

(童) わつははははは。

(雑色) この御東めら！云はせて置けばいい氣になつて馬鹿にし居る！ええ、斯うしてくれるわ……(いきなり一人の子供の頭を擡る。)

(女) これ、これ、手竟な事をするではないぞ。

(雑色) いえ、いえ。私に任せてお置きなさい。

(子供の一) 畜生！よくも己を擡りやあがつたな。

(子供の一) やつつけちまへ。

雑色と子供等と入り亂れて喧嘩をする。上手から、一人の隨身らしい男、細腰の冠に縷を附け、開眼の袍を着て胡録を負ひ、弓を抱へつつ急ぎ足に出て来る。

(隨身) こら、こら、何をそのやうに騒いで居る。壬生の大臣の御君さまのお通りぢや。退らぬか、退らぬか。

(女) おお、それ、それ、大臣の御君のお通りぢや、早う彼方へ行かうわいな。

袴着を着たる女、雑色の手をひいて下手へ退場。その後から子供等がバラバラ

姫愛らしい顔を開いて、暫くの間恍惚と空を眺める。

(藏人命婦) ほんにまあ珍らしい、今年は此れが初めてでござんする。

(警衛) あのほととぎすの聲を聞いたら、妾は野遊びがしたうなつた。今日のやうな麗かな日に、此のまま家へ歸るのは、残り惜しいわいな。

(藏人命婦) いえ、いえ、其れはなりませぬ。今日は母君の御代で、石清水の八幡宮へ詣り取つては、大層様に叱られます。

(警衛) いやぢや、いやぢや、妾はどうでも歸るのはいやぢや。野遊びが思はば船遊びをする程に、早う嵐山へ連れて行きや。

(藏人命婦) はて、さて、姫君には又しても、なぜ其のやうにむづかりなさるのでござります、おお、さうぢやさうぢや、今宵は内の大層様が、姫君の婿えらびに、それはそれは美しい、うら若い公達の方を、お邸へお招き申して、饗宴のおん催しがある筈ではござりませぬか。早うお歸り遊ばして、その御用意をなさらばなりませぬぞえ。

(警衛) 婿えらびなぞどうでもよい。妾は野

と遊ばせて行く。

(老人) 樓上に腕組みをして考へる。はてな。

(青鬼) 若さん、何を考へて居るんだね。

(老人) こんな事を云ふと、又お前さんに怒られるかも知れないが、壬生の大臣の御なら、若しや彼の春子姫の御先祖ではあるまいか。

(青鬼) あはははは。まだお前は春子姫を覚えて居るね。いかにも爺さんの云ふ通り、壬生野の大臣は春子姫の御先祖だよ。今此處をお通りになる姫君と云ふのは、警衛と云つてな、顔立ちと云ひ、氣象と云ひ、年恰好と云ひ、春子姫にそっくり其の儘のお婆様さ。

(老人) 何、何に驚きながら、夢中になつて上手を見込む。ああ、彼處へやつて来る車の中に姫君が乗つていらつしやるのだな。だが残念な事に、御簾が垂れて居て、お妾がまるきり見えない。——何かして、と眼でもいから拜む譯には行かないかな。ほんたうにたつた一と眼、姫のお姿を拜ませてさへ頂ければ私はどんなに仕合せだらう。

(青鬼) そんなにくよくよしないで、お大丈夫だ。あの車が此處を通る時、きつと姫君は御簾の隙から顔をお出しになるだらう。己には

遊びがしたいのぢや。

(藏人命婦) いえ、いえ、さうは参りませぬ。これ方方、早う車をやつて賜。

(雑色) 畏まつてござります。

藏人命婦を車の奥へ抱き込んで御簾を叩す。姫、尙も「いやぢや、いやぢや」と云ひ慕りながら、下手へ控かれて行く。

(青鬼) あはははは。どうだ爺さん、あの無邪氣な様子は、壬生野子爵のお嬢さんに生き寫しだらう。

(老人) うらん。(呻るやうな聲を出して感服する。)

(青鬼) 婿えらびなぞどうでもよいと云ふところにはほんたうに可愛いぢやないか。

(老人) それにしても今宵の饗宴に招かれる公達は、何と云ふ果報者だらう。私もさう云ふ身の上にならば来ればよかつたが、考へて見ると誰がないなあ。

(青鬼) おい、おい、冗談ぢやないぞ。姫のお顔を」と眼拜んだら、死んでもいいと云つた癖に、だんだん望みが殖えて来たな。

(老人) でもなあ、つくづくと自分が情なくなつて来るからなあ。

(青鬼) それぢや爺さん、いつその事からした

其れがちゃんと思つて居る。

(老人) うまくお顔が拜めさへすれば、私は死んでも本望だ。——ああ早く車が此方へ来ないかな。馬鹿に掘き方がのろいぢやないか。

(青鬼) あの車の中にはな、姫君の外にもう一人、藏人命婦と云ふ、お付き添ひの乳人が乗つて居る筈だ。

警衛の乗りたる手車しづと上手より掘かれて来る。車の前後には、中前の隨身の外に御さびの烏帽子を附け、白い袴衣を着た雑色共が七八人護衛して居る。姫の行列の一團が將に羅生門の前を過ぎて、殆んど下手へ入らんとする時、空の彼方からけたたましい杜鵑の啼き聲が落ちて来る。

(藏人命婦の聲、車の中より) もし、姫君様、ほととぎすが啼きますぞえ。

同時に車の後方の御簾がきつと打ち上げられて、中から姫と命婦とが顔を出し出す。姫は全く壬生野春子と同じ人らしく見える。

(警衛) おお、ばあや、彼處を御覽。あれ、あれ、彼處の雲の中に、ほととぎすが飛んで行くぞいな。

らどうだらう。お前なんぞあ、どうせ人間の數にも足りない男だから、思ひ切つて今日限り人間を止めてしまつて、己たちの仲間へ這入らうと云ふ氣はないかね。

(老人) お前さんたちの仲間と云ふと、鬼になるのかね。

(青鬼) うん、まあさうだ。

(老人) ええ、めつさうな。そいつばかりは眞つ平御免だ。

(青鬼) 何もそんなに恐がる事はないだらう。人間ならこそお前は強が悪いのだが、鬼になれば己のやうな神通力が備はつて、好きな眞似が出来るとだぜ。早い話が饗宴の席へ忍び込んで、人間共が知らない間に、警衛を渡つて来たつて、誰も何とも云ふ者はありやしないぜ。

(老人) 成程さう云はれると其れもさうだな。

(青鬼) だからよ、悪い事は云はないから、鬼になつてしまひなさい。第一お前、人間と違つて千年でも二千年でも生きて居られて、自由自在に世の中を渡れるだけでもどんなに得だか分りやしない。——どうだ爺さん、得心が行つたかね。

具足小路……

(童) わつははははは。

(雑色) この御東めら！云はせて置けばいい氣になつて馬鹿にし居る！ええ、斯うしてくれるわ……(いきなり一人の子供の頭を擡る。)

(女) これ、これ、手竟な事をするではないぞ。

(雑色) いえ、いえ。私に任せてお置きなさい。

(子供の一) 畜生！よくも己を擡りやあがつたな。

(子供の一) やつつけちまへ。

雑色と子供等と入り亂れて喧嘩をする。上手から、一人の隨身らしい男、細腰の冠に縷を附け、開眼の袍を着て胡録を負ひ、弓を抱へつつ急ぎ足に出て来る。

(隨身) こら、こら、何をそのやうに騒いで居る。壬生の大臣の御君さまのお通りぢや。退らぬか、退らぬか。

(女) おお、それ、それ、大臣の御君のお通りぢや、早う彼方へ行かうわいな。

袴着を着たる女、雑色の手をひいて下手へ退場。その後から子供等がバラバラ

と遊ばせて行く。

(老人) 樓上に腕組みをして考へる。はてな。

(青鬼) 若さん、何を考へて居るんだね。

(老人) こんな事を云ふと、又お前さんに怒られるかも知れないが、壬生の大臣の御なら、若しや彼の春子姫の御先祖ではあるまいか。

(青鬼) あはははは。まだお前は春子姫を覚えて居るね。いかにも爺さんの云ふ通り、壬生野の大臣は春子姫の御先祖だよ。今此處をお通りになる姫君と云ふのは、警衛と云つてな、顔立ちと云ひ、氣象と云ひ、年恰好と云ひ、春子姫にそっくり其の儘のお婆様さ。

(老人) 何、何に驚きながら、夢中になつて上手を見込む。ああ、彼處へやつて来る車の中に姫君が乗つていらつしやるのだな。だが残念な事に、御簾が垂れて居て、お妾がまるきり見えない。——何かして、と眼でもいから拜む譯には行かないかな。ほんたうにたつた一と眼、姫のお姿を拜ませてさへ頂ければ私はどんなに仕合せだらう。

(青鬼) そんなにくよくよしないで、お大丈夫だ。あの車が此處を通る時、きつと姫君は御簾の隙から顔をお出しになるだらう。己には

其れがちゃんと思つて居る。

(老人) うまくお顔が拜めさへすれば、私は死んでも本望だ。——ああ早く車が此方へ来ないかな。馬鹿に掘き方がのろいぢやないか。

(青鬼) あの車の中にはな、姫君の外にもう一人、藏人命婦と云ふ、お付き添ひの乳人が乗つて居る筈だ。

警衛の乗りたる手車しづと上手より掘かれて来る。車の前後には、中前の隨身の外に御さびの烏帽子を附け、白い袴衣を着た雑色共が七八人護衛して居る。姫の行列の一團が將に羅生門の前を過ぎて、殆んど下手へ入らんとする時、空の彼方からけたたましい杜鵑の啼き聲が落ちて来る。

(藏人命婦の聲、車の中より) もし、姫君様、ほととぎすが啼きますぞえ。

同時に車の後方の御簾がきつと打ち上げられて、中から姫と命婦とが顔を出し出す。姫は全く壬生野春子と同じ人らしく見える。

(警衛) おお、ばあや、彼處を御覽。あれ、あれ、彼處の雲の中に、ほととぎすが飛んで行くぞいな。

(老人) 全くお前さんの云ふ通りだ。しかし何かね、鬼になるには、餘程手数がかかるか知らん。

(青鬼) なあに譯なしだ。お前の決心が着きさへすれば、己が此の場で直ぐに禁厭を施してやる。

(老人) それでは早速お前さんに頼むとしよう。わしは鬼になり次第、此れから直ぐに鶯の郎へ出掛けて見る積りだ。

(青鬼) よし、よし、そんならちよいと此方へ来なさい。

鬼、老人を伴うて樓の背面に隠れる。

(青鬼の聲) さあ爺さん、お前は青鬼になりましたか。赤鬼になりたいか。

(老人の聲) わしは赤鬼になりたい。……舞臺暗くなる。

第三場 壬生大臣の邸内、泉殿の場。舞臺や上手に、池に臨んだ泉殿があつて、下手の廊に續く。池の汀の前栽の櫻花が、盛りを過ぎて折折ちらちらと風に散つて居る。今しも酒宴の最中で、殿上の正面から上手側面の座席へかけて、冷泉親王、梅小路

三位、春日少將、京極大納言、町尻中納言など、五人の客人が居流れる。いづれも二十歳前後の、花やかな若若しい公達揃ひで、紅梅、二藍、蘇芳、濃紫など思ひ思ひの色目の直衣に指貫を穿く。下手側面の臺に、主人役の壬生大臣が控へて居る。四十歳ぐらゐのでつぶり太つた、緒ら顔の鷹揚らしい男振りである。既に全く日が暮れて、庭の面は暗くなつて居る。殿上の四隅に燭臺を据ゑ、主客の前には酒肴を載せた折敷、高杯が置かれて、卯花の汗衫を着た女童が物を運んで居る。一同酒に酔ひしれて、管絃を弄び朗吟を歌ひ、大分御禮の體である。一番上座の冷泉親王は琵琶を弾じ、梅小路三位は横笛を吹き、春日少將と京極大納言とは拍子を打ちつつ詩歌を吟じ、町尻中納言は鼓を鳴らして居る。何處やらで、微かに遠山寺の梵鐘の音が聞える。

(春日少將、少し仰向き反り返つて、眼を流りながら朗吟を歌ふ。) 巫女 廟花紅似粉。町尻中納言 廟花紅似粉。京極大納言) いや、お見事、お見事、今度は

某が吟ずる番ぢや。えつへん！と云つて、同じやうに眼を流つて反り返る。花明上苑、輕軒、九陌之塵、涼叫、空山、斜月、盤千巖之路。

(壬生大臣) やんや、やんや！ 少將殿も大納言殿もなかなか御立派なお聲ぢやな。

(梅小路三位) ちやが大臣には御油斷をなされますな。二人とも此の聲で女子を欺して居るのぢやわい！

(一同) わつはははははは。

(冷泉親王) それはさうと、鶯はいかながなされた。早うお顔を見たいものぢや。

(町尻中納言) そのこと、そのこと、いかにお美しい姫君でも、あまり大事に隠まらうて置かれると、遂には徳が生えましますぞ。

(一同) わつはははははは。

(壬生大臣) ほんに姫は何をして居るのぢや。これ、これ、早う行つて呼んで参れ。

(女童) はははは。女童 下手の廊を走り行く。

(春日少將) 鶯が見えるやうに、ちと鶯の朗吟でも吟じませうかな。

(京極大納言) いかさま、其れが宜しからうて。

(春日少將) 誰家若柳鶯啼而羅幕垂。幾處華堂覺而珠簾未卷。

(京極大納言) どれ、今度は何、一つ鶯の伴馬樂を歌ひ申さう。——梅が枝に来居る鶯や、春かけてハレ、春かけて啼けどもいまだや、雪は降りつつ、あはれそこよしや、雪は降りつつ。

鶯、葡萄色の唐衣に白綾三重襷の裳を着け、拍扇をかざしながら、藏人命婦に手を曳かれて不承無精に廊を歩み來る。

(藏人命婦) もし、姫君、あれをお聞きなされませ。あの通り皆様が、鶯の歌をうたうて、姫のお越しをお待ちなされて居られます。さあ、さあ、そのやうにおむづかりなさらずと、早うお出でなされませいなあ。

(鶯) いやぢや、いやぢや、妾は婿えらびなどをするのはいやぢや。

其の時、一匹の赤鬼が姫の跡を追うて廊を走り出で、泉殿の下手の簀子にあぐらを掻いて酒宴の模様を眺めて居る。人人一向に心付かず。

(藏人命婦) いえ、いえ、なんと仰つしやつても、今宵の宴會に姫君がお越しなさらないで

三位、春日少將、京極大納言、町尻中納言など、五人の客人が居流れる。いづれも二十歳前後の、花やかな若若しい公達揃ひで、紅梅、二藍、蘇芳、濃紫など思ひ思ひの色目の直衣に指貫を穿く。下手側面の臺に、主人役の壬生大臣が控へて居る。四十歳ぐらゐのでつぶり太つた、緒ら顔の鷹揚らしい男振りである。既に全く日が暮れて、庭の面は暗くなつて居る。殿上の四隅に燭臺を据ゑ、主客の前には酒肴を載せた折敷、高杯が置かれて、卯花の汗衫を着た女童が物を運んで居る。一同酒に酔ひしれて、管絃を弄び朗吟を歌ひ、大分御禮の體である。一番上座の冷泉親王は琵琶を弾じ、梅小路三位は横笛を吹き、春日少將と京極大納言とは拍子を打ちつつ詩歌を吟じ、町尻中納言は鼓を鳴らして居る。何處やらで、微かに遠山寺の梵鐘の音が聞える。

は、大層様のお顔が潰れてしまひます。(無理やりに姫を引き擦つて、泉殿の入り口の御簾の前まで連れて行く。) それ、それ、ちよいと此處から中の様子を御覧なされませ。何とまあ、お綺麗な公達ばかりが、お揃ひなされたではござりませぬか。あれ、彼處の上座に琵琶を弾じて居らせられるのが、忝なくも冷泉親王でござりまするぞえ。それから其の右に控へておいでなさるのが梅小路三位、左のお方が春日少將、あの、向うの席にいらつしやるのが京極大納言、そのお隣りが町尻中納言——まあほんに誰方様も揃ひのやうに美しい方方でござんすわいな。なら姫君、あの五方のうちで誰方が一番お好きでござりまする。

(姫君) 妾はあのやうな酔拂ひは大嫌ひぢや。みんな氣味の悪い人たちぢや。

姫が隠見をするのを知らずに、一同ますます顔附して騒ぎ喚いて居る。管絃や催馬樂の調子が、だんだん亂雑に奔放になつて來る。

(春日少將の催馬樂) 我家とはばり帳をも垂れたるを、大君きませ聲にせん、御看に何よけん、……

(壬生大臣、少將に釣り込まれて、一緒になつて歌ふ。) 鮎榮螺子をかせせけん。

(一同) わつはははははは。

(藏人命婦、袖を口にあてて、) おほほほほ。

(鶯) あれ、あの様を見やいなう。父上までが御一緒に浸ましう酔ひしれて居るぞいな。

(梅小路三位) さあ、さあ、もつと歌はうでござらぬか。今度は何がやる番ぢや。——西寺の老鼠若ねずみ、御袋揃んづ、袈裟揃んづ、法師に申さん師に申せ。

(鶯) おほほほほ、あの方は、どうやら氣遣ひのやうぢやわいの。

(町尻中納言、ぐたぐたに酔ひ崩れて直衣の襟を外し、前後左右へ體を揺す振りながら、) よし、よし、では某も歌ふといたさう。——

「酒をたらうて、たべ酔うて、たんどころんぞまうで來る。よろぼひぞまうで來る。」

藏人命婦が我を忘れて隠見をして居る間に、姫は欠伸を二つ三つして、飽き飽きしたやうに下手の廊へ逃げて來る。例の赤鬼が得たりと姫の傍らへ馳せ寄つて、輕く彼女の袂を捕へる。

(赤鬼) 姫君様、姫君様。

……

(鶯) 妾を呼ぶのは誰ぢや。
(赤鬼) へい、へい、私はな、都の羅生門に
長年棲んで居ります、赤鬼でござりますが、
ちとお姫様へ申し上げたい事があつて、此れ
へ妾を現はしました。

(鶯) なに？ 羅生門の赤鬼ぢやと。
(赤鬼) へい、へい、さやうでござります。
(鶯) さうして其方は、妾に何の用事があ
るのぢや。
(赤鬼) 私はな、姫君様を、よい所へお連れ
申して上げようと思つて、推参いたしました
のでござります。—— 姫君様に、野遊びが
したいと仰つしやりましたな。

(鶯) おおさうぢや。妾は野遊びがした
いわいの。
(赤鬼) 船遊びもお好きでござりませうな。
(鶯) おお、船遊びも大好きぢや。
(赤鬼) あの酔ひどれの客人たちは、皆お姫ひ
でござりませうな。

(鶯) ほんに氣味の悪い人たちがぢや。妾
はあのやうな男子たちが強い嫌ひぢや。
(赤鬼) よう仰せられました。何と云ふお情巧
な姫君様でござりませう。—— もし、もし、
それではな、私と御一緒によい所へお越し

(壬生大臣) 姫よ、姫は何處ぢや。父の
解が聞えたら答へてくれい。
(藏人命婦) もし、晴明さま、姫は何處へお
いでなされたか、占うて下さりませい。
(阿部晴明) されば某按ずるに、はや姫君は
此の邊にはおはしませぬ。鬼に渡はれて、東
の空を高く高く翔つて、今しもちやうど東
寺の塔の頂邊に、引き据ゑられて居られます
る。

(冷泉親王) 東寺の塔の頂邊ぢやと？
(阿部晴明) さやうでござります。
皆皆童子に立ち出でて、もどかしさうに東
の空を打ち仰ぐ。
(梅小路三位) 東寺の塔の頂邊では、太刀も違
かず矢も及ばぬ、はてさてお傷はしい事ぢ
やなう。

(藏人命婦) なう晴明さま、其方は日本一の
陰陽師ではおはしませぬか。どうぞ其方の御
修法の力で、姫君様をお救ひなされて下さり
ませ。
(阿部晴明) 其の仰せを待つ迄もござりませ
ぬ。鶯の御命は、しかと某がお引き受
け申すでござらう。

(壬生大臣) おお、忝ない、忝ない。姫の命

なされませ。私に附いておいでになれば、
野遊びでも船遊びでも、お好み次第でござり
ます。
(鶯) そなた、ほんとに好い所へ件うて
賜るかえ。
(赤鬼) ええええ、なんで私が偽りを申しま
せう。嵐山でも嵯峨野でも、姫君様のお好き
な所へ、きつとお供を致します。
(鶯) 雀躍りして喜ぶ。それが本當なら
嬉しい、嬉しい。これ赤鬼、早う妾を連れ
行きや。

(赤鬼) よろしうござります。さあ、さあ、お
いでなされませ。
赤鬼、不意に姫の襟を捕へ、荒荒しく小陰
に抱へて、廊から庭に飛び降り、下手奥の
間に消行く。鶯の「あれエ！ 時けて
エ！」と叫ぶ聲が、ほのかに二三度聞えて
来るが、誰も氣が付きたる様子なし。女童
あわたしげに酒宴の席へ駆け付けて、左
大臣に注進する。
(女童) 申し上げます。唯今阿部晴明さまが、
急な御用で御越しなされてござります。
(壬生大臣) 晴明が参つたと。はて何事であ
らう。

を救うてくれたら、丹波の國の身が莊園を、
獲らず其方に取らすぞよ。
(阿部晴明) 有り難う存じます。—— 某した
だ今此の場に於いて呪文を唱へ、天上の雷神
を呼び出して、塔上の鬼を退治させるでござ
りませう。
(藏人命婦) 空に向つて合掌しながら、 姫君
さま、姫君さま、どうぞ御無事でお歸りなさ
れませ。
(阿部晴明) 庭前の池の汀に降り立ち、瞑目して
印を結び、口の中で嚴かに呪文を唱へる。唸、
唸、唸、摩訶鉢囉、復那時、唸、唸、
忽ち一陣の風が吹き起つて、殿上の燈火
を消す、見る見るうちに四面暗澹となり、
雨滴の音がばらばらと響く。
(雷士の二) やや、今迄空が晴れて居たのに、
大粒の雨が落ちて来た！
(雷士の二) 雨だ！ 雨だ！ 大雨だ！
(阿部晴明) 尚も呪文を續けて居る。微かな
摩訶鉢囉、唸、唸、唸、洋、洋、洋、
阿。

大雨沛然として到る。暗夜を劈く電光。
雷鳴。——

女童の後から、阿部晴明が同じく倉皇とし
て駆け付ける。
(阿部晴明) 何事とは任潤千萬。某唯今御門
前を過ぎたところ、一匹の赤鬼が、此のお
邸へたしかに忍び入つたるけはひ。捨てて置
いては一大事でござりますぞ！
(壬生大臣) ええ、赤鬼が！
大臣を始め主客一同眞青になる。此の時
再び、遠く遠く鶯の悲鳴が聞える。
(藏人命婦) 始めてハツと心付き、おお大變
ぢや。姫君のお姿が見えませぬ。姫君様、姫
君さまいなう！ (狂氣の如く童子の周圍を
馳せ廻る。)

(阿部晴明) うむ、さては鬼めが、姫を渡つて
行つたと見ゆる。
(壬生大臣) 勾欄の角に立ち上つて、大音に呼
ばはる。 姫よ、姫よ、鶯は何處へ参つ
た。—— こりや、雷士の者どもは居らぬか。
早う松明を燈して参れ。
下手より五六人の雷士の面影、手に手に松
明を打ち振りつつ現はれ、庭の隅隅を照ら
す。照らして見る。
(藏人命婦) 姫君様、姫君様、姫君様さまい
なう！

第四場 東寺の塔の頂邊。無常一面に暗
黒。稲妻のはためく影に、塔の頂上の雲
のあたりが緩かに見える。赤鬼が屋根瓦
に腹這ひながら、鶯の袴の裾をしつか
りと掴んでぐいぐい引張つて居る。姫は一
生懸命に九輪へしがみ着いて、頻りに悲鳴
を放つ。
(赤鬼) さあ、己の云ふ事を聴かないか。聴かな
ければ此處から下へ突き落してしまふぞ！
此の塔の高さは、十八丈八尺二寸あるのだ。此
處から落ちれば粉微塵になつてしまふぞ！
(鶯) あれエ！ 助けてくれエ！
(赤鬼) ええ、何と云ふ剛情なおまつちよだ！
さあ己の云ふ事を聴きさへすれば、お前の好
きな野遊びでも船遊びでもさせてやるのだ。
(鶯) いやぢや、いやぢや。其方は妾を欺
したのぢや。どうぞ妾を父上の許へ歸して
賜れ。いやぢやわいなう。
(赤鬼) よし、よし、此れ程云つても聴かぬけ
れば、いつその事頭から腰をつけて、嘔つて
しまふぞ！
(鶯) あれエ！ 助けてエ！
赤鬼、屋上に立ち上つて鶯を喰ひ殺さ
うとする。更に激しき雷鳴と電光が起る。

雷鳴。——

雷鳴。——

雷鳴。——

雷鳴。——

雷鳴。——

上手の空から太鼓を背負った雷神が黒雲に乗って屋根へ降りて来る。

(雷神) やい赤鬼！ こいつ不埒な奴だ！
雷神二人の間に分けて入つて鬼を突きつけ、驚娘を背後に庇ふ。

(赤鬼) なんだ貴様は？ 人の仕事の邪魔をしやがつて、一體何處からやつて来たんだ。

(雷神) 己は天に居る雷神だが、日本一の陰陽師の阿部明に頼まれて、驚娘を救ひに来たのだ。己が此の場へ這入つたからは、もう驚娘に指一本でも指させはしないぞ。

(赤鬼) 雷神でも風神でも、己の仕事の邪魔をする奴は斯うしてくれ！

(雷神) この赤鬼め！ 生意氣云ふな！
赤鬼、雷神を相手に猛烈な格闘を演じた揚句、とうとう負かされて右の腕を捻じ上げられる。

(雷神) さあ、どうだ、参つたらう。

(赤鬼) あいたたたた。あやまつた、あやまつた。

(雷神) いくら説いても、貴様のやうな奴を生かして置く譯には行かないのだ。此處から下へ突き落とすから観念しろ。

(赤鬼) きやッ。

と叫んで、塔上から眞つ倒まに落される。

第五場 舞臺がバツと明るくなると、第一場と同じ女学校のモランダに、大伴老人が以前の如く椅子に腰かけて眠つて居る。何か悪夢に驚かれて居るらしく、うんうん呻りながら手足を掻掻く。

上手から壬生野春子が駈けて来て、老人の寝姿を見守る。

(壬生野春子) 先生、先生、(肩を押して揺り起す。) まだ寝つていらつしやるんですか。もう三時でございますよ。

(老人) うーん、うーん、

(壬生野春子) 先生、どうしてそんなに呻つていらつしやいますの。先生、先生つてば！
老人、あまり體を掻掻き過ぎて、バツタリと椅子から轉げ落ち、眼を開くや否や、

(老人) おお、驚娘！ (と云つて、突然春子にかじり着き、ふと気が付いて極まり恐さうに。) うん、あなたは壬生野さんだつたか。
壬生野春子、さもさも氣味が悪さうに黙つて老人の顔を見詰める。

(老人) 壬生野さん、勘忍して下さいよ。わたしは夢を見てな、寢惚けて居たものだから、あ

なたに飛んだ失禮をしましたわい。

(壬生野春子) 先生、私何だか先生が恐くなりましたわ。

(老人) なあに恐い事もありません。今は寢惚けて居たんですよ。ははははは。

(壬生野春子) ねえ、先生、その驚を私に返して下さいませ。私考へて見たら、やつぱり驚の外へ放してやつた方がいと思ひますわ。

(老人) おお、成る程、此の驚が傍に居たので、私はあんな夢を見たのだ。さあ、さあ、あなたに返して上げませう。

少女、老人より驚を受け取り、蓋を開いて驚を放してやる。

驚、喜ばしげに囁りながら、團圓として空高く舞ひ上る。老人と少女とが其の姿を見送つて居る。

信 西

警場者 少納言入道信西

師 清光
師 清景
成 清景
清 清景
出雲前司光泰
光泰の郎黨数人

時 平治元年十二月、信賴義朝の謀叛ありたる夜。

所 山城近江の國境、信樂山の奥

荒廢した山奥の深夜。枯燥せる雜草、灌木、落葉、石ころなどが、處處はず亂雑に群り背後は一帶の竹叢に掩はる。舞臺の中央に太き老杉の幹一本高く聳え、こんもりした枝を傘の如く擡げる。能ふ限り舞臺面

の上下を高くして、曇りたる冬の夜の空を充分に見せ、幽鬱な時澹たる薄光を以て四邊をつつむ。

信西、年の頃七十餘歳、笠を戴き、黒き法衣を纏うて杉の根がたに腰をかけ、兩手に膝頭を抱いてうつむいて居る。其の向つて右に師光、清景、左に師清、成景、物の具に身を固めて蹲踞る。此の主従五人は、始終何物かを仰るやうな低い調子で、囁くが如くに語る。

(信西) (ちつと地面を視詰めた儘、皺皺れた聲。) 師光、師清、成景、清景、皆其處に居るか。

(郎黨四人) はい、此處に控へて居ります。

(信西) わしは先刻から眼をつぶつて居る。もう世の中の物を見る氣力も失せて了うた、どうぢや、空は曇つて居るか。星が一つも見えずになつて居るか。

(師光) (他の三人の郎黨と共に空を仰ぎながら、) 限なく曇つて居ります。

(信西) 星が一つも見えぬと申すのぢやな。

(師光) 左様でございます。

(師清) 我が君、何故そのやうに空の星を氣になされます。

(信西) あの思まはしい星が見える間は、わたしは眼を開く勇氣がないわ。(と云ひつつ笠を脱ぎ、眼をしばだたきながら、恐る恐る上下左右を見廻す。) もう大分夜が更けたやうぢやな。曇つて居ても、空には月があると見えて雲が鉛のやうに光つて居る。

(成景) 月の光が雲を射徹して、私の顔を冷かに照らして居ります。そこいら中の草木の色が、謎の世界のものやうに見えて居ります。

(清景) これが秋の夜であつたら、溪川の水が映つて、悲鬱ふる鹿の聲も聞えるでござりませうに、冬枯れ時の眞夜中では、山も草木も死んだやうでござります。

(信西) (身を震かせ恐ろしげに。) みんな暫く黙つて見てくれ。さうして、靜に耳を澄してあの物音を聴いてみてくれ。お前達にはあの物音が聞えないか。あの何處やらで、がさがさと云ふ物の音が……

(師光) あれは大方、夜風がうしろの竹叢にあ

欠

たる言でござりませう。

(信西) わしには、何となく人の足音のやうに聞えるが……

(師清) こんな夜更に、この山奥へ参る者はござりませぬ。

(信西) いや、さうも云はれないのぢや。いつ何時わしの命を奪りに来る者があるかも知れないのぢや。この信西の首が欲しさに、どのやうな山の奥、野の木までも草木を分けて尋ね歩く人達が多勢居るのぢや。今頃京都では「信西は何處へ逃げた、早く捜し出してあの男の首を斬れ。」と源氏の侍共が騒いで居るであらう。

(成景) それは合點の参らぬこととござります。學問と申し、器量と申し、今の朝廷に肩を列べる者もない、御威勢のある我が君を、殊に主上の御覺えの優れてめでたい、我が君の御命を源氏の侍が附け狙ふとはどう云ふ譯でござります。

(信西) お前達には、其の仔細が解らぬであらうな。

(成景) 一向合點が参りませぬ。

(清實) 私共は、唯君の仰せのままに、此處までお供致して参つたのでござります、丁度今

日の午頃のこと、わが君には青楓めた顔なすつて、櫛に居ては命が危い故、一顧も早くわしを何處かの山奥へ作れて行つて、隠してくれい。」と仰しやりました。それで、私共は取る物も取り敢へず、深い仔細も承らずに君をお伴れ申して、一と先づ田原の奥の大道寺の所領まで逃げのびたのでござりました。すると君には、「いやまだ此處では安心が出来ない。もつと人里を離れた、もつと寂しい處へ行かねばならぬ。」と仰つしやつて、とうとうこんな山奥へ参つたのでござります。

(師清) あの時君の様子と申したら、失禮ながらまるで御心が狂つたやうで、正氣のある人の沙汰とは見えぬ程でござりました。

(師光) 保元このかた世には泰平が打ち續いて、源平の武士は内裏を守護し奉り、朝廷の御威光の至らぬ限もなく、わが君の御身の上は磐石のやうに確だと思はれますのに、どのやうな仔細があつて、今宵のやうな見苦しい事をなされます。

(信西) お前達のやうな無學な人は仕合はせぢや。わしは昨日迄自分の學問や才智を誇つて居つたが、今となつて見れば、堪つて愚な人が羨ましいわ。わしは若い時分に唐土の孔

子の道を學んだ。さうして僅一年程の間に其の奥儀を究つて了つた。それからわしは老子の道を學んだ。さうしてまた一年も経つと其の奥儀を究めることが出来た。其の次には佛の道を學んだ。さうして此れも一年ばかりの間に、殘らず學び盡して了つた。最後にわしは此の宇宙の間にある凡べての事物を、悉く知らうとした。天文でも、醫術でも、陰陽五行の道でも、わしの學ばない處はなかつた。星の運行に依つて、世間の有爲轉變を占ふことも、人間の相を觀て、其の人の吉凶禍福を判する事も、出来るやうになつたのぢや。わしの眼には遠い未來の事までも明に見える。世の中や人の身の上の大事件が起る前には、必ず其の兆が現れるのぢやが、わしの眼には其れがはつきりと見えるやうになつたのぢや。しまひには自分の悲しい運命迄が、自分に能く見えるやうになつて来た。其れがわしの不仕合はせであつたのぢや。

(師清) それでは近頃、何か其のやうな恐ろしい前兆でも現れたのでござりまするか。

(信西) うむ、わしが其れに氣が附いたのは、今日の午頃であつた。院の御所に、何ふ途中

でふと空を仰ぐと、天の中央に懸つた日輪が、

欠

冴えて星五つ六つきらきらと輝き、月光普く地上を照らす。但し、月は舞臺面に現ざること。おお、いつの間にか空が晴れて参りました。さあ我が君、恐れることはござりませぬ。あの空の星を、あの星は美しい空の星を、額を上げて胸を張つて、つくづくと御覽なされい。

(信西) 静に、おづおづと頭を上げて、空を仰ぐ。あの星が其れぢや。あれ、彼處に、鏡い月の光にもまげずに瞬いて居るあの星が、わしの運命を誼ふのぢや。(風吹き来りて竹藪をざわざわと鳴らす)あれはやつぱり風の音か、此の次に竹藪が鳴る時は、源氏の討手が現れるであらう。

(成景) 私共は先刻からのお言葉を、まだ疑うて居りますが、若しも源氏の討手が参らうなら、腕の限り斬つて斬りまくり、我が君に指でもさせぬ覺悟でござります。

(信西) ふむ、まだお前達は、わしの言葉が信じられぬと云ふのぢやな。

(清實) 誰も、誰も、君の判断の中らぬことを願うて居ります。

力の限り刃向つても、名にし負ふ源氏の荒武者が十騎も二十騎も押し寄せたら手もない事ぢや。あの星を見るがよい。あの星を。あれが何よりの證據なのぢや。あの星が消えるか、わしの命が消えるか、二つに一つぢや。

(師清) それでは兎も角も、お心の休まるやうに、今少し山の奥か、それとも亦、南都の方へ落ちのびませうか。

(信西) 頭の上にあの星が覗んで居る間は、何處へ行つても同じ事ぢや。わしにはあの星を空から射落す力はない。あの星を頭の上から引きずり下す力がないのぢや。どうかしてあの星の見えない處へ行きたいものぢや。

(ふと、何かを見つけたやうに、下手の方を見やりて頷く)うむ彼處に材木と鉄とが置いてある。大方樵夫が連れて行つたのであらう。お前達、あれを此處へ持つて来てくれ。

郎黨等、下手から新しく捲きたる四分板四五枚と鉄とを運び来る。

(師光) わが君、これを如何なされるのでござります。

れるであらう。あの星の光が消えるまで、わしはさうして生きながらへ、運命の力に克つて見せるのぢや。時のたたないうちに、早く其處を掘つてくれい。

郎黨等、杉の木藪を穿ち、穴の中を板にてかこひ、後の竹藪から竹の幹を切つて来る。

(師光) 仰せの通りにしつらへました。

(信西) いろいろと大儀であつたなう。お前達の心づくしは、死ぬるまで過分に思うて忘れぬであらう。それでは、わしは此の穴に身を埋めて、世の中の静まるのを待つとしよう。

再び日の目が見られたらば、お前達にも厚く禮をするつもりぢや。お前達も人目にかからぬうち、早く此處を立ち退いて、何處の山里へなりと身を落ち着いたがよい。もしまたわしの體に萬一の事があつたなら、京都に残して置いた妻子共の面影を見てやつてくれるやうに、くれぐれも頼んで置いぞ。

(師清) 仰せまでもないこととござります。我が君にもどのやうな事があらうとも、命の綱をしつかと掴むで放さぬやうになされませう。

ことながら、萬一、これが長いお別れとならぬとも限りませぬ。何卒其の時は世の物笑とならぬやう、天晴れの御最期をお願ひ申して置きます。また其の時に私共が亡き後の君の御同向を葬ふことが出来ませうやうに、唯今此の場で骨を切りたう存じます。師清も、成景も、清實も、別に異存はなからうな。

(師清、成景、清實) 決して異存はない。四人一度に骨を切る。

(師光) かうなつた上は、われわれ四人に、何卒法名をお授け下さいまし。

(信西) うむ、よろこそ申してくれ。——師光……

(師光) はい。

(信西) 信西の一字を取つて、お前の法名は西光と稱へるがよい。

(師光) 忝なる存じます。

(信西) 師清、お前の法名は西清。

(師清) はい。

(信西) 成景は西景、清實は西實と稱へるがよい。

(師清、成景、清實) 忝なる存じます。

(師光) いつまで居てもお名残は盡きませぬ、それではこれで一同お暇を願ひます。

現れる。出雲前司光泰が、御黨を率ゐて出て来たのである。兵士等、盜賊の如く足音をしのばせ、互に耳うちをして、ひそひそと囁き合ふ。

(光泰) 人聲の聞えたのは、たしかに此の邊であつたらしいが……

(師黨の一) はい、此邊でござりました。まだ聞えて居るやうでござります。

(師黨の二) あの聲は、何を喋つて居るのだから、何も居りませぬ。

(師黨の三) あれは念佛を唱へて居るらしい。

(光泰) あの聲の中ではないか。

(師黨の四) 藪の中はすつかり捜して見ましたが、何も居りませぬ。

(師黨の五) 可笑しいな。

(師黨の六) 可笑しいな。

(師黨の一) まるで地の底から聞えるやうだな。

(師黨の二) さうだ、これは不思議だ。己達の下で聲がするのだ。

兵士等、頭を耳をかしげ、地面を眺めつつ杉の木蔭に集る。念佛の音ハツタリ止む。光泰、竹筒の先を指し示し、目くばせにて頼れと命ず、兵士等心得て、忽ち穴を發く。信

(信西) うむ、(と云ひつつ、つかつかと穴の端に進み、そこにのみて無言の儘暫く空の星を凝視し、力なげにうなだれる……) 星はまだ光つて居る。わしは此の穴の中で、息氣のつづく限り念佛を稱へて居よう……

信西穴の中に入る。師黨等、竹の幹の一端を土中に入れ、一端を地上に露出せしめ、穴の上を板にて蔽ひ塞ぎ、更に其の上へ土を盛る。

(師光) それではお暇を申します。

師黨四人、穴の中に向ひて叩頭す。

(信西の聲) (穴の中より) 師光、師光。

(師光) はい。(這ひ寄りて、竹の端に耳をつける。)

(信西の聲) 星はまだ光つて居るか。

(師光) はい、未だに光は衰へませぬ。

四人、立ち上りて下手へ歩み行く。

(清實) いまだに計手は来ないやうだ。己はどらも君の仰しやつた事が、ほんたうとは思はれない。

(成景) 己も半信半疑で居る。

(師清) もしも仰しやつた事が當らないとすれば、こんな騒ぎをしたのは馬鹿馬鹿しい。師光、お前は何でまた骨を切るの、長のお別れに打ち振る。

(光泰) 己は信西法師の顔を知らぬが、誰か知つた者はないか。

(師黨の一) 誰も存じませぬ。

(光泰) しかし、此の坊主が信西に相違あるまい。

(師黨の二) まだ息氣があるやうでござります。訊ねたら返辭をするかも知れぬ。

(光泰) (信西の顔を凝視して) こら、お前は信西法師であらうな。右衛門督殿の命をうけて、出雲前司光泰がお前を召し捕りに来たのだぞ。お前は世間の評判にも似合はぬたわけた臆病者だな、命が惜しさに、穴の中に埋まつて居るとは、何と云ふ卑怯な奴だ。

(信西) (光泰の言葉を解せざるもの如く、眼瞼をためかかせて體語のやうに、星はまだ光つて居るか。……)

光泰心付きてふと天を見る。夜ほのぼのとあけかかりて、白み初めたる空に明星明滅す。遠き山里に鶯鳴を聞き、冬の拂曉の覺束なき薄明のうちに暮を垂れる。

れだのと、不吉なことを云ひ出したのだ。(師光) 己の親た處では、君のお命はもうなにもにきまつて居るのだ。たとへ世の中が亂れやうが亂れまいが、人間があんなことを考へたり、喋つたりすると云ふのは、もう直き死ぬる前兆にきまつて居るものだ。

(成景) いやな事を云ふではないか。

(師光) いやな事でも、其れは本當の事だ。

(清實) さうして見ると事に依つたら、本當に世の中が亂れ出したのかも知れない。今まで君の仰しやつたことで、當らなかつたことはなかつたからなう。

(師清) さうだとすると、こんな處にぐづぐづしては居られない。早く何處かへ落ちのびよう。

(成景) しかし己はどうしてもまだ半信半疑だ。

四人下手へ退場。山中に集積なく、月光霜の如く地上を照らして寂寥として居る。唯信西の穴の中にて囁ふる不歸の念佛の聲、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と微に聞ゆ。暫くして、上手、下手、後の竹藪などの處處より、甲冑に身を固めたる兵士五六人、手に手に炬火を持ちて、一人又は二人づつ

現れる。出雲前司光泰が、御黨を率ゐて出て来たのである。兵士等、盜賊の如く足音をしのばせ、互に耳うちをして、ひそひそと囁き合ふ。

(光泰) 人聲の聞えたのは、たしかに此の邊であつたらしいが……

(師黨の一) はい、此邊でござりました。まだ聞えて居るやうでござります。

(師黨の二) あの聲は、何を喋つて居るのだから、何も居りませぬ。

(師黨の三) あれは念佛を唱へて居るらしい。

(光泰) あの聲の中ではないか。

(師黨の四) 藪の中はすつかり捜して見ましたが、何も居りませぬ。

(師黨の五) 可笑しいな。

(師黨の六) 可笑しいな。

(師黨の一) まるで地の底から聞えるやうだな。

(師黨の二) さうだ、これは不思議だ。己達の下で聲がするのだ。

兵士等、頭を耳をかしげ、地面を眺めつつ杉の木蔭に集る。念佛の音ハツタリ止む。光泰、竹筒の先を指し示し、目くばせにて頼れと命ず、兵士等心得て、忽ち穴を發く。信

兄弟

姫は長い春の日に遊び飽きると、細殿の局へやつて来て、乳人の話に耳を傾けるのが常であつた。...

かう云つて、乳人はまた遠い東の國國の風俗を話して聞かせる折もあつた。...

と、さうして今から三十年ばかり前に、將門と云ふ男が、その近衛を打ち從へて朝廷へ謀叛した。...

「それほど都から隔たつた土地に、そなたの夫はよくまあ住んで居られたねえ。」

「誰しも嫌でございませうが、公けのお役目ならば致し方がございませぬ。...

で吟じながら、権紙へすらすらと書き下して見せたりする。...

「祖父さまはほんたうにえらいお方でいらせられました。天徳四年の五月四日におなくなり遊ばしましたが、御存生でいらしたら、今頃はきつと太政大臣におなりなされたでございませう。...

「乳人は頼りに、夕占問ひをして見ると云つて姫にすすめた。それは日の夕暮れに街の四つ辻へ出て、行人の言葉によつて身の吉凶を判断する、至極簡単な方法であるが、不思議にもあたるものだ云つた。...

「大丈夫でございませうとも。」と云つて、乳人は大きく頷きながら、頼もしさうな返辭をする。...

「悪業などと、めつさうな事を仰つしやいます。二度と再びそのやうな言葉を仰つしやつてはなりません。」と、聲をひそめて、たしなめるやうな口調で云つた。...

「ねえお姫さま、私はね、あなたが行く行く貴いお方におなり遊ばすやうに、始終神佛を、お祈り申して居るのでございませう。物は試しに、伯父と父とはなぜ斯うだらうと、姫は折折恨めしかつた。...

その上に、蛇だの蛇だのが、勢よく群がって居る。何處かの家で八調が始まって居るらしく、法華經を誦する聲が、たそがれの町に響かに悲しく響いて居る。やがて大路の北の方から、水干を着た一人の男が、笛を吹きながら悠々と歩いて来たが、姫の姿が眼に留まると、訝しうに立ち止まって、

「もし、もし、其方は路にでも迷つたのかね。でなくば、早う内へお歸り。日の暮れがたに子供が表をうろついて居ると、人さらひに攫はれますぞ。」

と、姫の髪を撫でながら、いたはるやうに云ふのであつた。

その男の過ぎた後から、又二人の男女が、足ばやに四つ角を横きつて行つた。けれども誰も、姫の様子をちよいと振り向いて見るばかりで、別段聲をかけようとしないのである。姫はがっかりして、もと来た道へ戻らうとする、折柄すたすと尻切れの草履の足音が、鳥の羽ばたきのやうに鳴つて、

「お姫さま、あなたは夕占問ひをなさいますか。」

かう云つて、後ろから呼びかけた者がある。見れば年の頃六十餘りの、銀のやうな白髪を

生やした、眞白な髪束を纏うた姫である。落ち窪んだ眼には一杯に眼脂が溜つて、皺だらけの頬は傷痛しくこけて、口をきく度に頬をわなわなと顫はせて居る。あの路端の死骸と云ひ、此の老人の風情と云ひ、悉達太子が伽藍羅城の門前で出遭つた、淨居天の化身ではあるまいかと、姫は乳人に聞かされた因果經の佛傳を、思ひ起さずには居られなかつた。

「あなたの望んでいらつしやることは、必ず成就いたしますよ。あなたは今に、貴いお方のお后におなりなさいませう。あなたのお子さまは、一天下の主におなりなさいませう。お姫様の行くすまは、この大宮の大路のやうに、廣く長くお榮えなさるでございませう。」

姫は杖をあげて大路を指した。さうして、愛らしい姫のみめかたちを上げしげと打ち守つた後、再びすたすと歩む影が、程なく青い夕霧の中に消えて行つた。

東三條の兼家卿の姫君が、冷泉院の上皇の女御になつたのは、それから間もない事であつた。

時の御門は十一歳の御童で、殿上人の奉つ

「あれ、物性が、……」

女御が斯う叫んで、几帳の蔭に身を隠される。女房たちは大波の湧き騒ぐやうに、桂の袖を掻き合はせて、床にひれ伏したまま、尊嚴陀羅尼を一生懸命に誦し続けた。

「誰だ、其處をしめた者は誰だ。」

中納言は鋭く叱咤した。さうして、いきなり傍の太刀に手をかけて、格子の隙から洩れて来る月光に、きらきらと白刃を打ち振りながら、一月を見るのに折角格子を上げたものを、何物が締めたのだ。もとのやうに上げる、上げる。上げなければ容赦はせぬぞ。」

と、きつと表を覗みつづ繰り返して云つた。その勢に怯んだものか、格子は再び自ら開いて、物性は遙かな虚空へ逃げて行つた。

「父は何と云ふ勇ましい、豪傑な人であらう。」

――さう思はれると、女御は此の上もなく頼みかひのある心地がせられて、いつぞやの頼の豫言や乳人の話も、偶然ではないやうに感ぜられた。

實際、兼家卿の官位は、その頃から際立つてぐんぐんと昇り始めた。兄の兼通卿がやつと中納言に任ぜられて、彼に追ひ着く隙もなく、弟は忽ち右大将になり、權大納言になり、

た村濃の紐の着いた獨樂を、清涼殿の板敷にくるくると廻しながら、興じて居られるお年頃である。それに兼家卿の權勢も、まだ其處までは及ばないので、姫は上皇の御殿へ上るやうになつた。

院はやうやう二十のお歳で、つい四五箇月前に、讓位せられたばかりであるが、御門の位におはします間は、絶えず元方卿の惡黨に、惱まされてのみおいでになつた。その祟りが恐ろしさに、僅か三年で位をお降りになつたのである。

「近頃の御様子はどうでございますか。御機嫌よろしいですか。」

女御が二條堀河の御殿から、東三條の邸へ遊びに来られる度に、父の中納言はかう云つて、心配さうに聞くのであつた。

「をりをり物性のお現きになる時は、はたで見るとさへ、凄じう覺えますが、さもない時はお顔の色も美しうて、ほんにあでやかな、有り難いお方のやうに拜まれます。さうして此の頃は、ただもう春宮の御生長遊ばすのを、楽しみにしておいでなさりますか。」

春宮と云ふのは、ことし二歳の備前親王で、冷泉院が御在位の時分、一條攝政の姫君との間

から、惡黨の味方が更に二つ殖えたやうに、一層喧ましく取り沙汰されて、ますます公卿や女房たちの恐怖の的となつた。元方が惡黨に化したのは、云ふまでもなく、自分の孫の廣平の親王が、一の宮でありながら御門の位に即かれなかつたのを、含んで居るのであるらしい。從つて卿の怨念は、當時の競争者であつた九條の右大臣の一門は無敵のこと、その一門に好意を寄せる凡ての方面に、讐を報いねばならなかつた。二の宮の冷泉院の御懐かを始め、天徳四年から七八年の間に、九條の右大臣が五十二歳でなくなつたのも、その御女の中宮が天折されたのも村上の御門が崩御になつたのも、皆惡黨の所行であると人は信じた。

兼家卿の邸にも、怪しい事件はたびたび起つた。或る年の十五夜に、冷泉院の女御と中納言とが、南殿の庇の間に向ひ合つて、女房たちに圍まれながら、夜の更けるまで物語つて居た事があつた。月の光を貰つるやうに、わざと格子を明け放つて、大賑油を消して居たので、部屋の中には、隈なき影が鮮やかにさし込んで居た。すると、晴れ渡つた空の方から、目に見えぬものが、ばたばたと欄干のあたりに舞ひ降りて、格子を下ろしてしまつたのである。

「お生れたさつたお方であつた。」

「さればこそ、早う女御にも、あのやうな親王をお生みなされたがようござります。院のお爲めにも女御のお爲めにも、又かく申す父の爲めにも、それが何よりの仕合せでござる。」

中納言は、幼い折から病み知ひをした事もなく、伸び伸びと育つて来た女御の健康を、頼みにせずには居られなかつた。綾文の葡萄の唐衣の上に、房房と垂れて居る丈なす黒髪や、櫻色に、生き生きとかがやいて居る豊かな頬を打ち眺めては、彼女のすぐれた體質が、一門の榮華の元を授けてくれるやうに祈つて居た。時時、院のおん物性の激しい折などに、女御が里方へ逃げて来られると、物に動ぜぬ中納言は「あははは」と高笑ひをして、

「そのやうに氣がお弱くは、えらいお人にはなれませぬぞ。」

と、力強く囁きましたりした。

元方民部卿の惡黨は、今から二十年も昔、天曆七年の三月、解が憤死を遂げた頃から、朝廷の人人にいろの祟りをすると言ふ噂が、いつも世間に絶えなかつた。而も其の噂は、村上天皇の女御であつた卿の御娘と、その御腹の廣平の親王とが、最近に引き續いて薨去されて

天祿三年の閏二月には、大納言に轉じて右大將をも兼ねて居た。「この勢ではもう直きに大臣になれるだらう」と、殿上人は目を見張つて嘆き合つたが、同じ年の十一月に、太政大臣伊弉册が薨去されたので、機曾は遂に到来したやうであつた。

「今度こそは少くとも、右大臣になれるに違ひない。」
かう信じたのは大將自身ばかりでなく、誰も彼も機曾の榮進を期待して居た。しかし朝廷からは、いつ迄立つても何の御沙汰も下らなかつた。下らないどころか、それ迄官位の低かつた兄の兼通卿が、月末の二十七日に、意外にも一足飛びに内大臣に任ぜられ、やがて關白にさへなつたのである。

と太郎の道隆が、女御と父とを見比べながら、慰めるやうな調子で云つた。
「何れも騒ぐには及ばまい。向うにそれだけの手段があるなら、此方にも覺悟がある。」
右大將はただ斯う云つたきりであつた。さうして明るく日から病と稱して、當分内裏へ顔も出さなかつた。

堀河の大内大臣兼通卿が、關白の宣旨を蒙る迄には、随分長い間の隠忍と苦勞とがあつた。機曾は弟よりも官位が低ければかりに、いかにも無能の兄のやうに目されるのが、心外でならなかつた。成る程機曾には弟のやうな潤滑な氣象もなく、縱横の才氣もない。けれども機曾は自分の材幹が、弟よりも劣つて居ようとは、どうしても信ぜられなかつた。自分の出世が遅いのは、兼家のやうな派手な所がなく、人づきあひが悪い爲めなのである。それなのに弟の奴は、自分の立身を鼻にかけて、動ともすれば兄をないがしろにしよとする。今に覺えて居るがいいと、さう云ふ風に考へて居た。

年であつた。さうして父の師範が亡くなつた後は、伯父の實頼も兄の伊弉も、三郎の兼家の爲めばかりを思つて、「一向卿を相手にしない。大抵の公卿ならば、とうに榮達の衆みを絶つて、出家入道して、無理にも世の中をあきらめてしまふのが普通であるのに、機曾はそのやうな意志薄弱な男ではなかつた。うはべは頗る働きのない、邪氣に乏しい人間に見えても、その實一徹な機曾の胸中には、絶えず激しい功名心が執念く燃えて居た。

機曾は四十の歳になるまで、機曾の来るのを辛抱強く待つて居た。しかし、徒らに手をつかねて運命を自然に任せて居る限り、機曾は永遠に来さうもない。
「伯父や兄が頼みにならないとすれば、自分は後の宮にお籠り申すより仕方がない。」
最後に機曾はさう決心したのである。
其れはちやうど村上の御門の御代で、機曾の御妹の安子姫が、中宮として時めいておいでになる時分であつた。ある日、弘徽殿の宮のおん許へ、兼通卿が何と云ふ事もなく何候して、暫らくもちもちと躊躇つて居る様子であつたが、やがて、思ひ餘つたやうに、
「お願ひがござります。」

と、御前に近く控り寄りながら、頼づいて云つた。
「わたくしは、弟に先を越されるのが口惜しうございます。この後、せめて關白の宣旨だけは、兄弟の順序に仰せ下さるやうに、宮様のお手づからのお文を、いただきますござりまする。」
後の宮は、不遇な兄君の此の言葉を、今更のやうに哀れに聞き召したのである。
「よし、よし、何なりと書いて取らせよう。」
かう仰つしやつて、直ぐに其の席でお文を機曾へお渡しになつた。

政の薨去の報が傳はると、間もなく機曾は内裏で、清凉殿の殿上の間へ何候した。主上はまだ十三四の幼いお歳で、鬼の間に遊んでおいでになると、其處へ兼通卿がむづかしい顔をして、這入つて来さうなけはひであつた。不平のあまり、口頃めつたに朝廷へ出たことのない、無愛想な此の伯父を、主上にはうるさく思召されたのであらう。櫛形の窓の間から、機曾の委をちらりと御覽せられて、そのまま朝餉の間の方へ、駈けておいでにならうとすると、機曾が二三歩お跡を追つて、
「奏上いたします。」
と云つた。
「此れを御覽下りませ。」
かう云つて、兼通卿が懇懇に捧げて居る物を、主上は生憎に思召しながら御手に取つて御覽になつた。それは紫の薄様に、一關白をば次第のままにせさせ給へ。ゆめゆめ遠へさせ給ふな。」と、見事に走らせた女文字である。
「おお、此れは故宮のお手ぢや。」
なつかしさうに仰つしやつて、主上は暫らくお母後の亡き御顔を、お思ひになる御氣色であつたが、やがて御文をお持ちになつたまま、奥の間へ入らせられた。

かくて半月ばかりのうちに、内大臣の任命が兼通卿へ下つたのである。それからの機曾は、思ひのままに職足を伸ばして、關白になり、太政大臣になり、天延元年七月には、機曾を御門の中宮に奉つて、外戚の權威を振ふやうになつた。
機曾はもう五十を越えた老人であつたが、半生の屈辱と逆境とに依つて、一層強く培はれた性来の意地悪さは、存分に希望を遂げた今日になつても、容易に緩和されなかつた。なほ弟を憎んで居た。弟に對する復讐はまだ充分でないやうに感ぜられた。自分が嘗て味はつたやうな孤立無援の状態に、弟の奴を陥れてやらう。――機曾は始終さう思つて居た。
兼通卿の堀河の住居と、兼家卿の東三條の住居とは、院院の邸一つを隔てて居るばかりなので、弟の家を訪れる公卿の牛車が開る度に、
「又しても、東三條へ追従に行くと思える。今通つたのは、あれは誰だ。」
と、兼通卿は氣色を悪くして、車の主を調べさせた。人人は後難を恐れて、成る可く東三條へ近寄らないやうにした。たまたま巴むを得ない用事があれば、夜中にこつそりと尋ねて行つ

た。

解は、女御の中宮が、美しい男親王をお生
みになるのを見ない内は、容易に安心が出来な
かつた。自分の孫にあたらせられる御方が天下
の主となられてこそ、自分の榮華は絶頂に達す
るのであつた。しかし、太政大臣の勢力を以
てしても、此ればかりは思ふに任せず、中宮に
は長く御座候の御様子がない。御門は心うく
思召して、兼家卿の二番目の姫を女御に上る
やうに、内内での御沙汰があつた。解は再び、
更に激しく弟を嫉視した。

「中宮があつておいでになるのに、東三條の
大納言が、女御を上る要はない。彼奴は何處
までも、腹に桶を突かうとする。」
解はかう云つて、極力女御の御入内を妨げ
た。

「年中磨を喫つて居る弟の奴を、何とかして
亡き者にしてやりたい。」
などと云ふ恐ろしい考へさへも、胸中に浮ぶ
事があつた。

弟の兼家卿の方でも、黙つて兄に負けては
居ず、「たとへ、關白が何と云はうと、上の御言
葉があるからは、差し控へるには及ぶまい。」さ
う思つて、世間へは知らせずに、御君の入内の

支度

東三條の一門に取つて、此の上もないめでた
い事は、冷泉院の女御が、御座候なされたこと云
ふ知らせであつた。それを聞くと、兼家卿の邸
の内は、俄に春が来たやうに活氣づいて、五
境の御修法や長日の御讀經や、御安産の加持祈
禱に手を盡した。

「東三條の大將は油斷がならない。彼奴は、
院の女御が男親王をお産みになるやうに祈つて
居るのだ。さうして行く行く、その親王を押し
立てて、謀叛をしようとするのだらう。」
こんな事を云つて、兼通卿はその祈禱をさへ、
苦著しく感ぜずには居られなかつた。

太政大臣の執拗な威嚇と迫者にも拘はらず、
御修せと御讀經とは、山山寺の大徳、修驗者
に依つて半年の間、意らずに行はれた。院の女
御は貞元元年丙子正月三日に、恙なく男
親王を御産みになつた。

四

その明くる年、兼通卿が五十三歳の晩秋のこ
とである。太郎の顯光と、次郎の顯光とが驚愕
をつれて、大原野へ夕狩りに行かうとする日
に、

「お父様

とお父様もおいでになりませぬか。」
と云つて、公達は頼りに父を誘つた。
解は二日前から、夕ぐれになると何となく
胸が寒がつて、かすかな頭痛を覚えて居た。
解は平生自分の病氣を意圖する事が嫌ひであ
つた。「自分はまだまだ生きたければならない。
子供の氣榮をたしかめた後でなければ、近調に
死ぬる譯には行かない。」さう云ふ考へが常に
頭にあるせむか、大抵の病氣には強ひて抵抗
しようとした。それが今度だけは、格別苦しい
こともないのに、どう云ふものか重病にかか
りさうな豫感に襲はれて、不愉快でならなかつ
た。

「氣分がすぐれないのは、天氣が悪い爲めだら
う。しぐれ模様は空が、毎日毎日鬱陶しく曇つ
て居るからだらう。」
かう思つて、無理にも安心して居たが、驚愕
の日は朝來珍らしく晴れ渡つて、雲消けのした
庭の地面にうららかな小春日和の日光が、紫竹
の影をくつきりと印して居た。十月中旬の、
青青とした空の色を仰ぐと、解は急に救はれた
やうな心地がして、こんな時には、血氣盛んな公
達と共に、山野を駆け廻つた方が、却つて頭痛
が一掃するやうに感ぜられた。

「よろしい、解も一緒に行くとしよう。」

かう云つて、解は備い體を勵まして、未の
下刻に騎河の邸から草毛の馬を驅つた。

けれども、解はまだ道程の半分も来ないうち
から、早くも悪寒に襲はれ始めた。西日をうけ
て、ぱつと眼の覺めるやうに反射して居る比叡
山の頂きを、手綱を締めながら見上げようとす
ると、不思議な眩暈がして、仰向けにふらふら
と倒れさうになる。野裝束を纏うて地指の指貫
に熊の皮の行脚をさへ穿いて居る兩脚が、咄ん
ど無感に冷え切つて、體中の血が峠谷の邊へ
悉く集まつて来るやうに思はれる。久しく馬
へは乗らなかつたにしても、あまりに息切れが
して動悸が激しい。同じやうな解の狩着を着け
て、つきげの胸に跨がつて居る二人の公達の、
逞ましい鳴符の響に震れて居る様子や、大伺の
手に向かれた黒尾の犬の、狩場へ近づくとつれ
て、鈴を鳴らして勇み立つ姿が、をりをり解
の注意を惹く毎に、解は「はつ」として元氣に
なるが、其れが一向長もちをしない。

「御血色がお悪いやうに見えますが、どうか
さいましたか。」
隨身の一人が尋ねると、
「いや、別段……」

と云つて、物を云ふのも大儀らしく、解はただ
首を振るばかりである。

日の暮れ方に鷹野へ着いてからは、解は全
く夢中であつた。夢中で、若い者に負けない積
りで、森や、叢や丘陵の間を馳せ廻つて居たも
のの、辛うじて體が馬上に繋がつて居たに過ぎ
なかつた。最初は體が水を浴びたやうになつ
て、立烏帽子の縁がふるふるほど、頭蓋骨がき
りきりと軋もいて居たが、しまひには一切わか
らなくなつて、凡ての光景が幻の如くぼん
やりと瞳に映つて居た。

太郎の顯光が、獲物の中の二羽の山鳥を、解
の枝に結び着けて、右大臣の雅信卿へ贈らうと
して願いで居る時、
「雉があるなら取つて置け、鷹が卯酒の肴に
する。」
と、負け惜しみを云つたのを、體語のやうに覺
えて居るだけで、解は何處をどう歩いて何時こ
ろ家に歸つたのか、少しも記憶に残つて居ない。
恐らく途で昏倒して、公達や隨身どもに擔ぎ込
まれたのであらう……

氣が付いて見ると、解の耳には、何か地鳴り
のやうな響が、轟轟と聞えて居る。それは此の
世の終りの知らせで、自分は今、地獄へ墮ちて行

くのではあるまいか、それとも又、自分の體は
船底のやうな所に押し籠められて居て、波の音
に圍まれて居るのだらうか。——そんな事をう
つつともなく考へて居るうちに、解にはふと、
それが大勢の人間の、騒々しく怒鳴つて居る聲
であるらしく思はれて来た。聲はどうかすると、
蚊の呻るやうに遠くなつて、やがて今度は鳴神
のやうにおどろおどろしく近づくのである。中
でも一番近い聲が、やがてはつきり解の耳へ這
入り始めた。

「南無東方藥師琉璃光佛、藥王藥上菩薩、普賢
菩薩、雪山童子、……」
自分は病氣で寝て居るのだ。さうして誰か
が服藥の呪文を唱へて居るのだ。——解が解ら
ぬの中で呟いて居る間に、聲は一層明瞭に、朗
朗と呪文を高唱し続けた。
「……善神扶助、五臟平和、六腑調順、七十萬
脈、自然通張、四體強健、壽命延長、行
住坐臥、諸天衛護、莎訶。」
解はばつちりと眼を開いた。
「お氣がおつきになりましたか。お薬を召し
上りませ。」
と云つて、藥師の丹波忠明が、今の呪文と語
しながら、解の頭へ乗りかかるやうにして、口

元へ湯薬を注ぎ込んで居た。
 「まろはどうしたと云ふ事だ。」
 朝はかう云つて、自分の周囲を徐ろに眺めた。仰向きに寝て居る鼻先に、何か紅いものと白いものがちらちらするので、顔越しに見定めると、それはけばけばしい紅梅の御衣を召された中宮のお顔で、おん睫毛には涙が一杯に溜つて居る。宮の左右に侍りながら、ずらりと並ぶもとに並んで居る家族の者共の顔類も、同じやうに涙で濡れて居る。

「おお、お父様が眼をおあきになつた。」
 公達の一人が斯う呼ばはつたやうであつた。同時に五六人の女房の顔が、息のかかるほど近くへ寄つて、「お氣をたしかになさりませ。たしかになさりませ。」と、口口に甲高い調子で云つた。先、夢の中で聞いて居た騒々しい人聲は、忠告の呪文が止んでしまつても、未だに屏風の向うから、嚴かに絶え間なく響いて居た。
 「あれは何を云つて居るのだ。あの聲は誰だ。」
 「あのお聲がお分りになりましたか。あれは寛朝僧正や餘慶律師が、此の間から仁王經を讀誦遊ばして、御平癒の新願をこめていらつしやるのでございます。」
 と、女房が云つた。

十一日の早朝の卯の下刺ごろ、朝は例のやうにすがすがしい頭を枕に載せて、暫らくの間、ちつと感傷に耽つて居た。爽やかな黎明の外氣が、何處からとなく流れて来る部屋の中には、二三人の女房が、長炭櫃を圍んだまま、看護に疲れて睡つて居る。今しがた起き出たらしい都の町町の、鶏の啼き聲や、寺の鐘の音や、往來の人の騒擾や、曉の物の響の遠くの方で鳴つて居るのが、高僧の讀經のやうに莊嚴に聞えて、朝は靜かに耳を澄ましてゐると、やがて近隣の公卿の家から、牛車に乗つて出て行く者があつた。轎の音は邸の方より東の方に始まつて、それが程なく此方へ結つて来るらしく、隨身の警蹕の聲が、凍えるやうな寒空に返つて居る。
 「あの車は、東三條の邸から出たと思はれるが、……」
 朝は眞語のやうに云つた。さうして、今頃弟の兼家は、何處を訪れる積りだらうと、訝しみますには居られなかつた。
 「さうでございます。東三條の大將のやうに思はれます。」
 と、女房の一人が眼を擦りながら云つた。折柄

病氣の爲めに我を扱つたことのない朝は、これだけの人が寄り集まつて涙を流したり、泣きわめいたり、祈禱をしたりするほど、自分が瀕死の境にあるかと思へば、情ないやうな思ひを寄せて居る。この月始めから自分分を暫やかして居た豫感も、やつぱりほんたうであつた。自分はどうとう勝てなかつた。公達の話に依ると、驚愕りの跡途に氣を失つて、その晩枕に就いてから、今日は既に七日目で、病氣は傷寒であると云ふ。――解がばさばさに乾いて、眼の球が抉られるやうに痛い。寢返りを打たうとする、いつの間にか手足に力がなくなつて、體が不自由になつて居る。ちつと靜かに安臥して居ながら、燃首のあたりが始終火のやうに火照つて、その熱が盛んに燃え上る時は、酸鼻として危く失心しやうになる。をりをり典藥頭が甘草の汁に煎水を入れて、梅の核から口に注ぐのを、朝は何より旨さうにして舌にうけた。

それから長い間、朝は日に幾度となく、屢々昏倒し、屢々蘇生した。朝には正氣で居る時の熱病の苦しきよりも、前後不覺で居る時の幻覺の方が恐ろしかつた。
 「まろの病氣は傷寒ではない。兼家の生靈が……」
 次の間に詰めて居た次郎の朝光も、急いで父の枕許へ馳せ寄つて、
 「あれは叔父御に相違ございません。きつと叔父御は、お父様のお見舞ひに入らつしやるのでせう。」
 から云ひながら、意外の喜びに打たれたやうに、病人の顔色を窺ふのであつた。
 「さうか。」
 と云つて、朝は涙目して何事かを考へて居るやうであつた。日頃は仲が悪かつたが、兄の命の且夕に迫つて居るのを、弟はやつぱり案じて居てくれたのである。此れ兼家を恨んで居たのは、みんな自分の僻みであつた。今にも弟が見えたらば、潔く従來の罪を詫びて、一門の後事を託すしよう。關白の位をも譲つてやらう。さうしたら弟は、どんなにか嬉涙に咽ぶだらう。――その刹那の光景を想像するだけでも、朝は胸が一杯になつた。
 「東三條の大將が、まろの見舞ひに来てくれる。珍らしい事があるものだ。――その邊を綺麗に片付けて置けよ。」
 朝はこみ上げて来る泣き聲を無理にこらへて、やつと此れだけの事を云つた。
 すると、車はたしかに三條坊門を轡轡として

九月が暮れて十月の初冬になつたが、朝の容體は快い方へ向かなかつた。朝のうちはいくらか氣分が落ち着いて、看護の人人と噂よく話をすれば、夕方からは必ず熱に浮かされる。さすがに我儘の強い朝も、だんだん氣が弱くなつて、以前のやうに激しい譚話を、口走る情根もなく、ややともすれば情に脆さうな事を云ふ。夜の明け方に眼を覺まして、燈臺の灯の薄暗い影を見詰めて居ると、頭腦が透き徹るほどはつきりして来て、眩しかつた過去の生涯が次々から次々へと思ひ出され、自分は餘りに冷徹な人間であつたやうな心地もする。そんな考へが起るのは、死ぬ前兆のやうにも感ぜられるが、それをどうしても追ひ拂ふことが出

進んで来たが、朝の邸の門前には止まらずに、堀河の角を北へ曲つて、内裏の方へ行くのである。病床に侍つて、客の到着を待ち構へて居た人人は、一様に不審の眉を擧げた。朝光は早くも眼の色を變へて、再び恐る恐る、父の表情を窺み視すには居られなかつた。
 「腐は此れから内裏へ參る。腐の體を抱き起せ。」
 朝が突然かう云つたのは、車の響がもう聞えなくなつた時分である。
 一瞬間に朝の相好は全く違つて、眞青になつた顔の中に、吊り上つた鼠が狂人の如く血走つて居る。
 「起せ、起せ」と云ひながら、水を滑つた瘦せ犬のやうにぶるぶると顛ひ立つて、口と鼻とを大きく歪めて、あはや息を引き取りさうな、切ない喘ぎ方をする。
 「大變でございます、殿が物怪にお現かれなされました。」
 近侍の者が、斯う云つて絶叫したのも無理はない。明日にも命の危い病人が、女房たちの力まかせに抑へる手を撤ね除けて、起き上らうとするのである。

「どうなされました、お父様、淺ましうござ

「どうなされました、お父様、淺ましうござ